山岳

LXVII

信頼のブランド

●キヤラバン革登山靴
グランジュッタ＃175……¥19000
グランジュッタ＃145……¥15500
グランジュッタ＃115……¥12500
プ モ リ　＃085……¥ 8500
プ モ リ　＃075……¥ 7500
プ モ リ　＃069……¥ 6900

●キヤラバンシューズ
クライミング……¥ 3600
デラックス……¥ 3500
スタンダード……¥ 3200
メ イ ト……¥ 2700
ポピュラ……¥ 2400
ヤ ン グ……¥ 2000
ヤ ン グS……¥ 1700

●ホステリングシューズ
ホステリングニューデラックス……¥ 2900
ホステリングデラックス……¥ 2300

●ナイロン製登山ウエアー・雨具・テント・ツエルト
●キヤラバンエアーマット
●カネカロンシュラフ

株式会社 キヤラバン

●東京本社　〒170 東京都豊島区巣鴨1-25-7　電話 (03)944－2331(代)
●大阪支店　〒550 大阪市西区京町堀1－68　電話 (06)441－4431・5204
●札幌営業所　〒062 札幌市豊平区美園1条6-47　電話 (011)822－1859

山岳

第六十七年

山岳第六十七年目次（一九七二年度）

カンジロバ山群未知の部分＝一九七一年秋の登山……阿部和行…一
マナスル西壁（一九七一年）……小原和晴…一七
コルディエラ・レアルとアタカマ高地（一九七〇―七一年）……向一陽…六七
パタゴニア南氷陸中央部縦断……上智大学パタゴニア縦断隊…八九
叔父板倉勝宣のこと……板倉勝正…一〇三
アフガニスタン中央高地単独横断……梶正彦…一〇七
ランタン・ヒマール踏査行……梶正彦…一三
バウダ・ピーク登頂（一九七一年）……愛知教育大学山岳会…一二九
ティリチ・ミール登頂（一九七一年）……増江俊三…一三六
ピアーズ峰登頂（一九七〇年）……都竹勝…一四三
ダーラン山塊（一九七一―七二年）……国鉄山岳連盟ニューランド親善登山隊…一五一
山の地名と歴史……原全教…一六一

追悼
武田久吉氏（藤島敏男・戸沢英一・春田俊郎）、牧野平五郎氏（中田勇吉）、岡茶徳之助氏（望月達夫）、佐藤隆太郎氏（望月達夫）、岩崎京二郎氏（坂倉登喜子）、逸見真雄氏（小原勝郎）、村井栄一氏（藤井運平）、大島堅造氏（松井久之助）、袋一平氏（望月達夫）、永原輝雄氏（望月達夫）、水田健之輔氏（石原憲治）、入沢文明氏（成瀬岩雄）、真田昌孝氏（村尾金二）、手塚英信氏（中野和郎）、千々岩玄氏（千々岩助太郎）、成田潔思氏（岡部紘）……一七九
図書紹介（遙かな山やま・われらのものならぬ世界・中央アジア探検史）……三三
会務報告（一九七一年七月―一九七二年六月）……三三〇
英文梗概……巻末 一

写　真

カンジロバ山群に関するもの　四枚（うち折込み一枚）
マナスル西壁に関するもの　六枚
コルディエラ・レアルとアタカマ高地に関するもの　六枚
パタゴニア南氷陸中央部に関するもの　三枚（うち折込み一枚）
アフガニスタン中央高地に関するもの　四枚
ランタン・ヒマールに関するもの　四枚
バウダ・ピークに関するもの　四枚
ティリチ・ミールに関するもの　四枚
ピアーズ峰に関するもの　三枚（うち折込み一枚）
ダーラン山塊に関するもの　四枚
名誉会員武田久吉氏、名誉会員牧野平五郎氏、名誉会員岡埜徳之助氏、佐藤隆太郎氏、岩崎京二郎氏、逸見真雄氏、村井栄一氏、大島堅造氏、袋　一平氏、永原輝雄氏、水田健之輔氏、入沢文明氏、手塚英信氏、千々岩玄氏、成田潔思氏

地図・図版

ツォ・カルポ・カン登頂ルート図、ツォ・カルポ・カン付近概念図、カンジロバ・ヒマール略図（別刷折込み）
マナスル西北面概念図、マナスル西壁登攀ルート図
コルディエラ・レアル（チャチャコマニ南方）概念図、プナ・デ・アタカマ南部概念図、アタカマ遠征概念図
パタゴニア南氷陸中央部概念図
アフガニスタン概念図、アフガニスタン中央高地ルート図
ランタン氷河周辺概念図
バウダ・ピーク行程図、バウダ・ピーク概念図
ティリチ・ミール行程図、ティリチ・ミール概念図
ガブラル川カチカニゴル源流略図
ダーラン山塊概念図
秩父地方地名、伝説、史蹟一覧図（別刷折込み）

表紙カット　山里　寿男

カンジロバ山群未知の部分

＝一九七一年秋の登山＝

阿部和行

人間の未踏の地だと信じていた地域を、古い文献などで調べていくうちに、実は昔の人がはいりこんで記録まで残しているということを、日本ではたびたび経験している。登山者は勝手なもので、現地人や猟師が昔に通過していても、何等かの記述のない地域は未踏地と考えたがる習性をもっているが、そのような解釈をもってしても、現在のネパールには未踏地がなくなったといえそうな感じがするほど、山に関心のある人々が歩きまわっているのではないだろうか。

私達がカンジロバ山群へ出かけたのは、探検的要素が、そこには多分に秘められているという魅力以外の何ものでもない。そこが秘境であったかどうかは別として、よく知られないままで残っていたのは、第一に高い山がないこと、第二に大へん不便であることの要素が守っていたためだろう。とはいえ、この山群へは一九五三年にティヒーが登山家として最初に訪れてジャグドラの山へ登っている。その後一九六一年にタイソンが第一回目の遠征を行ないジャグドラに入った後、シスネ方面をさぐっている。翌一九六二年には英国の婦人隊がカグマラ付近の六ピークを登るなど、この山群も探検から登山の対象として洩れていたわけではない。また一九五八年には川喜田隊が北東方面から

接近を試みていることからみて、この山群の目ぼしいピークは、当時すべて人の眼にふれていただろうと想像される。

事実、一九六七年にタイソンがこの山群の地図を発表したことは、すでにこの山群が未知のものではないことを裏付けたのだが、その地図には幸か不幸か、日本人の眺めた北東部分が発表されずにかくされてしまっていた。私達が考えたのは、写真にとられたこの北東部分と、タイソンの地図とのつながりを明らかにしようというものだった。カンジロバの主峰はタイソンが登山を手がけてすでに久しいし、その地形もほぼわかっている。それにくらべてこの北東部分は、ここに川喜田隊のいう第二の高峰があるはずだ。その高峰の位置ははっきりしないし、接近するルートももちろんわからない。おそらくポクスンド湖と呼ばれている湖を、北へはいった方向にあるのだろうと思われるが、それもどの谷をはいるのかもわからない。このような未知が、すでにわかりかけている主峰よりも、さらに大きい魅力となって私達の心をとらえたのだった。

ポクスンド(註一)の湖の上流側にも、いくらかの人達が足跡を残している。最も早期に歩いたと思われるのは英国の植物学者ポルーニンで、一九五二年に湖からツァルカへ抜けている。一九五六年には英国の仏教学者スネルグローブが五月初旬に湖からシェーゴンパへと歩いた。一九六三年に同志社大学のサイパル隊が、西ネパールの横断の目的で福田勝一、松村多四郎の二名、ラングー・コーラを通って十二月二日にシェーゴンパに至り、十二月三日にポクスンド・コーラを下降して湖へ抜けている。一九六七年オランダ隊が湖を越えて、その北西にある五一〇〇から五七〇〇メートルの山へ取付いたといわれるが、詳細は不明。一九七〇年大阪市立大学隊がカンジロバ主峰の登頂後、三名は東面へまわりこんで十二月七日、湖から北のポクスンド・コーラが東西方向から北へ曲っている付近まで偵察にはいり、谷の奥に白い山を見ている。同じく一九七〇年、富森毅は単身湖からフィジョールへ向った。

(註一) 現地ではポクスンドと発音されている。ただしこの名称は谷の出合いの地名で、湖の名ではない。

私達の目指す山はおそらくこれらの人達の目に写ったにちがいない。しかし川喜田隊の発表した写真以外に、これ

がその山だと明確に指摘できるものは、なかなか手にはいらなかった。同志社隊の福田氏に借りたスライドの中の一枚、シェーゴンパからポクスンドへ越える峠上から西に見える雪峰が、私達の得ることができた二枚目の写真だった。湖の北の山へ登ろうとしたオランダ隊は、当然その山を見ていると思うのに、何も発表されず、連絡もとることができなかった。だが準備だけは着々と進んだ。

大阪市立大学隊が輝かしい登頂の成果とともに、頂上近くからの素晴らしいパノラマを持って帰ってくれたことは、私達にとってどれほど有利な情報だったことだろう。タイソンの発表した写真などとも照合することによって、第二の高峰が次第に明らかになり、登れる可能性が見つかったものの、その接近路についてもう一つ確証が得られなかった。それは大阪市立大学隊がポクスンド・コーラ上流で見た白い山の写真が、果して私達のいう第二の高峰なのか、あるいは他の尾根なのか、はっきりしなかったからだった。

以上のいきさつから、私達の登山の目的は第一に未知の部分の地図を作り、タイソンの地図の空白部を埋めること。第二に三つか四つのピークに登頂することとした。

カンジロバ山群は西ネパールに位置しているが、一般に西ネパールの山は登山に不便でアプローチが長い。食糧事情が悪いために現地食もあまり期待できず、大人数のポーターによる物資の輸送は不可能に近い。この山群に最も近い街であるズムラ(註二)にはバザールも一応あるし飛行機も着くから、このズムラを基点としてキャラバンを始めるのがいいように見える。しかし実際には物資が少ないしポーターも少なく、カンジロバの西側へは近くて有利であっても、東側へ廻りこむためには二週間もの日数を必要とする。そしてまたズムラに飛行機が発着するのは、モンスーン中はほとんど期待できず、十月になってからでなければ飛べない。とすれば、たとえ十月一日に飛んだとして、その後二週間のキャラバンが続いたのでは、BCのできるのが十月中旬になってしまう。全くルートもわからない登山では、

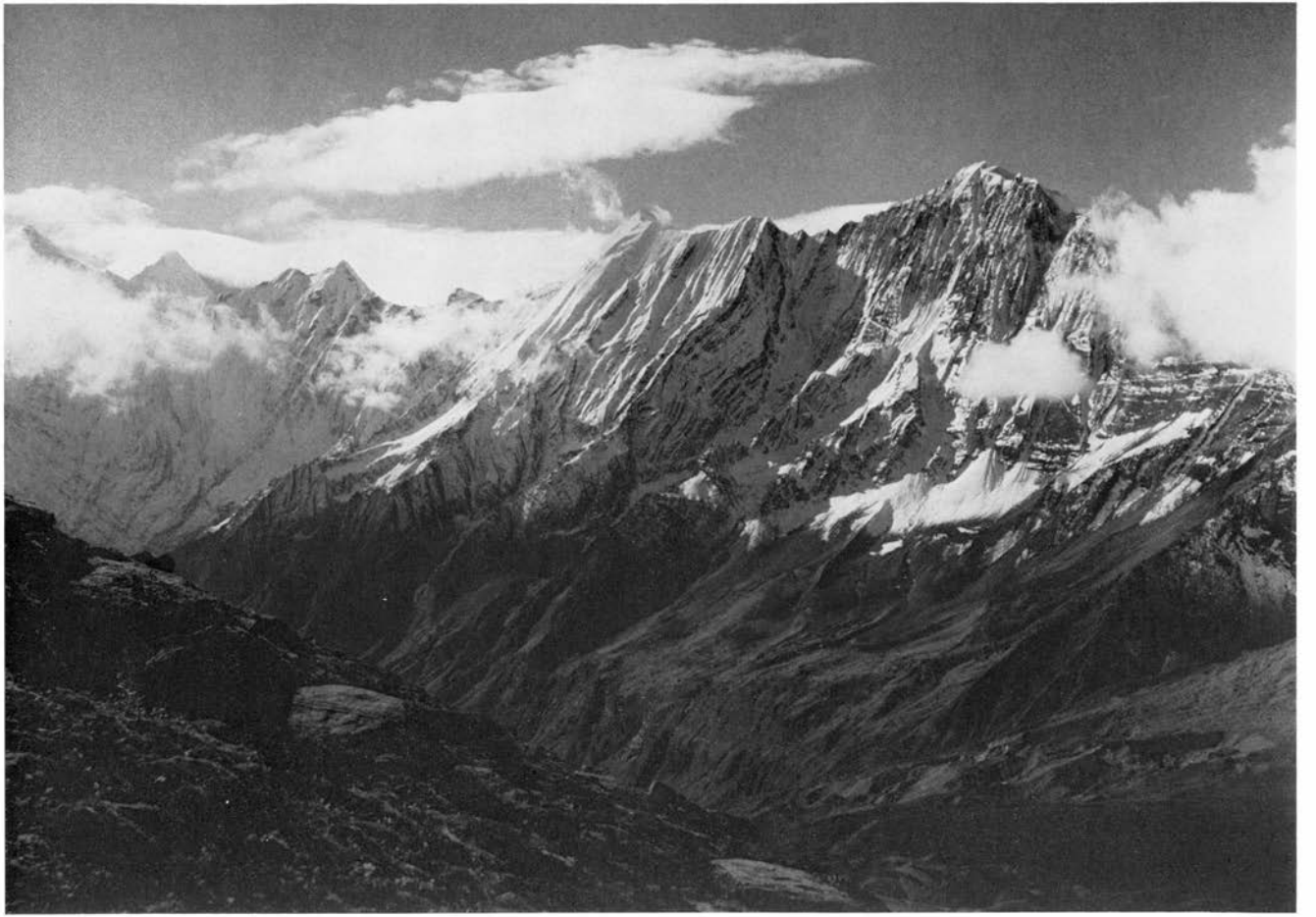
この半月の日数も無駄にしたくない。そのうえ貧乏隊だから空輸の費用も馬鹿にならず、以上の理由で約一ヵ月を要するポカラからのキャラバンを選ばなければならなかった。

（註二）日本ではジュムラと呼ばれているが、現地の発音はズムラに近い。

ポカラからの途中のドルパタンの村にも飛行機は発着できるが、この村でもおそらく食糧事情やポーター事情が悪いだろうし、モンスーン中の発着に不安があるため、飛行機による距離の短縮はとらないことにした。

キャラバンのコースは鳥取の船木隊、オランダのノルディック隊等と同じで、ポカラから西へたどってカリ・ガンダキを遡り、ベニからミャグディ・コーラにはいって途中から西進し、ジャルジャラの峠（三三一〇メートル）を越え、ウッタル・ガンガを下ってドルパタンから北へ向う。四〇二三メートルのファグネの峠を越えて二七〇〇メートルのグスタン・コーラに達し、これを渡ってペルマ・コーラ沿いに北上する。その源流に近いパニダールの峠（四六〇〇メートル）とそれに続くジャングラ・バンジャン（四五二〇メートル）の二つの峠を北へ越え、二〇〇〇メートルそこそこのトリベリ河に至る。ドゥナイの村からスリガッドの流れに沿って北上し、やがて湖の南岸にあるリンモの村に到着する。この間、ポカラを九月四日に出発し九月二十八日まで二十四日のキャラバンで、BCは湖を越えてさらに奥へ二日たどった地点である。

湖は単に「ツォ」と呼ばれていて、ポクスンドという名称は湖に流れこむ谷、ポクスンド・コーラの途中、シェーゴンパへ向う谷の合流点付近の地名のようである。リンモの村は谷がせき止められてできたツォの、広大な高原状のせきの上にあり、村の後には鋭くとがった岩のピークと、その後にやや丸い雪のピークが立っている。この岩の尖峰が「カンジェロルバ」とか「カンジェラルバ」と呼ばれるピークで、大きい巻髪の山と訳されている。雪のピークは「カントンパ」と呼ばれていて五〇〇〇メートル余のカンジェラルバより少し高い。カンジェラルバはリンモ村の守護神のような役割をもっているらしく、また湖と一対になって夫婦の関係にあるという。そのために湖は正式には



6600m峰から北西へ延びるポクスンド・コーラ沿いの削壁
The Ice-wall with flutings along the Phoksumdo Khola (By K. Abe)

ツォ・カルポ・カンの南東側の山々
Peaks on the south-east side of Tsho Karpo Kang (By K. Abe)

藍を溶かしたように青いツォの東岸にリンモの村から離れて立っているゴンパ
A Gompa at the margin of Tsho (By K. Abe)

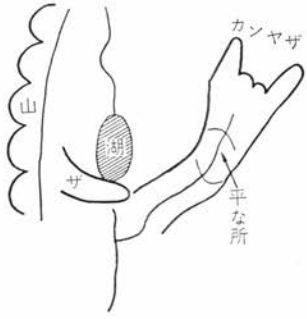
「アマ・ツォモ・ギャルモ」と呼ばれ、母なる湖の女王といわれている。

湖は西岸に沿って道がつけられているが、最初は岩壁のへつりが続き、西から流れこんだ谷の河原を越えると、砂ぼこりの急坂が四千メートルくらいまで上っている。湖は色を溶かしたような青で、湖岸をたどっている間にも刻々と色を変えていく。もうここでは秋になったのか、白樺の黄葉が青い湖に映えて美しい。そして湖にそそぐポクスンド・コーラの奥にスノーキャップの山がいくつか見えだした。

ポクスンド・コーラは、一面に潅木の生えた広い平らな谷だ。潅木の間に踏みあとが縦横に走っている。右岸に切立った壁が現れ上を雲にかくしているが、これが六六〇〇メートル峰に続く尾根に違いない。谷の途中にあるラコンマは旅人の中継点らしく、掛小屋が作ってある。翌朝再びポクスンド・コーラを北西へとたどりながら、私達は全く切れ目のない右岸の壁を眺めていた。一枚の屏風を張ったようなひだのない壁は、上の方をヒマラヤひだで飾りつけて、どこまでも豪然と突立っている。六六〇〇メートル峰がどれなのか、谷の中からでは全く判断できない。壁の高さもあまり感じなかったが、標高からみて三千メートルの高さは充分にもっているようだ。

壁がやっと終る頃、谷は白樺の黄葉で黄金に燃え立ち、ヒマラヤひだの白銀、高い青空と対照的ですばらしい色彩を放っている。シェーゴンパへはいる谷が左岸から流れこみ、やや狭くなった本流をたどると、谷の屈曲点へ北からすごいゴルジュの谷がはいってくる。本流の道は流れを離れて台地の一角へと私達を導いた。ポクスンド・コーラは西向きに広がり、六六〇〇メートル峰から続いてきた屏風の尾根は、六二〇〇メートルばかりの雪のピークを屈曲点として西に向きを変え、すごい削壁を突立てたまま延々と西の奥に向って延びて行っている。その場所から上流へ向って、左は取付きようのない岩壁が続き、その裾を水が流れ、右側はゆるいなだらかな草の尾根が奥へ向って続いていて、左右全く対照的な谷である。そして明らかに乾燥地帯へ踏みこんだらしく、体に触れる枯草がパリパリと音を立てて崩れるのだった。

図1



タバタンと呼ばれるカルカを過ぎ、左岸の台地状泊り場ペリカプワへ着いたのが九月三十日の午後だった。少し奥の方も見に行ったが適当な所がなく、ここをキャラバンの終点BCに決定した（四一一〇メートル）。その夜はリンモ村のチベッタンのポーターも夜遅くまでさわいで、実ににぎやかな晩だった。ポーターをつかまえてシェルパの通訳で谷の奥の様子を聞き出そうとしたが、どうも要領をえない。そのうちポーターの中に若いラマがいて、奥へ行ったことがあるという。聞き出していくうちに、本流は少し上流で消えてしまう。左岸から枝谷がはいっていて、枝谷の奥は広い谷となり、カンヤザという岩山が立っている。消えた本流の先にザ（押出し）があって、その向うは湖だという。湖の奥に谷が続いているかと聞くと、そこから奥へは行ったことがないから知らない、白い山も見たことがないという。ノートを出して彼に絵を書かせてみたら、ていねいに書いてくれたのが図1だが、私達の予想と大きくちがっている。

本流が消えてしまうのは伏流水になっているのだろうが、湖のことなど全く聞いたことがなかった。あるいは山崩れなどで最近にできたのかと思って、いつ湖ができたのかと聞いたら、彼ニヤニヤしていつかわからんという。カンヤザの山のことも根掘り葉掘り聞いてみたが、目標の山とはちがうようだ。カンヤザとはカンは山、ヤザは錆のことらしい。錆色の山では白い山とは違うようだ。しかし、どうやら本流の奥に何かありそうな感じがする。ここまで来て今さら別の谷へ向うのも事実できそうにない。BCからさらに荷上げするためポーターを使うことにしたが、彼等は全員傭ってくれないと不平等になるから駄目だと駄々をこね、ポカラからずっと従ってきた忠実な六人のポーターを、一日遊ばせねばならなかった。

十月一日、地形の確認とデポ地の選定と、デポ地までのポーターの賃金をきめるため隊員二名、リエゾン、ナイケ

の四人が先発。ザの上に登れば目の前に湖が広がっていた。リンモの湖より色が浅いので、現地ではこの湖を「白い湖」（ツォ・カルポ）と呼ぶらしい。湖の岸を作っているザの上を左岸の方へ廻ってみると、谷が右へ曲った奥に、私達が日本から想い続けてきた白い山が陽を浴びて立っていた。東西に長い雪のピークで東はナイフリッジになって切れ落ち、南側は雪壁の下に雪原をもっているらしい。そして雪原の南東から急峻な懸垂氷河が二本落ち込んで、私達のいる谷の源頭になっているようだ。考え続けた山を確認できたこと、雪原にさえ立てればピークへは達せられそうに見えることなどで、私達は無性に嬉しかったが、リエゾンは得体の知れない私達の山を確認できて、報告できることに満足したらしい。もうこれで私は登ってこなくてもいいのだといっている。その山は、大阪市立大学隊の人が眺めたのと同じ山のようだが、スケールの感じ方が全く違っていたことと、白い湖の存在が知られなかったために、私達の得た情報と現地の様子がひどく違ったもののように感じられて、少し混乱した傾向もあったと思う。

ザの上に立って、白い山を眺めていたリンモのナイケに私達は確かめようと質問した。だが、「この山の名は知らん。今まで見たこともないし、リンモ村の者も聞いたこともない」という。そのような意味で、これは全くの処女峰なのか、そしてまたカンジロバの第二の高峰なのだろうか。がいずれにしてもタイソンが、その発表した写真にいうUNEXPLOREDのピークには間違いない。私達は、はじめてその山を仰いだ場所の名をとって「白い湖の山」ツォ・カルポ・カン（Tsho Karpo Kang）と名づけることにした。

ところでGSGSのNEPAL 1：506,880 WEST SHEETを見ると、主峰の位置に23,107 ft.第二のピークとして主峰の東南部に22,532 ft.があり、これが第二の高峰を予想させたそもそもの資料であった。そしてこの二つのピークの間に湖が画かれているのだが、地図ではジャグドラ・コーラの源流に当っている。次々と解明されていくカンジロバではあったが、この湖の存在は不明のままだった。私達の間では、ひょっとすると、ポクスンド・コーラとジャグドラ・コーラの間が切り通しになって連なっているのではないかという冗談が出たほどだったが、ジャグドラ・

コーラの源流に湖がないとなれば、それはどこかの谷の源流にあるはずのものが画かれたに違いないと考えた。この種の不正確な地図でも、無いものを在るように書くことをしないということが、ドゥドクンダリの湖の例でもよく解っていたからである。しかし今もって、この地図の湖は確認できない。「白い湖」がそれではないかという推測をしているが、それ以外に私達のまだ疑問としている地形が残されているからである。あの大雪さえ降らなければ、是非眺めてみようと思った場所は、プンモを通っているドジャム・コーラ、プグミ・コーラ等と呼ばれている谷から、さらに北へ向って分れているプンプン・コーラの源頭である。北へ向った谷は六六〇〇メートル峰の西を通って、ポクスンド・コーラの右岸をなす岩稜に突当り、さらに西へ折れてウェッジ・ピークの尾根へ当って消えている。もし可能であれば、私達はポクスンド・コーラから南岸の岩稜の最低コルに立って、南側を眺めるつもりだったし、帰路はBCから最低コルを越えてプンプン・コーラを下降し、プンモへ出ることも考えてみたのだが、その全てが雪のために消えてしまった。プンプン・コーラからポクスンド・コーラへ越える最低コルはプンプン・ラといわれ、ポクスンド側が現在は岩壁になっているが、昔は傾斜がゆるくて自由に越えられた。そのためズムラからチベットへ抜ける道の一つになっていたのだと、現地人の話しもあったが、ズムラからこの峠へ出るまでにマウリヤ峠、カグマラ峠など高い峠があるし、かなり東へ寄っていて行程が長いことなどを考えると、この話は必ずしも本当とは思えない点がある。だが、プンプン・コーラの奥に湖を持っているらしい地形と、六六〇〇メートル峰、カンツーネの登路に一つのヒントをあたえてくれそうな、魅力を感じさせるのに充分な谷である。

目標の白い山を確認した私達は早速登山活動にはいったが、湖の上流一・五キロメートルの付近の川原にC1を作った。それは十月二日だったが、ここにほとんどの荷を集結して実質的なABCになっていった。高度は四六〇〇メートル。広々とした平らな川原の中の大きい岩陰に、石積みの壁の上にシートを張った炊事場と、少し離れた位置に隊員用の四人用テント、シェルパ用の三人用テントを張った。このC1から上流へ向って川原を約一時間歩くと、氷

河の末端にできた小さい湖に出る。湖は左右を数十メートルもの高さの側堆石でかこまれ、正面奥は百メートルくらいの岩壁となって、二つの懸垂氷河の末端がここで断ち切られて青い断面を見せている。左右からはいりこんでくる支谷は、すべてこの側堆石の上へ合流してくる点をみると、正面の懸垂氷河の勢力はかなり強いものだったらしい。少なくとも湖の出口あたりまで伸びていた舌端が、どんどん後退して現在の岩壁の地点で落着いているようだ。

正面の氷河を私達は北氷河と呼び、中央の岩稜で分れている二条を、それぞれ右氷河、左氷河とした。左氷河の南岸は奥の尾根から続いた岩稜で、その南側にかなりの高度差で低い氷河がもう一つある。この氷河を南氷河と呼んだ。ルートは右か左の氷河を登って大雪原に出て、ピークから南へ派生した丸い形の雪稜をたどる予定である。正面の氷河は非常に傾斜がきつくて、氷のブロックを積重ねたような感じのため危険性も大きく、十月六日に偵察にはいったがガスで見通しがきかなかった。翌日は南氷河の奥のコルへ登れるかどうかを見るために四人で出かけた。この氷河も側堆石がかなりの距離に延びている。南岸にかなりまとまった形の雪の可愛いピークがあり、これを眺めているうちに、南氷河の偵察より高度経験のためにこのピークに登ろうと衆議一決。枝谷にはいって氷河から雪尾根に取付いたが、雪の状態の悪い急斜面で遅々としてはかどらず、五二〇〇メートルくらいでストップ。ここから見る北氷河は、奥の大雪原が意外に広大な地形であり、右氷河より左氷河の方が傾斜もゆるく、多少は安全らしいルートを途中まで見つけることができた。

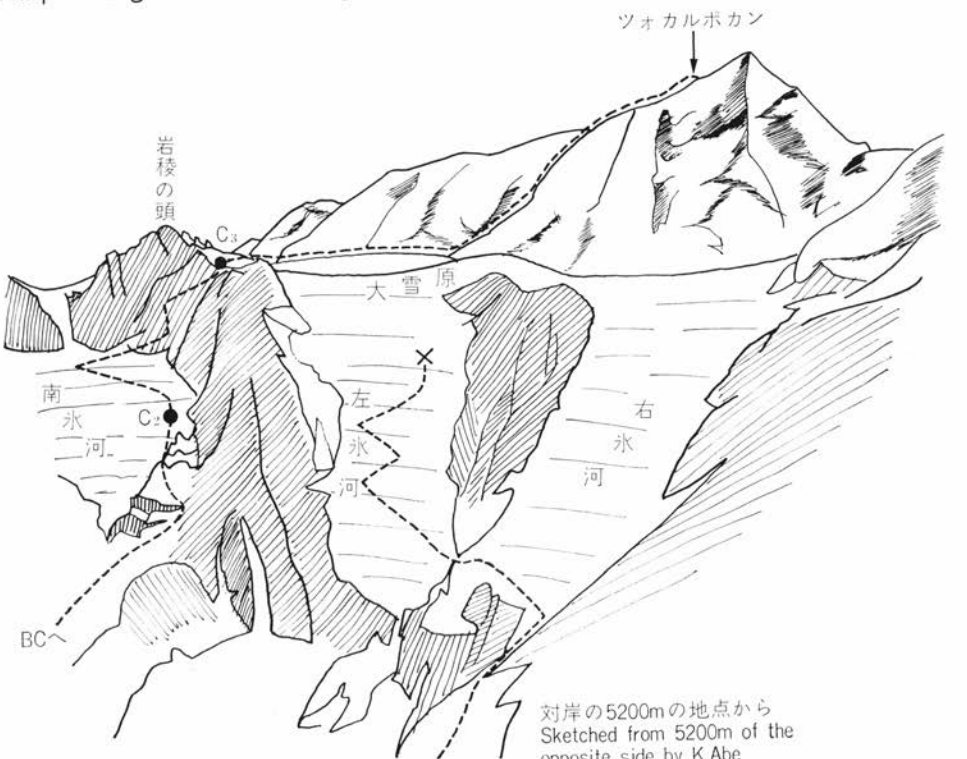
翌八日から氷河へ向う。末端の湖から左岸の側堆石を登って右氷河末端の右隅へ取付き、右氷河を横断して左氷河へはいる。左氷河もクレバスとセラックに蔽われた一二〇〇メートルの高差の階段状の急な氷河で、中へはいると全く見透しがきかない。日数を気にする私達は、ルートが開かれるあとから荷上げが続き、その日のルートの終点近くにデポを作っていく方法をとった。だが連日の天気で氷河は刻々に変化をみせ、私達のルートも決して安全ではなくなってきたし、登るに従って氷の段差が大きくなり、ハング気味の氷の壁を登り切ると、その上にも段がある。また

その上にも段があるという形で登る効率が非常に悪くなってきた。下からトランシーバでルートを指示しても、いつ氷が崩れるか気が気でなくなり、遂にこのルートの放棄を決定。下降をはじめたとき、すぐ隣りのビルくらいの氷がゆらっと揺れて崩れていった。

他にもいくつかのルートが考えられたが、最も可能性のある南氷河から岩稜を乗越えて大雪原に達するルートを検討することにした。十月十二日工作の二人は南氷河へ、一人はシェルパと北氷河の逆ボッカへ、一人は対岸のカンヤザ近くの岩のピーク（五五五〇メートル）へ登って地形全体を確かめる行動に移った。その結果ルートの可能性が確かめられ、十四日には南氷河末端にC2（五二二〇メートル）を作った。岩稜にロープをフィックスして一応ルートができた十五日の夕方から、一瞬のこやみもなく雪が降り続き、終日テントの除雪に明け暮れる日が続いた。背後の岩稜は急峻でちり雪崩しか落ちず、南氷河はゆるやかなため奥から雪崩が押出してくる心配もなかったが、一挙に積った新雪のために、周囲のいたるところで雪崩の音が絶えなかった。十八日の夕方にやっと雪がやんで星空になり、翌日から上と下に向ってラッセルを繰返す。前日岩稜の取付にデポした荷は、岩稜を落ちる雪で赤旗とも埋没してしまっていた。これがなければC3を出すことができない。しかし奇跡的に三メートルの雪の下から掘り出すことができ、早速岩稜のルート工作と荷上げをはじめた。

十月二十三日にC3（五五五〇メートル）設置。二名がここにはいり、大雪原のラッセルを行なう。二十五日さらに雪稜のルート工作のために出発したが、雪稜を西側へまわりこんだところに安全なルートを発見した。そのためにフィックス用ロープ等の工作用具を取付にデポし、二人は雪稜にラッセルを続けた。降雪のために氷の斜面が雪に蔽われて、かえって登りやすい状態を作り出している。ラッセルを繰返して苦しい登りを続け、三時頃、肩のように見えていた地点に着いた。頂上はさらに彼方にある。天気は朝から快晴で無風に近く、周囲に雲のけはいもない。夜は満月に近く驚ろくほどの明るさに映えることもわかっている。少々遅くなってもチャンスは逃すべきではない。二人はさ

ツォ・カルポ・カン登頂ルート図
Tsho Karpo Kang and its climbing route

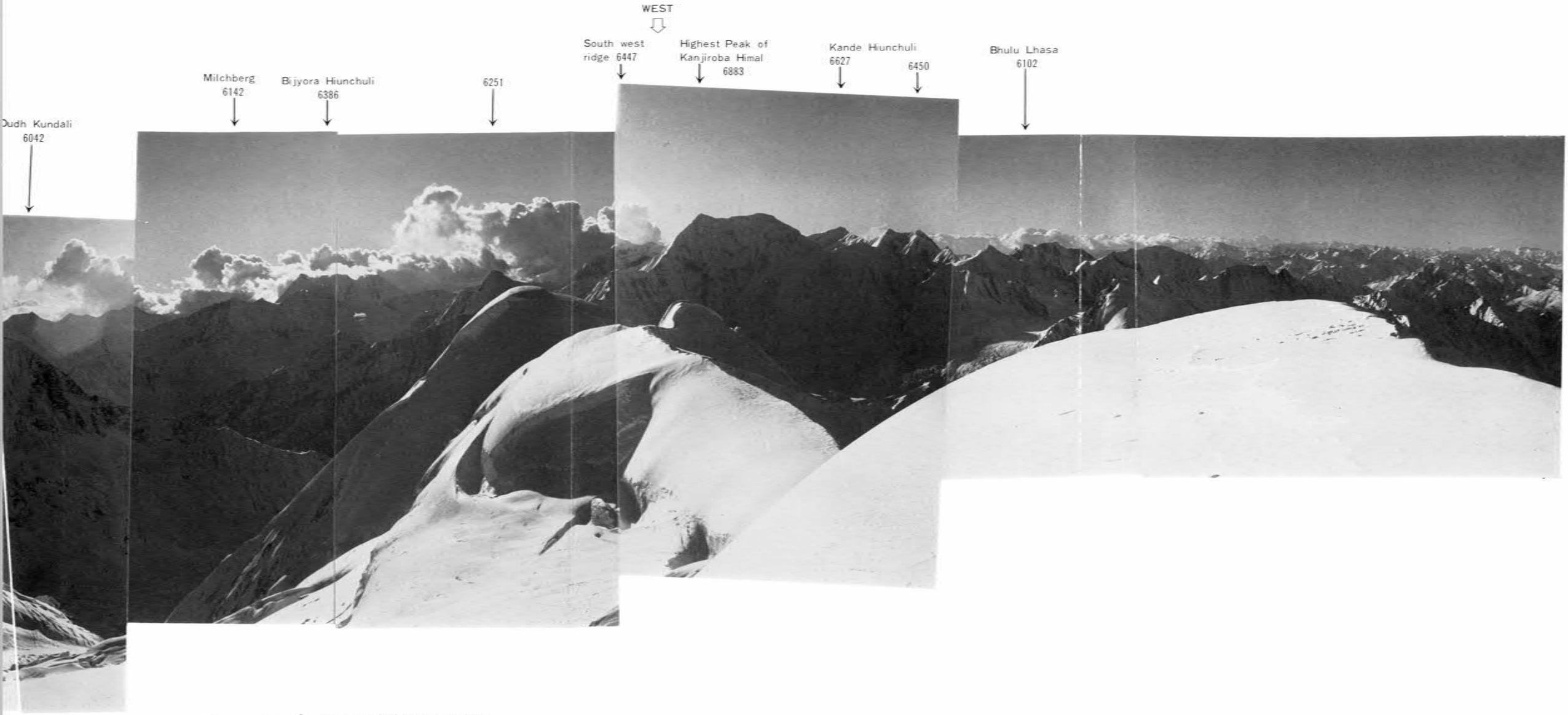


らに登り続け、四時十五分、遂に最高処に立った。東西に長いリッジとなった頂稜の最高点だ。北側は雪庇が続き、北に向ってすごい壁が落込んでいる。頂稜は西に向って次第に低くなり、その先には主峰が逆光の中にそば立っている。南にはハンギング・グレイシャーのピークが高さを競うように立ちはだかっている。越えてきた岩稜の頭は、もうはるか下に小さく沈んで、大雪原の一条のルートも見えにくい。ウェッジ・ピークから六六〇〇メートル峰でカンジロバの山群が終り、はるか遠くにダウラギリの山群が巨大な幅をもって立っている。

あわただしい写真撮影のひとときを過して下降にかかる。肩の付近でC3へはいった隊員と、トランシーバの交信で登頂を知らせることができた。雪稜を下ればあとは大雪原をC3へたどるだけだ。しかし十一時間十五分、高度差一〇〇〇メートル、水平距離もかなり長い行動に二人は疲れ果ててC3へ七時三十分に帰着した。

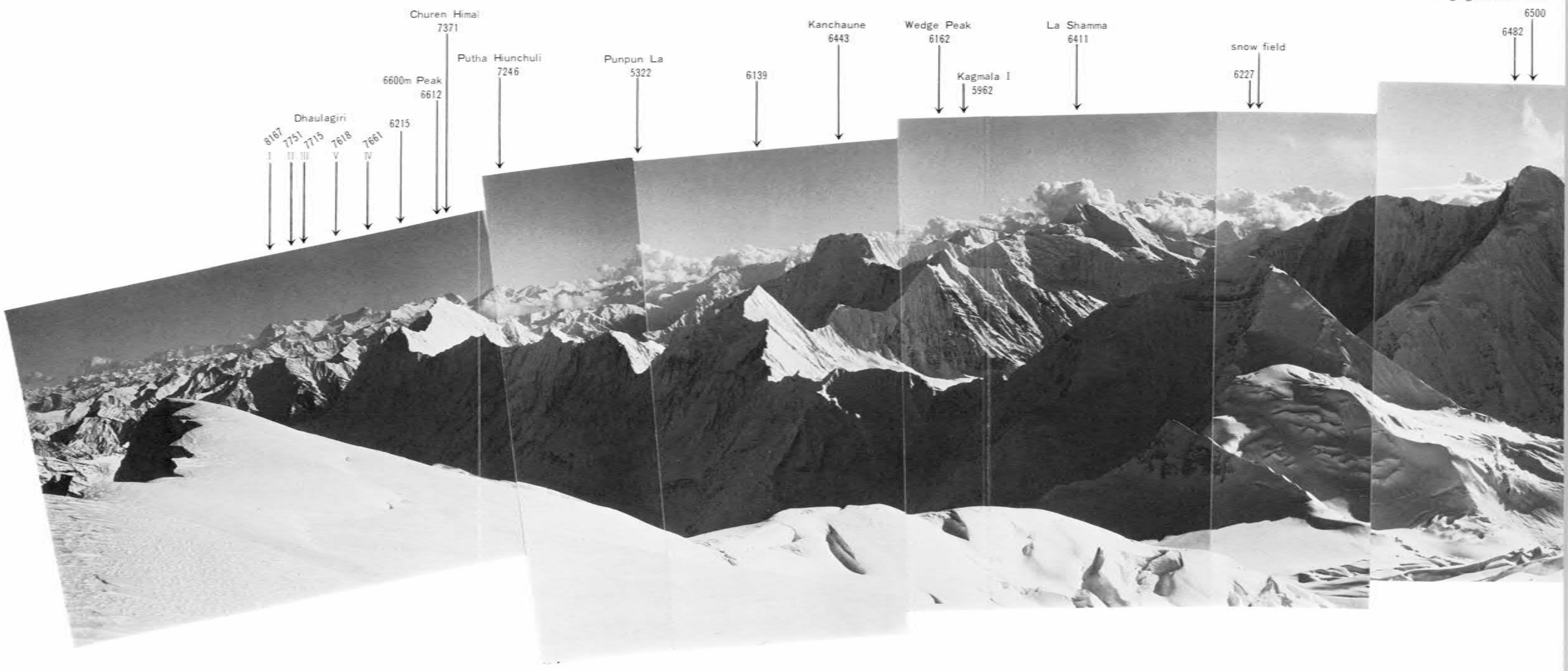
翌二十六日、隊員とシェルパの二名は再度頂上を目指したが、前夜からの風でラッセルがほとんど消え、正午に雪稜へ達しただけで引返した。かなり遅れた日程、乏しい食糧などのために、このピークへの登山は打切って、二十七日全員が再びC2へ集まった。翌日、さきに登りかけた可愛い山へ隊員二人が向ったが、今度の新雪でラッセルのため疲労し、途中で放棄して帰る。このときの状況から判断して、他のピークへ向うにはあまりにも条件が不利であることから、今回の登山活動はこれで終ることにした。

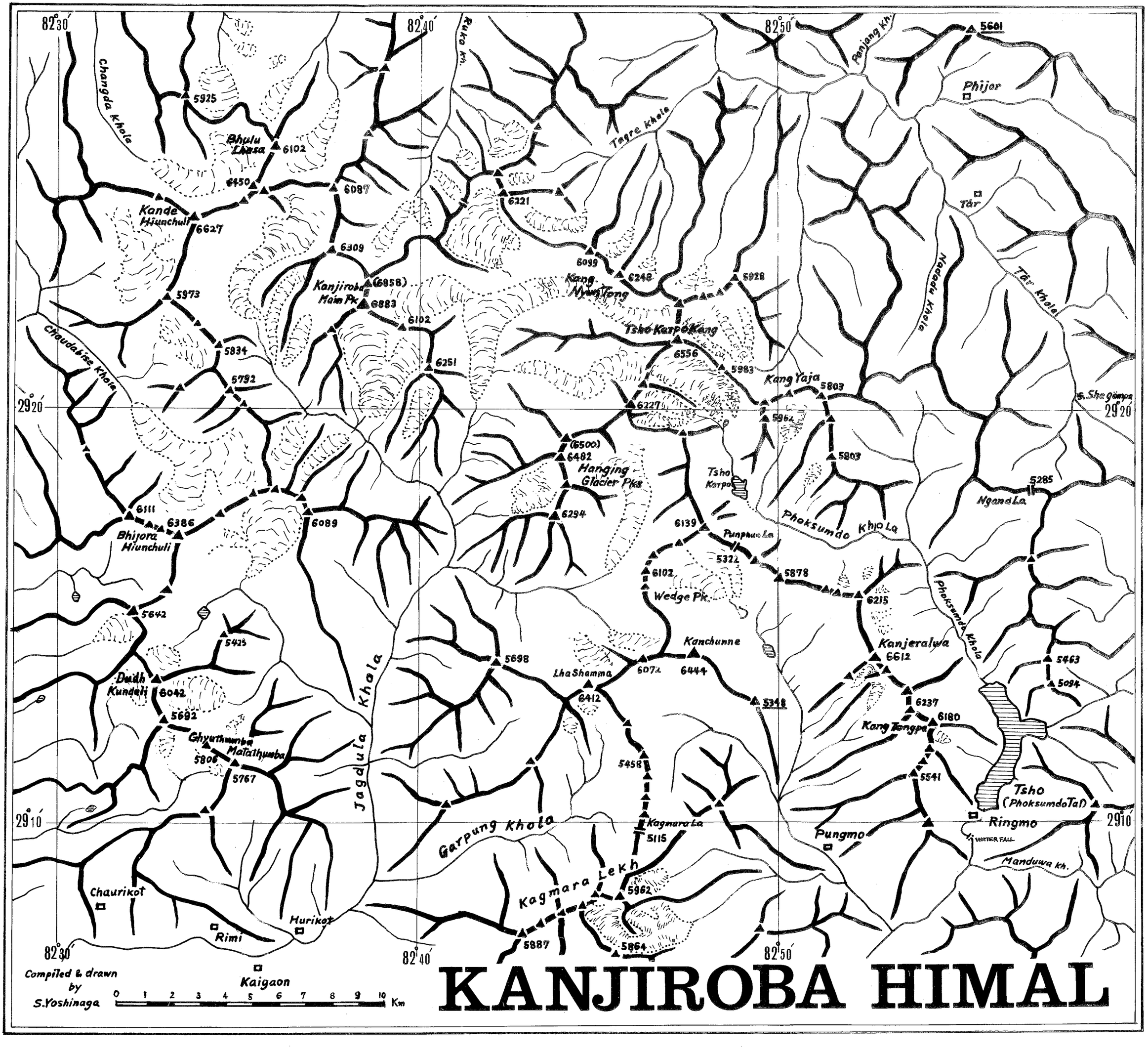
C2を撤収してC1へ帰着したのは十月三十日。翌日隊員一名はカンヤザの尾根に登り、カンヤザ谷の奥とカンヤザの地形の確認を行なった。この谷は内部で広々とした川原になり、その奥に三つの岩のピークが並んでいて、各ピークの間に氷河がおりてきているのが認められた。シェルパ一名をポーター交渉にリンモへ下ろし、隊員達は荷物のまとめと下降のラッセルに数日を費した。雪のためC1までは到底ポーターがはいらないので、隊員とシェルパ、キッチンボーイの六人でC1の全部の荷を持って下ることになった。その前日の十一月二日夜から再び雪となり、三日は午前三時に起きてすでにラッセルの消えてしまったルートを下降し、重荷を背負って悪戦苦闘しながら十八時二十



ツォ・カルポ・カン最高点からの展望
View from Highest Point of Tsho Karpo Kang Photo: Shoji Miyoshi

SOUTH

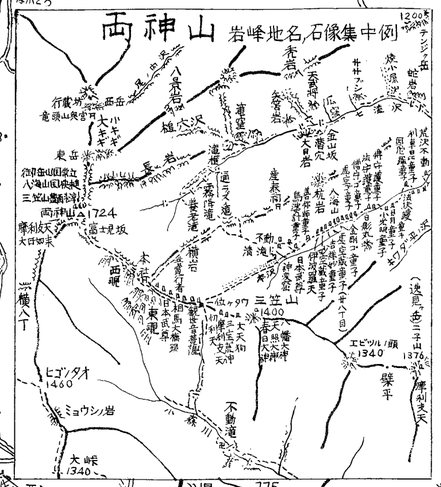

Churen Himal
7371
Putha Hiunchuli
7246
6600m Peak
6612
Dhaulagiri
8167
7751
7715
7618
7661
6215
Punpun La
5322
6139
Kanchaune
6443
Wedge Peak
6162
Kagmala I
5962
La Shamma
6411
snow field
6227
Hanging Glacier Peak
6500
6482



KANJIROBA HIMAL

附圖 地名、傳説・史蹟一覽圖

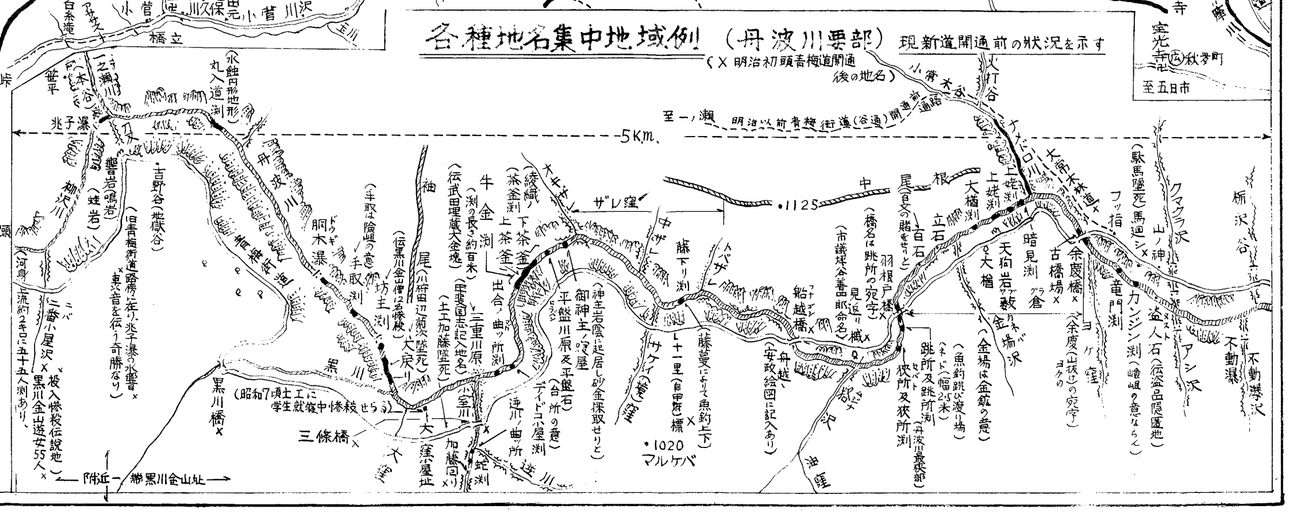
西神山 岩峰地名、石像集中地名例



各種地名集中地域例（丹波川要部）

現新道開通前の狀況を示す

（X 明治初頭香梅道開通後の地名）



寺院宗派本末関係、一部略		
扉号	宗派	本寺名
台	天台	
言	真言	
浄	浄土	
正	曹洞	正法寺
龍	〃	竜穏寺
平	〃	永平寺
最	〃	最勝院
乗	〃	最乗寺
広	〃	廣厳院
定	〃	定津院
永	〃	永昌院
天	〃	天室国寺
興	〃	興国寺
大	〃	大通院
光	〃	光源院
済	臨済	
恵	〃	恵林寺
法	〃	法燈派
向	〃	向嶽寺

分、真暗なBCへたどりついた。BCも大雪のため炊事場がつぶれ、整備し直して夕食をしたのが十時頃だった。

思わぬ雪のため、帰路予定していたカグマラ峠越えもできず、ティブリコット経由でリンモから十日間でズムラに到着した。途中では食糧が充分に得られず、毎日その日の食糧を買いあさって歩く始末で、主食は全くといっていいほど入手できず、空腹をかかえて数日をすごす有様だった。ズムラにはバザールもあるが思うようなものは入手できず、西ネパールの物資の少なさを痛感させられた。

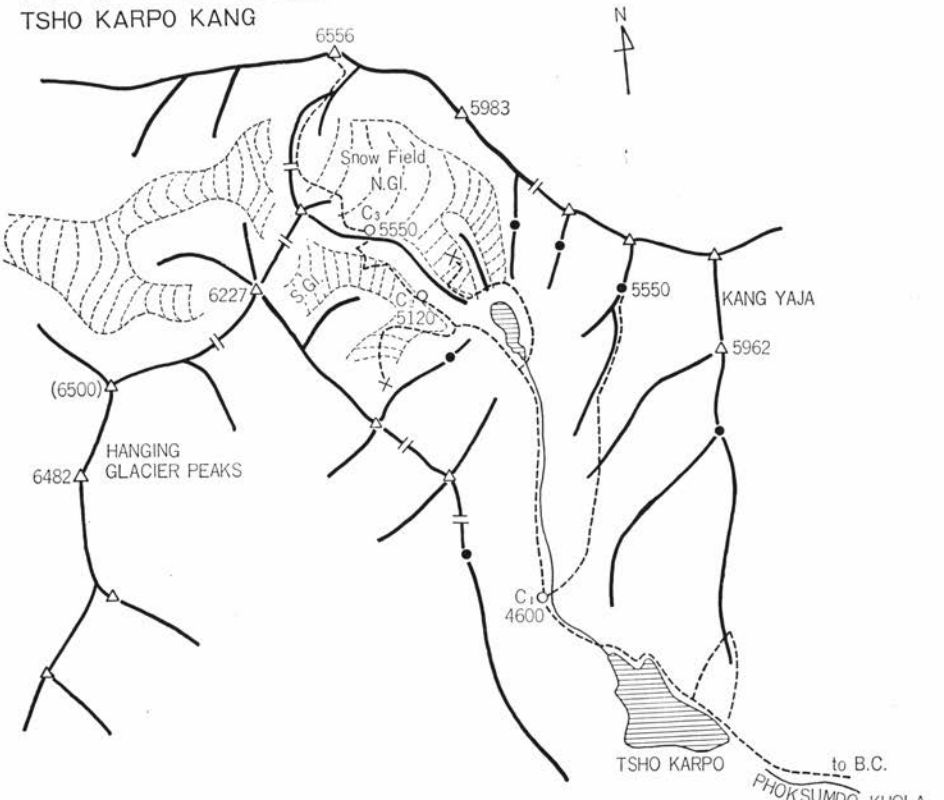
カンジロバ山群の東部

ジャグドラ・コーラの東、カグマラ峠の北の部分は、カンジロバ山群で最も知られなかった地域といえる。今回それらの地形を調査した結果、この地域にある山を次の五つのグループに分けることができると思う。最北にはツォカルポカンの山、その東にカンヤザの山々、南西にはハンギング・グレイシャーの山、ずっと南へ向ってカンツーネとラシャンマ、そして東南に延びた部分には六六〇〇メートル峰がある。この五つのグループはすべて尾根続きで、東面は全て急峻で西面がやや傾斜がゆるいという共通の傾向を示しているが、しかしそのゆるい傾斜も登攀を可能とするほどはゆるくない。全般的にかみそりの刃を立てたように鋭い稜線が多く、氷河が尾根の上まで続いていることも少ない。

私達の歩いた範囲では、ポクスンド・コーラを境として北側はチベット風の乾燥地帯であり、なだらかな地形に移っていく。この境界はツォカルポカンの北側を通りラングー・コーラに移っているように思われる。したがって、五つのグループの山のうち、カンヤザのグループだけがゆるやかな地形をもっていて、他の山とは異なった性格のようである。

ツォカルポカンの山はそのピークの北側は急激に壁となって落込み、北のコルからカンニュントンのピークへ尾根が続いて、その尾根の延長が主峰東側にある大雪原をとりかこむような形になって終っている。そして北のコルから西へ向って、おそらくこの山群で最も長大な氷河が主峰の東面まで流下している。南面には雪原を持っていてポクス

ツォ・カルポ・カン附近概念図
TSHO KARPO KANG



ンド・コーラの水源となり、また西向きに流れる氷河によってハンギング・グレイシャー峰との境を作っている。

ハンギング・グレイシャー・ピークはツォカルポカンの南のピークから西に分岐したグループで、西面に懸垂氷河をもっているために名づけられたようだ。南北に長い稜線をもっているが、このグループも痩せた稜線で構成されていて、氷河が稜線の上まで続いている部分はない。ジャグドラ・コーラに面していながら、ゴルジュによって南方からのアプローチが鎖された、接近の困難な山である。英国の女性隊がラシャンマの肩を越えて北側の谷へ下り、このジャグドラ・コーラの支流を少し上流の方まで偵察している。一九七〇年にはカンジロバ主峰を登頂した大阪市立大学隊がジャグドラ・コーラを下降、主峰とハンギング・グレイシャー・ピークとの間の谷を登って偵察している。

カンヤザは中腹までカルカ状で、上部の岩尾根の岩がたいへん崩れやすい以外、特に困難な山ではないようだ。ツォカルポの手前から左岸のカンヤザの谷へはいると広い内院があり、そこからいくつかのピークへ登れるだろう。谷の奥は氷河になって稜線に達している。一九六七年秋のオランダ隊が登りかけた山は、おそらくこのカンヤザのことではないかと思われるが、彼等の表現がオランダ語による「未知の谷」としか発表されていないので確証はない。もしこの山だとしたら、五五〇〇メートルもの高さまで登ったのなら、当然ツォカルポカンの白い山を眺めているであろうと想像されるのに、一言も触れていないのも不思議だ。下流の大きいツォを北岸へたどる途中、ポクスンド・コーラの奥にスノーキャップの山が眺められるのがカンヤザで、少なくとも三つの顕著なピークから成っている。

ツォカルポカンの南のピーク（六二二七メートル）から南東へ続く尾根の途中に六一三九メートルのピークがあるが、このピークから南へ派生した尾根がウェッジ・ピークにつながっている。ウェッジ・ピークは文字どおり楔形をしているが、山が低くて小さいので見劣りがする。その先にカンツーネ（六四四三メートル）が連なっている。タイソンの地図のフルーテッド・ピークがそれで、尾根はラシャンマへ続いている。カンツーネはナイフエッジ状の横幅の広いピークで、南東のプンモの方からみると壮麗な姿をしている。インド隊が取付いたことがあるというが詳細は不明。北

から見ても本を立てたような感じで弱点があまりない。ラシャンマとくらべると、ラシャンマの方がやや低いにもかかわらず、山容が堂々としていて立派に見える。

六六〇〇メートル峰は、ツォカルポカンから削壁のような尾根で延々とつながっている。途中の六一三九メートルのピークの北斜面は、この尾根の間の唯一の雪のたまり場らしく、圧縮された雪が崩壊して裾に落ち、氷河のような状態を作っている。そして徐々に谷の方へモレイン等を押出していった結果、谷がせき止められて湖が作られたのだろうと思う。プンプン・ラで最低高度に下った尾根は再び上昇し、谷の曲り角で南へ方向を変えて六六〇〇メートルになる。この峰は「カンジェラルワ」と呼ばれることもあるが、リンモ村では村の後にそびえる約六〇〇〇メートルのピークをカンジェラルワと呼び、村の守護神になっているのかもしれない。しかしまた、北方に住む連中は六六〇〇メートル峰をカンジェラルワと呼んでいるようでもある。したがって、この名称は確定的なものではない。六六〇〇メートルのピークのポクスンド側の壁には北と南各一ヵ所に、稜線から懸垂氷河の下っているところがあるが、このピークへの接近路として適当であるとは思われない。このグループを登ろうとしたのは今までに鳥取の船木隊だけであるが、この隊はリンモ村のカンジェラルワの一つ南のピークに達することができた。

今回の山行によってカンジロバ山群の未知の地域がほとんどなくなり、探検の段階は一応終ったように思う。その最終段階を実行できた私達は幸福だった。遠いところの低い山々に魅力は少ないかも知れないが、登りごたえのある処女峰への興味は今後も続くことだろう。

なお、大阪府山岳連盟隊の隊員は次のとおり。

隊長　阿部和行（43歳）、吉永定雄（37歳）、水谷弘治（33歳）、三好司二（28歳）、平田英一（29歳）、坂下志津夫（25歳）

マナスル西壁（一九七一年）

小原和晴

はじめに

一九七〇年正月、高橋照、青木、高橋善数の三人が、ヒマラヤで岩登りをやりたい、出来れば八〇〇〇メートル峰が良い、それなら日本人ゆかりの山「マナスル」を西側からやったらどうか、という話をしたのがもとで、マナスル西壁隊が発足したのである。そしてすぐ登山許可申請書の手続を始め、都岳連の推薦を貰うために、当初青木の所属する日本岳友会主催としたが、後に隊名は「日本マナスル西壁登攀隊」となった。これに東京都山岳連盟主催の肩書きが付いたのはずっと後のことである。ともかく隊は発足し、正隊員も遠藤、雨宮、小原、田中（基）と増えていき、八月には雨宮宅の庭にプレハブ作りの事務局も出来た。任務も分担され、隊員も増え着々と遠征準備は進んで行くが、はたして我々がねらうマナスル西壁は、登攀の可能性があるのだろうか。前人未踏のマナスル西面のことて、資料は遠くからの写真しかない。鋭く屹立する傘状の岩壁（後に傘岩と呼称されるようになった）は登れるのだろうか、いやその前に氷河の状態はどうなのだろうか、ベースキャンプの位置は？　などと限りなく疑問と不安がわいてくる。そこで偵察隊を出すことに決めて、九月半ば青木と善数は羽田をたっていった。偵察隊は氷河の取付まで

登ってその可能性を確かめ、BC予定地も決めて、ナムン・バンジャンを越えてポカラに戻って来た。ポカラでは私書箱を開設し、カトマンズでは正式許可書を得るために奔走、またヒマラヤン・ソサイェティでは優秀なシェルパと契約を済ますなど、大きな成果を上げて青木は十一月中旬、善数は十二月初めに帰国した。これでなお自信が増し、遠征準備は急ピッチにはかどり、十二月二十五日、十トン余の隊荷が横浜埠頭に運び込まれたのだった。

荷は予定より早くカルカッタに着き、急遽一月二十日に田中（基）が、二十五日には松崎がポカラまでの陸送のために羽田を発った。また諸手続のため、二月一日、善数も出発した。

ここで隊員とシェルパを紹介しておく。

隊員

高橋　照　隊長　五七歳　山岳巡礼倶楽部所属
遠藤　登　副隊長　四〇歳　コンテニュアス・クラブ所属
青木　敏　戦略　二七歳　日本岳友会所属
高橋善数　庶務　二五歳　第二次RCC所属
田中壮佶　医師　三〇歳　鵬翔山岳会所属
雨宮　節　装備　三四歳　東京雲稜会所属
小原和晴　食糧　三〇歳　東京雲稜会所属
松崎哲也　梱包　二七歳　東京ヤング・クライマース・クラブ所属
清水清二　装備　二五歳　鵬翔山岳会所属
田中基喜　輸送　二一歳　山岳巡礼倶楽部所属
新　隆浩　写真　二六歳　東京雲稜会所属

マナスル西壁（1971年）

シェルパ

イラ・ツェリン（サーダー）ナムチェ出身、一九三六年生

ラクパ・テンジン（サーダー）ナムチェ出身、一九三八年生

パサン・ニマ（コック）ジュンベシ出身、一九四五年生

ペンバ・ノルブ（シェルパ）ガート・ロモジョ出身、一九三一年生

ハクパ・ノルブ（シェルパ）タミ出身、一九三八年生

ツェリン・ナムギャル（シェルパ）ナムチェ出身、一九三九年生

アン・ツェリン（シェルパ）ジョサレ出身、一九三八年生

カミ・ノルブ（シェルパ）ナムチェ出身、一九四三年生

ニマ・ウォンチュー（シェルパ）タミ出身、一九四五年生

アン・ニマ（シェルパ）ナムチェ出身、一九四四年生

アン・タルケイ（シェルパ）ナムチェ出身、一九三一年生

テンジン（シェルパ）ナムチェ出身、一九三八年生

カルサン（ローカル・ポーター）ナムチェ出身、一九三五年生

ラクパ・ツェリン（ローカル・ポーター）ナムチェ出身、一九四五年生

パサン（メイル・ランナー）ナムチェ出身、一九二六年生

ヌルブ・ザンブー（メイル・ランナー）チャウリカルカ出身、一九三六年生

ギルミー（キッチン・ボーイ）ナムチェ出身、一九四五年生

ソナ（キッチン・ボーイ）ナムチェ出身、一九三五年生

ププ（薪採り）ラッサ出身、一九四七年生
リエゾン・オフィサー
モーハン・バハドゥル・パンディ

ネパールへ

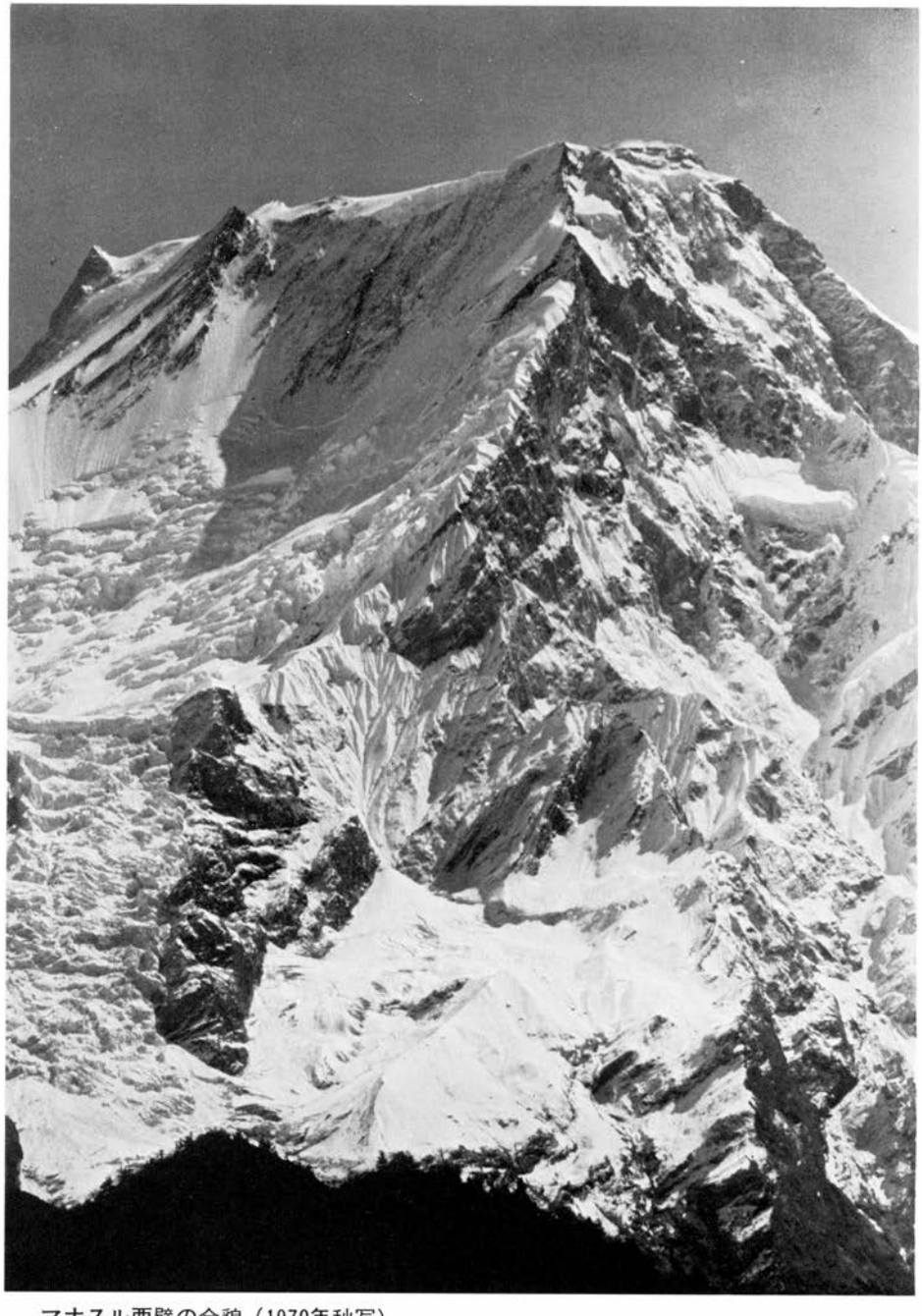
二月十四日に高橋照隊長、田中ドクター、清水、新、小原の五名、翌十五日に遠藤副隊長、青木登攀隊長、雨宮の三名が羽田空港を飛び立ち、それぞれその日のうちにカルカッタのリットン・ホテルに着いた。カルカッタはパキスタン紛争のあおりで、政情不穏で一人歩きは危険な状態であった。

後発荷物の引取りの任務を持つ高橋隊長と、インドのネパール領事館でビザの延長が出来るような手続をとってあった小原を除いて、他の者はカルカッタ一泊でカトマンズへ飛んでいった。

二月十八日、カトマンズに遠藤、青木、高橋善数、田中ドクター、雨宮、新、小原の七人が集結した。その他の行動は高橋隊長がカルカッタで後発荷物待ち、清水はポカラにて陸送荷物待ち、そして田中基喜、松崎は印ネ国境の町バイラワでBフォームのコピーが届かないので足止めを喰っているという配置となった。陸送隊はもう一週間以上も足止めを喰っているのだ。カトマンズでの段取りは大変順調に進んでいる。

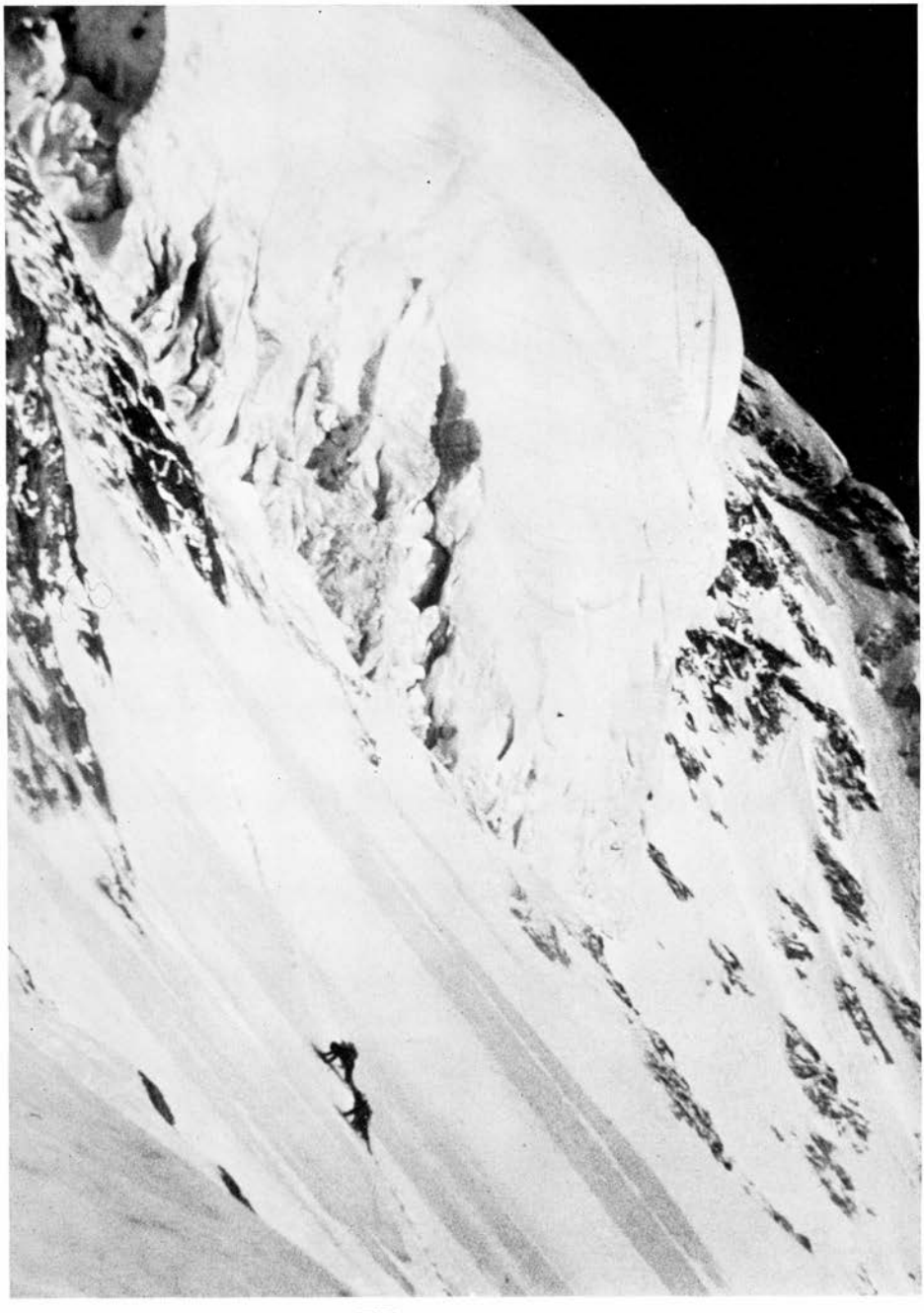
十九日、リエゾン・オフィサーのパンディ氏、シェルパ、隊員達の顔合せを行なった後、バザールで食糧、装備の買付けをする。ほとんど日本で揃えて来たので、ここでの買付けは米、砂糖、塩、紅茶と圧力釜、大鍋位なものであった。

二十一日、遠藤、雨宮、新がポカラへ飛んだ。荷物はまだポカラに着かない。カルカッタへ電話してインド側からもアプローチしており、Bフォームは発送済みだが、もし着かなくても通関してもらえるよう話は付いたという高橋



マナスル西壁の全貌（1970年秋写）
The whole aspect of Manaslu West Face
(By S. Aoki in autumn of 1970)

C1～C2の中間からマナスル西稜の全貌を望む
The whole aspect of Manaslu West Ridge seen from halfway between Camps 1 and 2 (By S. Shimizu)



C４上方の氷壁を登る―マナスル西壁
Climbing up the steep ice-wall above Camp 4 on Manaslu West Face.
(By K. Kohara)

マナスル西壁のC4付近、左後方はプラトーの一角
Camp 4 on Manaslu West Face with a portion of the summit plateau in left background. (By K. Kohara)

隊長の伝言を持って、清水はバイラワへ飛んで行った。入れ替りに松崎がバイラワからポカラに入った。

二十二日、小原ポカラ入り。二十三日、青木、田中ドクター、シェルパ六人がポカラ着。二十三、二十四日と清水からの連絡を待つも音信まったく不通。電報を打たないわけがないのだが？（松崎がバイラワで打った電報を、彼がポカラに着いてから自分でその電報を受取るという笑い話のような事が平気で起るのがネパールなのだから、あせる方がいけないのかも知れない。）

二十四日、三時半のバスでバイラワへニマ・ウォンチューを伝言に出す。

二十五日、情勢に変化なし。バイラワに使いにやったニマ・ウォンチューさえも帰って来ない。高橋隊長、カトマンズ着。後発便のメドが着いたというのに、先発便はその動向さえも今は定かでない。これでは三月一日キャラバン開始は絶望的となった。

二十七日、青木とサーダーのラクパ・テンジンがジープにてバイラワに出発。入れ違いに突然、清水がホコリで顔も服もまっ黒にして帰って来た。彼の話では、こちらで考えていたとはまったく逆に、インド側の通関は至極アッサリ済んだが、反対に全然軽く考えていたネパール側の通関でひっかかっているという。それも問題は金だ。税金を安くするためにインドとネパールと違う金額の書類を作って持っていたのだが、安くしてあったネパールへのインポート・ライセンスでは受付けてくれず、高い方のインドへの書類を基に税率を掛けられてしまったのである。税金九、〇〇〇ルピー、積立金九、〇〇〇ルピー、計一八、〇〇〇ルピーが必要だという。田中に持合せがないので清水が金を取りに来たのだ。予算外のこの出費は隊としては非常に痛いが、この際荷物を出すことが先決。三時四十分、清水は金を持って再びバイラワへ戻って行った。

今朝、ナイケとポーターの件で打合せをやった。準備は着々と進んでいる。荷を待つだけだ。

二十八日、ニマ・ウォンチューが青木のメッセージを持って戻ってきた。荷は一日夜か二日の朝には着くという。

三月一日、午後二時四十五分、ホテルのボーイが車が着いたととんで来た。すぐ庭へとび出す。トラックが二台、どうどうと庭へ入って来た。青木、清水、ラクパ・テンジン、そして四十日ぶりにひげモジャの田中の顔も一緒だ。

待望の荷が着いたのだ。シェルパ総動員で荷を下ろす。マチャプチャレを背景にして作業は進む。荷は昨日の雨でかなり痛んでいるが、ほとんど荷抜けはなさそうだ。本格的な整理は明日からにして早速天幕を張る。経費節約のため今日から天幕生活だ。夜は久しぶりに日本の食糧を腹一杯食べた。食後、シェルパらと交歓会を行なう。

二日、三日、四日と朝から梱包作業で忙がしい。マチャプチャレ、アンナプルナ連峰を仰ぎながら裸で作業だ。作業ははかどった。五日キャラバン出発と決めたが、後発便が届かないので、隊を先発、後発の二つに分けることにした。少しでも日程の遅れを取り戻さなければいけないのだ。後発隊は隊長、善数、新とリエゾン、シェルパ二名とし、残り二十四名は五日に出発することに決定する。

キャラバン

三月五日（雨）ポカラ～シシュワ

ホテル・アンナプルナは薄暗いうちからあわただしい雰囲気に包まれていた。小雨の中をポーターが続々と集まってくる。ナイケ別に整列させ、一人一人に荷物と番号札、アドバンスマネー（三日分四五ルピー）、雨合羽用ビニールを渡し、名前を控えてから全部を送り出し終るまでに一時間半を要した。ポーター二六四名、ナイケが五名であった。

空港を横切り、ポーター達は雨の中を、支給品のビニール一枚で荷物を大事そうに包んで小走りに歩いて行く。四〇キロ近い荷なのにやはり強いものだ。いくつかの小さな部落をすぎ、山に入る手前のシシュワの田圃の中に幕営。キャラバン第一日目はとうとう終日雨だった。

六日（霧のち晴）シシュワ～カルプタール

雨は上り、濃霧の中にポーターは続々と消えて行く。まもなく山に入り、三十分の登りで峠の茶店に着いた。ここで鮒を十五匹一一ルピーで手に入れた。こんな山の上に魚があるなんて不思議だと思いながら峠を降りて行くと、途中で霧がはれ、すぐ目の下に大きな湖があった。

再び田圃の畔道を辿り、タール・ベシ・バザールを過ぎると、まもなく次の山越えに入る。山道は日本の奥多摩辺りとそっくりだ。木も草も石も、そして川の流れまでも。前を歩くポーターがいなければ、日本の山を歩いているのではなかろうかと錯覚しそうだ。

正面に真白い雄大なヒマルチュリを望めるサルコバス・バンジャン（峠）で一服。さすがのポーターも大汗をかきながら、ハーハーいって登ってくる。峠を二時間も下るとマディ・コーラの河岸に出る。激流にちょっと傾いた十メートル位の丸木橋がかかっており、これを渡ると今日の幕営地カルプタールだった。河原より一段上った田圃の中にキャンプする。丸木橋でポーターが三人も河に落ちて流され大騒ぎしたが、大した水深でなかったので、ポーターにも荷にもダメージはなかった。

七日（晴）カルプタール～ナルマ

早朝の出発は気持がよい。今日も暑くなりそうなので最初から短パンで歩く。大変幅の広い河原とも田圃ともつかない所を歩いた後、渡渉三回で二俣に着いた。道は真中の急な尾根に付いている。二十分毎に作られている木陰の休み場（チョータラ）で休みながら登るも、暑さと昼食抜きの空腹の身にはかなりこたえた。尾根道から、山の中腹にマメに作られた段々畑の中の道へと辿り、それを登りつめると稜線伝いに部落がある。そこが今晩の泊り場ナルマの部落であった。

ここから眺められるマナスル三山の偉容は圧巻であった。またポカラで見なれたアンナプルナⅡ峰やマチャプチャ

レが、横の角度から眺められた。いつまでもあきない眺望だ。

景色は最高だったが、物資が非常に少なく高い（多分に足元を見られているようだったが）のにはまいった。薪が四束で二〇ルピーもした。大変人なつっこく善良そうな国民も貧乏ゆえにか、金や物に対してはとてもいじきたない。でもその生活環境、生活ぶりを目の辺りに見てはそれもにくめなくなるが……。

八日（高曇りのち晴）ナルマ～クディ

ナルマの部落からは稜線歩きが続く。マナスル三山を見ながらの稜線漫歩を期待していたのに、あいにくの高曇り空のため、山々はうすぼんやりとしてしまっている。残念でたまらない。だが、まっかな大シャクナゲの花が咲き乱れる稜線歩きは、キャラバンの楽しさを味わわせてくれる。ポーター達の陽気な歌声、笑い声もはずんでいる。

二時間も稜線を歩くと小さな部落があった。バクルン・パニーだ。峠の茶店でチャを何杯も飲む。

道は茶店の横を九〇度曲り、少し行くと二つに分れ、左の林間の急下降の道に入る。（後発の隊長、新は右の広い道を進んで散々の目にあっている。）谷川岳の厳剛新道のような岩場混りのガタガタ道を一時間半も下ると、川岸の小さな部落（ラマ・ガウン）に着いた。立派な吊橋を左岸に渡ってしばらく歩くと、尾根のトラバース道となる。暑い！　間もなく大きなクディの部落が見えてきた。右下に黒部川のようなマルシャンディ・コーラが見下ろせる。大きな吊橋を渡るとクディの部落に入った。そこの牛糞だらけの畑の中が今日の泊り場だ。この先トンジェまでは大きな部落がないので出来るだけの買物をする。米、鶏、卵を大分買う。

九日（晴）クディ～バフン・ダダ

キャラバン五日目の朝は快晴で明けた。今日からマルシャンディを辿ることになる。少し先で激流の上にかけられた、竹で編んだ新しい架け橋を渡る。少しずつ渡るので三〇〇人が渡り終るまでに二時間半を要した。

対岸のブルブーレ・バザールでＢＣで飼育する若鶏と卵を買付ける。この部落から正面にヒマルチュリ、Ｐ二九の

立派な姿が望まれ、つい長居をしてしまった。白き巨人を仰ぎ仰ぎ、川ぞいにビスタリ、ビスタリと歩く。

竹で編んだ丸屋根の粗末なチベッタン・カルカをすぎ、まもなくあらわれた、ヒマルチュリ、P二九より流れてきた大きなムシ・コーラにかかる長い吊橋を渡り、炎熱の道を進み、しばらくきつい登りをあえぐと、尾根の上の竹林の中に我々の天幕が張ってあった。バフン・ダダ部落であった。こんな尾根の上に水道があるのには驚いた。スチール製、蛇口付の本格的なものだ。

明日向かう行手には、槍ヶ岳のようにとんがった山が薄く雪を付けてそびえている。大分奥地へ来た感じだ。

十日（晴）バフン・ダダ～ジャガット

今日も快晴で明けた。ポーターが〝ナマステ〟と挨拶しながら元気に出て行く。

一時間も歩き新しい竹橋を渡り、河原ぞいの道を進むと五～六軒のチベッタン部落（シャンゲ）に着く。昨日からすでにチベッタンの領域に入ったのだ。チベッタンは一様に黒っぽい毛布地で出来た服を着、サンゴ色の石の首飾りを付け、皮底の長いズック靴を履いている。この暑いのによく平気でいられると感心する。

その部落からつまらない登り下りが始まる。灰色の岩壁に囲まれたマルシャンディの流れは緑色だ。一時間半も歩くと岩壁を削った、幅三メートル位の立派な道となった。こんな所に機械はない。手でコツコツと削っていったのだろうか？

間もなく、岬状に突き出た台地上に四軒ばかりの藁屋根の小部落があらわれた。ジャガットだ。まだ昼前である。だが今日の予定はここまでだ。いくら近くてもポーター達は夕方にならなければ到着しない。途中で適当に時間をつぶして来るのである。時計を持っていなくても彼等の時間は正確である。

夕方、一日遅れでポカラを出発した八王子ガンガプルナ隊が追いついてきた。請負制にしたらポーターが非常に良く歩くのだという。その方が得かも知れない。

十一日（晴）ジャガット～タール

昨日と同じく今日もマルシャンディの右岸を、登ったり下ったりのトラバースを一時間半も続けると、小さなチャムジェ部落に着いた。すぐ前方の山まで雪が下りているが、まだ相変らず陽差しは強い。

部落から十分も下って三〇メートル位の立派な吊橋を左岸に渡り、汗だくできつい登りを終ると突然パッと前方が開け、明るい白砂の広河原が展開した。今日の泊り場タールである。七～八軒の部落で、前はマルシャンディの川、後は七〇メートル程の四段の大滝、広々としたすばらしい所だ。まだ時間は十時半。だが今日はここ泊りで文句はない。

朝から一緒にキャラバンしていた八王子パーティは、今日はトンジェ近くまで行く予定だったらしいが、我々がここ泊りなのを知ってゴネだし、結局彼らも隣りに幕営することとなってしまった。時間の余っているネパール人を急がせることは、まったく難かしいものだ。

夕食後、我々もナイケ共にゴネられ、トンジェから先二日の予定を三日にのばされてしまった。山奥に入って交替させられる心配がなくなってから、ゴネるのが彼らのやり口なのだ。欲の皮のつっぱった小ざかしいナイケ共には腹が立つ。

十二日（晴、夕立）タール～トンジェ

河原ぞいの良い道を三十分も行くと、道は右壁をトラバースしながら登っている。のっぺりした岩壁に下から石を積み上げたり、木を渡したりして道を作ってある。その人力には感心するばかりだ。両岸は屏風のようにそそり立ち、長い登り下りのトラバースが続く。こんな所にも人間が住んでいる。石ころだらけのわずかな畑と数頭の羊、鶏と共に二～三戸の集落を作って暮している。文明にひたり切ってしまっている我々には、彼らの生活が理解できない。でも彼らの表情は意外に明るい。ナマステ！　と挨拶すると、明るく笑いながらナマステ！　と返ってくる。そ

の顔はまったく日本人そっくりだ。

ダラパニ部落に着くとトンジェはもうすぐだ。前方の対岸に家が見える。部落より三十分程でマルシャンディ沿いの道とわかれ、少し下って木橋を渡るとトンジェ部落の入口になる。

トンジェはさすが中国（チベット）との国境に近い要衝の地だけあって、ポリスが沢山居る。こんな小さな所に二十人も居るという。ここで初めてパスポートを見られる。

この辺の家はみんな石で出来ている。石を積み上げて壁にし、屋根は木板を瓦状に並べ石をのせて押えてある。内部は土壁だ。床も土で、いろりが一つあり、主人の所だけジュータンが敷いてあって、他の者は土の上にじかに坐る。四畳半～六畳の暗い部屋が居間兼食堂兼台所兼寝室となる。暗くてけむくて、我々には一日と住めそうにない。

二時頃、ひょっこり善数とリエゾン・オフィサーのパンディ氏があらわれた。あまり突然だったので、何か悪いことでも起きて知らせに来たのかと思い、一瞬ビクッとした。が、そうではなく、ちゃんと二十二名のポーターを引きつれて急いだ結果、二日の遅れを取り戻して追い付いたのだという。何しろ良かった。間もなく、新、隊長と到着して、これで全メンバーが勢揃いしたことになる。キャンプ地はまた一段とにぎやかになった。

十三日（晴）トンジェ～カルチェ

キャラバン九日目、今日からマルシャンディを離れてドゥド・コーラぞいの道となる。トンジェで雪に強いポータと半数近く交替したので、大分混乱し時間を喰ったが、荷残りもなく、約二八〇名のポーターは元気に出発していった。

部落をはずれて、すぐ道は橋によって左岸に渡る。両岸の絶壁はますます高くなり、屏風岩の数倍のスケールだ。さすがに風は冷たくなってきた。

再び橋を渡るとティリチェ部落である。トンジェと同じ位の大きさだがなかなか裕福そうだ。ここで飼育用の鶏を

九羽買足し、これで二〇羽となった。また、青木達が昨秋注文しておいた篠竹で編んだムシロ（BCの炊事場用）も手に入れた。この先にはもう大きな部落はない。卵も出来るだけ買溜めした。

これから先は右岸歩きである。振返ると真白なナムン・バンジャンがそびえ立っていた。三時間近く歩いて小さな峠を越すと、反対側にはまだ雪が大分残っている。ポーターは雪の上をハダシで歩いていく。まもなく今は無人、夏場だけの部落、カルチェ・カルカに着いた。標高は二七〇〇メートル位である。

十四日（晴）カルチェ～ハンブー

カルチェの先で小川を渡り、以後右岸の林の中を登って行く。所々に残雪がある。広々とした草原を横切って三十分も登ると、突然マナスル西壁が木の間越しに目にとび込んで来た。まったく突然あらわれたという感じで、思わず立止ってしまった。写真ですでに見なれていたはずだったのに、実物を目のあたりに見ると、やはりすごい迫力だ。傘岩から上の岩稜は、はたして登れるだろうか？　おそろしく立っている。ここがキーポイントになることは間違いない。また、あのデコボコの氷河はうまく通過できるであろうか？

見あきぬ景色に別れをつげて、右下のドゥド・コーラめがけて石楠花林の中の切り開きを辿ると河原に出、先発隊の架けた丸木橋によって本流を渡った所が、本日の幕営地ハンブーであった。高度は三二七〇メートルであった。

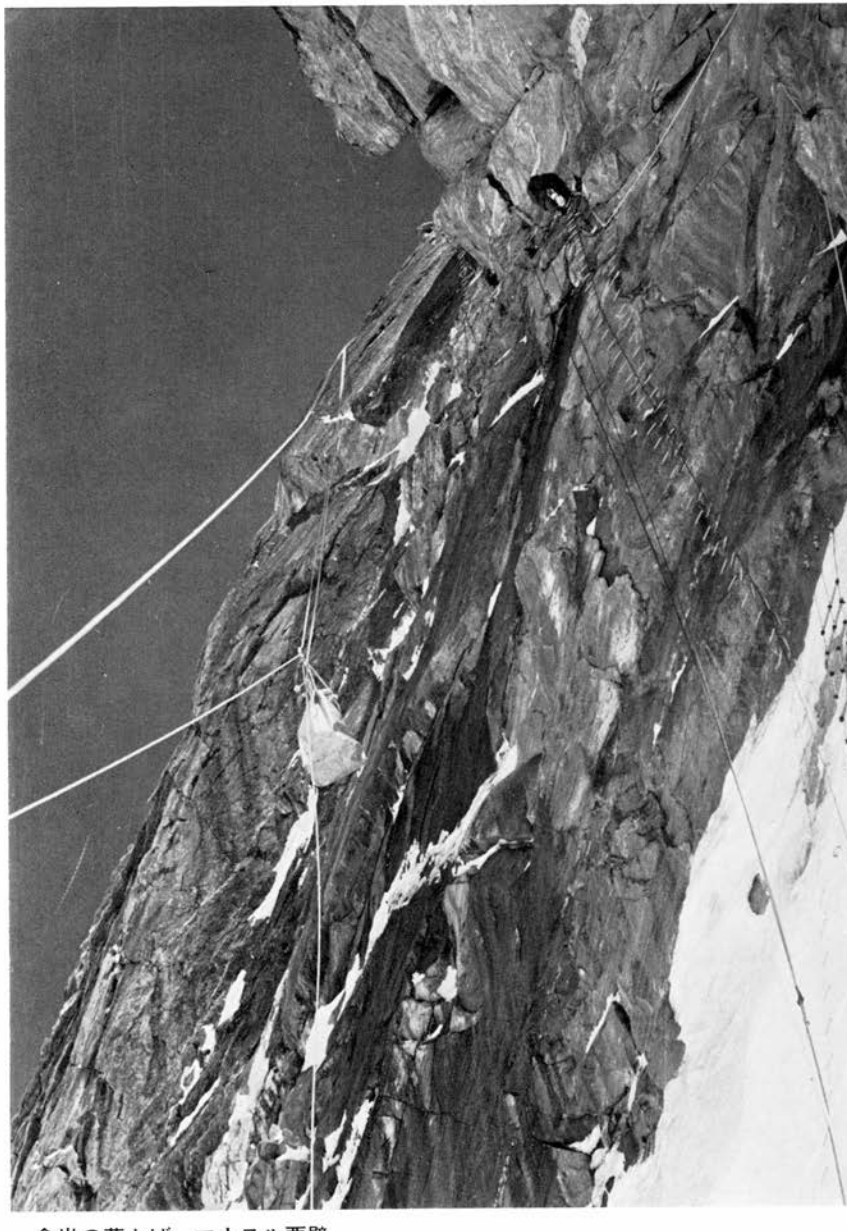
松崎がもう四日も風邪で熱が下がらない。連日夜になると三八度から九度近い熱を出す。しばらく下の部落で静養を、とも考えるが、BCが三五〇〇メートル位なので何とか連れて行くことにする。彼は陸送で弱っていた体で風邪を引いたので、こじらせてしまったようだ。ヒマラヤでは風邪と下痢には充分注意をしなければいけない。

夜、大分冷えこんだようだ。さすがのポーター達も寒くて眠れないようで、遅くまでたき火をしていた。

十五日（晴のち曇）ハンブー～BC

さあ、今日はBC入りだ、と張切って出発の支度をしていたら、その出鼻をくじくようにポーター達がゴネ出した

マナスル山頂における小原隊員
K. Kohara on the summit of Manaslu on May 17, 1971.
(By M. Tanaka)



傘岩の荷上げ—マナスル西壁
Lifting the load on to Kasa-iwa—the most difficult part of Manaslu West Face. (By S. Tanaka)

（と言っても煽動者はほんの二～三名なのだが）。雪があるのでこれ以上行かないと言うのだ。雪があること位は最初からわかっているはずだ。すでにここまでに彼らの要求をのんで、一日余分にかけて楽をさせているのだ。そう下手にばかり出てはいられない。金箱を背負ったシェルパを先に出発させておいてから、〃よろしい、ではここから帰りなさい、ただし契約違反なのだから金は払えない、金もここにはない〃とつっぱねておいて、隊員やシェルパは出発を始めた。一瞬喧々ごうごうとなったが、結局ポーター達もあきらめて付いてくることになった。その替り、はだしのポーターには運動靴を貸してやった。遠征において、ポーターの使い方は大変重要な部分を占めるということを、今回つくづく感じた。

ドゥド・コーラとも別れて、今度は水のないドメン・コーラぞいに登る。一時間程で二股になり、左に入る。雪は三〇センチ位だ。

善数とラクパ・テンジンが先行してBC地を探し、あまり広い所ではないが、マナスルのルートが全部見渡せる林のそばに決った。標高三五〇〇メートルと、八〇〇〇メートル峰のBCとしては少し低すぎるが、偵察時に決めておいた四〇〇〇メートルのポカリのある台地には、この積雪では行けないのでしょうがない。

十一日間一緒だったポーターともお別れだ。何だかんだと言っても、大半のポーターは善良で人なつっこく、決して悪人ではない。全員の賃金を払い終るのに三時間を要した。金を受取ったポーター達は雪道をころがるように駆下りて行った。

いつの間にか雪が舞い出した。キャラバン初日が雨、締繰りが雪。なんだかけじめけじめに天気が変るようだ。

かくて、日本をたってから丸一ヵ月を要して、マナスル西壁のベースキャンプに到着したのである。

第三キャンプまで

三月十五日（晴のち雪）ポーター達が去った後には隊員十一名とシェルパ等二十名、計三十一名が残され、いよいよ登山活動が始まる。早速天幕を張り、ダイニング・ルームの工事にかかったが、今日は完成しなかった。

十六日（晴）午前中にダイニング・ルーム（石垣を積み、丸太で柱と梁を作り、その上に養生シートを屋根型にかけた小屋で、隊員全員が入れる大きさである）が完成。午後より荷物の整理。

十七日（晴）今日からいよいよ行動開始。善数、田中ドクター、新、シェルパ三人で出発し、取付で二パーティーに分れ、ベースからトランシーバーでルートを指示するも、C1予定地へのルートは見つからず。

他の者はベースキャンプの整備に追われた。

十八日（晴）セラック・ルートに善数、田中ドクター、基喜とシェルパ三人、岩稜ルートに青木、清水とシェルパ一人が向かったが、岩稜ルートは取付見つからず、セラック・ルートはどうにかルートを発見できたようで、明日クレバスにかけるはしご、丸太を持っていけば、C1地は見つかりそうだ。

十九日（晴のち雪）サーブ七人、シェルパ十三人でルート工作兼荷上げに向かう。ジュラルミンはしごと丸太の橋でクレバスを越えると雪の台地に到達した。この台地をC1に決めて荷物をデポする。四五〇〇メートルであった。

これでC1へのルートは確定した。ルートを表記すると、まずBC前の小尾根を横切って雪と氷のルンゼに入る。これを一時間程つめると懸垂氷河末端のポカリのある台地に出る。ついで左のサイドモレーンに上り、その稜上を辿ると岩壁にぶつかる。下り気味に左の雪面をトラバースして不安定なアイスフォールの下を小走りに通過して、マナスル内院からの本流氷河のサイドモレーンの上に立つ。ここが氷河の取付で、アイゼンをはいてアンザイレンする場所となる。取付の三〇メートルの氷の垂壁をフィックス・ロープにつかまって登り切ると氷河の上に立つ。氷河はし

ばらくの間あまり大きなクレバスがないが、新雪の後は小さなクレバスが雪の下になってしまい、片足落ち込むというようなことがしばしばあった。BCから仰いでスカイラインになっている地点よりクレバスは大きくなり、縦横無尽の表現通りで、まったく気がぬけない。両側クレバスのナイフエッジをヘッピリ腰で辿り、一メートル程の底なしのクレバスをとび渡ると雪原となり、ここがC1である。雪原の下にはあきらかにヒドン・クレバスがあるが、他にキャンプ適地はないし、急激にクレバスが口をあくこともなかろうと、腰をすえることにする。

二十日（晴夕方一時小雪）今日から本格的荷上げ開始。サーブ、シェルパ共二〇キロの荷だったが、やはりシェルパの方が早い。明日からはサーブ一五キロとしよう。

米の弁当を作ったが大変好評だった。

二十一日（晴のち曇）C1建設。清水、善数、アン・ニマ、ニマ・ウォンチューの四人がとどまり、明日から上部のルート開拓の任にあたる。

C1への途中に架けてあるアルミ梯子に上部の氷が崩壊し、最下段がひん曲っていた。岩のように堅い氷だ。この所、天候は非常に安定している。朝はいつも快晴に明ける。それは午前中続くが、十時頃トンジェの辺りより発生した浮雲が、徐々に発達してこちらへ広がってきて、午後の始めには我々の上空に達し、雪が散らつく。毎日この繰返しである。日本の山のように急変することはまずない。天候の周期さえつかんでしまえば、天候判断は比較的楽と言えよう。

二十二日（晴のち曇）ルート工作隊の四人はアイスフォール帯をクレバスを避けて上部へと登るが、五〇〇〇メートル弱で時間切れとなり、C1へ引返した。BC隊はC1への荷上げに従事する。

二十三日（晴のち曇）前夜の降雪と疲労からルート工作ははかどらず。昨日の到達点より右上のセラック帯へと入りルートを探すが、クレバスにぶつかり戻る。違う所にルートを求めて進むも、また巨大なクレバスに前進をはばま

れ引返す。この繰返しでほとんどルートは伸びずに終った。

二十四日（晴のち曇）善数、アン・ニマ組と清水、ニマ・ウォンチュー組にわかれてルートを探す。善数組はセラック帯をさぐったが成果なし。清水組は北峰よりの高巻きルートを進み、クレバスの危険のほとんどないルートを発見した。C2への見通し明るくなる。雨宮、田中ドクターがC1に入った。

二十五日（晴のち曇）ルート工作隊は昨日の到達点より清水、田中ドクター、ニマ・ウォンチュー組と善数、雨宮、アン・ニマ組に分れてルート工作を始める。両組ともアイス・ビルディングとクレバスに行手をはばまれ前進できず。アイスフォール帯のルート・ファインディングのむずかしさを改めて痛感する。清水、善数とシェルパ二人がBCに下山し、替ってペンバ・ノルブとツェリン・ナムギャルがC1に入った。

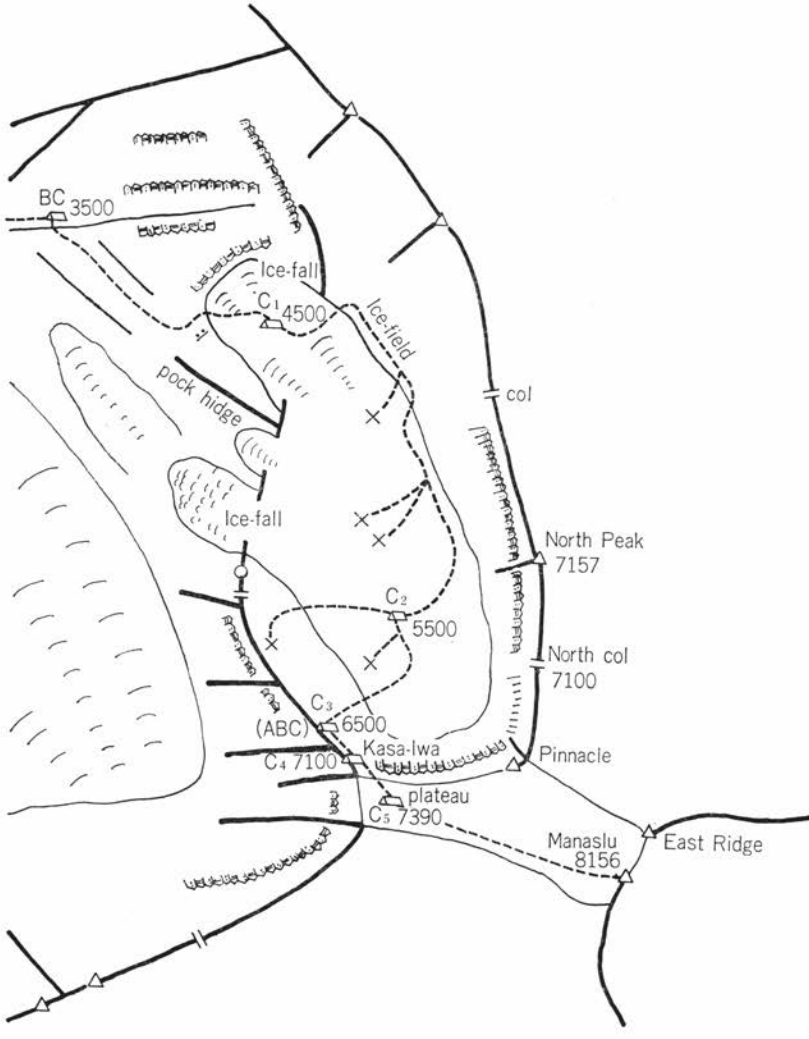
二十六日（晴のち曇）今日も快晴だ。毎日アンナプルナⅡを眺めているが、その美しさはあきることがない。ルート工作隊は田中ドクターとツェリン・ナムギャル組と雨宮、ペンバ・ノルブ組に分かれ、昨日さぐったルートよりずっと左、北峰寄りの凹状の斜面にルートを探してみる。雨宮組は巨大なクレバスに阻止されたが、田中組は北峰直下の雪原を大きくトラバースして、内院の大雪原のふちに出ることに成功した。そしてそこにABCに最適地を見つけたのである。五五〇〇メートルであった。

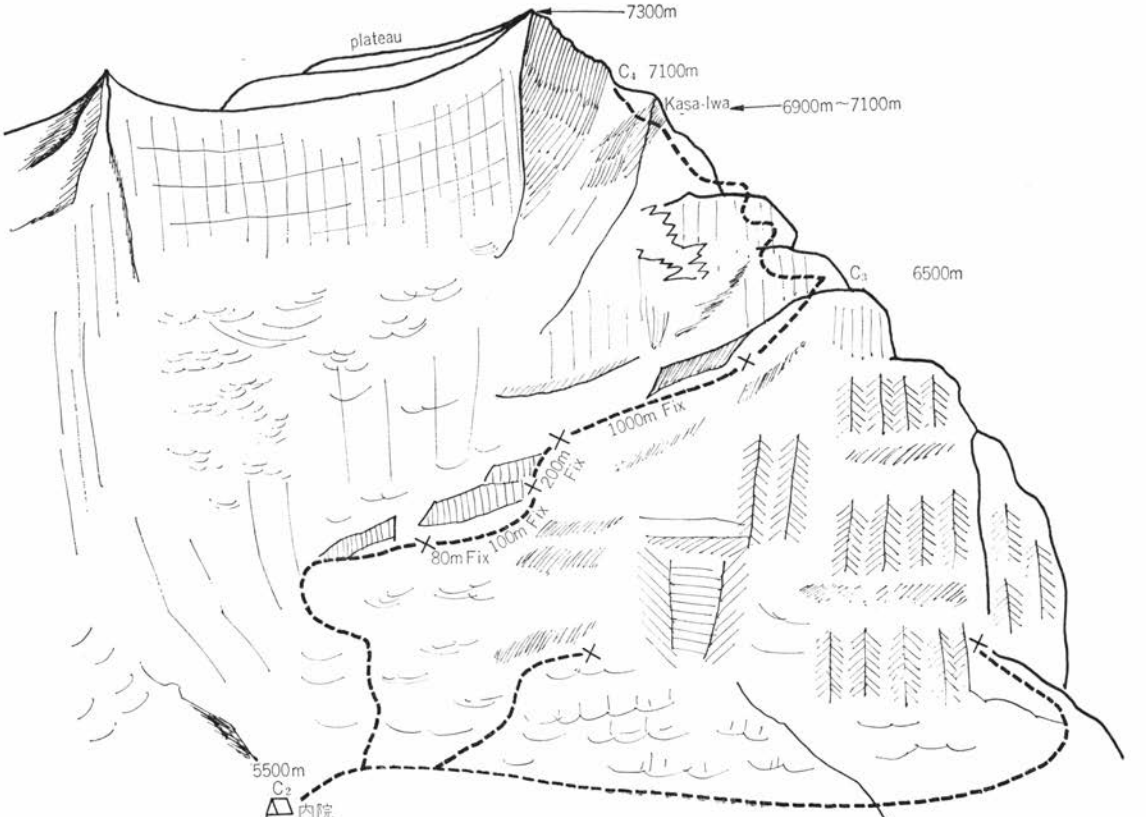
結局C1～C2（ABC）間のルートはアイスフォール帯の左端、北峰よりを大きく弓なりに取っている。北峰からの雪崩に気をつけさえすれば、遠回りだが、クレバス、セラック崩壊の危険の少ない安全なルートだ。

BCよりドクターに歯痛の治療をしてもらうべく、手術道具を担いで田中（基）がC1に上った。が、ドクターの顔を見たとたんに歯痛は治り、田中はC1にとどまることになった。

二十七日（晴のち雪）C1隊はABC予定地へ天幕、食糧、燃料などを荷上げする。BCからは小原、松崎、新とラクパ・テンジン他五人のシェルパがC1入りした。C1は六人のサーブと八人のシェルパでふくれ上った。いよい

MANASLU


BC 3500
Ice-fall
C1 4500
Ice-field
col
pock hidge
Ice-fall
North Peak
7157
C2
5500
North col
7100
C3
(ABC) 6500
C4 7100
Kasa-Iwa
Pinnacle
plateau
C5 7390
Manaslu
8156
East Ridge


7300m
plateau
C₄ 7100m
Kasa-Iwa
6900m~7100m
C₃ 6500m
1000m Fix
200m Fix
100m Fix
80m Fix
5500m
C₂
内院

よ明日はＡＢＣの建設である。

二十八日（晴のち雪）Ｃ２（ＡＢＣ）建設。Ｃ１のメンバー全員でＣ２建設に向かう。高度の影響と荷の重さ（約二〇キロ）のため大変苦しい。Ｃ２地に着く頃より今日もガスが出て来た。すぐカマボコ型テントを張って、これでＣ２は出来た。そして明日からの上部ルート工作隊として、小原、松崎、新、ハクパ・ノルブ、テンジンの五人が残り、他の者は早々にＣ１へ戻っていった。

Ｃ１は内院のど真中にある。キャンプ地の上部には巨大なクレバスが数条口を開けているので、西壁からの雪崩はそれに吸い込まれ、ここまで来ることはなかろう。ただし爆風には見舞われるかも知れない。一番の心配は、プラトーから張出している雪庇の崩壊である。そのとてつもなく大きい雪庇は、ちょっとやそっとでは崩れることはなかろうが、何年か何十年に一度は崩れていることであろう。運が悪ければその時に遭遇することはありうる。が、それを心配していては山など登れるものではない。

さあ、いよいよ明日から西壁への攻撃が始まる。だが、Ｃ２の第一夜はいたってのんびりと更けていった。

二十九日（雪のち夕方晴）ＢＣ入り以来初めて朝から天気が悪かった。だが視界は悪くないのでルート偵察に出発する。

ルートとしては二つある。西稜ルートと西壁の雪壁を大トラバースして西稜の中段に出るルートであるが、両者とも一長一短がある。前者は雪崩の心配はないが、その替りヒマラヤ・ヒダに取付かなければならないので、技術的に非常に困難そうだ。後者は技術的には楽だが雪崩の巣の真中を登るようなもので、危険性が非常に強い。どちらを取るか隊員の中でも意見は分れたが、危険よりも困難を取ろうということに決定し、我々は西稜に取付くべくＣ２を後にした。

五人の二組に分け、小原、松崎、テンジンが先発し、クレバスなどで行き詰ったら、新、ハクパ・ノルブが違う所

にルートを拓くということにする。

西稜の真下までは、またげる程のクレバスが二ヶ所あるだけで問題はなかった。西稜上へは約六〇メートル、急な雪壁をカッティングしながらよじ登るとコルに達せられた。BCがはるか下方に米粒ほどの大きさで見下ろせた。ここにスノーバーをぶち込んでフィックス・ロープを張る。西稜はしばらく傾斜が緩み、それから急に立ち上ってヒマラヤ・ヒダを作っている。ロープをフィックスしながらヒダ直下まで登った所で天気が悪化しだした。途中あまり旗を立てて来なかったので、急いで戻ることにした。案の定、風雪の中、雪原でルートを見付けるのに骨を折りながらも無事C2に戻ってきた。

夕方天候は回復し、アンナプルナⅢ峰の右に夕陽が沈んでいった。ヒムルン・ヒマールの雲が夕焼だ。マナスルの上部はまだオレンジ色に輝いている。まさに雲上の楽園にたたずむ思いだ。

本日、BCから青木、清水がC1入りした。青木の咳は相当ひどく、行動出来るような容態ではないのだが、登攀隊長としての責任感から、隊長の忠告もきかず登ってきてしまったのだ。替って田中ドクター、雨宮、田中（基）は休養しにBCへ下りていった。

三十日（晴）今朝は快晴で明けた。すばらしい眺めだ。あまり寒く感じないのだが、出発時の八時半の温度がマイナス一四度Cであった。

五人一緒に出掛け、昨日の到達点まで一時間ちょっとで達し、早速ルートを伸ばしにかかる。かなり急だが雪が固いのでステップを切りながら登れば安全だ。小原、松崎でルートを作り、新とシェルパ二人をロープ・フィックス係とするが、なかなかはかどらない。二ピッチ八〇メートル伸ばすのに昼になってしまった。

C1より荷上げのシェルパと共に青木、清水がC2に到着するのが見えた。トランシーバーで交信すると、西稜を初めて見た青木の〝あまりにも悪く、長すぎる〟という意見が返ってきた。隊員は登れるかも知れないが、シェルパ

を引上げるのがむずかしいというのだ。以前からシェルパはトラバースルートの方が良いという意見でもあるので、もう一度検討し直そうということになり、我々は五八〇〇メートルの所から下降することになった。そしてC2で待っていた青木、清水と話し合った結果、西稜ルートはひとまずそのままにしておいて、明日からはトラバースルートの偵察に向かうこととなった。BCでは養生シートを利用して風呂を沸かし、隊員達は次に自分に巡ってくるであろう困難にそなえて、疲れをいやしていた。

三十一日（晴朝のうち強風）夜中、風の音で目がさめた。シェルパ達はおびえて、シェラフの上に坐っている。天幕に当る雪が大雨のようにザーザーと騒ぎ、今にも天幕が張り裂けんばかりだ。明け方まで息の切れ間もなく吹き続けた風も、太陽の暖かみと共に息をつき出し、少し遅くなったが出発とした。

前と同じ二パーティーに別れ、小原組は比較的雪崩の危険の少なそうな、右手クレバス帯をダイレクトに突破するルートの偵察に向かい、新組は中央の凹状の雪崩道のような雪の斜面を登ることになった。小原組はC1からC2に荷上げに上ってきた清水に、トランシーバーによってルートを指示してもらいながら、右に左にクレバスを避けて登って行ったが、ついに大クレバスにぶつかってこのルートを断念。一方新組は、雪崩に気を払いながらクレバスのない斜面を直上し、小原組の立往生したクレバス帯の上部に出て、先の見通しをつけて戻ってきた。新に同行したハクパ・ノルブが雪崩の心配はないというのだから、明日からはこのルートを上に延ばすことにしよう。一番心配なのは雪崩の危険に尻込みして、シェルパが動かなくなることだったのだが、そのシェルパ達が同意したのなら、問題はなくなったわけだ。

今日の最高到達点は五九〇〇メートルであった。C2に戻ったら非常に頭が痛かった。

C1に善数、田中（基）が入った。

四月一日（晴のち雪）今日でルート工作四日目、BCでの荷上げから数えると八日目に当るので、そろそろ体力の

限界に近づいたらしく、非常に体が重い。昨日の新達の到達点まで二時間半を要した。その上部にフィックスを延ばして行ったが、なかなかはかどらない。山が大きいので、どうしても目測に狂いが生じてしまい、一日で達せられると思った所に、三日も四日もかかってしまうことが、ヒマラヤではままあるのだ。今日はシェルパ二人をC1まで下らせるので、一時に登攀を打切って下降を始めた。到達点は六二〇〇メートルであった。

C2に着く頃から雪が激しく降ってきた。ククタ、フラフラで天幕に辿り着いたら、交替要員の善数、田中(基)、アン・ニマ、ニマ・ウォンチューが既に到着していた。

二日（晴のち雪）ルート工作は善数、田中と調子の良い松崎にシェルパ二人というメンバーに替った。一〇センチ程の新雪を踏んで、フィックス・ロープ伝いに登って行くと、突然松崎の足元から新雪表層雪崩が発生し、善数共々数メートル流され、フィックスにぶら下って止った。予期していたことではあったが、最初の雪崩でもあるので、一旦降りて、今日は雪崩の観察をしようと下降を始めた。貴重な一日だが身の危険には替えられない。

小原、新がC2からBCまで下山。雨宮、田中ドクターC1入り。青木、清水はシェルパ四人を伴なってC1からC2へ荷上げ。

三日（晴のち雪）ルート工作は三〇〇メートルのフィックス・ロープを張るだけで終った。

昨日C1の天幕の下にクレバスがあいたので、今日は一段上に移動した。

四日（晴のち雪）今日もルートは西稜上まで延びず。三〇〇メートルのフィックスで終った。六五〇〇メートル近くの高度でラッセルを混えたトラバースは、気ばかりあせっても体が言うことをきかない。

五日（晴のち曇）善数、松崎が連日の奮闘で疲労困憊し、C2で休養をとっている間に、一番若い田中はシェルパ二人を引連れてルート工作に向かい、六〇〇メートル、フィックスを延ばし、あと三ピッチで西稜に出られる所まで到達した。まったく長いルートだ。

C1より清水、雨宮、田中ドクター、C2入りし、松崎は替ってC1に下って行った。小原、新はBCよりC1へ上った。

六日（晴のち雪）遂にC3予定地までルートが延びた。ルート工作を始めてから九日ぶりである。田中（基）、雨宮、田中ドクター、清水とシェルパ四人はルート工作と荷上げを同時に行ないながら、六五〇〇メートルの西稜上の台地に到達したのである。

小原、新はC2に入り、C1の青木、松崎はBCに休養に下りた。

七日（晴）田中ドクター、清水、新、小原、ラクパ・テンジン、テンジンの六人でC3へ荷上げをする。体の調子は良いのだが、息苦しさだけはどうしようもない。いくらハーハーやってもまだ空気を吸い足りない。二十歩登っては一息を繰り返しながら、徐々に高度を上げるしかない。まだ体が完全には高度に順応してないのであろう。

これで明日にはC3が建てられるだけの物資が上った。ペンバ・ノルブ、ツェリン・ナムギャルの二人、C2入り。

八日（晴のち雪）C3建設成る。

夜中の強風が朝まで続いたため出発が遅れた。皆大変疲れている。そのため時間がかかって、C3に着いたのが三時。天気がくずれ、雪が降り出していた。気温はマイナス一〇度Cに下っている。すぐに整地をして、小さなミード型天幕を一張張った時はもう四時になっていた。小原、新、ペンバ・ノルブの三人を残して、他の五人は急いでC2へ下っていった。

たった一つのテントだが、C3には変りない。C2が出来てから十一日目だ。C3の第一夜は静かに更けていった。風もなく、雪も降らず——。だが息苦しくて寝苦しくて、お世辞にも快適な夜とは言えなかった。

傘岩を越える

九日（晴のち雪）今日から傘岩に向かってルート開拓が始まった。西稜は裏側ドメン・コーラ側は断崖となって三〇〇〇メートルも切れ落ちて、ルートの可能性はまったくない。天幕のすぐ背後は一〇〇メートルの氷の垂壁で、これも荷上げルートには不適だ。この氷壁を左から巻くべく、四〇メートル程バックして、氷のクーロワールにルートを求めることにした。小原がトップで取付いたが、見た目よりも氷が固く、なかなか手強い。傾斜は七〇度近くある。四〇メートルザイルを延ばして、右側のスノーリッジに出て一息つく。雪の下の氷にスクリューハーケンをねじ込んで支点とし、なおもクーロワールをアイゼンの出歯とアイスメス、ピッケルを駆使して四〇メートルよじ登って、左側のスノーリッジに出ると、この急なクーロワールも終りであった。たった八〇メートルに三時間近くもかかってしまった。だが、がっしりとフィックス・ロープを張ったので、今後はユマールで楽に早く登れるだろう。

トップを新に交替して、大きな雪庇状雪壁の下を左に一〇〇メートルのトラバースを行なう。楽に見えたトラバースも急な上に、氷と雪の境目なので不安定でいやらしかった。途中に休み場に格好の大テラスあり。

再び小原トップで二〇メートルの雪壁登りをして、西稜上のコルに立った。ドメン・コーラより肌を刺す寒風が吹き上げていた。いつの間にか天気が悪化しだしていた。そこから上の雪稜は右に広い六〇度程の雪壁となっており、ルートはこれを登るしかない。ここでスリップすれば三〇〇〇メートルの空間をダイビングすることになる。慎重にステップを切りながら登るので、非常に疲れる。アイスメスが大変有効であった。ザイルを四〇メートル延ばして、この雪壁を越えると、緩い雪稜に出た。ここで今日は時間切れとなり、余ったザイル、スノーバー等をデポして、今フィックスしたばかりのロープに懸垂環を通して、懸垂下降で一気にC3へと戻った。傘岩の基部には明日の昼頃には着いてしまいそうに思われた。

調子の出た青木、松崎はBCで作った鶏の燻製と日本からの手紙を持って、C1をとばして一日でABCまで入ってしまった。が、このオーバーワークは後々まで、二人の調子を崩す原因となってしまった。

十日（晴のち一時雪）昨夜降った雪のためラッセルがあり、ルート工作は遅々として進まない。昨日の到達点よりしばらく雪稜を辿り、つき当った一〇〇メートル程の急な雪壁をよじ登って、再び雪稜に出た所で天気が悪くなり引返した。新の調子が悪くなってきた。

ABCを発ってC3に向かった青木、松崎は調子悪く、途中から引返してしまった。

田中ドクター、清水はABCより休養のためBCに向け下山。遠藤、善数、BCよりC1入り。

十一日（晴）朝から雲海がものすごく美しかった。BCは天気が悪いと言うことだったが、五〇〇〇メートルから上は上天気だ。雲海上にアンナプルナ連峰、カングルー、ヒムルン・ヒマール、チェオ・ヒマールなどが朝日に輝き、我々を声援してくれているようだ。だが、BCを出てから一週間動きづめの体には疲労が沈澱し、非常に苦しい一日であった。

昨日の到達点より雪稜をしばらく進み、いよいよ傘岩直下の大雪壁である。新とペンバ・ノルブにフィックスをたのみ、小原は傘岩目がけて急雪面にアイゼンを蹴込みながら、左斜上を始めた。そして一二〇メートルもザイルを延ばすと、傘岩直下の雪の台地に到達したのだ。六八〇〇メートルであった。天幕を出てから五時間二十分が過ぎていた。

非常に苦しいルート工作であった。だが、素晴らしい大パノラマ・ルートが出来上った。氷のクーロワールから大トラバース、そして雪壁から雪稜、再び雪壁——雪稜——雪壁と繰返すこのルートは、必ず皆を満足させるであろう。

ゆっくり休む間もなく、この遠征の成否を握っている傘岩のルート観察を行なう。傘岩とは、その形がカラ傘を半開きしたのに似ている所から、我々が付けた名称である。その傘の頭までは約二〇〇メートル、所々にものすごく堅

そうな青氷を付けた逆層の垂壁で、絶望的な悪相だ。どこか弱点があるはずだ。真剣に目は岩壁をなめる。傘の左辺に岩のクビレを発見した。所々かぶり気味の垂壁だが、岩の部分八〇メートル、氷の部分一〇メートルの登攀で突破出来そうだ。勿論ボルトの連打となるが、上に抜けてしまえば、縄ばしごをたらしてシェルパを上げれば良いし、荷は空中ケーブルが利用出来る。よし、ここに決めよう！　トランシーバーでBCに詳しく報告を終えて、急いで下降を始めた。

C3に着く頃、青木、松崎、雨宮、田中（基）が上ってきたので、雨宮、田中（基）、アン・タルケイの三人にバトンタッチして、小原、新、ペンバ・ノルブは青木達と共にABCに降りた。

C2の善数、ABCに荷上げ。田中ドクター、清水はBCにて休養。

十二日（晴）夜中雪が降り、日中は無風で気温が上ったため、一日中雪崩の音が山々にコダマしていた。C2～C3間のトラバースルートも朝、幅一〇〇メートル程雪崩にやられ、フィックスが断ち切られ、松崎らの荷上げ隊は途中から引返して来た。また、彼らが登っている時、真上のプラトーからものすごい雪崩があり一瞬肝を冷したが、下に届くまでに雲散してくれて大事に至らなかった。

傘岩のルート工作隊は、C3からベタ張りのフィックス・ロープをユマールによってよじ登って、三時間で傘岩の基部に着いた。そして下部の氷壁一〇メートルにルートを開いた。ものすごく堅い氷で予想以上に時間を喰い、本日はそれだけで終ってしまった。

C1の遠藤副隊長とABCの青木の調子が思わしくない。小原、新はABCにて休養。

十三日（晴のち曇）傘岩のルート開拓隊の雨宮達は本日岩に取付いた。田中トップで氷壁から岩に移り、バランスクライムにてクラック通しに右斜上していった。アイゼンを付けているので非常に悪い。クラックは一〇メートルで終り、その上は逆層のオーバーハングだ。リスも見当らず、これから先はボルトの領域となりそうだ。天候が悪化し

てきたので、今日はここまでとして下降に移る。さすがに傘岩は手強い。

ＢＣより田中ドクター、清水Ｃ1に入る。Ｃ1にて不調をかこっている遠藤は、ドクターより胃潰瘍の疑いありと診断される。小原、新は本日もＡＢＣにて休養。

十四日（晴のち雪夕方晴）朝方まで降っていた雪も止んだので、ルート工作隊は行動を起したが、ラッセルと天候悪化のため傘岩の基部から引返した。

一方、ＡＢＣからは、Ｃ3の食糧が欠乏しだしたのが心配で、小原、ペンパ・ノルブ、テンジンが荷上げに向かった。途中から雪が降り出し、ラッセルも深く、雪崩が心配されたが、気温が低いので大丈夫と判断し登行を続け、一時少し過ぎにＣ3に無事到着した。気温が上昇しだしたので下降は危険と判断して、小原はＣ3泊りと決めたが、シェルパ二人は雪が小止みになったのでＡＢＣへ下ると言い出した。我々は止めたのだが、言葉が不自由なので説得することも出来ないままに、彼らは二時半頃下降していった。が、はたせるかな途中で雪崩に遭遇し、フィックス・ロープのお蔭で流されずにすんだが、二人共雪に埋まり、特にテンジンは首までもぐって肋骨を痛めたのであった。ヒマラヤに慣れているはずのシェルパだが、意外に判断が甘いことを知らされた。

十五日（晴のち雪）具合の悪いアン・タルケイをＣ3に残して、雨宮、田中は新たに小原を加えて傘岩のルート開拓に出かけた。

すぐ傘岩に取付き、一昨日の到達点まではフィックスを利用してユマールで登る。その先は、もう少し直上してから左にトラバースすることに決めて、まずホールドを探すも、岩が非常に大雑把で適当なのが見つからない。仕方がないのでボルトを打って一段ずり上り、その上に二本のハーケンを打ち込んで、外傾しているがどうにか足の置けるスタンスに立つことが出来た。左へのトラバースの入口だ。ここまでトップの田中が到達した処で、天気が急変しすぐ下降を始めねばならなくなった。今日もたった三メートルしかルートを延ばせなかった。

ＡＢＣ隊は雪崩を恐れて全員停滞。Ｃ１に高橋照隊長、田中ドクターが入る。

この所、毎日天気が思わしくない。

十六日（晴）傘岩のルート工作に従事した雨宮、田中、アン・タルケイは休養のためＡＢＣへ下り、替って青木、松崎、清水、ツェリン・ナムギャルがＣ３に入った。小原を混えて、これで一挙に傘岩を攻め落そうという作戦である。善数、ラクパ・テンジン、ペンバ・ノルブが荷上げのためＣ３を往復した。田中ドクターＡＢＣ入り。

これでＢＣに遠藤、Ｃ１に高橋、新、ＡＢＣに田中ドクター、雨宮、田中、善数、Ｃ３に青木、清水、松崎、小原という布陣が整い、傘岩総攻撃の時が来た。後は好天を祈るだけだ。

十七日（雪）出鼻をくじくかのように、朝から雪が降り続け、各キャンプは荷上げに行動を起すも途中迄で引返した。荷上げが遅れ気味である。

Ｃ３はまったく行動出来ず。天幕内でゴロゴロするも暑さでまいる。時々さす薄陽のため幕内はむし風呂のようで、裸になってもまだ耐えられない程だ。外はマイナス三度Ｃで湿雪が降り積っていた。

十八日（雪）ＢＣ～Ｃ１間を除いて全部行動不能のため停滞。

十九日（雪）今日も終日雪。Ｃ３の積雪は一メートルになった。シュラフも下から濡れてきて不快きわまりない。荷上げがされないので食糧は限られたものばかりだ。砂糖も切れた。話題は相変らず食物のことが多い。

全キャンプ停滞。

二十日（雪一時晴）四日連続雪で明けた。が、九時頃より青空が広がり、ヒムルンの方まで見えてきた。Ｃ３パーティは明日にそなえて少しでもラッセルをと、すぐ様準備をして出発。だが雪の深いこと、完全に腰まである。スコップで除雪しながら進むので、クーロアールの取付までの平地の四〇メートルに、一時間以上かかってしまった。結局、今日はクーロアールを登って、トラバース中間のテラスまでで引返した。一時であった。再び雪が降ってきた。

松崎、清水が調子を崩してきた。松崎は右脇腹の痛み、清水は不眠症で共に食欲なし。早くＡＢＣに降ろして休ませてやりたい。

他のキャンプは全員停滞。

二十一日（晴のち雪）天気はやっと回復した。不調の二人を残して、小原、青木、ツェリン・ナムギャルの三人で傘岩までのルート確保のためＣ３を後にした。すごいラッセルだ。平均して腰まで、急斜面では胸から首まである。フィックスがなければとても登れない。そのフィックスを掘出すのが一苦労で、腕がとても疲れる。小原、青木の五時間の奮闘でやっと最後の雪壁の基部まで行ったが、二人とも全身だるくなり、これ以上続けると明日からの行動に差しつかえると判断し引返した。

午後から、またいまわしい雪が降ってきた。苦心のラッセルもくたびれもうけに終ってしまったようだ。

今日もＣ３に荷上げなし。砂糖も茶もなく連日白湯ばかり。

Ｃ１～ＡＢＣ間は両方から進んで、どうにかランデブー出来たようだ。ＢＣ隊はＣ１への途中で引返す。

二十二日（雪）Ｃ３に向かった荷上げ隊、途中で引返す。Ｃ１～ＡＢＣ間ランデブー出来ず。ＢＣ隊のみＣ１に着いた。

Ｃ３は停滞。雪が降り続けているが外気温がなんとプラス一一度Ｃ。幕内はじめじめで、シュラフの下には水がたまってびっしょりだ。不快きわまりない。

二十三日（晴のち雪）やっと晴れた。ＡＢＣ隊が今日はなんとしてでも、荷上げとメンバーチェンジするというので、青木、小原で上から逆ラッセルをすることにする。二時間半かけてやっと八〇メートル進んだか進まないかの状態ではどうしようもなく、今日はあきらめた。Ｃ３は夕方、後の崖より雪崩があって、天幕が半分埋まり、フレームとポールがひん曲ってしまった。

二十四日（晴たり曇ったり）朝四時の気温マイナス一七度C。天候回復の兆かも知れない。今日も昨日の繰返しを行なう。いつもと同じオジヤの朝食をとり、白湯を飲み、身仕度を整えると外には腰までのラッセルが待っている。もうフィックス・ロープを掘出すのは止めて、ルートを思い出しながら、新たにフィックスを張りながらラッセルし、通称〝門〟と呼ばれる所まで来て十二時だ。これから急なトラバース気味の下降となる。ABC隊の動きも鈍い。が進んでいることは確かなので、トランシーバーで連絡を取り合って、これから先はフィックス・ロープが使えそうなので、松崎、清水だけで下ってもらうことにした。

半病人の二人は腰までのラッセルをしながら下って行った。二人は夕刻無事にABC隊と合流したが、その時は立っているのがやっとという状態であった。

二人に替ってABCからは善数、田中（基）がC3に入った。暗闇の中、雪まみれで二人はC3に到着した。七時丁度であった。ともかく曲りなりにも、ABCとC3のルートは開通したのだ。

その夜の砂糖入りの紅茶とウィスキーのうまかったこと。

二十五日（晴強風）昨夕から強くなり出した風が烈風となり、天幕が破れそうだ。C3は快晴なるも一日停滞。昼頃よりやや風の息が長くなったので、外に出て見て驚いた。あんなに降り続いて我々を苦しめた雪が、ほとんど吹きとばされてしまい、天幕の前には降雪前の古い大キジが点々と残されているだけだ。風の威力にはまったく驚かされた。

ABCも停滞だったが、その下のキャンプは荷上げに成功した。

二十六日（晴強風）出発しようとする頃から昨日と同じような強風が吹き出し、結局今日もC3は停滞となってしまった。が、ABCから雨宮、田中ドクターとシェルパ五人が、実に十日ぶりに荷上げに来てくれた。これで食糧も一安心となった。

二十七日（晴のち曇）待ちに待った登攀日和だ。無風、快晴、そして暖かい。サーブ四人で出発する。新雪は風でとばされ、雪は適当にクラストしていて、傘岩の基部まで今までの最短時間の二時間で到達した。

すぐ登攀準備をする。青木、小原でルート工作、田中が氷壁部に縄ばしごのセット、不調の善数は基部に居て、上部への不足品の補充をする係となった。

まず小原が今までの最高到達点までユマールで登り、アブミに乗ってジッヘルする。次に青木が登って、そのまま小原の横を通ってトップに出た。これからはまったくホールド、スタンスなく、ハーケンを打つリスもない垂壁だ。ボルトの連打しかない。ルートを左斜上にとる。岩は割とやわらかいが、アブミに乗って左に打つので非常に打ちづらく、一本打ち込むのに二十分はかかる。それもボルトの先の割れ目が見えているような打ち込み方である。青木は二時間かけてボルト五本、ハーケン一枚打って小原と交替した。青木の声はボルト打ちであまりハーハー言ったので、かすれてほとんど出なくなっている。

交替した小原は、ルートをリスのありそうな直上にとる。が、大きなリスばかりで、ハーケンによいリスがなかなか見つからない。ハーケンの重ね打ちやら、動くハーケンをだましだまし使ったりして、結局ハーケン五枚、ボルト一本で雪のついたテラスに手が届いた。しめた！　と喜こんで雪を払い落すと、それはペロンとしたスラブだった。がっかりして、又このスラブにボルトを一本打つ。時間はいつしか三時半となっていた。今日はここまでとし、補助ロープでザイルを引上げて、懸垂で基部に下り立った。

今日の健闘で、ザイルは十五メートルしか延びなかったが、傘岩の最悪部は突破し終った。残すは四十メートル程で、今日よりは楽に行けそうだ。明日には是が非でも突破したい。

本日はＢＣを除き、他はフル行動し、再び全キャンプが活気に溢れてきた。Ｃ３のツェリン・ナムギャルはＡＢＣに下り、替ってニマ・ウォンチューがＣ３に入った。

二十八日（晴のち雪）傘岩突破。調子を崩した青木に替って田中（基）と小原とでザイルを組み、昨日の最高到達点より田中トップで未知の壁に挑んだ。頭の上に二本のクラックが平行に並んでいる。左上にテラスがありそうなので、左のクラックに入ろうとしたが、入口がハングしていて入れずに、やむを得ず右のクラックに取付く。非常に岩が脆く、ハーケンも打てない。ボルトを打って、これにアブミをかけ、クラックに入ってずり上がる。その上にもう一本ボルトを打ち、これにぶら下がるようにして左のクラックに入り、これをずり上って、とうとうクラックを抜け出すことに成功した。クラックを抜けた所は小さな雪田となっており、田中はこれを削って二人がやっと立てるテラスに仕上げ、小原を迎えた。その上は二メートルの氷壁と十メートルの赤茶気た垂壁が連なり、灰色の虚空へと延びていた。垂壁はまったくの一枚岩で、ボルト以外には手も足も出ない。小原と田中は二本ずつ交替でボルトを打ち続け、八本目のボルトでこれを突破することが出来た。その上にはもう岩はなかった。とうとう頂上への最大の難関は、我々の足の下になったのである。すぐ様基部にいる青木と善数に傘岩突破の合図を送ると、彼らはトランシーバーによって、この朗報を全キャンプに知らせた。午後三時であった。

傘岩を抜けた所から五十度の雪面が、大きな雪庇を張り出した稜線まで続いている。雪の下は完全なスラブとなっているようで不安定な感じだが、今日はそれを確かめる余裕がない。懸垂下降で基部まで下り、すぐC3へと下山を始めた。C3帰幕は五時半だった。

ABCに高橋隊長が入り、C3には田中ドクターが上った。

二十九日（晴のち雪）喉を痛めている青木と、清水と交替にABCに下る善数をC3に残して、小原、田中ドクター、田中（基）、ニマ・ウォンチューの四人で傘岩の整備に向かった。田中は頭痛で苦しそうだし、小原も連日の傘岩のルート開拓で疲労し、傘岩基部に着いたのは十二時近かった。が、ともかく、中段からワイヤーばしごをたらすべく小原が登り、ボルトを二本打って固定した。下を田中ドクターが固定し終って、小原がこのはしごを伝って下り

てみた。途中所々ハングしているので非常に腕力がいる。はたしてシェルパが登れるかどうか心配だが、これ以上のことは出来ない。ザイルで引張り上げるしかないだろう。C3帰幕は六時を過ぎてしまった。

ABCから清水が元気に上って来た。善数はABCに下りた。C3にカマボコテントが張られたので快適になった。

三十日（晴一時雪）清水、田中（基）、田中ドクター、ニマ・ウォンチューで傘岩の整備に向かい、中段から上のクラックには縄ばしごを、最後の垂壁にはワイヤーばしごをセットし、荷上げ用空中ケーブルも張り終って夕方C3に戻って来た。明日、これらをもう少し補強すれば、傘岩のルート整備も完了となろう。

小原はC3にて休養し、不調の青木はABCに下りた。替ってサーダーのラクパ・テンジンがC3に入った。

小原はC3で、上部荷上げ用食糧を整理して、ダンボール箱五つにパッキングし終えた。これでC4建設の準備はほぼ終った。

アタック・キャンプ

五月一日（晴強風）C4予定地まで行くべく強風の中を小原、清水、ラクパ・テンジン、ニマ・ウォンチューの四人で出発する。雪煙の中を傘岩の基部まで頑張ったが、益々風は強まり、結局空中ケーブルのロープの張り替えだけで戻って来た。

C3に雨宮、ツェリン・ナムギャルが加わる。

荷上げは各キャンプ順調に行なわれた。

二日（晴一時雪）C3のメンバー全員で出発する。小原、田中（基）はC4予定地までルート工作すべく先発したが、二人とも快調で、今まで平均三時間かかっていた傘岩基部まで一時間四十分で到達した。傘岩をワイヤーばしご

と縄ばしごで乗越し、二人は更に上部へと向かった。傘岩の頭へ続いている雪稜上に出るべく、約六〇度の雪壁を左斜め上にキックステップで登り、四〇メートル間隔にロープをフィックスして行く。西稜から大きく張り出している雪庇の下を、左にトラバースする。急斜面の上に雪が不安定なので、いやらしいトラバースだ。ついで頭上の雪庇の切れ目を目指しての四〇メートルの直登は、傾斜約七〇度あり、出口は垂直でピッケルとアイスメスを駆使しての、かなりきわどいバランスクライムを要求された。雪稜上に手が届き、体をグイッと持上げると顔面に雪混りの寒風がつきささった。ドメン・コーラの谷底から吹き上げてきた風だ。一旦ひっこめた首を再び伸ばし、雪稜上にはい上った。反対側も断崖となって、三〇〇〇メートルの空間が谷底まで続いているはずだが、今はガスのために底までは見えない。突然頭上が明るくなりガスが晴れた。目の前には岩稜がプラトーに向かって延び、それは比較的易しそうに見えた。二日もあればOKだろう。(後にこの目算が大変な誤算だったことを思い知らされる。)

さあ、上部の見通しがついたので、C4を建設出来る所を発見しなければならない。フィックス用ロープがなくなってしまったので、二人はアンザイレンしてコンティニュアスで雪稜を先に進んだ。左は雪庇だし、右は崖だ。慎重に行動し二〇〇メートル程で雪稜の幅が広くなった所に着いた。大きな雪庇の上だ。西壁側に一〇メートルは張り出しているだろう。根はしっかりしていそうなので、ここをC4に決定しよう。時計を見るともう三時半だ。急いで下降に移る。

傘岩の連中の方はさっぱり仕事はかどらず。ワイヤーばしごを登る時は上からジッヘルしてくれなければいやだ、とシェルパにゴネられてザイルをセットしたり、傘岩を抜けた所の雪面が急なので、その部分は上から荷を引きずり上げられるように工作したり、という作業だけで一日終ってしまい、実際の荷は全然上らずであった。本格的荷上げは明日からだ。

C3にアン・ニマが入り、これでサーブ五人、シェルパ四人の計九人となった。

三日（晴のち雪）風邪で調子のよくない清水を残して、サーブ四人、シェルパ四人でC3を出発したが、傘岩の荷上げで非常に時間と体力を消耗してしまい、今日もC4予定地まで荷は上らなかった。空中ケーブルの具合が良くなく、十キロの荷を上げるのに、下で六人掛りで引張らねばならない程だったので、基部のデポ品を上に上げるのに精一杯であった。

ともかくC4建設用の荷はほとんど傘岩の上に上った。明日はC3の全員休養し、明後日全力を上げてC4を建設することに決定した。アン・タルケイとハクパ・ノルブC3入り。

四日（晴のち雪）C3は全員休養。ABCからの荷上げ隊のうち、善数とギルミがC3手前のクーロアールからの雪崩に埋まる。ここは平らなトラバースなので、晴天の時はフィックスを使用しない者が多いのだが、たまたま二人はフィックスにセルフビレーをかけていたので、下のクレバス帯にたたき落されなくてすんだのである。油断大敵だ。

今後のローテーションが決まる。第一次アタック隊は小原・田中（基）、第二次は未定。第三次に、これからC4から上部のルート工作をやる雨宮と清水が一旦休養の後にアタック隊となり、これは東面へ下降する。アタック態勢は十五日まで続ける。それまでに第三次まで出すことは非常に困難なことだが、明日からこのローテーションで全力投球をすることを誓い合った。

C1の荷物はすべてABCに上ったので、C1隊全員ABC入りする。今日からC1は無人となる。

五日（晴）昨晩の新雪と強風のため、C3、ABCとも停滞とした。ここまで来た以上、無理に行動をおこして無駄足となった場合の体力の消耗が、こわいのだ。もうこれから先は、一日たりとも停滞する余裕はないだろうから。

晴天の停滞は楽でない。暑くて暑くてたまらない。天幕内は四〇度Cを超えていることだろう。ヒマラヤで暑さにまいるとは——。

六日（晴のち風雪）C4建設。

今日こそはと意気込んでは見たが、朝の天気はパッとしない。西の空に前線のような雲があり、東の空まで薄雲が広がっている。シェルパ達はすぐ雪が降り出すだろうと言って、あまり腰を上げたがらない。まだ一度も乗越したことのない傘岩の存在が、彼らの腰を重くしているのだろう。

長い空とのにらめっこの末、出発を決定する。八時C3を全員十一名で出発する。

持ち直したかに見えた天気も、傘岩基部に着く頃から急に崩れ出し風が出てきた。すぐ納まるだろうと思って、シェルパをせっつかせて傘岩を攀らす。シェルパは独力では絶対に攀らない。中間と出口に隊員を配置し、上からザイルで引張り上げるようにしないと動かないのだ。一時間一人の割で、ラクパ・テンジン、アン・ニマ、ハクパ・ノルブと引張り上げて、四人目のアン・タルケイの番になる頃から、風は益々強くなり、雪も降ってきて、顔も上げられない程になってきた。アン・タルケイははしごの途中で念仏をとなえながらガタガタふるえている。あまりに気の毒で降ろしてやったが、我々も前進か後退かで迷った。時間ももう三時だ。一時はバックしようとしたが、上に居るラクパ・テンジンが、今上に居る者だけでC4を作ろうと積極的な所を見せている。シェルパが積極的に前進を主張することは異例のことで、きっと彼らはこの天気の中を傘岩を下るよりも、上部の雪壁を登る方が楽だと判断したからなのであろう。隊員同士の協議の結果、上に居るシェルパ三人と隊員五人でC4を建設することに決定した。そうと決まったら急がねばならない。塵雪崩が落下し、舞い上り、渦を巻く傘岩を攀って、隊員は荷物のデポ地に集結した。各人出来るだけの荷を背負って、C4へと動き出したのは四時をすぎていた。二十キロ以上の荷を背負ってフィックス・ロープをたぐる登りは、息がはずみ、腕が疲れる。

垂壁を乗越し西稜上に出た時は六時を過ぎていた。C4予定地はもう目と鼻の先なので、田中ドクター、田中（基）、小原は荷をそこに置いてすぐ下降に移った。暗闇につつまれる前に、傘岩だけは下降しておかなければならない。あ

と一時間だ。三人はフィックス・ロープにぶら下がるようにかけ降りて、傘岩を懸垂で下り終えた時、完全な暗黒に包まれた。三人共ライトは持って来ていない。だが、傘岩を下り終ったことで、三人共ホッとした気分になり、あとはC3までは通いなれた道なので不安は全然なかった。テントの入口までロープは張られている。運よく時々おぼろ月が顔を出し、それが唯一の照明となり、無事九時にC3に帰着した。シェルパ達は大変心配していたらしく、我々の声を聞いて、天幕からころげるように出て来て、素手でアイゼンをぬがせてくれ、その間に他のシェルパが熱いコーヒーをなみなみとついでくれるという喜びようであった。

C4地に着いた雨宮、清水、ラクパ・テンジン、アン・ニマ、ハクパ・ノルブの五人は、早速雪庇の上を整地し出した。スコップで雪をかいていると、亀裂が現われギョッとしたが、大したことは無さそうなので、これを雪で埋めて、その上にミード型天幕を一つ張った。これでC4が出来たのだ。風と先程の亀裂がやはり気にかかり、天幕の周りにスノーバーを沢山打ち込み、ロープを幾重にも天幕に巻きつけてみたが、所詮気休めにしかならないだろう。全員が天幕内に落付いたのは八時を廻ってからだった。

外は降雪、そして中は窮屈だったが、C4の住人の意気は盛んであった。

七日（晴のち雪）第一次アタック・メンバーの小原、田中（基）は登頂日迄、絶対に今のコンディションを持続させなければならない。そんな二人を天幕に残して、田中ドクターは三人のシェルパを連れて傘岩の基部まで荷上げに行った。今後はC3～C4間は傘岩でドッキングして、空中ケーブルで荷の受渡しをすることになっているのだが、C4は強風のため停滞してしまい、C4に荷は上らなかった。

ABCから青木、松崎がペンバ・ノルブ、カミ・ノルブと共にC3に入った。松崎は完全に復調したようだが、青木はまだ喉の調子が悪く、ドクターに注射してもらっている。

八日（雪）降雪激しくC3、ABC停滞。C4は食糧不足のため、午後から雪に苦しめられながらも、傘岩上のデ

ポ地から食糧等を荷上げした。今日もルート偵察は出来ず。

九日（晴）C3全員十人（サーブ五人、シェルパ五人）で傘岩の荷上げに向かった。ラッセルが非常に深く、基部まで五時間もかかってしまった。C4からはシェルパ三人が傘岩の上に降りてきて、ケーブルで吊上ってきた荷物を上のデポ地にデポする。天気よく荷上げは大変はかどった。C4のシェルパはC4～傘岩上間を二往復したので、C4は天幕二張となり、食糧も大分上った。ツェリン・ナムギャルもC4に入ることが出来、人員は予定通りに揃った。

だが、上部ルート工作隊の雨宮、清水は強風に前進をはばまれ、岩稜まで二五メートルの所から引返してしまった。これでもう三日がロスされてしまった。

十日（晴のち雪）ルート工作隊の雨宮、清水は早朝出発し、岩稜に達してみて驚いた。易しそうに見えた岩稜も、最初の岩峰（我々はその形状からチンボコ岩と呼んだ）からして、通過不可能だった。無理して巻き込んでも、その上に続く岩稜は垂壁の連らなりで、更に絶望的だ。二人はそれを一望しただけで、あっさりと岩稜ルートに見切りをつけて、フィックス・ロープとスノーバーを回収して一旦C4に戻って来た。あと残されたルートは右側の懸垂氷河しかない。小休の後、天幕入口より右の雪壁を下降する。七〇メートルも下ると岩場が出て来た。五メートル位だがちょっと悪い。これを通過すると広大な氷の斜面に立つことが出来た。氷の上に乗っている雪をどけて、氷にステップをきざまなければ、とても立つことの出来ない堅い氷だ。まるでガラスのようだ。ルートはこの氷の斜面を登って、懸垂氷河の左隅にと作れそうだ。見通しは明るくなった。氷にステップを切り始める。一つステップをきざむのに、ピックの方で三〇～三五振りしなければならない。幾つかきざんだ所で急に雷が鳴り始め、金物がジイジイ音をたて始めた。時間ももう四時を回ったので、二人は今日のルート工作をこれまでとしてC4に引き上げた。

C3からは松崎がシェルパを連れて荷上げに出発した。荷は傘岩の上まで全部上り、C4からはシェルパが二往復

したので、荷上げは大変順調に運んだ。

ラジオニュースで、ダウラギリⅤ峰の県稜山岳会の遭難を知る。先日はエベレスト国際隊とプモリの富士宮山岳会の敗退を報じていた。悪いニュースばかりだ。

十一日（曇のち雪）雨宮、清水は五〇～六〇度の氷の斜面に、一つ一つ丁寧にステップをきざんでいった。降雪の中を頑張って六〇メートル、ザイルをのばし、岩場の下に達した時は、もう五時であった。気ばかりあせっても体が言うことをきかない。疲れ切った体を引きずってC4に戻った。

C3からは全員で荷上げに向かい、酸素も含めほとんどの荷が上った。あとはC5へのルートが開けるのを待つばかりだ。

遠藤副隊長念願のABC入り。新BCに下る。

マナスル韓国隊の金隊長の弟遭難のニュース入る。遭難ラッシュだ。いやな気分。

十二日（雪）朝からの雪でABC、C3とも全員停滞。その雪をついてC4は雨宮、清水の二人で十時より行動を開始した。氷の斜面を終って一〇メートル位の岩のルンゼに取付く。易しく見えたルンゼも、七〇〇〇メートルを超える高度では非常に悪く感じる。ハーケンをベタ打ちしてこれを乗越すと懸垂氷河の末端だ。懸垂氷河の上までは、あと二〇メートルの氷と雪まじりの壁を登ればよい。氷にスクリューハーケンをねじ込んでフィックスの支点として、なおも登り続けた。そして遂に懸垂氷河上に達した時は、時間は夕暮迫る六時であった。懸垂氷河は傾斜四〇度位で、プラトーに延びる雪のルンゼ下まで約三〇〇メートル続いていた。氷河上を一ピッチ登った所で今日も終ってしまった。またプラトーには出られなかった。今日こそは、今日こそはが、何日続いたことだろう。明日こそは——。

帰路、岩場で雨宮のアイゼンがはずれたり、電池が終ってしまったりして時間を喰い、C4に戻ったのは八時四十五分であった。

C5建設のメドがついたので、明日は第一次アタック隊の小原、田中（基）と、それをサポートする田中ドクターがC4に入ることになった。あとは好天を祈るばかりだ。

十三日（晴一時曇）雨宮、清水は今日はサーダーのラクパ・テンジンを伴なって、プラトーに抜ける決意でC4を出発した。風もほとんどなく、今までで一番穏やかな天気だったが、ルートは懸垂氷河の終り、最後のルンゼの取付までしか延びなかった。ラッセルが深かったのと、清水の調子が悪かったためだ。あまり順調な高度順応をしていなかった清水だが、C4からはほとんどトップでルート工作を進めていた。夜は不眠症に悩まされ、顔はむくみが出てまんまるにふくれ上っていたが、清水は今日も終始トップで行動し、プラトーまで行くんだと意地をはっていたが、精神力にも限界がある。その歩みは夢遊病者のそれのようであった。見かねたテンジンがトップを替ってラッセルしたが、プラトーまでは遠かった。また予定が一日狂った。

田中ドクター、田中（基）、小原の三人C4入り。松崎はシェルパ四人を引連れて傘岩の荷上げに従事した。C4からはシェルパが傘岩上まで降りて来て、荷物は全部C4に上った。

またまた遭難のニュース入る。アンナプルナⅡの信州大学隊だ。我々も気を引き締めねば。

十四日（雪）今日こそはC5入りと張切っていたのに無情の雪。それでも出かけようとアイゼンまではいたが、風雪強まり断念。

七〇〇〇メートルを越えているというのに、しかも雪の日だというのに、なんという暑さだ。天幕内は四〇度もある。頭はボーッとし、体がだるい。一日の温度差が五〇度以上。しかもこの高度、体が変にならないのが不思議だ。ヒマラヤでは寒さよりも暑さに気をつけろと言いたい位だ。

ABCからC1へ食糧を取りに行った以外は、他のキャンプ共特に動きなし。どのキャンプもすでにすべての準備完了し、登頂成功のみを待っている。

十五日（晴時々曇）七時四十分、C5建設のための荷を背負って、隊員五人、シェルパ四人の全員でC4を後にした。雨宮、清水の報告では、プラトーまであと五～六〇メートルの易しそうなルンゼがあるだけだということなので、今日は間違いなくC5は建設できるだろうと張切る。荷は各人約二〇キロ、この高度まで来ると、隊員とシェルパのボッカ力には差がなくなる。逆に隊員の方が強い位だ。

フィックス・ロープとユマールによって悪場を乗越し、懸垂氷河に立つと深いラッセルが待っていた。膝から股までのラッセルはかなりこたえる。シェルパ達は徹底してトップをやらないので、小原と田中（基）が交替でラッセルして、今までの最高到達点であるルンゼの入口の岩蔭に到達した時は、既に十二時半であった。

すぐ様、小原トップでルンゼへのルート工作を開始した。ルンゼ内は雪崩の危険性があるので、左側を登るが岩が出ていて悪い。三〇メートルのばして、雪の下の氷にスクリューハーケンを打って1Pとした。下で待つ連中は、このルンゼを悪いと見て、もう一本右の長いが傾斜の緩い雪のルンゼにルートを変更したがっている。だが、小原はなおもこのルートに固執して、先にザイルを延ばしにかかった。結果的にはそれが良かった。もし右にルートを変更していたら、我々はマナスル頂上に立つことが出来なかったかも知れない。右のルンゼの上には、通行不可能な岩稜がプラトーまで続いていたのだ。ルンゼを抜けてからそれに気付き引返したのでは、もはや体力的にも日数的にも手遅れとなってしまったことだろう。このルンゼの選択は運命の別れ道でもあったのだ。

小原はザックを置いて2P目に入った。岩のスラブを避けて右にトラバースしてルンゼを横切って、ルンゼ右側にルートを求めた。雪の下はすぐ岩のスラブで、アイゼンがガリガリ言って気分が悪い。出来るだけ雪の厚そうな所を選んで登る。二〇メートル延びた所で岩にハーケンを打ってランニングビレーをとり、なおも一〇メートル直上する。そこの露岩にリスを見つけてハーケンを打つも、三分の一しか入らない。それをビレーピンにして、フィックス用ロープを担いでいる田中（基）を上げた。時間はもう四時に近く、これでは今日C5建設はとても無理なので、他

の者は荷をデポしてC2に帰ってもらうことにして、小原と田中（基）だけで、ともかくプラトーまでルートを作っておくことに決める。

3P目からはルートをルンゼ内にとった。雪崩れそうな急な雪壁を二〇メートル登って、ルンゼ左壁にハーケンを打つ。今度はよく利いた。なおもルンゼの直上、雪の下は氷か岩だ。雪が丁度うまい具合に付いているので助かる。雪が少なければ岩のスラブが出てきて、恐らくこのルンゼは登れなかったろう。反対に、これ以上雪が多ければ雪崩が出る。この辺でも我々はラッキーだったと思う。三〇メートルの直上でルンゼを抜けることに成功した。だが、そこはまだプラトーではなく、氷の上に二〇センチ位の雪が積ったいやらしい雪面であった。氷にスクリューハーケンをねじ込むが、ここの氷はあまりにも乾燥しているためか、ガラスのようで、パリパリと割れ砕けてうまくねじ込めない。苦労してやっと一本打ち込んで田中を迎えた。このいやらしい雪面を二〇メートル登ると、足下は完全な雪だけの緩斜面に立つことが出来た。丁度フィックス・ロープも終りであった。スノーバーを打ち込んでガッシリとフィックスする。さあ、これでプラトーまでのルートは完成したのだ。ルンゼの入口からここまでにフィックス・ロープは一三〇メートル延びた。目測の倍以上の長さだった。ここでもまたヒマラヤのスケールにだまされたのだ。

フィックスの終点でザイルを解いて三〇メートルも登ると、眼前はパッと開け、広大な雪原がそこにあった。とうとうプラトーに立ったのだ。左手にはいつも下から見上げていた大雪庇が見え、その先にはピナクルが一〇〇メートル位の高さにとんがっている。頭上に雲の合間に白い丸い頂が見える。頂上はあの奥だろう。大分遠い。C5は出来るだけ上、七五〇〇メートルの第二ステップ辺りに作ってもらおう。頂上までもう一息だ。

肌を刺す寒風で我に返り時計を見ると、もう五時半を回っていた。田中をうながして下りにかかろうとした時、思いもよらず、清水がただ一人でフィックス・ロープを担いで上ってきた。さぞ彼はここまで自分でルート工作をやりたかったことだろう。その執念が肉体の限界を超越して、清水をここまで登らしたのだろう。二人は清水を先導して

再びプラトーまで上り、五時四十五分三人一緒に下降に入った。

下のキャンプは雪のため停滞した。C3はまたまた雪崩に埋められた。

十六日（晴）やっとC5が出来た。当初二～三日で出来ると高をくくっていたが、実に十日もかかってしまった。が、ともかくアタック・キャンプが出来たのだ。

八時四十五分C4出発。ルンゼ下までは荷がないので昨日の半分の時間で到着。そしてルンゼ内もフィックスたよりによじ登って、一時半にプラトーに着いた。その頃から風が強くなり、雪原上には雪煙が渦を巻いている。皆疲れているが、出来るだけ上部に天幕を張るべく、雪原に歩を進めた。シェルパと隊員は別々にザイルを組んで進む。下ではサボってばかりいてあまり役に立たなかったハクパ・ノルブが、エベレストで活躍しただけあって、ここでは断然強く、他のシェルパを引きずるようにしてトップを登っていた。

三時、登行を打ち切って天幕設営にかかる。高度計は七三六〇メートルを指していた。

三時三十分、ミード型天幕を一つ大雪原の真中に張り、小原、田中（基）の二人を残して、雨宮、清水、田中ドクター、ラクパ・テンジン、ハクパ・ノルブ、アン・ニマ、ツェリン・ナムギャルの七人は後を振り返り、振り返りして登頂成功を祈りながら降っていった。

残された小原、田中（基）は皆が見えなくなる迄見送ってから天幕に入った。酸素六本、プロパンガス（五キロ入）一式、炊事用具、食糧ボックス、個人装備と天幕内に入れても、六人用天幕は広々として寒々しい。すぐガスをつけると心地よい暖かさとなった。

さすがに下のキャンプよりも大分息苦しさを感じるが、二人共調子は上々だ。夕食は二人共食欲旺盛で、高所用にと持参したベビーフードなど見向きもせずに、味付け飯（ちらし寿司）とみそ汁、それにコンビーフをかじり、食後にはみつ豆缶まで開けた。

明日は標高差八〇〇メートル、距離二・五キロの登行が待っている。暗くなると同時にシュラフに入った。睡眠には酸素を使うことにする。

天気は快晴だが風が強い。うなりっぱなしだ。この風がやみさえすればアタック決行だ。C5は位置の関係からか他のキャンプの通信は入らなかったが、下ではアタックは第一次のみで中止という指令が出されていた。

登　頂

十七日（晴一時曇）十二時十五分、登頂成功。

朝一時半起床。風はあるが星空だ。アタック決定。昨夜は酸素（毎分〇・五リットル）のお蔭で良く眠れた。二人共依然食欲旺盛で松たけ飯とスープをペロリと平らげた。慎重に身仕度を整え終って外へ出た時はすでに五時に近かった。酸素ボンベ（鉄製、一本六・三キロ）二本、トランシーバー、カメラ、テルモス、食糧、登攀具などを入れたザックは二〇キロある。服装は羽毛服上下の上にウインドヤッケ上下を着、靴は三重靴の上にオーバーシューズ、それにアイゼンをはくので体が重い。夜が白々と明け始めた五時五分、二人はアンザイレンして酸素マスクを付けてC5を出発した。プラトーは広々としていて上部には何の目標物もない。ただ高みを目指して進むだけだ。下山用に二～三〇メートルおきに赤テープを雪中に埋めながら登る。相変らず風が強く、たえず雪煙が足下を洗っていた。雪は表面がクラストしていて時々足首までもぐる。振り返るとヒムルン・ヒマールやアンナプルナは雲海上に頭だけ出し、それはもう目の下にあった。マナスル北峰は、両側がヒマラヤひだとなって殺ぎ落ちたナイフエッジとなっている。二〇歩歩いて一息付くというペースを堅持して第二ステップ、第三ステップと通過し、天幕を出てから五時間後、八〇〇〇メートルの所で二人共一本目の酸素が切れた。平らな所までと酸素なしでそのまま五〇メートル程歩いたが、その苦しかったこと。毎分二リットルの酸素の効用を痛切に感じた。但し最初から酸素なしならば荷も軽い

し、体もなれていることだろうから話は別だが……。

酸素を交換した後、出発後初めて食物を口にする。羊羹を半分ずつ食べ、熱い紅茶を飲んだ。十時半、再び腰を上げる。頭上の雪壁を左から巻こうと基部をトラバースして行くと、間もなくブリガンダキの崖ぶちに出てしまった。しかたなく少し戻って雪壁を直上する。雪壁の表面は薄い氷でおおわれ、その下はクレバスのようだ。踏み破らないように、慎重にこの四〇メートルばかりの雪壁を乗越すと、緩い雪面に立つことが出来た。この頃からマルシャンディ側からガスが巻いてきて視界が悪くなってきた。堅雪をアイゼンを利かせて登り切ると、そこは八一〇〇メートル、偽頂上の左肩の雪棚の上であった。そこからは奥に雪稜が延びているが、ガスのため頂上は見えない。

雪稜はかなりやせていて、右側は急な雪壁となって落ち込み、左側は雪庇を張り出した断崖となっている。二人はスタカットで慎重に雪稜に足を踏み入れた。一〇〇メートルも雪稜の右側をトラバースして行くと、コル状になった所に岩が出ている。これを右に巻いてから、かなり急な雪壁に取り付くのだが、岩を巻く所でアイスハーケンを発見！　十五年前の日本隊初登頂時のものだ。それは厳しい風雪にたたかれながらも、錆一つ付けずに黒光りしていた。これで頂上へのルートは確認出来た。さらに慎重に四〇メートルも雪稜を辿ると、再び岩が現われ、その先がコルとなり、コルの上にはあの写真で見覚えのあるマナスルのピークがあった。

岩の所で田中に確保してもらい、小原はコルに下り、そして最後の七メートル程の脆い岩場を登った。十二時十五分、遂に登頂は成った。

頂上は狭かった。人一人やっと立てる位だ。反対側はスッパリと切れ落ち、激しい風雪が吹き上げて顔を打つ。ザイルは宙に舞い、早く頂上から降りるよう促しているようだ。急いでピッケルに国旗を結びつけ写真を撮ってもらい、下で待つ友のために石を拾いザックにつめ込んで下降に移った。登りは夢中で登った岩場も降りは悪い。岩が風化してボロボロなのだ。手にする岩が欠けてしまう。さて、どうしようと迷っていたら、手で払った雪の下から黒い

アイスハーケンが出て来た。十五年もたったハーケンだが錆もなく、ビクともしない。これにザイルを引っかけて下った。そして田中と交替。田中も小原と同じ動作を繰り返し、石を拾って戻ってきた。ああ、それにしても遠く険しい頂だった。総勢三十一名が二ヵ月余をかけて勝取ったピークだ。二人は万感を胸にいだいてじっと頂を見つめ直した。

去り難い気を押して十三時四十分、下山にかかる。帰り際に、途中の岩場のアイスハーケンを記念に抜いてきた。八一〇〇メートルの偽頂上の肩で、途中から毎分三リットルに上げた小原の酸素が切れた。以後酸素なしで降ったが、やはり苦しかった。心配された大雪原の下降も、途中からガスが晴れて迷うこともなく、天幕の見下ろせる所まで来た。昨晩から我々と他のキャンプとは交信がとだえている。みんな心配していることだろう。もう一度念のためにとトランシーバーのスイッチを入れると、かすかにABCの隊長が我々の電波をキャッチしてくれ、登頂成功のニュースはたちまち全キャンプに伝わった。やっと大任をはたし終った感じでホッとした。そして、ここで初めて本当のうれしさがこみ上げて来た。五時二十分、無人のキャンプに帰り着き天幕に入ってのんびりすると、あまり感じなかった疲れがどっと出てきた。

夕食はベビーがゆにお茶漬のりをかけて食べる。二人共あまり食欲なし。昨晩の残りの酸素を吸って寝る。

他のキャンプでは、たえず雪煙を上げているプラトーを見上げながら、アタック隊が出発したかどうかも判然としないままに、トランシーバーを開放したまま長い一日を過していた。そして夕刻登頂成功の朗報を受け、その夜はほとんどの者がうれしさのあまり眠れぬままに朝を迎えた。

十八日（晴たり曇ったり）C5の二人は天幕に陽が当るまで、シュラフに入ってウトウトしていた。夜中酸素が切れると、とたんに息苦しくなり、寒くなってよく眠れなかったのだ。

朝食はオートミール。二人とも食欲なく、テルモスの内ぶたに一杯食うのがやっとであった。

十時五分前、かじかんだ手で天幕の入口をしっかり閉めて、二人はこれを後にした。風雪の中にポツンとたたずむC5、たった二晩の宿だったが、名残り惜しくて何度も何度も振り返った。

プラトーから下る頃から天気が悪くなってきた。灰色のガスの中をフィックス・ロープにぶら下って下り、懸垂氷河の末端まで降りてくると、C4から雨宮、清水、田中ドクターがサポートに上ってくるのが見下ろせた。岩のルンゼの下で合流、サポート隊に先導されC4に入る。シェルパ達はすでにC3に向け出発した後であった。閑散とした天幕内で改めて喜びを分かち合う。昨晩は三人共眠れなかったという。しばしのんびりしてから五人でゆっくりとC3へ向け下り始めた。

傘岩も無事下り、基部で松崎と合流。その頃から天気は良くなり、最後の景色を堪能しながら、それこそのんびりのんびりとC3へ下った。

C3に着くと、真先に青木がとび出して来た。彼も昨晩は眠れなかったという。続いてシェルパ全員が握手を求めて来た。皆うれしそうだ。本当に登頂出来て良かった。

この日、BCからパサンに登頂報を持たせてポカラに出発させる。また、トンジェから無電で登頂の第一報を政府に送った。

十九日（晴のち曇）一気にBCまで下山する。九時半、全員三〇キロを超えるザックを背負って、四十日間世話になったC3地を後にした。ABC～C3間は二日間通らなかったのでラッセルが腰まであり、ABCに着いた時はもう三時になっていた。ABCは撤収した後で泊るわけにはいかない。更にここで荷を上積みしてBCへ向かった。C1着七時、もう薄暗いが誰も泊ろうとは言わない、皆かなり疲れているのに。

C1を出るとすぐ暗くなり、ランプの明りを頼りに、複雑に口を開けているクレバス帯を下って行った。先行者のトレースを辿りながら慎重に慎重に下る。三ヵ所クレバスをとび移り、無事氷河帯を抜けることが出来た。そしてシ

ヨボくなったライトを頼りに、滑ったりころんだり、まるで敗残兵のようにバテバテでBCに下りて来た時は、夜中の十一時に近かった。

ともかく、これで全員無事にBCに降りて来たのだ。すぐロキシーが運ばれ、真夜中の乾杯が始まった。あんなに疲れていたのに、たちまち皆元気付き、飲み、食い、語りで、とうとう夜が明けてしまった。

夜中、シェルパ同士の喧嘩が遅くまで続いていた。

二十日（晴後曇一時雨）全員休養。養生シートで風呂を作り、数ヵ月ぶりに垢をおとした。風呂上りに焼鳥で一杯やりながら、シェルパ達と歌を唄い、それが九時頃まで続いた。これも成功したからこそだ。今年は失敗した隊が多かった。失敗だけでなく遭難まで引起した隊が大分あった。そのような隊はどんな気分で遠征を締括ったのであろうか。ふと、幸せに包まれながら、そんなことを考えた。

二十一日（晴後曇）田中（基）とシェルパで、C1とその先の台地に残してきた荷の撤収を行なった。

二十二日（晴後一時雨）昨日残置された荷を、シェルパ全員でBCに荷下し。撤収完了。

ヌルブ・ザンブーがポーターを呼びにトンジェに下る。キャラバン開始を二十五日とする。

二十三日（晴後雨）終日梱包作業。

二十四日（晴後一時雨）梱包作業終了する。

帰りのキャラバン

二十五日（曇時々雨）キャラバン開始。約八〇名のポーターと共に九時五十分、七〇日間暮したBCを後にする。来る時は雪の沢だったのが、今は雨でよく滑る河原歩きだ。

カルチェ手前の広々とした原っぱで幕営。往きに十五ルピーだったポーター賃が、帰りは十八ルピーに値上りされ

ていた。一足先に帰って行った××大学隊が、十八ルピー払ってしまったらしいのだ。悪い前例を作られると後の隊が苦しむ。

値上げ分だけ荷を重くした。一人四〇キロ平均だ。

二十六日（曇一時雨）トンジェ泊。夜、シェルパダンスが夜中まで続いた。

二十七日（晴）タール泊。汗ばむ暑さだが、風が涼しく日本の秋の感じだ。

二十八日（晴一時雨）ジャガット泊。谷底ぞいなので山は見えないが、替りに滝が素晴らしい。日本にはない豪快さだ。

二十九日（曇一時雨）バフンダダ泊。途中で洗濯したり水浴したり、蝶を追う者、花の写真を撮る者、思い思いにのんびり歩く。帰りのキャラバンは楽しい。

三十日（晴一時雨）クディ泊。モンスーン期の今は毎日必らずにわか雨がある。傘は必需品だ。夜、蛍が沢山飛んでいて大変きれいだった。

三十一日（晴たり曇ったり、朝大雨）ナルマ泊。天幕の中まで水びたしにした大雨も、歩き始める頃には晴れてきた。森林帯に入るとヒルが沢山出てきたが、気を付けていれば食われることもない。

ナルマでは学校に泊った。マナスルとP二九がよく見えた。往きとは違う感慨でマナスルをいつまでも見つめていた。

六月一日（曇）カルプタール泊。往きには何でもなかった河も、今は急流となり腰までの深さとなっている。四回の渡渉で今日の泊り場着。幕場のすぐ近くの川では川人足が居て、金を取って背負って人を渡していた。水を恐れるポーター達を、隊員が手を取って渡してやった。

二日（曇後晴）シシュワ泊。ポカラに近付いたので暑い。峠越えでは蒸し暑さにまいった。日本の夏の低山歩きと

ちっとも変らない。だが夜は涼しい。

三日（晴）ポカラ着、キャラバン終了。幕営地から三十分程で広い自動車道路に出、ここから乗合ジープに乗って、あっという間にポカラに着いてしまった。八時十分であった。三ヵ月ぶりのポカラだが、着いてみると出発したのが、つい先日のような気がする。

日本から届いていた手紙には、我々の登頂成功を報じた新聞の切り抜きが沢山入っていた。思ってもいなかった程大きく扱われているので、驚いた。

明日の飛行機でポカラを発ってカトマンズに戻る予定。

四日（朝の内雨後曇）午後の飛行機でカトマンズ入りした。そしてホテル・シャンカーに宿をとった。

田中ドクター下痢で発熱。これでC4以上で行動した者全員が、下山後何らかの障害を起したことになる。小原がBCからキャラバンにかけて下痢、胃けいれん、雨宮がBCとポカラで下痢、田中（基）がキャラバン中に下痢、そして清水が膝の関節が痛くてキャラバン中ずっとビッコという具合にだ。やはり高度の影響で、本人の自覚以上に体が衰弱していたのであろうか。今さらながら、高度の影響の大きいのに驚くしかない。

かくして我々のマナスル登山は、無事故で登頂成功という成果を残して、幕を閉じようとしている。残るは持ち帰った荷物の整理と挨拶廻り、それに登山局へ遠征報告書を提出すること位だ。

一切の仕事を終え、カトマンズにて解散、帰国第一陣は六月十五日カトマンズを後にした。そして六月二十日、羽田に帰着した。

（編者付記）本登山については高橋照著『マナスル西壁』が既に刊行されている（昭和四十七年十二月・文芸春秋新社）。

コルディエラ・レアルとアタカマ高地

（一九七〇—七一年）

向一陽

大学や会などの〝名誉〟にこだわらないエクスペディションができないものか、と考えた。こんなに狭くなった地球に、国内のセクショナリズムを拡散するのはばかげている。

遠征といえば、とかくセクト的「全体」が先に立つが、本来山登りの原点は「個人」である。異なるカマのメシを食ったいろんな経験、考え方の人間があちこちにいる。そのような自由な「個人」が、義理や附和雷同ではなく個人の意志で共通の目的のもとに集まれば、より強力な「全体」ができるだろう。個人の人生も豊かになるだろう——。そんな意味で、エクスペディションの出発点を全体ではなく個人に置いてみた。

アタカマ高地（プーナ・デ・アタカマ）という存在のために、そんなチームを思い立ったともいえる。「世界最悪の場所」「地上の月世界」などと表現されてきた、チリ・アルゼンチン国境の高所砂ばく。アンデスで一番広く高い地帯だが、漠然として複雑で、つかみどころがない。六〇〇〇メートルを越す巨峰が群立しているが、登攀意欲をわかせる「美しい氷雪のピラミッド」とはほど遠い、死火山、活火山ばかり。ふもとも「乾燥度世界一」の、塩原と砂ばくである。そんなところへはいってみようというのは、あちこちばらばらの物好きしかいなかった。アンデス経験と

いう共通の広場を通じて「一緒に行ってみようじゃないか」というヨコのつながりができ、「アタカマ高地探検隊」の原型が誕生した。

南北六百キロ、東西二百～三百キロにわたるこの高所砂ばくを南北方向に縦断してみよう、その間、山にも登ろう、植物、地質、地形、気象、民俗などの調査もしよう――という計画であった。

紆余曲折を経て七〇年春、各地の大学の山岳部、探検部ＯＢ八人からなる「アタカマ高地探検隊」が成立した。隊のメンバーは次の通りである（年齢は出発時）。

向一陽（三五）＝東京外語大、隊長、共同通信社会部▽西村豪（三二）＝北大、地質調査、チリ大研究員▽今村文彦（二〇）＝日大、写真、共同通信写真部▽竹下孝哉（二九）＝東京外語大、輸送、翻訳業▽中村昭伸（二九）＝日大、医療、駿河台日大病院循環器科医師▽山本紀夫（二七）＝京大、植物調査、食糧、京大農学部応用植物学教室▽金井良碩（二五）＝神戸大、測量、装備、大阪府岸和田土木出張所▽向一宇（二五）＝千葉大、地質、気象調査、機械、佐賀県有田工業高校教諭。

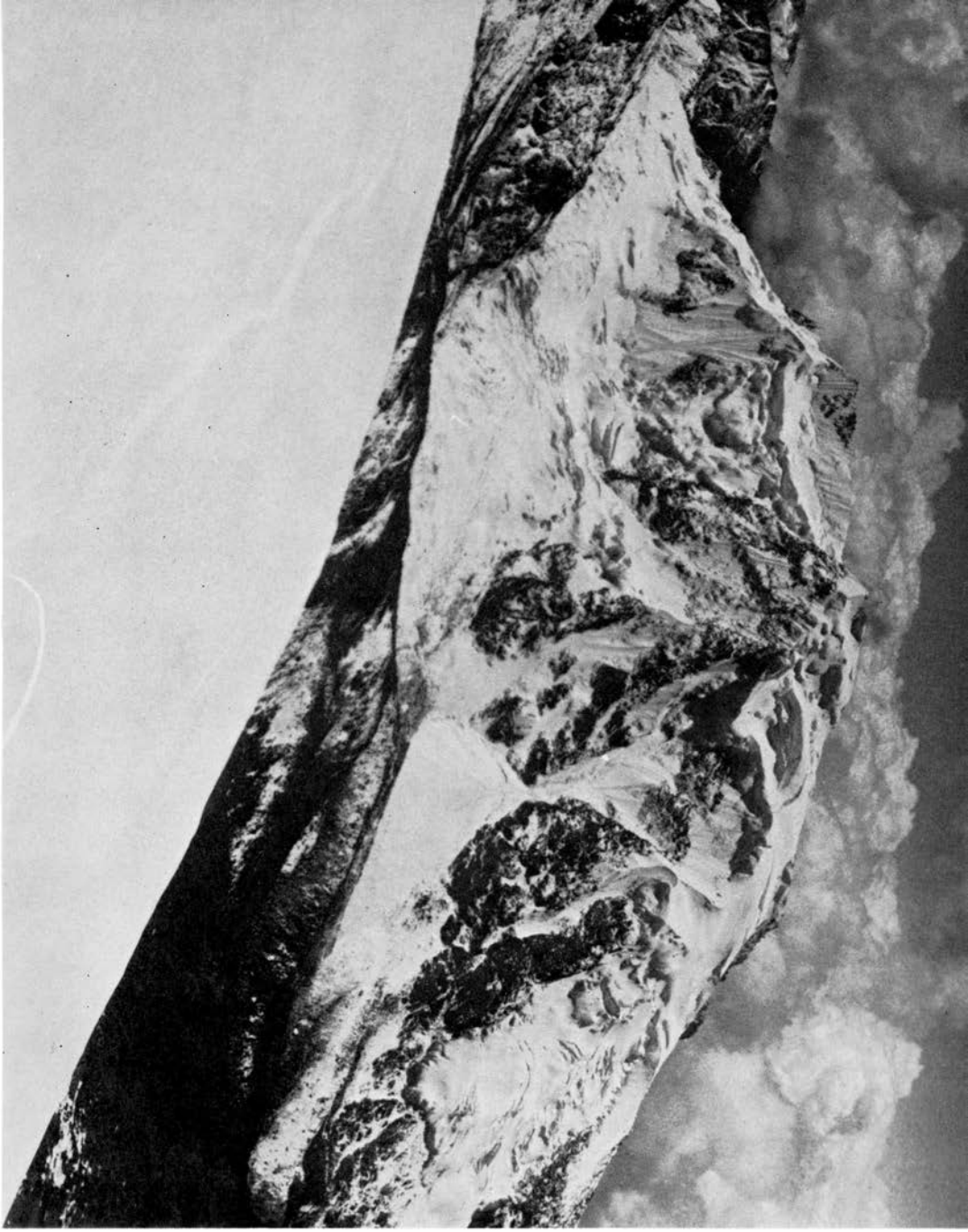
六四年に東京外語大隊で僕が初めて南米へ行ったとき貨物船の相乗り客に、北大隊でアマゾンへ行く、という西村がいた。そのとき以来西村は南米にとりつかれ、チリのサンチアゴに住みついたような形となり、北大のパタゴニア調査隊に四度も加わっている。

今村は副隊長格として隊を取り仕切ってくれた。日大グリーンランド遠征隊の第一次隊員である。中村は本業の医療活動のほか車にも詳しく山登りにも熱心だった。

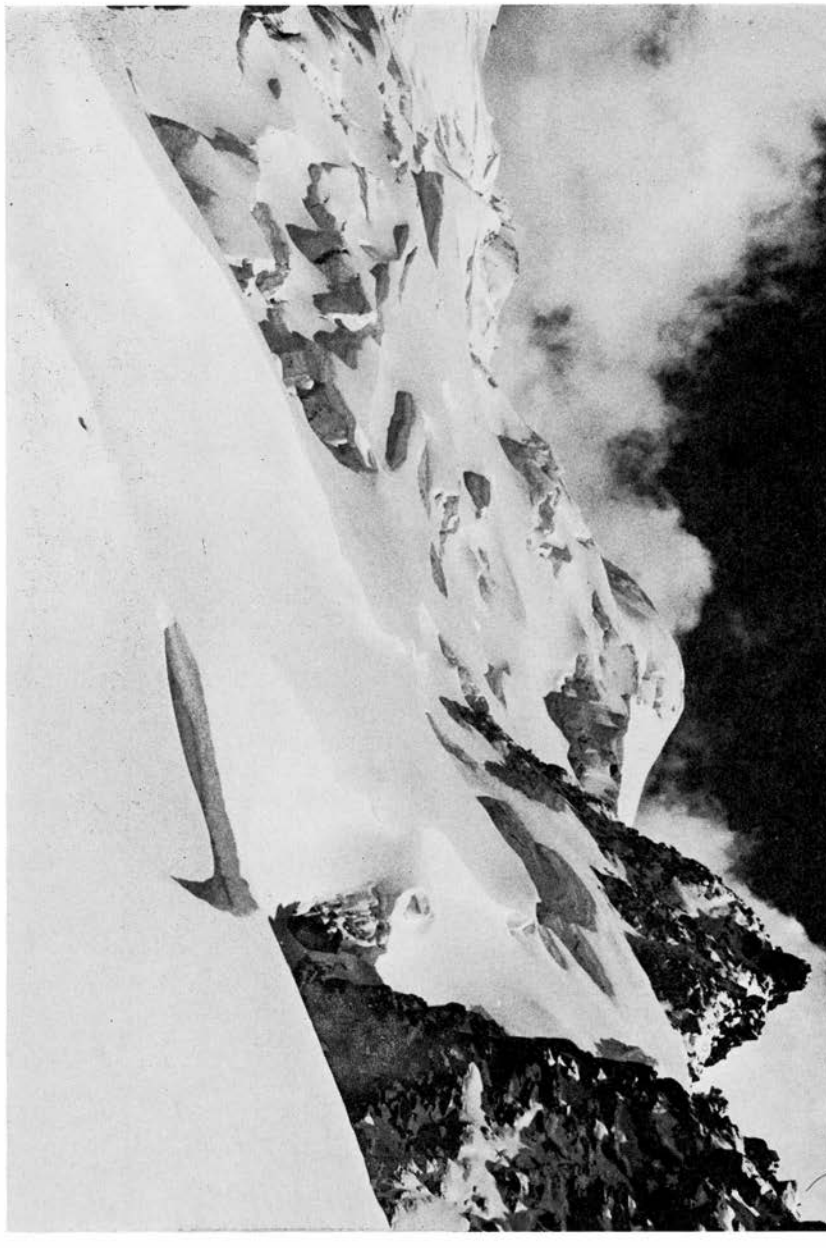
竹下は僕の一回目のアンデス行の仲間。抜群の技術、体力、経験を持ち、登山面のリーダーとして安心してまかせておけた。

山本はアンデス東斜面でトウモロコシやジャガイモ、タバコの原生種の発見を意気込んでいる。京大隊の一次、二

ウィラ・ローヘ (5596m)
Wila Lloje (5596m) seen from Jankho Huyo (5512m), Cordillera Real
(By F. Imamura)



ハンコ・ラカーヤ（5545m）
Jankho Lakaya (5545m) seen from Wila Llojeta (5244m), Cordillera Real (By I. Muko)



ハンコ・ウーヨ（5512m）
Jankho Huyo (5512m), Cordillera Real (By F. Imamura)

←— オホス・デル・サラドの絶巓（左方の岩峰）
The summit (rock pinnacle on the left) of Ojos del Salado(6880m)
(By F. Imamura)

次の中央アンデス栽培植物調査隊にも参加している。

金井は、同じ神戸大の金井健二さんの〝身代わり〟として参加した。健二さん（神戸大アンデス遠征隊長、一九六三年）とはかねてボリビアのイヤンプを一緒に登ろうと話し合っていたが実現しなかった。向一宇は僕の実弟。〝山屋〟ではなく〝石屋〟（地質）だが、重い石ころを背負って谷を歩き回っているので、体力、脚力はあった。ジープの修理、毎日の気象観測に活躍した。

このほか成川隆顕（早大OB、朝日テレビ）がいた。撮影機をかついで一緒にアタカマへ行くために、ローツェ・シャールで傷ついたからだで土壇場まで走り回っていたが同行できず、隊の〝東京事務局長〟として留守の雑務を引き受けてくれた。金井健二さんが〝関西事務局長〟となった。

僕の妻も長男（四つ）と長女（五ヵ月）をかかえ、親に無いソデを振らせて遅れて南米へやってきた。隊の行動に伴ない、ラパスに三ヵ月、サンチアゴに四ヵ月、アパートを借りて生活していた。アパートは、隊の資金が詰まってくると隊員たちの寝泊まりの場となった。その生活を通じて、ホテル生活ではわかりにくい庶民生活の内面にまで入り込むことができた。

隊の経費（予算九、二九一、九八〇円）は全額、共同通信社と次の十五新聞社から分担支出してもらった。

北海道新聞、河北新報、神奈川新聞、信濃毎日新聞、静岡新聞、新潟日報、北国新聞、岐阜日日新聞、京都新聞、神戸新聞、山陽新聞、中国新聞、高知新聞、熊本日日新聞、宮崎日日新聞。

その見返りとして行動の期間中、記事と写真を日本へ送った。僕は山から都会へおりても、隊員たちが遊び回っているのを横目に、膨大な量の原稿書きに追いまくられた。ボリビアで革命、チリで政変、インフレに会ったため、約二百七十万円の赤字が出て隊員たちに負担がかかった。

隊員のほぼ全員が日本山岳会員なので、「日本山岳会後援」の名目をつけてもらった。山岳会の吉沢一郎副会長、

ラテンアメリカ協会の川崎栄治理事長（前駐ボリビア大使）、保利茂氏、故泉靖一東大教授ら多数の方々に面倒をみてもらった。

七〇年夏、船と飛行機で出発、八月中旬、ボリビアの首都ラパスに、西村を除く七人が集結した。十一月中旬までボリビアに滞在、コルディエラ・レアルで山登りをし、ボリビア南西部の火山帯をチリ、アルゼンチンとの国境付近まで調査した。十一月初め西村も合流した。

十一月下旬チリに移った。首都のサンチアゴを基地として翌年三月末まで滞在、チリ大、チリ山岳会からも加わって、アタカマ高地にはいった。四月下旬までに全員帰国した。

以下隊の行動を、登山面だけにしぼって報告する。

コルディエラ・レアル

コルディエラ・レアル（帝王の山脈）での登山は、通関が遅れたうえに日本人行方不明者の捜索というハプニングがあって、スケジュールが大幅に遅れた。

七月初めに東京・練馬区石神井の原田正雄さん（三〇）という単独登山者がラパス近郊のワイナポトシ（六〇九四メートル）で消息を絶っていた。日本大使館、日本人会の依頼で九月四日から四日間、ワイナポトシ東南面の氷河末端（標高四八四〇メートル）にベースキャンプを張り、頂上付近まで捜したが手掛かりはなかった。

九月十二日から三十一日まで、レアル中央部で待望の登山をした。レアルの登山は僕と竹下にとっては二度目。前回の東京外語大隊ではレアル中央部のチャチャコマニ（六〇七四メートル）や北部のアンコウーマ（六四二七メートル）、ボリビア南西部のサハマ（六五三一メートル）など二十峰を登った（『山岳』六十年）。今回はチャチャコマニ南方の山群で八峰に登頂した。このあたり、六〇〇〇メートル峰はないが、山脈の幅が広く、五五〇〇メートル前後のピークが群立して

いる。六年前の登山で、すばらしい容姿の山をいくつも遠望していた。

コルディエラ・レアルは長さ百二十キロほど。チチカカ湖の東方に、西北—南東方向に走っている。チチカカ湖のほとりから山脈中央部のイチュコータ谷をトラックと、リャーマ、馬のキャラバンを組んでつめ、レアル主稜線近くの湖の岸に第一次のベースキャンプを張った。

谷筋は古氷河跡の、曲折の少ないU字谷。谷底には大きな湖が三つあった。最下段の湖の長さは六キロほど、濃い緑色。谷を上がるに従って水の色は「グレーシャー・ミルク」が濃くなり、ベースキャンプの最上段の湖はその色通り、アイマラ語で「ハンコ・コータ（白い湖）」と呼ばれていた。ハンコ・コータは長さ一・五キロ。湖面標高は四七〇〇メートル。氷河を散りばめた針峰群が湖面に鮮やかに影を落としている。

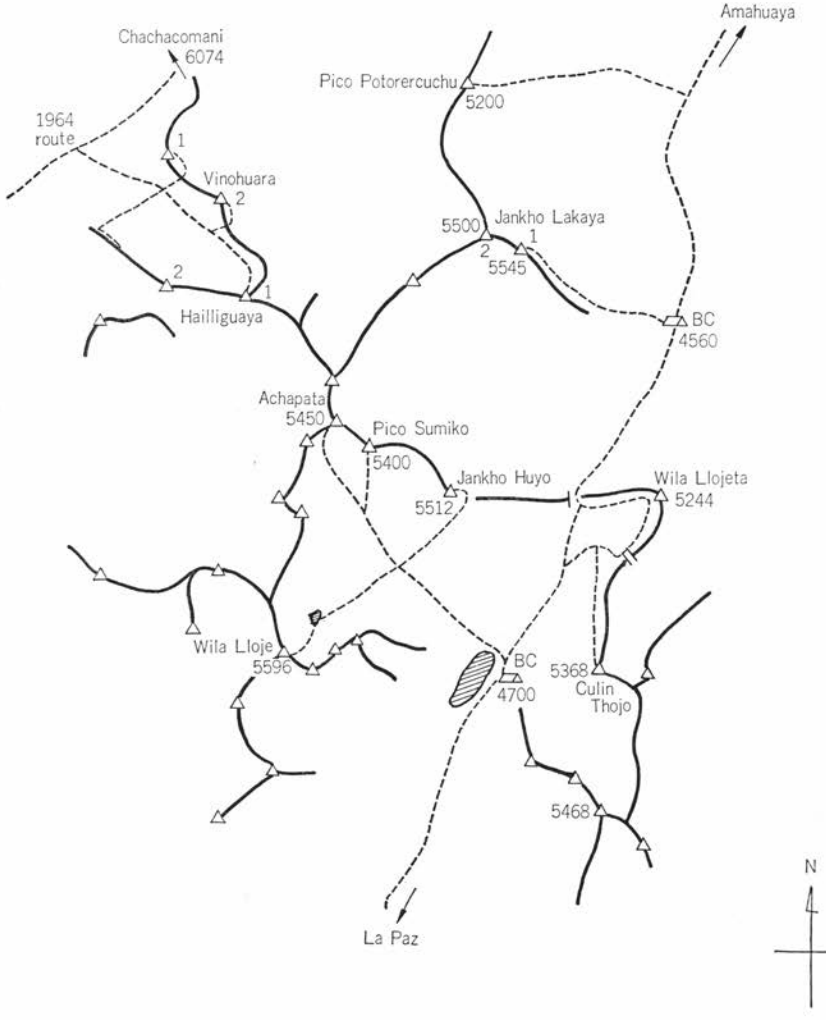
もうレアルは雨季にはいっていた。入山以来八日間は毎日ふぶきに見舞われた。正午ごろになるときまって、アマゾン側から雲が湧く。いきなり米粒大のアラレが降り、カミナリがとどろく。アラレはやがて雪に変わる。この間、風は主稜線の東方、アマゾン側から吹いている。

夜になると風向きが逆になる。谷の下流、西方の高原（アルティプラーノ）側から吹き上げてくる。温度が上がり、大きな綿雪となる。真夜中近く風はぱたりと止み、きれいな星空に晴れ上がる。

意識的に雨季のアンデス登山を試みてみたのだが、このカミナリと氷河上の新雪の深いラッセルには参った。さらに新雪の下に「ペニテンテ」という厄介物があり、乾季の登山の何倍ものアルバイトをしいられた。

中央アンデスの氷河には、剣をさかさまに植えつけたような氷の柱、「ニエベ・ペニテンテ」が密生している地帯が多い。ペニテンテの高さ、堅さは、靴で踏めばざらざらくずれる十センチ足らずのものから、一メートルほどもあるがっしりしたものまで、さまざまだ。この氷の柱は乾季はズボンを破ったりする程度の厄介さですむが、雨季にはこのペニテンテ地帯が新雪ですっぽりとおおわれていて、足下に無数の落とし穴を作っている。堅く長いペニテンテ

Southern Region of Chachacomani, Cordillera Real, Bolivia
by Expedicion Japonesa a Puna de Atacama 1970-71



の密集地帯に踏み込むと悲劇である。ペニテンテは山側に少し傾いて生えているので、その間に腰までも落ち込むと足がねじ曲がってしまい、立ち上がれない。疲れている時にかぎってこの落とし穴が際限なく続く。

六年の間に、ボリビア陸軍測地部作製の五万分の一地図がレアル中央部までで出上がっていた。これまでレアルの標高の根拠とされていたオーストリアのトロール＆ハイン隊（一九二八年）の地図より、二百メートルほど低い標高が記入されている。著名な山頂の標高だけは以前のままだったりして、ちょっと頼りないが、ここではこのボリビア陸軍の地図に従って山名、標高を記す。

イチュコータ谷には以前アメリカ隊が左岸にはいっている。日本の女性隊（一九六七年）も短期間はいっている。僕たちは最初右岸の氷河源頭部を中心に六峰を登り、入山期間の後半はレアル主稜線をアマゾン側へ越え、かねて目をつけていた二つのピークを登った。計八峰のうちクリン・トーホとウィラ・ロヘータを除く六峰は初登と思われる。

計画ではこのあとレアルのアマゾン側を北上し、レアル北部を回るキャラバンを考えていた。道があるのかないのかわからないが、このキャラバンに成功すれば、レアル東面の処女山域を明らかにすることができる。ハンコ・ラカーヤ登頂のあと、このキャラバンのため標高三三〇〇メートルの村まで下ったが、北上の旅はできなかった。雪が深く途中の主稜線上の峠が越えられないという。またちょうど農繁期で、リャーマや馬の集まりが悪かった。だがこの旅を志したことで、レアル一周ルートの情報をかなり集めることができた。

▽アチャパタ（五四五〇メートル）。九月十八日登頂。向一陽、金井良碩。

ベースキャンプの「白い湖」のまわりは湿原が広がり三方から谷が合流していた。その右岸に落ちている谷、アチャパタ谷の氷河のまわりには、きれいな氷雪のピークが十数座立っていた。

アチャパタはアチャパタ氷河最奥の山。午前六時十五分、BC出発。他のピークを目ざす竹下・山本組、今村・中

村組と氷河末端まで一緒。氷河右岸のガラ場を登る。途中右岸から支氷河が合流していた。この氷河の源頭部にも十数座の岩峰が並んでいる。

氷河の上部は傾斜はゆるやかだが、ラッセルがきつい。稜線からおりている岩尾根伝いに登る。〃定時〃に鳴り出したカミナリを避けて岩穴で休む。

頂上直下は二本のクレバスがリボンのようにぐるりと取り巻いていた。稜線の反対側に回り込み、午後二時半頂上に立った。ガスの合い間に、氷河をへだてて、先年北方の谷から登ったハイリワヤ（五九四〇メートル、または約五七〇〇メートル）の垂直の氷壁が見えた。さらにその北方のチャチャコマニまで、レアル主稜線の続き具合を確認することができた。午後六時すぎBC帰着。

▽ピコ・スミコ（五四〇〇メートル）。九月十八日登頂。竹下孝哉、山本紀夫。

アチャパタ谷の奥にある雪峰。直線の三つの稜からなるきれいなピラミッド・ピークである。以下山本の記述――。

朝、テントのまわりの新雪五〇センチ。八時十五分、氷河末端の凍結した湖に到着。向パーティーと一緒に氷河右岸のガラ場をたどる。九時三十分、アチャパタ氷河の横断を開始した。

ひざまでのラッセル。十一時、ずたずたのクレバスと氷塔地帯で立ち往生した。クレバスの底へアプザイレンしたりして通過。目ざすピークの南西面に氷河上まで一直線に落ちているリッジ目掛けて進む。腰までのラッセル。リッジ上も雪がやわらかく、ピッケルはシャフト全部が埋まる。頂上直下から氷となった。午後二時、登頂。帰路は途中から向パーティーと一緒になった。

▽ハンコ・ウーヨ（五五一二メートル）。九月二十日登頂。今村文彦、中村昭伸。

アチャパタ氷河の左岸、レアル主稜線上にある堂々たるピークである。氷の房飾りが氷河に落ち込んでいる。九月

十八日に今村・中村組がアタックしたが、下部では傾斜四〇度ほどの堅氷の上に積もった新雪に悩まされ、上部では深いラッセルと雪の下のペニテンテに痛めつけられて時間切れとなった。二十日、同一パーティーで再度アタックし成功した。

今村の記述——。キャンプ出発午前六時。前回のステップのおかげでスタコラ登る。九時二十分、頂上の右手、主稜上に出た。十時二十分、三角形のジャンダルムを越す。

頂上はすぐ目の前に見える。あと一時間もあればと思っていたが、ここからの雪原が苦しかった。ヒドン・クレバスが縦横に走っている。新雪の下にはびっしりと堅いペニテンテの落とし穴。三〇〇メートル足らずの距離に一時間もかかった。

頂上下の急登が始まるとラッセルは楽になった。午後一時、やっとハンコ・ウーヨの頂上に立った。

▽ウィラ・ロヘータ（五二四メートル）。九月二十日登頂、縦走。向一陽、山本紀夫。

イチュコータ谷の最奥、レアル主稜線上の山。氷河をべっとりとつけている。土地の人たちはスペイン語で単に「セロ・ブランコ（白い山）」と呼んでいた。

この山の西方と南方で二つの峠がアマゾン側へ越えていた。午前六時半、テント出発、七時半西峠（四九八〇メートル）着。ウィラ・ロヘータのアマゾン側は、氷河をまとった西面とはうって変わって逆落としの岩壁帯である。堅い氷の稜線伝いに十時、スキーでもできそうな広い頂上に立った。〝真の頂上〟は高さ四メートルほどの岩塔で、その上にもよじ登った。珍らしく雲が湧かず、レアルの大パノラマを楽しんだ。南峠（五〇〇〇メートル）まで縦走して帰幕。

▽ウィラ・ローヘ（五五九六メートル）。九月二十日登頂。竹下孝哉、金井良碩。

アチャパタ氷河の右岸の支氷河を取り囲む十数座の岩峰群中の主峰。右半分は岩壁、左半分は氷壁で守られた鋭峰。距離的にも技術面でも、前進テントを出すべきだったかもしれない。パーティーの帰幕は深夜になり、翌朝救援

を出すことも考えていた。

金井の記述――。モレーンをつめて行くと岩陰にビスカッチャ（尻尾の長い鳴きウサギ）が何匹もすばやくはねる。モレーンの段ごとに小さな氷河湖が水をたたえている。最奥のウィラ・ローへの基部には岩峰群にかこまれて、ひときわ大きい湖があった。

主峰との岩壁のすそぞいに、左手の第二峰との間の氷河を登る。氷河の中は腰までもぐるので、ときどき岩壁をからむ。主峰の岩壁は頭上におおいかぶさっている。

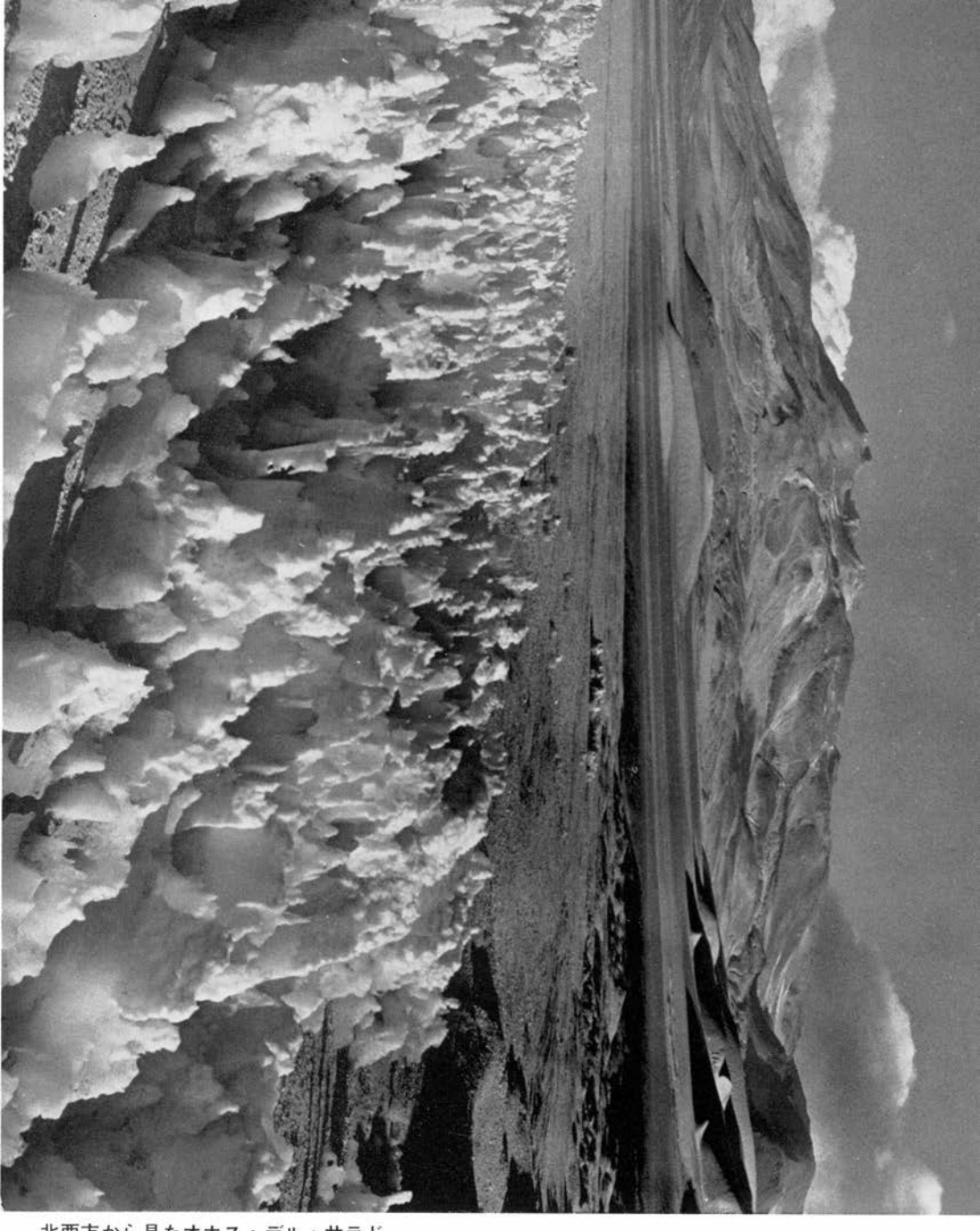
岩壁の間のルンゼにはいった。クリノメーターで計ると平均傾斜四五度。ペニテンテの間に突っ込むと、どこまでもからだが沈み込んでいく。

最後のつめは一段と急だ。頂上はぐるりと雪庇でとり囲まれていた。竹下さんがまず頂上直下まで登り、僕がその確保を受けて少し低いところから雪庇を乗り越す。雪庇の表面は堅いが、下はさらさらとした雪で足場が定まらない。ピッケルとアイゼンを強引に突き立てて越えた雪庇から十メートルほどで頂上だった。反対側にも雪庇が出ていて、ピッケルをさし込むとすぽんと穴があき、向こう側の氷河が見えた。急傾斜で坐ることができないので立ったまま約二十分間、カメラを出して写真測量した。

▽ハンコ・ラカーヤ（五五四五メートル）。九月二十三日登頂。竹下孝哉、山本紀夫。

待望の登頂だった。六年前、北方からこのあたりを眺めたさい、その当時の地図にない、すさまじい氷壁の独立峰を見つけて胸をおどらせた。ウィラ・ロヘータを登るさい、すぐ真近に予想通りの位置に、この山を確認したときは嬉しかった。ハンコ・ラカーヤという山名を持っていることがわかった。アイマラ語で「天井のない白い一軒家」という意味である。レアル主稜線からアマゾン側に張り出している独立峰。

九月二十二日、主稜線上の西峠を越えてアマゾン側へ下り、ハンコ・ラカーヤの東のすそをめぐる谷の中にベース



北西方から見たオホス・デル・サラド
Ojos del Salado(6880m)－North-west aspect of the highest active volcano in the world, Puna de Atacama (By F. Imamura)

世界最高の活火山　オホス・デル・サラドの噴火口
The world highest active crater of Ojos del Salado (6880m), Puna de Atacama　(By F. Imamura)

キャンプを移動した。標高四五六〇メートル。最初、向一陽、竹下、中村、山本の四人がこちらに移り、二十五日残りも合流した。

竹下の記述——。テントから草付まじりのガラ場に取りつき一時間登る。氷河に磨かれたスラブをさらに一時間。そのあとまた一時間ほどで新雪の上に出た。氷河上に出たのは三十分ほどあと、午前十時四十分。

氷河上は例によってラッセルとペニテンテ。午後一時、稜線の上に出た。雪庇を両側につけた鋭い氷のリッジ。左側の南西壁は下の氷河まで絶望的にすとんと落ちている氷壁。

急なリッジを主に右側（アマゾン側）にルートを選んで登る。時折り下からリッジの下までサポートしてくれた中村ドクターから、「雪庇に気をつけろ」と声がかかる。ひさしの上に乗っていることもあるらしい。頂上も雪庇の上だった。暗くなる直前に帰幕。

▽クリン・トーホ（五三六八メートル）。九月二十三日登頂。金井良碩、向一宇。

ハンコ・コータの最初のベースキャンプの上にそびえていた、氷のピラミッド。インディオにピッケルを二本盗まれたので、この登頂では二人に一本のピッケルしかなかった。頂上直下にクレバスがあったが、そこを除いて登攀はむずかしくはなかった。テントから往復八時間。

▽ポトレルクチュ（五二〇〇メートル）。九月三十日登頂。向一陽、金井良碩。

ハンコ・ラカーヤ登頂のあと、ハンコ・ラカーヤから流れるアマワヤ谷を下り、標高三三〇〇メートルのアマワヤ村までおりた。村の下はもうアマゾン上流の渓谷地帯である。レアル一周の旅を断念し、往路の峠を越えて帰る途中、レアル北部を観察するためにハンコ・ラカーヤから北方に伸びる支稜線上の岩山に登った。六年前に登ったなつかしいチャチャコマニとその南峰が西北の空に大きく鋭くそびえていた。四囲にまだいくつもいくつも未踏のピークが立っていた。

ボリビア南西部

レアルの登山からおりてくると、ラパスでは革命騒ぎが始まっていた。革命が一段落し、十月二十七日から十一月六日までボリビア南西部の火山帯を旅行した。中古ジープに五人が詰まり、屋根にもぎっしりとテントや燃料、水をのせ、往復千七百五十キロの旅。

この調査旅行に行ったのは向一陽、今村文彦、中村昭伸、山本紀夫、向一宇の五人。竹下孝哉、金井良碩の二人はラパスで留守番し、チリへ移動の準備をし、後発の西村を待った。

ボリビア南西部は、四国の半分ほどの広さがあるウユニ塩原（標高三七〇〇メートル）をはじめ大小無数の塩原をちりばめた高所砂ばく。だが、のちほどはいったアタカマ高地より水気は多かった。太平洋のフンボルト海流の乾いた空気が、ボリビア・チリ国境の山でさえぎられるからであろう。果てしないほどトーラ（潅木）だけが広がる原があった。行けども行けどもコケだけが続く原もあった。そんな高原に、さまざまの形の、五五〇〇メートルから六〇〇〇メートルの火山が無数といえるほどそびえ立っていた。「大アンデス」という言葉を実感した旅だった。四囲の地平線にはしんきろうが燃え、どこかでいつもタツマキが上がっていた。

コルディエラ・レアルから続く一連の山脈コルディエラ・デ・ロス・フライレスには五九〇〇メートル、五七五〇メートルなどのピークがある。氷河は見えなかった。ボリビア・チリ国境の火山群からはいくつも噴煙が上がっていた。氷河も見えた。

ジープが砂の中で何度も立ち往生した。ボリビア・チリ・アルゼンチン三国国境のサパレリ山（五六四三メートル）にできれば登ってみようと思っていたが、ジープの燃料が切れ、それらしい山を遠望したにとどまった。ボリビア最南部の村の一つ、サンパブロ（標高四三八〇メートル）まで達し、その南方のボネテ（五七三〇メートル）連峰の間の峠へジープ

で上がった。あられが吹きつけた。ボネテは頂上直下からひさしのように岩が突き出した岩峰。この連峰には他にコンドル・ワシ（五六二〇メートル）、アギラール（五五九〇メートル）など顕著な岩峰がある。

ボリビア——アルゼンチン国際鉄道が通っているアトチャの町の東方に立っているチョロルケ（五六一五メートル）は白いピラミッド・ピークだった。

アタカマ高地

アタカマ高地はチリとアルゼンチンの国境にまたがっている。北部ではボリビア南西部とも接している。一九一三年、ドイツのW・ペンクが高地南端のボネテ（六四一〇メートル）に登頂して以来、登山隊は幾隊もはいっているが、高地の全容をつかむ隊ははいっていない。中央部では山の姿さえ明らかでなかった。高地北部のリカンカブール（五九三〇メートル）あたりから中央部の盟主ユーヤイヤコ（六七一〇メートル）を経て、南部にあるアンデス第二の高峰オホス・デル・サラード（六八八〇メートル）まで北から南へ、この世界最大の火山帯をジープで縦断してみようと思った。

当初、国境を地勢に従って〝山ナリ〟に、自由に横切りながら南下するプランをたてたが、国境問題がからんでおもわしくない。チリ側の要望もあって、チリ側からだけ入山することに決めた。チリ側はアルゼンチン側より地勢が複雑で思い通りのルートがとれなかった。

サンチアゴを基地に、三度に分けて高地へはいった。第一次は十二月七日から二十六日まで。日本側八人とチリ側六人の計十四人で高地南部のサラード峰周辺の登山と縦断ルートの偵察。第二次は翌年、一九七一年一月十六日から二十六日まで。今村、西村、中村の三人とチリ側二人の計五人で、中央部のアプローチルート偵察。第三次は一月二十八日から三月五日まで。隊を離れた山本を除く七人とチリ側四人の計十一人で、高地北部から古代の〝インカ王道〟を捜し、たどりながら南下、再度サラード峰のふもとまで達した。

第一次登山に参加したチリ人は次の六人。

セルヒョ・クンストマン（四二）＝チリ山岳会。チリ電力公社技師長▽ペドロ・ロセンデ（四三）＝チリ山岳会。チリ国境委員会委員。サンチアゴ第九警察署長▽ホワン・タンゴール（三六）＝チリ山岳会。写真業▽ホセ・エレラ（五七）＝チリ大昆虫学教室名誉教授▽マリア・エチュベリ（四二）＝同教室主任教授▽ダニエル・ムニョス（三四）＝自動車修理工。

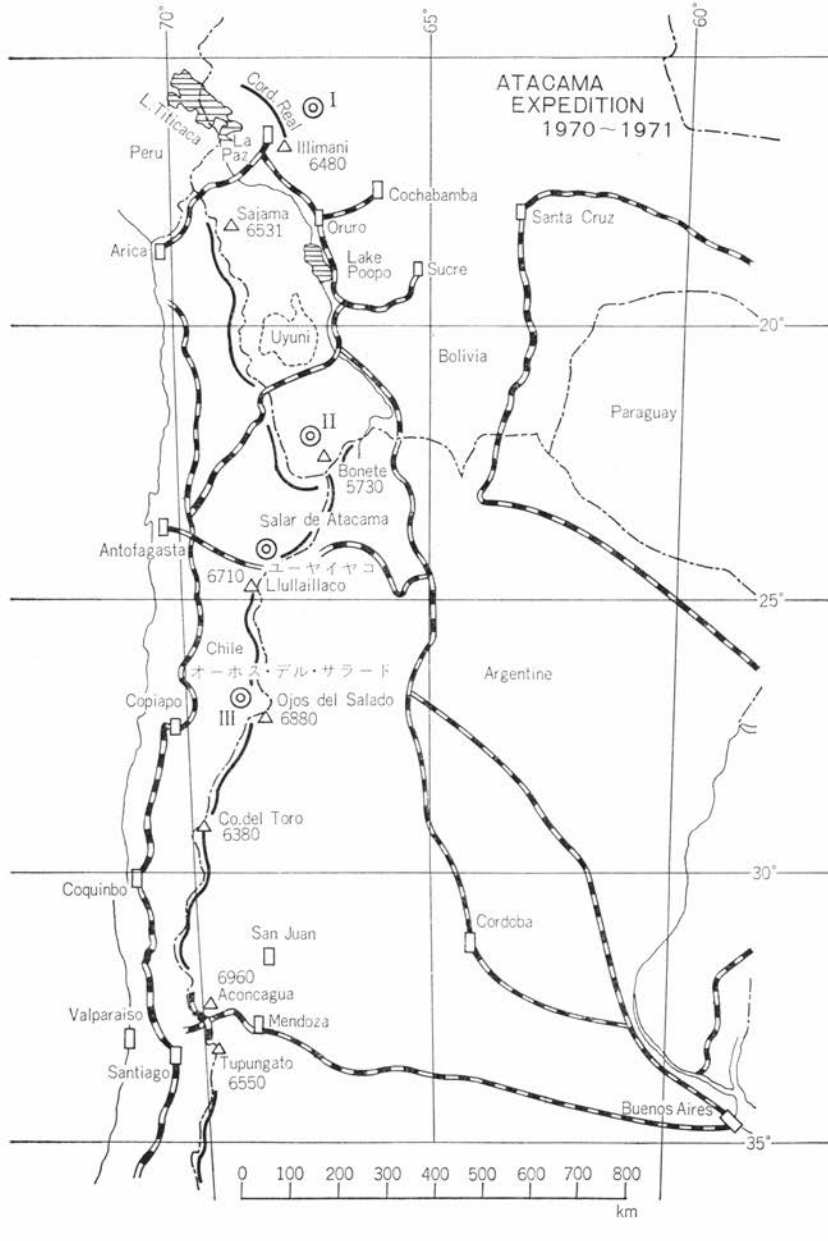
第三次の縦断旅行には次の四人のチリ人が参加した。

ルシオ・カンポス（四二）＝チリ山岳会。自動車修理工▽オスワルド・ビレガ（二五）＝チリ山岳会。大工▽ホルヘ・エスピノザ（二五）＝チリ国境委員会測量士▽ネルソン・フローレス（三一）＝警官。

第一次の入山基地はコピアポ市。高地西方の太平洋岸一帯に広がるアタカマ砂ばくの南限にあるオアシスである。コピアポから東方へ二百六十キロ、アルゼンチン国境近くのラグーナ・ベルデ（緑の湖、標高四二〇〇メートル）まで隊のジープ二台とチャーターした大型トラック一台で上り、ベースキャンプを作った。湖は長さ七キロ、幅四キロ。濃い塩湖で、海岸を思わせる白砂の浜に、波しぶきをたたきつけていた。この湖は東西六〇キロ、南北一〇キロほどの、草一本ない砂ばくの高原盆地の底にあり、盆地の回りにはサラード峰をはじめ、インカワシ（六六二〇メートル）、トレス・クルーセス（六六二〇メートル）、エル・ムエルト（六五四〇メートル）など世界最高の火山群が立っている。

思い出すのも気が滅入る、激しい西風だった。台風クラスの乾いた強風が早朝を除いて間断なく吹きまくり、隊員たちの生気を奪った。じっとしているだけで、からだが目に見えてひからび衰弱していった。この風に加えて、周囲は頭がヘンになりそうなほど毒々しい色彩に包まれている。濃い紺色の湖。塩まじりのねっとりとまぶしい白浜。湖の回りのオレンジ色のがけ。赤、オレンジ、黒、灰色の灰火山群、暗いほどの青空。いたるところにころがっている、ロバや馬のミイラ、白骨。昔のキャラバン隊の遺物である。それに薄い酸素と悪い水のために入山数日でチリ側

Southern Region of Puna de Atacama
by Expedicion Japonesa a Puna de Atacama 1970-71


ATACAMA
EXPEDITION
1970～1971
70°
65°
60°
20°
25°
30°
35°
L. Titicaca
Cord. Real
La Paz
Illimani
6480
Peru
Cochabamba
Santa Cruz
Sajama
6531
Oruro
Arica
Lake
Poopo
Sucre
Uyuni
Bolivia
Paraguay
Bonete
5730
Salar de Atacama
Antofagasta
6710
ユーヤイヤコ
Llullaillaco
Chile
オーホス・デル・サラード
Argentine
Copiapo
Ojos del Salado
6880
Co.del Toro
6380
Coquinbo
San Juan
Cordoba
6960
Aconcagua
Valparaiso
Mendoza
Santiago
Tupungato
6550
Buenos Aires
0 100 200 300 400 500 600 700 800
km

からも日本側からもばたばたと病人が出た。飲用水とジープ冷却用の水は五キロ離れた小湖から運んできたが、この水は硫化物がまじっているような妙なにおいがして、コーヒーもお茶も味がつかなかった。他に飲み水はなかった。ジープも風と砂、空気の薄さのために絶えず故障した。

このラグーナ・ベルデのBCから南方へ四十五キロ、サラード峰の西麓の処女地へジープで砂の谷をつめて上がり込むのに成功、C1を建設した。標高四七〇〇メートル、直径一五～二〇キロもある、出口のない砂の大盆地で、ここを〝砂の聖域〟と呼んだ。

第一次の主目的はサラード峰とカサデロ峰（六六六〇メートル）の登頂だった。カサデロはサラードの南西一〇キロに航空測量で発見された山。アンデス最高の未踏峰とされていたが、地上からはまだ確認されていなかった。サラード周辺は地形が複雑でスケールが大きい。

C1から見ると砂の聖域の対岸にサラードの黒と白の山体が大きくそびえている。その右手、西方に国境稜線が伸び、エル・ソロ（六一九〇メートル）、トレス・クルーセス連峰（最高峰は六六二〇メートル）などがスカイラインに立っている。サラードとソロの間に、聖域から深い谷が食い込んでいる。谷の奥に高いピークがあった。これがカサデロかもしれない、と見当をつけた。

砂の聖域をジープで横断、谷の入り口から荷物をかついでそのピークの下にC2を作った。竹下、金井、クンストマン、ロセンデの四人がはいった。

▽ロス・ペルディドス（六三〇〇メートル）。十二月十二日登頂。竹下孝哉、セルヒヨ・クンストマン、ペドロ・ロセンデ。

竹下の記述——。C2のそばにはペニテンテの密生した雪渓が東北方のサラードから流れてきていて、きれいな水が飲めた。十二日、午前三時に起床したが疲労のため出発できたのは五時半。月光の中を歩く。C2頭上のピークか

らダイレクトにおりている幅の広い尾根を目ざす。寒い。セルヒョたちは上下とも羽毛服。僕はヤッケとオーバーズボン。ガラ場の登りはきつい。正午、頂上着。頂上は三つのピークに分かれていて西側のピークが一番高い。

頂上にアルミのナベがあった。中にペナントと手紙がはいっていた。「一九五五年、ツクマン山岳会（アルゼンチン）、オホス・デル・サラード登頂」と記してある。サラードと間違えたらしい。セルヒョが大笑いして、この山をロス・ペルディドス（迷い子の山）と名付けようということになった。

この山はカサデロではなかった。国境線から南に外れて、サラードに匹敵する高い黒い山がある。これがカサデロに間違いない。金井はこの日頭痛がひどく、連絡をかねてC1へ下った。

▽カサデロ（六六六〇メートル）とネバド・アマリリョ（六〇五〇メートル）。十二月十四日登頂。竹下孝哉、セルヒョ・クンストマン、ペドロ・ロセンデ。

竹下の記述――。午前五時半C2出発。ペルディドスとその西方の黄色い山の間の、国境稜線上のコルへ上がるルンゼを目ざす。ペースは非常に遅い。

黄色い山は予想通り硫黄だらけ。コル着十一時。右手の黄色い山にもついでに登り、その色に従って「ネバド・アマリリョ」と命名。

ここから南方のカサデロへ行くには二つのルートが考えられた。国境稜線からカサデロへ伸びている支稜線どおしか、いったんアルゼンチン側の谷へおりて、カールの底からカサデロの基部へ達するか――。稜線上は高度差は少ないが岩登りを重ねなければならない。時間はかかるが安全な谷筋を選んだ。

コルからトラバース気味にアルゼンチン側へ下る。南斜面には雪が多い。カール底まで高度差で四～五百メートル、急な雪渓に足場を刻みながら下った。カサデロはなかなか近くならない。意識がもうろうとして幻覚が現われる。ようやくカサデロと国境稜線間のコルへ上がる。ここで昼食の大休止。出発以来水も食物もとらなかった。昼食の

あとはがぜん元気が出た。バテは空腹が原因だったのだろう。反対にセルヒヨたちがあえぎ始めた。

カサデロの頂上部は三つのピークでできている。国境稜線に近いピークが一番高い。からだが吹き飛ばされそうな強風。

ピークの上にはさらに岩塔が十三本立っていた。一本の高さ二～三十メートル。セルヒヨはさかんに僕を先頭に立てたがる。一番高そうなのによじ登ってみたが、向こうにもっと高いのがある。結局三回目に登ったのが一番高かった。午後三時。ピースの空き缶に記録を入れて岩の間に残し、下り始める。谷底からまた五百メートルも登らねばならない。三人とも不機嫌に黙々と歩いた。テント着八時。

▽セロ・ファロ（五七〇〇メートル）。十二月十四日登頂。金井良碩単独。

C1の裏の山（五七五〇メートル）とサラードの中間に、〝聖域〟の見張り台のように立っている複式火山。

前進テントの設営、補給、登山行動の間にも、病人が続出し、二台のジープは絶えず故障して動かなくなった。一度ジープが二台とも病人おろしと修理のためコピアポへ下山して、高地上に残っているのはC2の三人（竹下、クンストマン、ロセンデ）とC1の三人（向、金井、向弟）の計六人だけになってしまった期間があった。

そのおりC1の三人で、C1裏の山とファロの間のコルへ登った。万一ジープが下山途中で動かなくなったりしてふもととの連絡が途切れた場合、C1からBCへ徒歩で帰るにはこのコル経由が最短距離になる。その偵察のために登った。すぐそこに見えるが長く苦しい上りだった。猛烈な風だった。コルから金井が単独でファロの頂上を往復してきた。

▽オホス・デル・サラード（六八八〇メートル）。十二月十九日登頂。竹下孝哉、金井良碩。

カサデロ登頂のあと、ジープも無事帰ってきて隊の態勢を立て直した。聖域をへだててC1から日夜あおいでいたサラードを登った。

十八日、サラード西斜面の標高五五〇〇メートル付近にC2を建設、今村、竹下、中村、金井の四人がはいった。砂のルンゼの下に水が流れていた。

このあたり見かけは砂と溶岩ばかりで、氷河や残雪は少ないが、砂を掘り返して調べてみたところ砂の下にはかなりの氷河が隠れていることがわかった。広大な〝砂の聖域〟の下も氷河と永久凍土層らしい。表面の砂は西方四十キロの高地の前衛山脈から、風で運ばれてきた花こう岩のこまかい砂である。

十九日C2の四人が頂上を目ざした。病人介抱などで高度順応のできていなかった今村と中村は頂上下の噴火口のふちで待機、竹下たち二人が登頂した。頂上は鋭く突き上がった岩峰。一九五八年のアルゼンチン隊の、登頂記念のペナントがあった。

サラードの頂上には三つの大きなピークが並んでいる。三つのピークで囲まれた噴火口からは噴煙が上がっていた。世界最高の活火山であるという事実を確認した。僕達の登頂は五番目だと思われるが、はっきりしない。サラード周辺は地勢のスケールが大きく複雑で、ペルディドス山頂のカマの例のように、〝山を間違えて登った話〟が多い。ここで記しているサラードの「六八八〇メートル」という標高は、アメリカ地理協会で出している数値である。サラードの標高はまだ大いに〝揺れて〟いる。七〇〇〇メートルを越える高さも何度も測定されている。チリ人は一九五六年にチリ測量隊が出した七〇八二メートルという数値を信じている。そうなればサラードが、アコンカグア（六九六〇メートル）をしのぐ新大陸最高のピークとなる。僕達もその高さを測量してみようと思っていたが、余裕がなくなった。

サラード登頂のあとサンチアゴへ下山、三週間休養した。疲労がひどく、チリ大学付属病院で精密検査を受けたところ全員肝臓がやられているという診断が出て、あわてたりした。政変に伴ないインフレに痛めつけられた。

▽リカンカブール（五九三〇メートル）試登。二月三日。

一月二十八日、アントファガスタを出発、ジープ二台とトラック一台で北から南へ、高地縦断の旅に出た。途中、高地北部のアタカマ塩原の北辺にあるサンペドロ・デ・アタカマのオアシスにしばらく腰をすえた。このあたり東方のボリビア国境には六千メートル前後の火山がずらりと並んでいる。氷河をかけている山もある。

リカンカブールはサンペドロのオアシスの上に守護神のようにそびえている、富士山そっくりの火山。頂上に湖があり遺跡があるという。ジープで登りに出かけたが、溶岩の中に行き詰まった。稜線近くまで歩いてみたが、果てしなく遠く、時間もないので登るのはとりやめた。

南北のさしわたし九十キロもあるアタカマ塩原（一部はまだ塩湖）のかなたに、高地中央部のソコンパ（六〇三一メートル）とユーヤイヤコ（六七一〇メートル）がかすんでいる。サンペドロからユーヤイヤコまで二百キロ以上離れている。

▽ユーヤイヤコ（六七一〇メートル）。二月十一日登頂。ルシオ・カンポス、ネルソン・フローレス。

二月六日、ユーヤイヤコ西面中腹まで車で上がり、BC設営。ここでチャーターのトラックは帰した。八日、前進キャンプを作り、今村、西村、金井とチリ人三人の計六人がはいった。翌日、金井が高熱を出しBCへ収容。前進キャンプには竹下が交替ではいった。

十日、竹下、西村とチリ人二人の計四人で頂上に向かった。ガラ場と稜線上の氷河の上り。一夜ビバーク、翌十一日、頂上直下で西村が不調となり竹下が付き添って下り、チリ人だけで登頂した。

この登頂の間、BCからは二台のジープで南方へのルート開拓を繰り返した。ユーヤイヤコの南ではどこが国境の分水嶺かわからないほど小さな火山が重なっている。古代の「インカ王道」の断片を発見したことが、この南下の助けとなった。インカの道はほとんど砂に埋もれ、標高五千メートルを上下する山の間を、地勢に無理なく従ってぽつん、ぽつんと現われた。金井は肺炎が心配された。向、中村、向弟が付き添い、徹夜で未踏の高所砂ばくを走って太

平洋岸の町まで運びおろした。そのさいも偵察で目つけておいたインカの道が、ルート選びの決断の支えとなった。

縦断の旅は、一度太平洋岸へ休養におりたりしたあと再びサラ・ドのふもとのラグーナ・ベルデに達し、〝砂の聖域〟の測量をして終了した。

アントファガスタでは広島県出身の高岡仙一さん、コピアポではアタカマ鉱業の久保明所長、サンチアゴでは三井物産の真鍋幸雄さんらに、ずいぶんお世話になった。

（了）

パタゴニア南氷陸中央部縦断

上智大学第一次パタゴニア縦断隊

われわれ上智大学山岳会の三人のメンバーは、一九七一年十一月から七二年二月にかけて、南米パタゴニア南氷陸中央部の初縦断に成功した。

いわゆるパタゴニアの山々は、高度においてほとんどが三〇〇〇メートルに満たない山群ではあるが、地球上で最悪の気象条件、カラコルムの氷河の二倍以上の規模を持つ山岳氷河が発達しているなど、〝ポスト・ヒマラヤ〟がいわれている現在、地球上に残された魅力ある地域の一つといえよう。

また、このような〝未知へのあこがれ〟と同時に、われわれにパタゴニア行を執着させたもう一つの理由は、パタゴニアではすべて自分達の力でやらねばならないということであった。ここにはヒマラヤのようにポーターもシェルパもいないし、グリーンランドのように犬ぞりも使えない。荷上げからソリひきまで、成功のカギはすべてわれわれ隊員自身にかけられている。

縦断隊メンバーは次のとおり。

隊長　竹内登志夫（29歳）装備・医療・気象

隊員　吉沢岳夫（27歳）渉外・会計

隊員　都築威男（26歳）食糧・記録

サンティアゴ入り

一九七一年十月一日、先発隊として吉沢、都築の二名が空路羽田を出発した。おりしも、パタゴニアへの第一歩にふさわしく、その日は雨だった。

先発隊の第一の目的は、九月上旬、横浜港から出した荷物の通関をよりスムーズにすることにあったが、出発まぎわにわかった登山許可取得も大きな問題であった。少なくともこれまでパタゴニアで登山許可を必要とするなんて聞いたこともないし、在日チリー大使館に行った時も〝許可〟についてはひとこともいわれなかった。サンティアゴ入りしてから、ほとんど毎日国境管理局に日参したものである。

登山許可に関する渉外は時間をかける以外に方法がなく、学校、教会関係からの紹介状、ならびに在チ三菱商事の方々の協力が結果的に大きな力となって、十月二十三日、正式許可を取得することができた。

チリー外務省・国境管理局の発行する登山許可証一枚があらゆる点で威力を発揮し、八〇〇キロにおよぶ荷物の通関もたった三〇〇エスクード（邦貨約四千円）の税金で即時引きとることができた。そのうえ、チリー海軍までが、われわれを縦断基地のプエルト・エデンまで運んでくれることになった。ヴァルパライソ～サンティアゴ～プエルト・モンを汽車輸送、プエルト・モン～プエルト・エデンを定期船ナヴァリーノ号による輸送を考えていたわれわれにとって、この海軍の好意はまさに瓢箪から駒であった。

縦断基地プエルト・エデンへ

十一月四日、われわれを乗せたチリー海軍の南極用砕氷船〝ピロート・バルド〟はヴァルパライソを後にした。フ

ンボルト海流に逆らって南下する二〇〇〇キロの船旅は豪快そのもの。どこまでも続く青い空と濃紺の海、そして夜の南十字星の輝きが充分に船酔を覚ましてくれる。だが、三日目あたりから空の色が鉛色になってきた。南極圏に近ずくにつれて天候は悪くなるばかり。荒波による船首の上下運動が七・八メートルにもおよび、大きなブランコに乗っているような錯覚に陥る。

十一月八日午後十一時三十分、ヴァルパライソ出航以来五日目に土を踏む。われわれの縦断基地となるプエルト・エデンに着いたのだ。実のところ、もし天候がよければプエルト・エデンに寄らず、そのまま外海をプンタ・アレーナスまで直行するという最初の約束だったのだ。その頃、悪天のきざしはまったくなかったといってよかった。それにもかかわらず、われらの慈悲深い艦長は、わざわざイギリス水道という非常にせまい困難な水路を通って、その南の出口の近くにある湾内のめざすプエルト・エデンに、荷物とともにわれわれ三人をおろしてくれた。このことが何を意味するかは、わかりすぎるほどわかっていただけに、この時の艦長の処置に対して全くいう言葉もなかったほどであった。

ピロート・バルドからカラビネロ（警察官）のポンポン船に乗り移り、エデンに上陸する。われわれのことはサンティアゴ～プンタ・アレーナスを経由してエデンにも連絡が入っているらしく、病院の二部屋がわれわれのためにあけられていた。

四〇世帯、人口一四〇人のプエルト・エデン（楽園の港）、そのほとんどが日本人と同じモンゴロイドの血をひくアラカルーフェ族の末裔。そんなこともあって、われわれにとって荷上げ、縦断中、常にその名のごとく、ここプエルト・エデンは〝楽園の地〟として頭の中にあった。

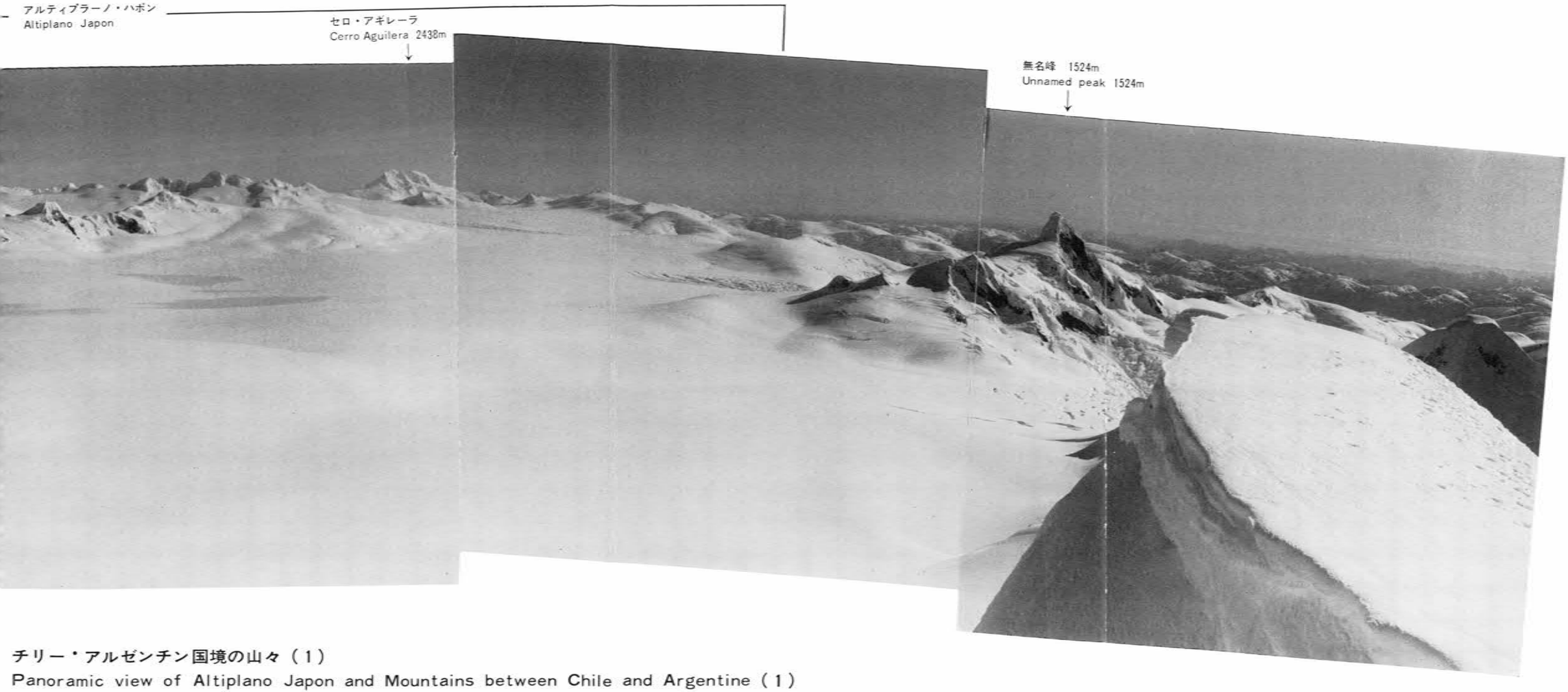
エウロパ氷河への荷上げ

十一月十一日、カラビネロ一家の見送りを受けて、エウロパ氷河へ向け出発。エデンからフィヨルド・エウロパまで美しい海峡を時速一〇キロで進むこと三十数時間。この間、イルカの一群が前へ後へと水先案内人を買って出る。十二日午前九時、エメラルド色をした浮氷を発見。明らかにエウロパ氷河から押し出されたものだ。フィヨルドの奥に入るにしたがって、浮氷の数は多く、大きなものが目立つようになる。しかし、初めてみる氷河舌端の雄大な眺め、浮氷の美しさに見とれているわけにはいかなかった。それというのも、予想以上の浮氷で予定した上陸地点に上陸不可能なことがはっきりしたためだった。二五万分の一地図とニラメッコしながら、上陸地点を探す。この荷上げの成功なくして氷陸縦断は絶対にあり得ない。結局、西経七十四度付近に流れ込む沢の落口を上陸地点とする。当初予定した上陸地点の氷河舌端から戻ること直線距離にして二〇キロはあるだろう。平地と違って、ここパタゴニア氷河地帯での二〇キロは計画に大きく影響することは間違いない。だが、われわれにとって〝可能な地点から可能な限りやるしかない〟という、ごく当たり前の考えを貫き通すしかなかった。

苦闘十五日間の荷上げ

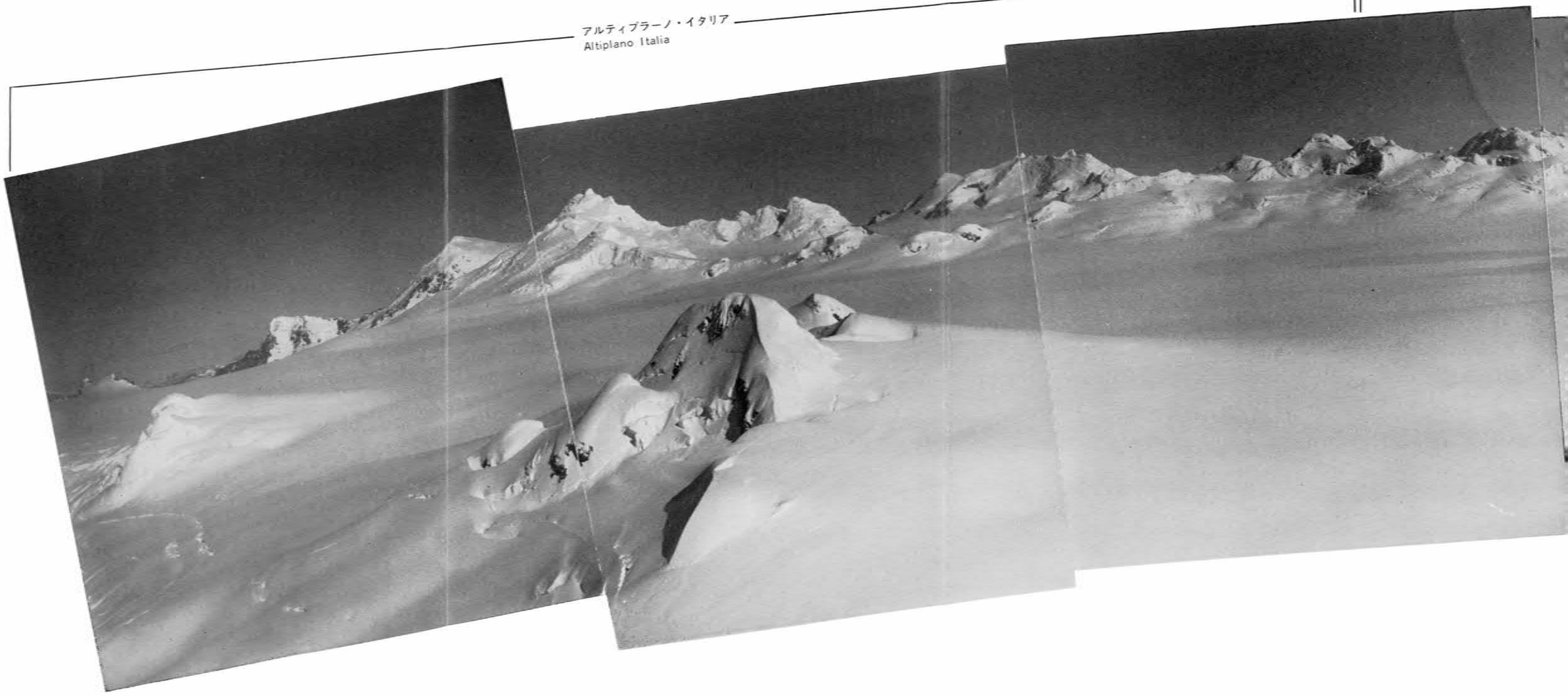
西経七十三度五十八分、南緯五十度十七分の地点にポンポン船は静かに横づけされた。

「果たして船上から見たとおり、この沢は一三四一メートル峰に続く稜線へ突き上げているかどうか」、そんな心配をしながら約二五〇キロの荷をおろす。「きっと十五日たったら迎えにきてくれよ」、堅い握手をしたが不安だった。逃げるようにして荷上げ地点を離れていく漁船。もし来なかったら、われわれは縦断にかかるはるか手前で、浮氷と湿原のあいだにとり残され、永遠にプエルト・エデンに帰る機会を失ってしまうかもしれない。ふと昔の島流しにで

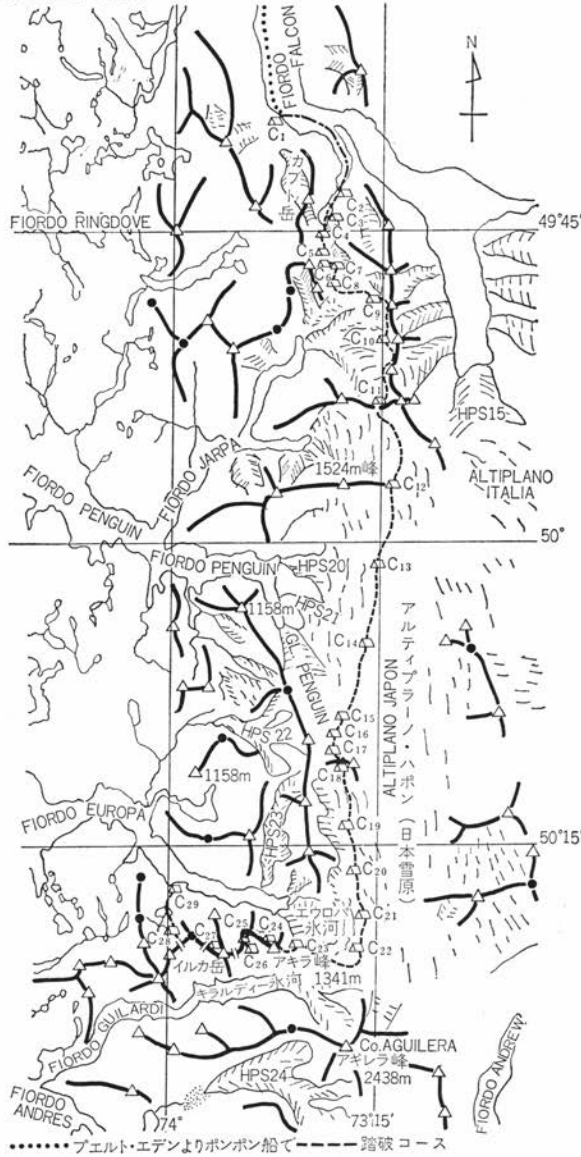


チリー・アルゼンチン国境の山々（1）
Panoramic view of Altiplano Japon and Mountains between Chile and Argentine (1)

アルティプラーノ・イタリア
Altiplano Italia



パタゴニア南氷陸中央部　Middle Range in South Ice Sheet of Patagonia



もあったような不安が走る。

がそれも束の間、シトシト降る雨と荷上げへのあせりがわれわれを現実にひきもどす。さて、天幕地の選定。日本の山なら風向さえ気をつければ一日ぐらい何とか過ごせる。しかし、ここはまったく違う。年間七〇〇〇ミリに達する降雨量。何千年の間、自然の中に根をおろしたコケの山。踏めば水がわき出てくる、まるでスポンジのようなコケの群生地。上からは雨の攻撃、下からも水の攻撃。快適な天幕生活など到底考えられない。それでも、少しでも快適さを要求するのが人間である。どこでも五十歩百歩と分っていながら、われわれはできるだけ快適な天幕地を探し求めた。

以後十五日間というもの、偵察、ボッカの繰り返し。あるときはナタを片手に道を開き、またあるときはオール片手に氷河湖を渡り、行く手をさえぎる河に架橋。その間、太陽の顔を見たのがたった数時間。いやというほどパタゴニアのきびしさを味わわされた。

C1からC2へは二つの氷河湖を〝恐る恐る〟という表現がピッタリするこぎ方で渡る。「まるでネス湖のようだ。恐竜でも住んでいて、われわれをパクリとやるんじゃないか」。C2からC3は湿地帯に悩まされ、C3からC4ではヤブこぎに手こずる。パタゴニアはすべての技術をわれわれに要求する。その間、毎日が雨、雨、雨。そして聞きしにまさる突風の洗礼。日本の冬山のような急激な気温の変化はないかわりに、ジワリジワリと攻めてくる。着ているものを平等にビッショリと浸してから、風が体温を奪っていく。

十一月二十一日、毎日、十一時間～十六時間という体力限界ギリギリの行動を続けているわれわれに決定的ともいえるショックが襲った。一三四一メートル峰への偵察が完全に失敗に終って、疲れた足に鞭打ってC4に帰ったその夜、パタゴニアの名物の突風にしてやられてしまったのだ。C4の位置は稜線直下のカールの末端。ちょうど涸沢を小さくしたようなところである。ビューン、ビューン、ポールを押えると同時に必死にふくれる天幕に身体をくっつ

けるが、そんな抵抗はしょせんムダなこと。パタゴニアの風は容赦なくわれわれの天幕を引き裂きにかかる、ビリッ、一筋の切れ目ができたと思うと天幕は真っ二つ。まるでナイフで切ったように裂かれてしまった。

荷上げ開始以来一〇日もたったが、いまだデポ予定地へのルートを確認できないというあせりと重なり、二の天幕破損はわれわれに暗い影を投げかけた。これから先の荷上げは雪洞を使ってやらねばならないのだ。雨でグシャグシャになった雪山での雪洞生活は苦しい。しかし、荷上げはどうしても氷陸近くまでもっていかねばならない。荷上げのために残された日数はあと三日。二〇〇キロの荷を縦断ルートまで荷上げするためには、どうみてもあと一〇日は必要というのに……。

「縦断成功のためにできる限り氷陸近くへ」という言葉を心の支えに、C4から一挙に一三四一メートル峰までアタック並みの荷上げを敢行する。二十三日などは偵察なしのため、十七時間以上のアルバイト。ギジャルディー氷河側に大きく張り出す雪庇、そしてU字谷にスッポリ切れている雪稜に神経をすり減らす。そのうえ、稜線は完全に吹雪の世界。パタゴニアのスケールの大きさとは逆に、われわれの闘志はしぼみがちであった。

結局、二十三日から三日間、延べ四十五時間にわたるアルバイトの甲斐もなく、最終デポ地は当初の計画よりはるか手前のイルカ丘（仮称）頂上直下とせざるを得なくなってしまった。さらに悪いことには、イルカ丘から氷陸までのルート確認ができないままエデンに帰らねばならない。「こんなところにデポして縦断ルートから回収できるのだろうか。ヨレヨレになって縦断してくるというのに……。」こんな不安も重なって、十一月二十七日、迎えにきたポンポン船でエデンに帰る喜びも余りスッキリしたものではなかった。

何千年というもの人類にその足跡を許さなかったパタゴニアのプライドか。せめてものレジスタンスとばかりにわれわれにあらゆる攻撃をかけてくる。これがエウロパ氷河荷上げの印象だった。しかし、このデポの存在と荷上げの苦闘が、それ以後の氷陸縦断を終了するまで、われわれの心の支えとなったことはいうまでもない。

氷陸縦断へ——ファルコン氷河上陸

十二月三日、四日間の休養後再びエデンを後にする。この日のうちにフィヨルド・ファルコンに入ったが、ここでもまた、予想以上に押し出された浮氷のため、上陸を見合わせ待機せざるをえないはめになった。ポンポン船の船長が極度に浮氷を恐れたためだ。四日、五日。しかし、もう待つことはできない。ここでの三日間のロスは限界ともいえる。十二月六日、われわれの強引な説得で上陸予定地の一〇キロ手前に接岸させる。最悪の事態に備えて一艘のゴムボートは、フィヨルド・エウロパの上陸地点に置いてきた。残る一艘で上陸地点まで運ばねばならない。身体を乾かすひまもなく雨は降りつづいている。ときどき大きな浮氷の一部が崩れて海に落ち込む。ドンという大砲のような音が、静かな海面をふるわせる。二日がかりで全部の荷物を運びおえたわれわれは、九日、HPS16氷河舌端の氷河湖畔にC3を建設した。いよいよ本格的荷上げが始まる。氷河にどうやらとりつけそうなところが一ヵ所あったが、その周囲は滝の連続だった。われわれは水しぶきをあびながら、氷河の末端に向かって登りはじめた。

当初HPS16氷河を荷上げルートとして考えていたが、再三の偵察の結果、二ヵ所ある上部のセラック地帯の突破は到底不可能であることが判明した。そこで隣りあわせの無名氷河にルートをとる。連日雨とミゾレの集中攻撃にあいながらルート工作、荷上げの繰返しが続く。三人ということもあってトリプルならぬ四回、五回の往復ボッカ。十二月十五日、無名氷河上部にC5を建設。ここは昨日までの天幕場と違って完全に雪の世界(標高約七〇〇メートル)、今日一日であのいまわしい雨から逃れることができると思うと本当にホッとする。が、雪の世界に移ったとたん、今度はヒドゥン・クレバスとの闘いが待っていた。ポッカリと青白い口を開けたクレバスと違って、新雪に隠されたクレバスは始末が悪い。トップがストックで座頭市よろしく雪面をつきさしながら歩く。その間、つねにガスの中での行動。何時間かは神経を集中させることができるが、ラッセルの苦しさも重なって「エーッ、クソッ、なるようにな

れ」とばかりに強引に真直ぐ進むことになる。

十二月二十日、パタゴニアにもこんな天気があるのかと思えるほどの快々晴。昨日までのブリザード、ガス、アラレ……といった悪天候がまるでウソのようだ。偵察をかねてC7建設地までガソリンタンクをボッカする。ワッパのツメがキュッキュッと心地よい音をたてる。C6から下り気味にルートをとる。HPS16氷河に流れこむ支流の氷河源頭をトラバースして、C6東方のピークから延びる尾根のコルに出る。見えた、氷陸だ！〃われわれはあそこにいくんだ〃パッと広がる氷陸の素晴らしさにしばし足がすくんでしまったほどだ。フィヨルド・ファルコンの回りには荘厳なピークが連坐、そこから流れる氷河の美しさ。地球上のものとは思えないほどの景色だ。この一瞬を、そして、この一瞬をつつみこんでいる大気を自分自身の身体で感じんがために、ここ数年間青春をつぎこんできたといえるだろう。

われわれの「少なくともあの氷陸の片隅にでも降り立たねば」という気持ちだけが、前へ前へと進ませていた。

そのわれわれの闘志に水をさすアクシデントが起きた。二十二日、C7に全荷物を集結後、HPS16氷河とハルパ氷河の分氷嶺へ偵察に行った際、トップが滑落し、ガソリンタンクをクレバスに落としてしまったのだ。燃料、食糧等すべてを最少限しか携行していないわれわれにとって、二〇リットルの燃料なくして氷陸縦断は考えられない。まして、荷上げ開始後二週間以上たつのに氷陸までの半分にも達していないのだ。〃撤退〃という思いがみんなの頭の中にうごめきはじめていた矢先の燃料消失だ。どうしてもタンクは回収しなければならない。しかし、それからまる二日間、強い雨と風、深いガスに悩まされてテントを出られない。三日目にやっと晴れて、旗を目印に例のクレバスに戻った。幻想的というより不気味なクレバスの中を洞穴探検並みのいでたちでタンクを探し求めた。クレバスの底は雪でうずまっていた。ピッケルで探しまわること二時間、ブスッという鈍い音がして、手ごたえがあった。これがわれわれにとって最大のクリスマスプレゼントとなった。

その日から一週間というもの、必死の荷上げが続いた。氷陸までにはまだもうひとつかなり広い雪原がある。われわれが登ろうとしたHPS16氷河の源頭だ。三人はその雪原を渡って対岸の尾根にとりついた。

しかし、そんなわれわれの闘志をあざ笑うかのようにパタゴニアの自然攻撃は続いた。雨、雪、風、ガス……あらゆる手でわれわれを襲う。十二月二十八日、久しぶりの快晴に恵まれ、ファルコン氷河源頭の尾根に足跡を印す。ここから氷陸の全景が見渡せる。リソ・パトロン山群、ドン・ボスコ、ムラジョン、トリノ、アルティプラーノ・イタリア、そして、かの有名なフィッツ・ロイまでもがその頭をのぞかせている。肉体的にも精神的にも徹底的に痛めつけられて来た後の報酬——この感激はわれわれ三人以外に味わうことはできないだろう。われわれの目指す氷陸はコルから真南に見える。航空写真ではそれほど実感は持てなかったが、こうやって自分の目で見ると実感として「大きいなあ、果たしてソリはうまく滑ってくれるであろうか」期待と不安が交錯する。

十二月三十一日、再度の快々晴。大晦日を飾るにふさわしいパタゴニアでの日本晴れだ。C10を撤収して氷陸へ降りるコルにC11を建設することに成功。天幕を移すことが先決だったので、私物と四日分の食糧を持ってC10を後にする。アルゼンチン領の空は赤く染まっているが、チリー側の氷陸はまだ夜明け前のあの青暗い輝き。パタゴニアでは珍しい天気に助けられて入山以来最高の六キロをかせいだ。しかし荷上げ予定日数はとっくに消化しており、縦断のための食糧、燃料等の余裕がなくなってきている。ソリの走り具合によっては引き返すことも考えなければならない。

視界ゼロの十一日間

一月三日、エデン出発以来一ヵ月目に氷陸への第一歩を印した。どこまでも続くスカイラインを見ながら進むわれわれの姿は、さしずめノミが大海原を泳いでいるようなものだ。荷上げの時と違って単調な動きの連続。いかんせん

だだっぴろいだけ、遠くにぼんやりと白いピークが見えるのみだ。今までのような上り下りがないため、余計な考えが頭をかすめる。太陽はわれわれをじりじりとてりつけ、汗が目にしみ、ソリの引き綱が肩にくいこんだ。頭はもうろうとし、ただ数をかぞえながら黙々と前進するしか手がなかった。こんな単調さがかえってソリを予想外に走らせた。C12は一五二四メートル峰の真西に張る。しかし、その日をさかいにして天候は一変し、ガスがたちこめ、シトシトと雨の降る中を磁石頼りにしゃにむに南下する日々が続いた。われわれはすでに深く自然の中にのめりこんでいた。すでに後退の道はとざされている。沈痛な前進がもう十日間も続いている。残っている食糧もあと二週間分。相かわらずガスと吹雪だけの世界。太陽の顔も忘れてしまいそうだ。この天幕には永久に日光が当たらないのではないかと思いたくもなる。

しかし、毎日毎日、パタゴニア氷陸の大きさに驚ろかされるばかりである。氷河の源頭付近を右往左往するばかり。実に大きい。これこそ、われわれが何にもましてパタゴニアに求めてきたものなのだが……。

ヒマラヤのジャイアンツ、それもまたアルピニストの心をひきつけるものに違いない。しかしここパタゴニアは、広大な氷の広がりが、われわれをひきつけずにはおかないものをもって広がっている。高さにおいてパタゴニアははるかにヒマラヤの比ではない。しかし、この広大な氷の広がりはヒマラヤを大きく凌ぐものがある。そしてこの広がりこそ、われわれが常に求めてきたものなのだ。

いったいわれわれはどこにいるのだろう。最初の出だしの位置と、その後の歩数からだいたいの位置は地図上に示すことはできるものの、平らなところであることを信じているわれわれにとって、登りぎみになったり、下りぎみになったりすると、ふと不安が頭をかすめていく。この何日間か、自然の前では実にちっぽけでみじめだということを身にしみて感じさせられていた。

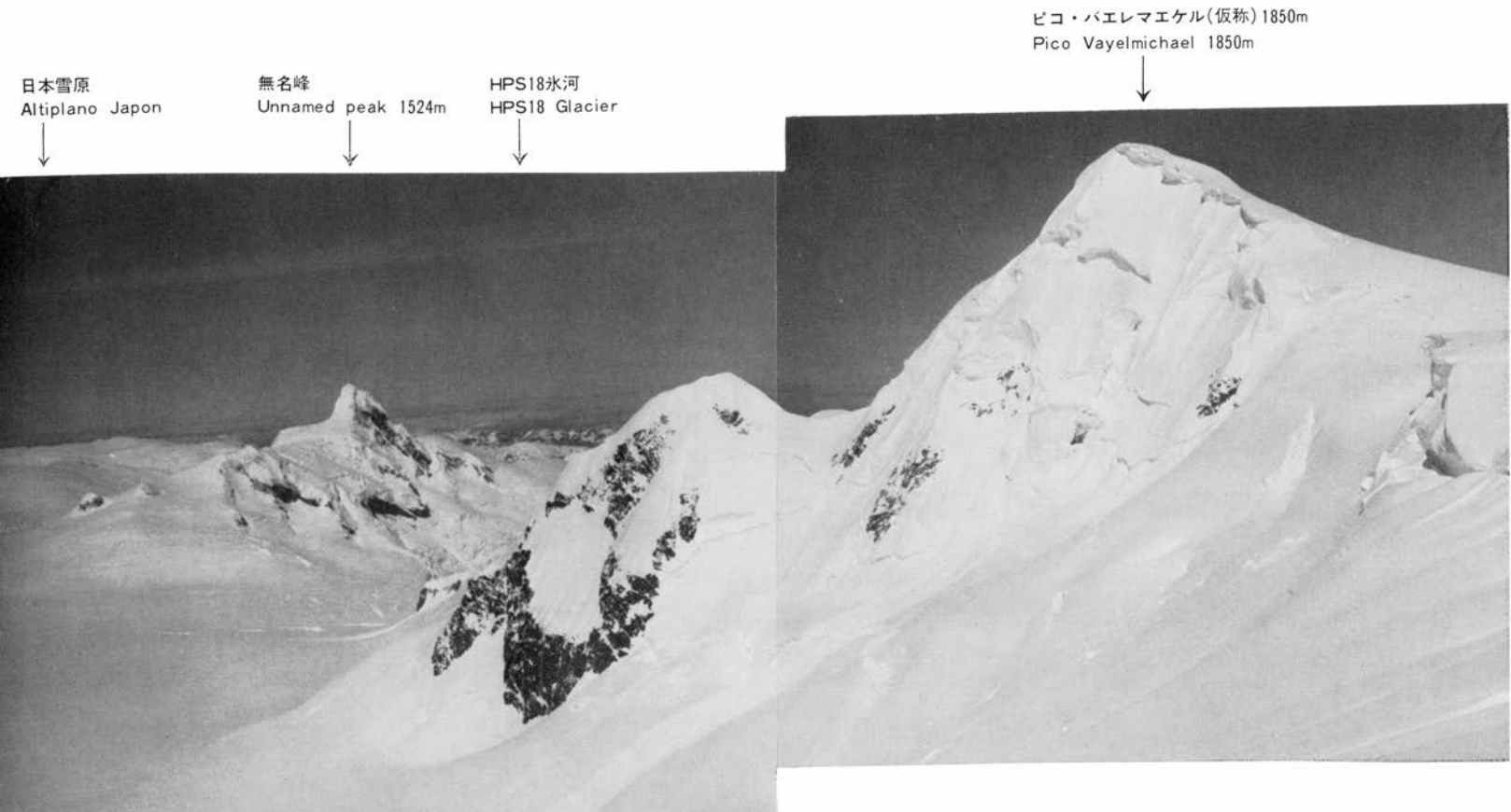
われわれには信じた方角に向かってただ前進するしかなかった。

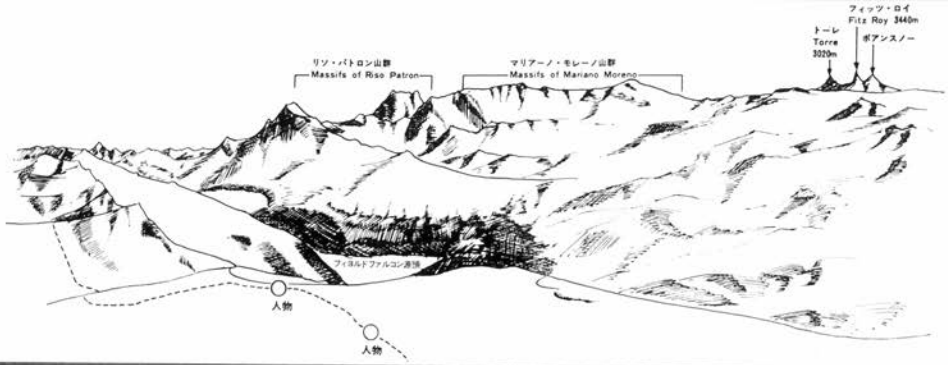
一月十六日、われわれは一日、前進することをやめ、偵察に出ることに決めた。もうこれ以上はないというところまで登ってみた。しかし、ガスは濃く、風はさらに強い。こうなったら腹を据えて、天気待ちするよりほかにない。ツェルトにもぐりこみ、じっと待った。外が少し暖かいような感じをうけた。それにちょっと明るくなったような気もする。ツェルトのはしから首を出してみた。「見えたぞ！　氷陸がみえる。やった、やった！」三人はパタゴニア中に響き渡るような叫び声をあげた。ほんの少しガスが切れただけだが、われわれにとっては日本晴れに思えた。それ以上だったろう。なぜならこの晴れ間こそ、われわれの生死を決定するといっても過言ではなかったからだ。デポ地に続くエウロパ氷河源頭もはっきり見ることができる。

十二日ぶりに見た晴れ間はわれわれにC18の撤収を急がせた。幸いパタゴニアの日照時間は長い。午後九時三十分までわれわれはただひたすらに南下する。今度は確信をもって。エウロパ氷河源頭まで約二十キロ。再び三人の頭に〝一、二、三……百〟数字の羅列が始まった。

一月二十日、視界はないがとるべき進路が南ということが分っているので気は楽だ。一三四一メートル峰へは南西に行けばいいのだが、エウロパ氷河源頭のクレバス帯が発達しているので、これを大きく回り込まねばならなかった。徐々に方向を南々西に修正しながら進むが、二ピッチ目を過ぎたあたりでスッポリと口をあけているクレバス帯にぶつかった。あわててソリを南に向ける。三ピッチで一三四一メートル峰を真西に見る地点に着く。時間的にはもう少し進めたが、ここにC22を建設することに決定した。というのは、この地点で後半部の縦断を続行するか否かを決定しなければならなかったからだ。続行するなら、この地点に天幕をおいてデポを回収しに行かねばならない。だが、そのデポ回収にどれだけの日数がかかるかわからなかったし、われわれ自身の体力、これまでの食糧の使用状態からみて、デポした食糧の量、それに後半部の状態はこれまで以上にアップ・ダウンのはげしいところであり、技術的にも困難なところなので、われわれが計算していた日数を大幅に上回るだろうこと等を考えてみると、続行という

チリー・アルゼンチン国境の山々（2）
Mountains between Chile and Argentine





リソ・パトロン、マリアーノ・モレーノの山々。はるか遠く(右端上)、フィッツ・ロイ、トーレがかすんでみえた。
Massifs of Riso Patron and Mariano Moreno as seen from the inner part of Fiordo Falcon. Torre and Fitz Roy are seen in the distance.

ことは不可能に近かった。

一月二十一日、一三四一メートル峰（セロ・アキラと命名）直下にC23を建設、直線距離一〇〇キロ、延べ踏破距離四〇〇キロの氷陸縦断に終止符を打った。われわれは縦断の核心部である南緯四十九度五十分から五十度二十分に至る約五〇キロに広がる氷陸を〝アルティプラーノ・ハポン（日本雪原）〟と命名した。

最終地点で苦労をともにしてきたソリを捨て、われわれはフィヨルド・エウロパへ下りるルートを探しはじめた。偵察の二日間は雨まじりの強風にたたられ、ルートを発見することはできなかった。ここでルートをあやまれば、約束の日にエウロパの上陸地点に着くことはできない。

結局、不安定だけれどもこれしかないというルートを見つけ、かなり急な雪壁を登った。重荷を背負って逃げるにはちょっときびしすぎたが、そんなことは云っていられない。一三四一メートル峰を越え、再び雪壁を下って最初にデポした地点にむかう正常のルートを探しあてた。それも非常に細い雪稜で、おまけにクレバスのある不安定なルートであった。

C23からデポ地まで一週間もかかってたどりつくなど、パタゴニアは最後までわれわれを苦しめ続けた。

ポンポン船が偵察にくる二月十八日まで、われわれはデポ地付近の地形概念の研究をする。

いよいよ下山の日が来た。われわれは約束の前日、フィヨルド・エウロパの上陸地点に着いていた。テントの中でお茶をのんでいると、外で人声のようなものがする。おかしいとは思ったものの、飛びだしてみる。一日早く船がやって来たのだ。もう一日もこんなジメジメした生活にたえられない気持でいたわれわれは、一度に緊張感がゆるみ、顔見知りの漁夫に抱きついていた。

われわれは張ったばかりのテントをたたみ、ポンポン船に乗り移った。パタゴニアに別れをつげ、雨と苔のプエルト・エデンに向かった。

初めてみたときのエデンは、灰色の部落に映ったが、今見るプエルト・エデンは、まさに〝エデンの園〟そのものであった。

世話になったエデンのお巡りさん夫婦も、われわれの無事な帰還を心から喜こんでくれた。

（吉沢岳夫 記）

叔父板倉勝宣のこと

板倉勝正

(1)

板倉勝宣は父の末弟である。私は叔父の学習院高等科時代から北大を経て死にいたるまで、一緒に暮していた。しかし叔父が死んだ時私は数え年の九つだったし、北大時代にはほとんど家にいなかったから、叔父についての記憶は極めて断片的なものにすぎない。

最初の記憶は上野桜木町に住んでいたころ、叔父が玄関に掛けて編上靴に片手で紐を掛け、「行って参ります」と母(私の祖母)に挨拶するところである。叔父が片手で素早く紐を掛けるのが私には手品のように見えた。叔父はまた一羽のミミズクを飼っていて、その生餌になるドジョウやカエルを下の(当時の院線=今の国電=の向う鶯谷あたり)田圃に捕りに行ったこともある。このミミズクは叔父か祖母からしか餌を喰わず、私や女中がやろうとしてもフハァフハァという啼声を出して脅した。叔父の山行は必ず夜行で、「メガネ=今の交通博物館、元万世橋駅」から立ったが、その日には自分で車中の弁当用にサンドイッチを作った。ジャガイモとヒキ肉をねり合わせて、トーストパンにはさんだものだが、私は台所で叔父の傍に立ってそのお余りを貰うのを無上の楽しみとした。後年(昭和六、七年頃)三省堂の二階でミート・サンドイッチ(二十銭)なるものを食って、叔父を憶い出したことがある。

その頃(震災以前)の東京は今とちがってよく大雪が降った。そんな時叔父は必ずスキーを担いで両大師から米隣坂(ベーリンザカ)へ上りに出掛けた。私はミカン箱に座ブトンを敷いた「ソリ」に乗ってそれを見に行った。多分今の科学博物館や学士院のあたりだったように記憶する。ストックが一本か二本かは全く覚えていない。そう言えば、大きなザックを背負って出て行く姿は覚えているが、山の道具をどこにしまっていたのか、ほとんど見たこともなかったような気がする。

叔父が家にいる時は(年中山に行っていたような記憶があるが)、たいてい上野の図書館に通っていた。三度に一度は叔父について行く。その時は弁当持である。叔父は紺絣に袴を穿いている。私を博物館にほうりこむと叔父は図書館の方へ行ってしまう。学齢前の私の入館料は多分払わなかったのだろう。ミ

イラを見たり、仏像を見たり、カビ臭い空気の中でアチコチしているうち、日射しがベンチのところからケースの箱の裾の方まで縮んでくると、私はミイラの棺の方にもどっている。すると間もなく叔父が迎えに来て、芝生で一緒に弁当を食べる。帰えりはどうしたのか、全く記憶にない。

桜木町時代で大変よく覚えているのは、札幌の叔父から時々赤い布に包まれたハムの片脚が届いたことである。その頃父は日本にいなかったから宛名は板倉勝正様となっていた。それで私はこれは皆ボクが食べるといって大いに叱られたが、包紙の形から「ビワ（の形をした）のブタ」と称しているのを記憶している。この札幌のハムには「日く」があって、叔父も父も（これは先輩である父の入智恵と思われるが）一本のハムについて二度、金を請求したらしい。長年家につとめていた高田という老執事からこの話を聞いたことがある。桜木町では叔父はいつも離れにいて、友人を訪ねる時はこちらから出掛けたらしく、来客のあった記憶はない。札幌では、かつて父がいた花岡というアイヌの家に下宿していたようだが、昭和二十三年に私が北大に赴任した時、探して見たが見つからなかった。当時は未だ叔父の同級生が在勤中で、クマ博士の犬飼哲夫先生などから叔父の北大時代の話をきくことができた。叔父はよく独りで銭函（ゼニバコ）沿岸（今はゴミバコと言われる）へ出掛けて砂浜で寝たり、木工所へ行って下木を削ったりしていたそうである。その時々の生活は当時京大生だった松方さんへの通信にくわしい（「遺稿」）。

（2）

つぎの記憶は本郷東片町の家である。この頃は叔父の北大時代と思われるが、ほとんど家にはいなかったようである。叔父の部屋は二階にあって、父がスマトラから買って来た鹿の角などが掛けてあった。私は大変な泣虫であったが、ワイワイ泣いていると叔父が二階から駈け降りて来て私を抱き上げ、「折るぞ、折るぞ」と言って脅したのが大変こわくて、すぐに泣き止んだ。

最後は池之端七軒町の家で、大正十年頃、父が帰国してはじめて、一家が顔を揃えた。この頃の叔父にはよく電話が掛かり、友人もここに訪ねて来た。電話が掛かるとすぐ「俺んち来いよ」と言っていた。それでもたいていは出掛けて外で会っていたようである。「ボージョー（坊城俊賢）、マツカタ（松方三郎）、イジューイン（伊集院虎一）」の三人からよく電話が掛かったので、私と姉はよく語呂合わせのようにこの名を言って笑ったものである。いつか松方さんが二階へ来て、私がお茶を持って行くと「舌のなげえのは、こいつか」と言ったので、私は大いに気を悪くした。この時は二人とも白い絣を着ていたと思う。伊集院さん、坊城さんには久しくお目に掛かっていない。叔父

は決して子供好きとは言えなかったが、それでも時々はハガキを寄越した。「シタノナガイノハダレダロー、ヨナカニベンジョニイケナイノハダレダロー、カゲベンケイハダレダロー」等等。これが遺稿に収録されて私は迷惑した。

最後の冬に、叔父は庭の樅の木を切ってクリスマス・ツリーを作ってくれた。父が「ノブスケ、余り珍しいことをすると、帰って来られないぞ」と言って笑ったが、その通りになって終った。訃報が伝わると家は来訪者でごったがえしたが、私と姉とは何やら分からず人が集まるのに昂奮して騒ぎ回り、滅多に怒らない父からひどく叱られたのを覚えている。葬式に出たかどうかは忘れたが、槇さんが樽のような足をして福松におぶわれて玄関に見えた姿は今でもマザマザと目に浮ぶ。暫くしてからその時の立山の映画を写しに槇さんが見えた。カツノブクンが「カツノウクン、カツノウクン」と聞こえるので、姉と二人でクスクス笑った。「転んだのは三田君であります」という説明も覚えている。私はスキーを止めて三十年になるが、今でも槇さん、三田さんとならスキー行をしてもいいと思っている。ついでだが、父の兄弟は皆食い辛坊で、食べ物のことで父が祖母に叱られているのをしばしば見聞したが、遭難の年にも叔父は大好物のあげ煎餅を食いすぎて腹具合いが悪かったという話をきいたが、これは果して叔父のことだったのか、何かのはずみで叔父のことにして終ったのか、その辺のことは定かでない。

右より三田，勝正，槇，加藤（泰安），成瀬岩雄さん （本文次ページ参照）

防寒具が極めて貧弱だったことは、父が後々までも「あの位の事はしてやれたのに」と悔んでいたから、確かなことと思われる。

（3）

震災と戦災とを経て、今私の手許に残っている叔父の形身は、ピッケル、カフスボタン、それに遺影数葉とである。「遺稿」も三月十日の空襲で焼いて終い、扉のエーデルワイスの鋳型も久しく文鎮に使っていたが、この時に溶けて終った。槙さんが叔父のために注文して下さったシェンクのピッケルは、叔父の死後届いたが、遺品として差上げ、それをまた戦後になって、あらためて槙さんから私が頂戴したのである。ヒンズー・クシュ遠征の時、これを携えていき、登頂隊員にバンダコー頂上に立てさせた。帰国してから墓前に持って行き報告したが、ピッケルを持って墓参りというのは余りないだろう。カフス・ボタンも形身として三田さんに差上げたものを、「お前が持っている方がよかろう」というので、これまた頂いたものである。

写真は北海道のエハガキに「この一番先が僕です」などという雪中行進のものがあるが、チャンと顔が分かるのは三枚しかない。最初のはおそらく天神町三番地（旧宅、父の兄弟は皆ここが本籍で、今その一画に「板倉茶屋」なる小料理屋がある）の家らしく、小学生の叔父が年上の叔父（多分勝忠、八十六歳健在）と廊下で将棋を指している処を庭前から写したもの。審判の白髯の翁は国分青涯老人だろう。つぎは学習院時代の貞明皇后のお裾持ちの時ので、ページのような服装で貴公子然と見えるが、ガニ股が苦しく品位を失している。最後は北大時代と思われるが紺絣の前がはだかって、腕組みして大口をあけて笑っているものである。いつか山崎（安治）さんにその話をした時、家捜ししても探し出せと言われたが、私は伊倉さんなどとちがってひどく整頓が悪いので甚だもって自信がない。確かにあるのは昭和三十四年一月十七日の叔父の墓前祭の写真で、槙さん、三田さん、成瀬さん、加藤（泰安）さん、〇〇〇〇さんなどが見えるが、撮影者は誰だか分からない。来年は叔父の五十周忌（仏教でそんな数え方はないかも知れない）である。中大の夏山合宿は毎年剣沢でやっている。今年は十五年飼っている犬の病気で同行出来なかったが、来年は松尾峠と芦峅寺を訪れてみようと思っている。（四七・七・一〇）

アフガニスタン中央高地単独横断

梶　正彦

暑い昼下りであった。ギラギラと照りつける太陽のもと、不釣合いな静寂が支配する。気温は摂氏四十五度をこえているであろう。すべてのものがこの暑さに、動きを封じられているように感じられる。この静寂を破るかのように、時折り、バザールの中の道を熱風が、砂ボコリを舞い上げながら吹き抜ける。

ここはアフガニスタンの有名な観光地バミアン、バンデ・アミールの奥にあるヤカオランという小さな寒村である。バミアンから時々バスが連絡している。観光客で賑わう、世界一の石仏のあるバミアン、荒野の中に紺碧色に水をたたえる神秘的な湖バンデ・アミールに較べ、ここヤカオランには一人の観光客の姿も認められない。しかし、写真で見た石仏や湖以外の何物でもなかったバミアンの石仏やバンデ・アミールの湖よりも、ここのアフガニスタンらしさに強く感動する。

この村は東西に横たわった谷間の中にある。東から入って来たこの村から、西の方を見ていると、地の果てに辿り着いた気持ちになり、心細くなる。この先に広がる荒野が人間の生存を許しているとは、とても信じられなかった。

ヤカオランには小さなバザールがある。バザールは、一本道の両側に、ドロ作りの低い長屋のような家が二十軒程ずつ並んでいるだけのものである。この一皮並びの長屋の裏からは、木一本生えない荒野が広がっている。北側は大きな岩山である。遠く西には高い山が見える。その頂上付近には、小さいながら雪田がある。ここヤカオランは、今まで見てきたアフガニスタンのどの街や村よりも、中央アジアを感じさせた。二十世紀初頭において、最大の地図の空白部であった中央アジアには、西欧や日本から数多くの探検隊が殺到した。しかし、現在われわれは政治の壁に阻まれ、中央アジア奥地への憧れを実現する道を鎖されている。ここヤカオランで中央アジアとはこのようではあるまいかと、ただ想像するしかない。

太陽が西に傾き始めると、辺りは今までの暑さが信じられぬ程涼しくなる。そして静寂が破られ、夕闇のなかで人の動く気配が感じられるようになる。

バザールに出てみる。バザールにある店のほとんどは、雑貨屋、穀物屋、布地屋である。多くの店の前には、ブロックにした岩塩がうず高く積み重ねてある。ここで手に入る野菜・果物

類は、小さく、堅く、そして辛いタマネギだけである。泊っているチャイ・ハナ(茶屋)の隣りは金物屋であった。狭い店の床には、手作りのハンマー、ハサミ、ネズミ取り、羊に付けるスズ、そして馬具。どれ一つ取っても無細工であるが、規格化された工業製品にはない味わいがある。人の好さそうなオヤジが、いつくるともあてのない客を待って、奥でころがっている。バザールの中を、荷を付けた数頭のロバを後から、ノンビリと追い立てながら歩く男。店の前で世間話でもしているのであろう男達。そしてもの珍しそうに、一人の侵入者に見入る子供達。奇妙なことは、女の姿を全く見かけないことだ。

ダイダイ色に染まった西の空も色あせると、村は闇に支配される。いくつかの家でランプが灯される。どこのチャイ・ハナで出される夕食も決まっている。全く同じ味の羊肉スープ。そしてナン。生のタマネギが岩塩を添えて出される。スープの中には、ランプに当たって落ちた蛾やハエが飛び込む。それらを手でつまみ出しては、ナンをスープに浸して食べる。単調な食事が終ると、ミルクもレモンも入らない味のない紅茶が出される。しかし、インド料理のように、辛過ぎたり、甘過ぎたりしないので助かる。

夜はチャイ・ハナがそのまま宿になる。砂漠の夜は涼しい。夜の戸締まりは厳重にされる。ドロの床の上にカーペットが敷かれ、フトンをかぶって横になる。とたんにノミと南京虫の襲来だ。また寝られぬ夜を迎える。

バミアンからバスに一日揺られて、このヤカオランに到着したのは、カーブルを出て五日目だった。バミアンで奥に行く交通機関を見つけるのに手間取ったためであった。アフガニスタン中央部にある荒野を横断するに際し、その前にバンデ・アミールから奥に入って偵察を行なうことにした。日本では、このアフガニスタン中央部に関しては、ほとんど情報らしきものは得られなかったが、七十年にバンデ・アミールを訪れた友人から、奥にナヤックという村があり、そこまで週一本程バスが通っているとの話を聞いた。そしてナヤックとヤカオランは同じ村であったことを、ここに着いてから初めて知った。今は、ヤカオランからコー・イ・ババの山脈を越えたパンジャオまでトラックの便があることを聞きつけ、何時来るともあてのないトラックを待っているところである。人は、歩いて二時間もあれば着けるという。またトラックで三十分とも、二時間とも、数時間とも。しかし、パンジャオに向かうトラックは、果してあるのか、何時くるのか、どの位かかるのか、本当のところはさっぱりわからない。すべてがアフガニスタンのペースで運ばれる。

トラックは来た。結局パンジャオまで七時間の旅であった。ヤカオランから、コー・イ・ババ山脈の西端を約四〇〇〇メートルの所で越えた南側にパンジャオはあった。そして、体調を

くずしながらも、パンジャオより奥地への偵察を続けた。

雪と氷に厚く覆われたヒマラヤの白い峰々。登攀。そして登頂の感激。四年間の大学生活はこの夢を実現させるためにあった。その夢が実現した一九六九年のヒマラヤ遠征後、パキスタン・アフガニスタン・イランの砂漠を四〇〇〇キロにわたりトラックとバスで旅した時、僕は全く別の世界があることを知った。砂。蜃気楼。竜巻。あまりにも広大で、極端に単調な死の世界であった。冒険心を満たしてくれる場、旅のロマンティシズムを求める場としては、ヒマラヤ登山に限界を知った心には、この砂の世界は強烈であった。大学三年の春山合宿後松本で買い求めた梅棹忠夫著『モゴール族探検記』の記述がオーバーラップする。アフガニスタンの中央部は未探検地域と地図に記されているのを明瞭に想い出す。ここを砂漠の舟と呼ばれるラクダで横断したらどうなるか。調べを進めても、なかなか目的地域の状況がつかめてこない。冒険心を鋭く刺激されると同時に、未知への不安が広がる。

しかし、十二日間の偵察行の結果、当初考えていたラクダを使っての横断は諦めざるを得ないことを知った。砂漠の舟と呼ばれ、砂漠の旅には欠かせないこの忍耐強い動物は、強情で素人が短期間の練習で乗りこなせるようになるのは困難であり、また世話をするのは不可能に近いからであった。現住民の移動の多くにはロバが使われており、馬かロバによる旅を選べば、ラクダは必要なさそうであった。この地域は、古くから強盗とオオカミの多い地域としてよく知られていることも心配であったが、それ以上に横断行は、現地で細々と定着農業を営む者、及び遊牧民は他人嫌いで、彼らが必ず連れている犬と共に苦労しそうであった。もっとも心配したのは水であるが、この地域の山岳部には冬期に降雪があり、砂漠の中に消えるヘルマンド、ハリルード川等の源流地帯であり、全く降雨のない春から秋にかけても、水に苦労することはなさそうに思われた。しかし、食糧は、トラックによる旅ですら、常にひもじい思いをしたことを考えると、苦労しそうに思われた。

物価が安く、ハシーシ等の麻薬に関しても厳しい規制のないアフガニスタンの首都カーブルは、今やカトマンズを追われたヒッピーのたむろする街となっていた。偵察行よりカーブルにもどってから、横断行に自信のもてぬまま、また暑さに完全に気勢をそがれて、ヒッピー達と寝起きを共にして、彼らとのだらけた生活に浸り込んでしまった。

ポスト・モンスーンのネパールでの登山に間に合うためには、そろそろ決断せねばならぬ時が来た。ヒッピー達と一緒の生活では、横断行の意欲は全く涌いてこない。困難な旅を自らやる積極性は、彼らに通用しなかった。確かにやっても、やらなくても、価値のないことでは差はない。しかし自分に対してだけ

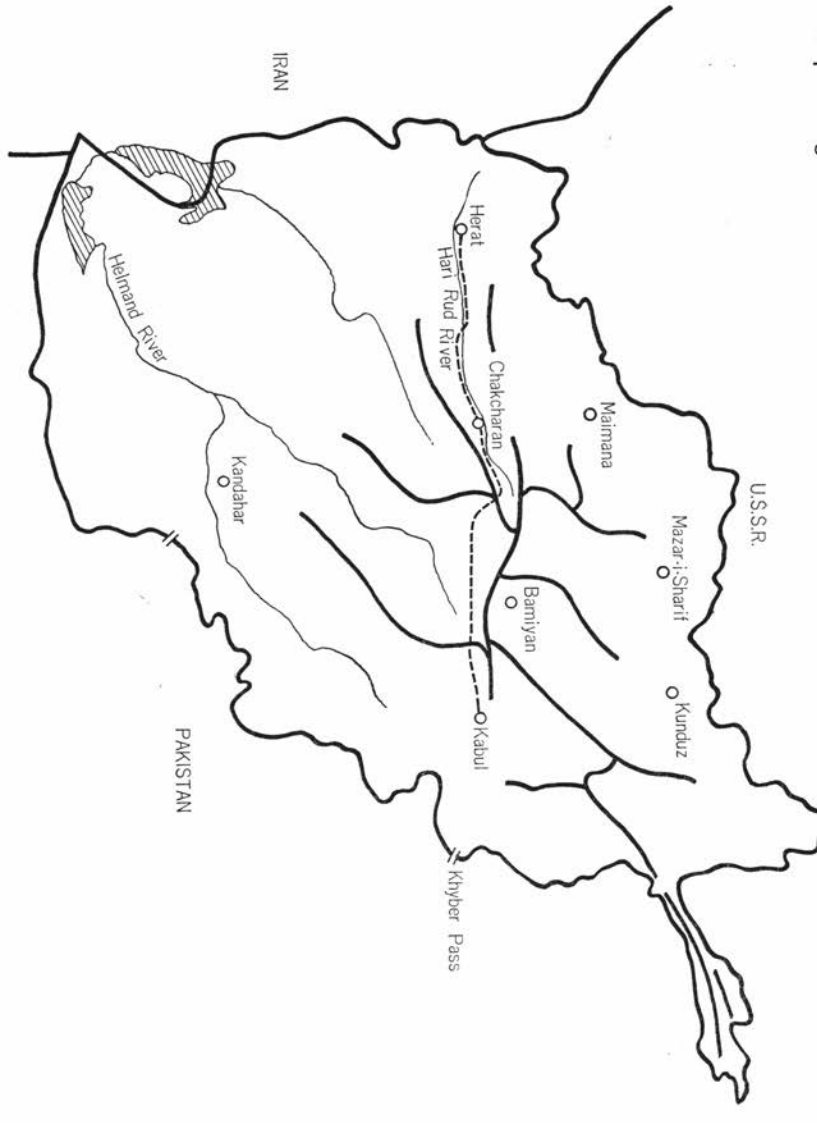
は違いがあった。やってなんら価値はなくとも、やらなかった者、やれなかった者にはそれは言えない。準備を始めよう、そのうちだんだんやる気になるだろう。まず、馬を購入した時に都合のいいように、中庭のある安宿に移った。

馬は四五〇〇アフガニ（約四十五米ドル）で購入した。最初の言い値の八〇〇〇アフガニをここまで値切った。しかし取引の後は、まわりの者からまた言われる。「これは高過ぎた」。アフガン人は値段交渉を見ている時点では決して何も言わないが、終ると必ずこれを言い、いつも腹立しい思いをさせられる。異民族・異教徒には協力しないというのだろうか。心配なのはビザ延長と許可だった。外務省、内務省、警察、観光局と毎日たらい回しにされていいかげん頭に来た頃、大使館の助力で二ヶ月の滞在ビザがおりた。警察では、都会での滞在以外はすべて許可がいると言っていたが、観光局では国境付近以外は必要ないと言うので、それで通すことにした。

明朝横断行出発を決めた日も、特に用意に追われることもなく、ただ馬の世話に忙しかった。何もない地域の旅なので、十分な食糧をはじめとして持って行きたいものが多くあったが、荷物はサドルバッグ一袋につめられるだけに限定した。ただでさえ物騒な所へ、目立つ格好で乗り込むのは得策ではないので、不便を我慢することにした。

四日前に購入した馬は、まだ乗りこなせない。毎朝乗馬の練習をしても、左に向かわせようとしても直進し、右に曲らせようとしても勝手にホテルに逆もどりである。馬の機嫌次第で少少パカパカ走られようものなら、振り落されないよう必死になる。今まで乗ったことはおろか、さわったこともない馬である。乗りこなすどころか、世話することもまともにできない有様であった。同室のアメリカ人には、「乗馬の経験のない者が一日中馬に乗るなんて。その上八〇〇キロ以上の距離を乗り切ろうなんて」と一笑に付されてしまう。こんな状態で、あの広大な荒野に足を踏み入れられるというのだろうか、正直のところまったく自信がなかった。

昼間、大使館で「今年のアフガニスタンは例年にない旱魃で治安状態が悪く、この六、七月だけでもアメリカ人三人、オーストラリア人一人が殺された。くれぐれも注意するように」と言われる。大使館には、横断する地域は、このアフガニスタンでももっとも治安の悪い所であること、以前二度横断が試みられたが、最初のオーストリア人二名は強盗に夜襲をかけられて失敗し、二度目のドイツ人二名は、二年前にヘラートを発ったまま消息不明であることは話していない。夜は、一泊十五アフガニ（当時一アフガニは約四円）で泊っている安宿の主人が説得にやって来た。「強盗とオオカミの多い地域だ。一人は危い。われわれカーブルに住む人間では、あの地域に一人で入って行けない。それに今は時期が悪い。アフガニスタンでも一番暑い


Map of Afghanistan
IRAN
U.S.S.R.
PAKISTAN
Herat
Hari Rud River
Helmand River
Chakcharan
Maimana
Kandahar
Mazar-i-Sharif
Bamiyan
Kunduz
Kabul
Khyber Pass

時だ」等々。

カーブルからヘラートまでは八〇〇キロ以上離れ、それらの間には無限に続くのではないかと思われる荒野が広がっている。この荒野の真中にチャクチャランという街があるという。カーブルからチャクチャランまでの東半分は、偵察行でもある程度見ているが、未知の西半分は山地も高度を低め、より乾燥度も増し、暑さと乾きの苦しい旅になりそうであった。冒険を、旅と放浪のロマンティシズムを求めてやってきたのに、出発を明日に控え、楽観的な希望を持つことを全く許さないこの現実に、何んとも気は重かった。計画は今からでも放棄できる。一人でやろうとしているんだ。中止するのも自分で決心さえすればいいだけだ。今年は条件も悪い。中止しても言い訳はできる。しかし他人を納得させたつもりでも、それは自分自身への言い訳に過ぎない。やるも、やらぬも個人の問題だ。未知への不安と焦燥の中で、二つの気持が複雑に交差する。

一九七一年七月二十三日未明、ドラマは始まった。一日一日の幕がどう下ろされるのか、そしてどんな結果を告げるのか全く分からないドラマが。

一人の見送りがいるわけでもない寂しい出発であったが、先の困難さを考えるとそんな感傷に浸ってはいられない。二時間程馬を引いて歩くと、カーブル市街を抜けた。カーブル大学の広い構内の横を通り、朝市で賑わう旧市内のバザールを通り抜けると、木一本ない砂漠が広がる。カンダハルに通じる米国援助による舗装道路を行く。昼頃小さな丘を越える。カーブル市街は視界から消え、周囲は茶一色の荒野が果てしなく広がる。ここで迷いが少し減る。もうサイは投げられたんだ、と自分にいいきかせる。

薄暗くなる頃、南下する道路と分かれて西に向かう。真暗闇の中、馬を進める。林の中に静かに横たわるマイダン着。初日は約四〇キロ進んだ。この日、金をよこせ、タバコをよこせ、ボウシをよこせと数回石を投げつけられた。夜は食事、カイバとも手に入らなかった。一日目にしてこれでは、先行きが思いやられる。しかし夜は、「砂漠と星の国アフガニスタン」にふさわしい、すばらしい星空であった。

二十四日、小さな谷沿いにウナイ峠に向かう。この辺りはまだ東に位置するため、小川沿いには柳の並木すらある。川沿いの小さな畑では、ちょうど麦の取り入れに忙しい。この谷には、ウナイ峠・ハジカク峠を経由してバミアンに至る道が通っており、外人観光客の乗った数台のジープとすれ違う。狭い道なので、ジープとすれ違う毎に気の小さい馬は驚き、緊張させられる。ウナイ峠手前シャハークという数軒農家のある小村で泊る。これだけ緑のある谷でも、馬の草はなかなか手に入らない。

二十五日、ロバを数頭連れた二人のアフガン族の男と一緒に、

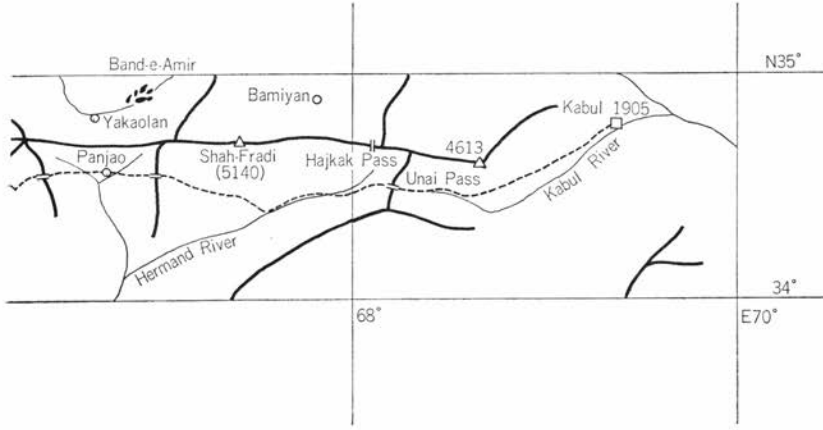
ウナイ峠を歩いて越える。峠といっても一つだけではなく、幾重にもなっている。ハジカク峠への道と分かれて、ヘルマンド川沿いに下る。もう外国人を見かけることもない。孤独感が重くのしかかる。

雲一つない暑い日である。馬は暑さに弱り、馬を引いて歩く。しかしこの暑さでは、引いて歩く方がフラフラとなる。景色が単調なので進んだとも思えず、気が滅入る。ヘラートまでの行先の遠さを思い、暑さに弱っている馬や自分自身を考えて焦る。夜は、コー・イ・ババ山脈東端の山が真近に見える、ヘルマンド川沿いのヘサ・イ・アワル村に泊る。

二十六日、コー・イ・ババ山脈を右手に見ながらヘルマンド川沿いに下る。山脈を南側から見上げているためか、稜線に二、三ヶ所小さな雪田を乗せているだけの岩山で、さっぱり迫力が感じられない。どの山が最高峰シャー・フラディ(五一四〇メートル)であるのか判然としなかった。小さな丘をいくつも越えて行く。いくつ越えても、草など全くない茶色の荒野が広がるだけの相変わらずの同じ景色が広がる。夜はババ・ハン村の農家に泊めてもらう。この家は砦のような高い塀で囲われた中に数家族が住んでいる。このような構えは、古くから強奪の繰り返しの中に生きてきたこの地域の歴史をおもわせる。街では見ることができないベールを付けない女を見ることができる。この塀の上に寝かせてもらった。手すりがなく、落ちるのではないかと心配であった。この日は、丸一日食事にありつけなかった。

二十七日、ヘルマンド川沿いに下る。一時間程進むと川は岩壁の間を通り抜ける。踏跡をたどって行くと、道は岩壁の中に消えてしまい、馬ではとても通過できない。そこで川辺に降り、峡谷の中に馬を乗り入れる。浅瀬を求めて右岸に左岸にと渡りかえして突破する。その後はまた一日がかりで山越えである。登りで馬は暑さにダウン。つねっても、ひっぱたいても、けっとばしてもだめなので、仕方なく引いて歩く。馬が弱いのか、なめられているのか、さっぱり分からない。下りでは、馬は尻餅をつく始末であった。ウナイ峠を越えてヘルマンド川流域に入ってから、緑は一段と少なくなった。

二十八日、また一日がかりで峠越え。灼熱の中、馬を引いて登り、そして下る。地図は米国製航空測量図百万分の一のONCを日本から持参している。カーブルではこれ以上の地図は手に入らない。最初百万分の一という大まかさに手を焼き、行先の距離の長さから、一日に進む距離のあまりの短さに焦りを感じる。今日あたりになると、この地図上でもどこにいるのか、ほぼ正確にポイント・アウトできるようになった。地図は、地形は正確であるが、地名はあまりあてにならないようである。カーブルから目的地ヘラートまでは、直線距離にして六五〇キロメートル、行程は八〇〇キロメートル以上にもなる。焦って



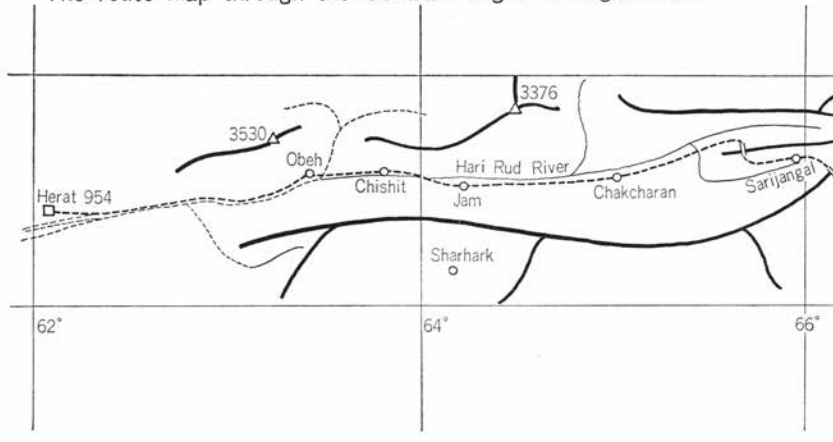
も始まらないと自分に何度もいいきかせる。

二十九日、昨晩もまた南京虫に悩まされ、ほとんど寝られなかった。毎晩南京虫に悩まされ、寝られない夜が続く。半日山を越えてパンジャオ着。山には羊の歩いた踏跡が縦横に走っており正確な道を探すのに苦労する。この村には、広場を囲んで二十軒程の雑貨屋が並ぶ。カーブルを出て以来最初のまともなバザールである。第二次大戦後、東京のGHQにいたことがあるという英国人女医と看護婦二人がおり、カーブルから二五〇キロメートル以上も離れたこのような辺地で、何年も診療を続けている。彼女達に、最初は女に、次はモゴールに間違えられた。今までヘラートまで馬やラクダで行った話は聞かないが、この先はもっときついだろうと言われる。

三十日、一日で二つの峠を越え、十数時間かけて距離をかせぐ。泊るところがなかなか見つからないとはいえ、カーブルを出発した初日から何回も暗闇の中を歩かされている。決して夜は歩くなと言われているが、毎日うまく日没前に次の泊り場に行かれるわけではない。暗闇の中を一人で、強盗やオオカミがうようよいると聞かされているこの地域を、馬を引いて歩くのは気持ちのいいものではない。二つ目の峠は闇の中を越えたので、道を見失わないようにするだけでも大変であった。

三十一日、チャクルシィ峠を越えたところで、ヘルマンド川流域に別れを告げ、いよいよハリ・ルード川流域に入る。半ば

The route map through the Central Height of Afghanistan



崩壊した古い砦の跡をいくつか見る。いつ頃のものかは見当もつかない。昨日も谷の両側の山の上に、見張所に使用したと思われる建物をいくつか見た。アフガニスタンは、十三世紀のジンギスカン侵略以前にも、現在のイランから何回も侵略されており、近くは七、八〇年前までハザーラ族（モンゴル系）とコチ族（アフガン族）の間に大規模な戦闘が続いていたという。これらの建築物は、部族間の戦闘用にしては立派すぎる。また現在この地域に住んでいる住民に、これだけのものを建てるだけの力があったと考えるのにも、かなりの無理がある。現在アフガニスタンの要路は、中央部高地を避け、そのヘリの砂漠の中に道路が作られているので、中央部は取り残されている。しかし太古から自動車輸送が始まるまでは、カーブル・ヘラートを結ぶ道は、この中央部を横断していたものと考えられる。それ故この地域が戦略上の最重要地域であったであろうと想像される。二つ目の峠を越えてサリジャンガル村着。ここには小さいながらもバザールがあった。

八月一日、朝から下痢で、体調は思わしくない。この地域の水は悪く、塩分や石灰分で白濁した水、アオミドロの浮いた水、泥水等すさまじい。この地では、水であれば、その質は全く問わない。この水が体調を崩す原因となっている。何んとも日本の冷たくうまい沢の水がなつかしい。サリジャンガル村を出て間もなく、下痢のため馬から飛び降りてそこにしゃがみ込んだ。

ホッとする間もなく、地面に一尾のクモを認めた。アフガニスタンにはゴンダールという猛毒をもつクモがいて、一メートルも飛びついてきて、一命にかかわると聞いている。このクモの方が、サソリよりはるかに恐れられているのである。心臓がどうかなるのではないかと思う程ビックリして、そろそろと逃げ出した。尻を出したままの脱出である。アフガニスタンでクモを見たのは、この時が最初で最後であった。

終日の山越え。あまりの暑さにグロッキー気味である。暑さと餌不足で馬も衰弱している。ハリ・ルード流域に入ってから、益々乾燥の度合はひどくなり、目につく緑は一段と減少している。

気温は朝七時を過ぎると必ず体温を越える。日中は焼け付くような暑さ。そして雲が浮んでいることの全くない青空の毎日に、腹立しさを感ずる。あまりの暑さに薄着はできない。暑さが布を通して突き刺してくるようだからである。シャツ一枚では暑さに耐えられず、そして体の水分を早く取られて体がまいる。木綿の長袖シャツの上に厚手のコール天ヤッケを着込んで、馬に乗ったり引いて歩く。

二日、朝からの山越え。山上からの景色は、いつものことながら全くばかげている。見渡す限り続く荒野にいささかうんざりする。こんなでたらめな世界に住む人間に、すべて緑で被われている景色を説明しても信じないのも無理はない。しかしこの荒涼とした世界は茶一色ではない。薄茶、灰色、赤紫、黄、水色、ダイダイと色とりどりである。そしてそれらがすべて淡い色で統一される。

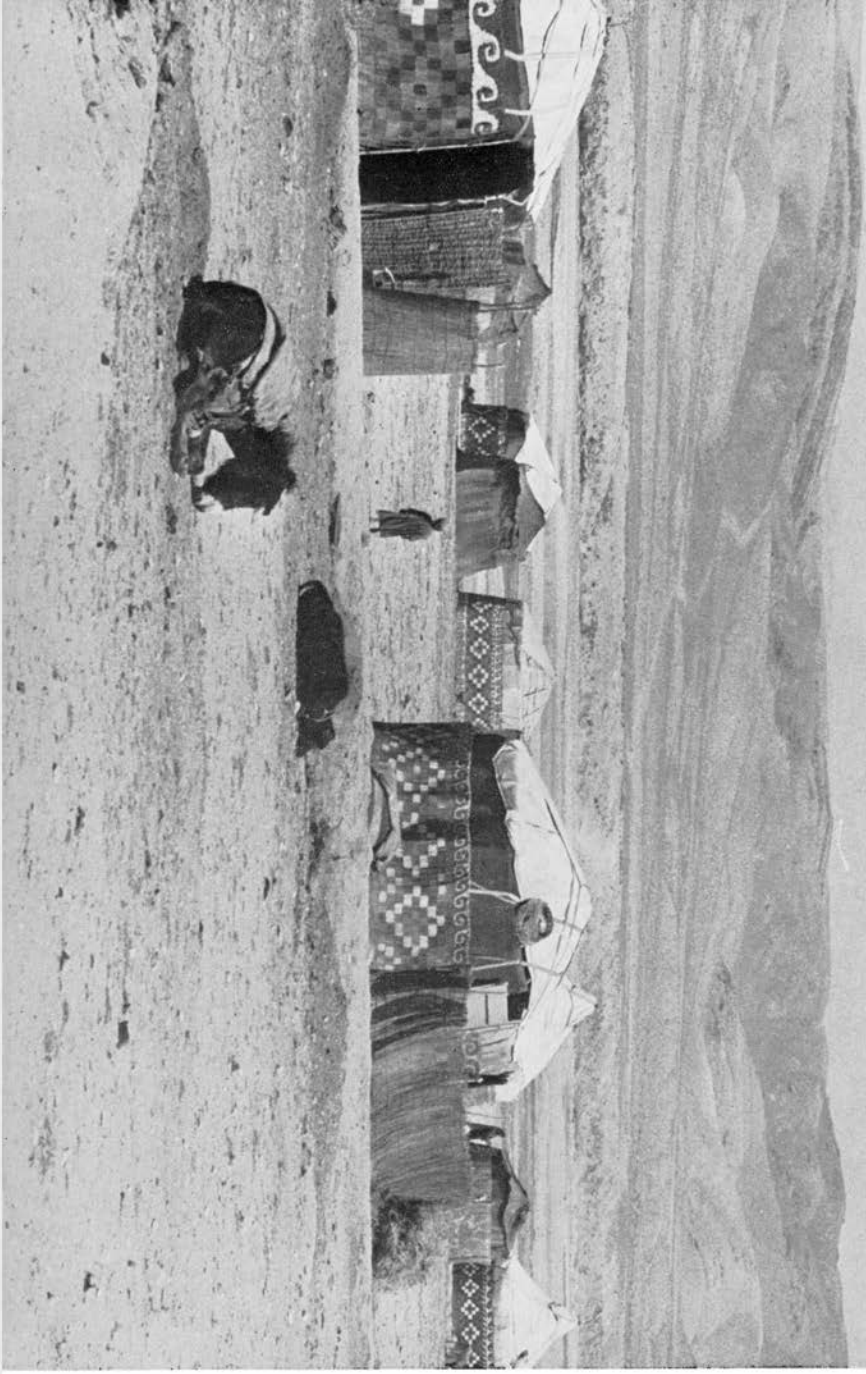
山を降りるとハリ・ルード川に出る。夕方暗くなる寸前シニアという小村に着く。学校の先生なる者達が現われ、泊めてやるという。結局彼らに、馬の餌代、食事（卵一個にナン半分）代に法外な値段をふっかけられた。こんなに金は払えないと言うと、やおら銃の手入れを始めたり、刃渡り三〇センチもあるナイフで歯の間をほじりだしたりする。遊牧民を相手に旅をしていると、毎日のことで銃やナイフの出現に、あまり驚かなくなっているので、妥当と思われる金を彼らにたたきつけ、テントを出て外にシュラフを広げて寝る。明日目がさめたらあのナイフが胸に突き刺っているかもしれない。しかし夜にこの村を一人で出て行くわけにはいかない。すばらしい上弦の月であった。月は物音一つしないこの荒野をくっきりと照し出していた。世俗離れしたこのすばらしい砂漠の夜に、あまりにも人間臭い争いが続くのが不思議に思える。

三日、ハリ・ルード川沿いに下る。この辺りでは澄んだ水がサラサラと流れて行く。川辺は決して緑ではない。水は土の上を、岩山の間を流れて行く。よくもしみ込まないで流れるものだと感心する。

昼頃小学校で英語を教えているという男に、馬を奪われそう

茶店で憩う現地民
Local tribemen relax in tea house — High Afghanistan (By M. Kaji)

砂漠を旅する遊牧民の家族
A nomad family traveling through the desert — High Afghanistan
(By M. Kaji)



砂漠を旅しているとき、全く思いがけなく天幕の村が現われた
During my passage through the desert, a tent village appeared out of seemingly nowhere — High Afghanistan (By M. Kaji)

砂漠の灼熱ばかりでなく、飢渇と恐ろしい砂漠の孤独とを克服して旅を続けねばならぬ

Not only incandescence must be overcome, but the other obstacle hunger, thirstiness and the ever present monotony of the desert scenery — High Afghanistan (By M. Kaji)

になる。昨晩の先生といい、先生と名のる者には何回もいじめられた。彼は "Give it to me." "I need it." "It belongs to me." などの都合いい文章ばかり知っている。そのくせ昨日と明日の区別もできず、頭・首・口・手などの単語すら知らない。これがアフガン式実用英語である。日本人であればまず最初に憶える言葉は、"Thank you" と "I am sorry" ではないだろうか。この二つに相当する言葉は、全く彼達から聞くことはない。ここに有史以来略奪の歴史の中に生きて来た彼達と、島国で対外関係において全くの温室に育った農耕民族日本人との根本的差違を見る。カーブルで会ったアメリカ平和部隊の英語教師は神経衰弱にかかり、「アフガン人を原爆で皆殺しにしてやる」などと物騒なことをいい続け、本国送還となったが、ある程度彼らとつきあってみると、その気持ちもよく分かる気がしてくる。日没直前、チャクチャラン着。カーブルからヘラートまでの前半を乗り切った。

四日、カーブル出発以来初めての休養日を取る。ひどい下痢に悩まされながらも、朝から晩まで馬の世話で結局は休めない。これでやっと前半は終った。後半はより乾燥地帯の旅となる。前半が終ってやれやれと喜ぶより、まだ後半があるのかとウンザリしているのが実感である。

五日、休養日。チャクチャランには小さな飛行場があり、週二回カーブル・ヘラート間を結ぶ小型飛行機が立ち寄るそうである。そしてサリジャンガル村にも小型飛行場が建設されていた。たった十数年前には外部に全く知られることもなく取り残されていたこの地にも、飛行機が立ち寄る。そしてかなり広範囲に渡って活躍し始めたトラックは、ラクダやロバによるキャラバン輸送を駆逐する。アフガニスタン政府は現在、ヘラートからカンダハルを経てカーブルに至るアジア・ハイウェーのほかに、ヘラートからここチャクチャランを経てカーブルに至る中央高地横断のコースに、第二アジア・ハイウェーを建設するための現地調査をECAFE（国連アジア極東経済委員会）に依頼している。カーブル・ヘラート間の時間短縮と地域開発を目的とするこの道路建設計画が実現したならば、この地域は急激な変容を遂げるであろう。これが時代の必然の流れなのであろうか。一抹の寂しさを感ずるのは、現地の人の利益を無視した部外者のエゴなのであろうか。

六日、いよいよ後半戦である。この中央部高地においては、東部はヒンズー・クシュ山脈の延長上にあり高度も高く、比較的降雪も多い。しかし西部では高度を低めてイラン国境の砂漠へと消えていく。旅の厳しい部分は後半だろう。あきらめと居直りの気分である。半日程進んで、シャラークへの道が南下するのを見送り西進する。小さな丘をいくつも越え、百万分の一の地図ではどこにいるのか分からなくなった。午後は強風が吹き、頭上の青空を残して空は薄茶色に染まる。午後、村で泊めてく

れるよう頼むが、次の村に行けと取り合ってくれない。すべてが暗闇の中に消えようとする頃、こんな所にも人間が住めるのかと思われる場所に、二張のテントを見つけた。犬に襲われた上に、このすぐ先に村があるから行けと追い払われる。連れはいないのかと聞かれた時に「一人だ」と答えてしまった。仕方なく暗闇の中を出発する。真丸の月が出て来た。踏跡を辿りながら進む。羊が斜面を縦横に歩いており、度々道を見失う。村らしきものは全くない。九時頃完全に道を見失った。満月で明るい夜である。斜面にいては見つかる恐れがあった。窪地を見つけてシュラフにもぐり込む。「一人」と答えたことを後悔する。その時ニヤリとした男の顔を想い出す。昨晩チャクチャランでの夢見も悪かった。偶然であろうが、野盗に襲われた夢を見た。二年前にヘラートを出発したまま行方の知れないドイツ人二人も、こういう場所で襲われたのであろうか。こんな所では殺されても全く浮かばれまい。全く生きた心地がしない。明朝目をさますことはないかも知れないなどと考える。しばらくすると周囲が少し暗くなって来た。見上げると、月が欠け始めている。一時間半程で、すばらしい皆既月食となった。そして今まで見たこともない程大きな流れ星を見る。たとえ奴等が追ってきたとしても、この月を見て驚いて引き返すだろうと勝手に考える。そうしたら何んとなく心が軽くなって、寝入ってしまった。

七日、朝目をさます。どうやら殺されずにすんだようだ。しかしまだ道に迷ったままであった。水も、食事も、草もないので、すぐに馬を引いて歩き出す。脱水症状を起こしたのか、体は極端にだるく、頭は割れそうに痛む。道が見つからないまま二つ、三つの丘を越えると、下にテントが見えた。やっとたどり着いたとたんヘナヘナと座り込んでしまった。誰か水を持ってきてくれた。妙な臭いと味がしたようだった。しかし小バケツ一杯の水を一気に飲み干した。ここにはナンすらないというので、落ち着いてからまた出発。一日中小さな山を越える。地形が複雑でどこにいるのか見当がつかない。何んとも情けなくなる。夕方テントを見つけ泊めてもらう。モミガラの入った燕麦をセンベイ状に焼いたもの半分だけで、茶もない夕食であった。

八日、半日で二つの山を越えるとジャム村のある小さな谷に出合う。この村から一時間程行ったハリ・ルード川辺りに、ミナレット（回教寺院に付属する塔）があるというので見物に行く。高さ約七五メートルあるというこのミナレットは、狭い谷を流れるハリ・ルード川の辺りに聳え立っている。対岸岩山中腹には、砦跡らしい廃墟が見える。レンガを下から積み重ねて作られたこの塔の内部には、二重の螺旋階段がある。外側レンガ上には、所々に青色タイルが残っており、以前は一面タイルが張られていたであろうと想像される。ミナレットは、回教寺

院の四方に建てられるもので、モスクを建てる余地などない狭谷に、一本建てられているのは不思議であった。

九日、午前中かかって山を越える。山は西に行くに従い高度を下げているのがはっきり見渡せる。山を下ると再びハリ・ルード川に出合う。川は赤紫色の山間を静かに流れる。夕方は涼しく、西の空は刻々と美しい色の変化を見せる。しかしこの時こそ焦らなければならない時である。早く泊る所を確保しなくてはならない。この夜も八時頃暗闇の中に、やっとタイマニ族のテントを見つける。夜、彼らから病気の子供を見てくれと頼まれる。素人が見ても、すぐ栄養失調と分かる症状である。薬を分けてやる。薬など何もならないことは分かっている。しかし彼らに、野菜・果物・卵・肉を食べさせろと忠告したところで何んになるというのだ。彼らの貧しい生活に同情する。しかし物質あふれる大都会のわれわれの生活の中にも、異次元の貧困があるのではないだろうか。繁栄の中の貧困感の方が、人間はより大きく感じるかも知れないと思う。

十日、ハリ・ルード川沿いの小道を下る。馬に乗った一人の男が、この辺りはよく強盗がでる。すでに近くの者が三回も襲われたので、二人で行こうと言う。二人で馬を進める。男はピストルを見せながら、これだけでは不安だと言う。しかし二人の間には、この男と一緒に行くと強盗に対し少しは安全なのか、この男も強盗なのか理解に苦しむような会話が続く。

昼過ぎ、シャラークよりの車道に出合う。この道は、十数年前梅棹氏が通ったところで、『モゴール族探検記』にでてくる道である。この先ヘラートまでは、日本人も通ったことがあり、少しは車も通ると思うと気が楽になる。

夜はホジェ・チシトの茶屋に泊る。おいしいナンを食べる。チャクチャラン出発以来たった二枚のナンと水だけであった。

十一日、周囲の山もかなり低くなってきた。暑さは増し、景色はますます単調になる。しかし一日に車と二、三台も出会い、心強い。

十二日、単調な景色の中、馬を進める。毎日午後から風が吹き、周囲を茶色にする。頭上だけに青空があり、てっぺんの抜けた薄茶色の大ドームの中にいるようである。

今宵の泊り場オベは、この行程中最大の村であった。梅棹氏の本にある温泉がここにあるものと思っていたが、そうではなくてがっかりした。

十三日、周囲の山は低くなり、砂漠状となる。きのうからハリ・ルード川は伏流となり、旅は終りに近いことを知る。午後は熱風に悩まされながらも、ヘラート真近さから、ヒマラヤのこと、そして次の計画のことなどを考える余裕がでてきた。

十四日、もう体はダルい。馬は、いくらムチを入れても反応しない。昼頃前方遥か遠くに、ぼんやりとヘラートの林を見る。午後は例の北からの砂まじりの熱風に悩まされる。南の空は茶

色のカーテンが張られているようだ。その上に幾筋も、竜巻が登っていく。

夕方ヘラート着。すぐにばくろうを捜して馬を売る。馬はもう使いものにならないからと、一二五〇アフガニにたたかれた。カーブルからはるばると一緒にやって来た馬だが、感傷に浸ってはいられない。それとともに、これ以上馬の世話に悩まされたくないという気持ちが強かった。

馬を売り終わると、残されたサドルバッグを肩に、重い足をひきずり夕方の雑沓の中に入って行った。

八〇〇キロ以上を乗り切った二十三日間の旅は、灼熱、飢え、渇き、単調、そして焦燥との闘いであった。旅は、出発時の未知なるものへの興奮と緊張が信じられない程、静かな終りを告げた。静かな旅の終末は、明日の心配と馬の世話のわずらわしさを取り去ってくれた。喜びを分かち合う相手がいないからか、とりわけ嬉しくはなかった。大きな満足に酔っているわけでもなかった。しかし次の計画に胸をふくらませたり、旅の想い出に浸るには、あまりにも疲れはてていた。

どうしてこうも劇的でないんだ。高笑いしたり泣きじゃくったりして、狂喜しないんだ。まあいいさ、この旅がドラマではなかったんだ。ドラマは旅ではなく、人生の方なんだ。

ランタン・ヒマール踏査行

梶　正彦

はじめに

ランタン・ヒマールは、カトマンズからもっとも近距離に位置し、他の山群に比べて比較的短期間のキャラバンで手軽に行かれる地域として、またそこには高度こそエベレスト・アンナプルナ・ダウラギリ山群にゆずるが、美しい峰々が未登のまま数多く存在している地域として、ライト・エクスペディションには恰好な山群である。また今日ではほとんど知り尽された感のあるネパール・ヒマラヤにあって、種々の政治的問題から入域が制限され、解明されていない部分の多い非常に興味深い地域でもある。

われわれ三名は、一九七一年ポスト・モンスーン期にこのランタン・ヒマールに入る機会を得、最奥部に位置するチベット国境上のティルマンのコルに立ち、この未踏峰の宝庫ランタン・ヒマールの美しい山々をつぶさに見る幸運に恵まれた。メンバーは次の通りである。

佐藤正敏（31歳）弘前大学山岳部OB
梶　正彦（25歳）上智大学山岳部OB
山田和夫（25歳）国際商科大学山岳部OB

一九七一年九月十日、われわれはかねてからの打ち合わせに従って、カトマンズに集合した。佐藤はパトラシ・ヒマールからダウラギリ北面を回った七五日間のトレッキングから、山田はプレ・モンスーン期のアンナプルナ南峰の後のアッサムへの旅から、梶は灼熱のアフガニスタンの砂漠の旅からであった。約束していたもう一名は、八月最上川におけるボート転覆事故により参加できず、残念であった。三人が集合した時点で早速協議し、われわれの金銭的・時間的制約を考慮に入れて、目標をランタン谷に決定した。ランタン・ヒマール最奥部に位置するランタン・リ（七二三九メートル）南西稜は容易であるとの情報と、最後の八〇〇〇メートル峰であったゴザインタンを間近に見たいという強い希望もあった。

出発を十日後と決定してからは忙しくなった。許可に関しては、アンナプルナ南峰隊々長であった山田は、遠征隊付リエゾン・オフィサー発狂事件による登山中止後、ネパール外務省から一ヶ年有効のネパール全山域登山許可証を与えられており、

それをもとに簡単に片付いた。われわれ三名は、今回のランタン行以外の各自の目的を持って日本を出て来たために、個人用装備を中心とした装備の一部と薬品を除いた一切をカトマンズで調達しなければならなかった。装備はプレ・モンスーンのエベレスト国際隊の残骸を中心にシェルパから、シェルパ用装備すべてと登攀具の一部及びテントを購入した。食糧は一切をバザールから調達したが、味の単調さおよび重量が重く長期間の山行と高度の影響を考えると条件はかなり悪いものにならざるをえなかった。シェルパ雇用に関しては、プレ・モンスーンに比べて遠征隊の数が少なく、いいシェルパを比較的簡単にまた安い賃金で雇うことができた。このようにわれわれの準備は決して十分でなく、また満足のいくものでもなかった。しかし、これからは今までのように十二分に組織され、日本で準備を整えた遠征隊よりも、われわれのような小遠征隊が数多く出かけてくることが予想される。われわれの、限られた人員と準備でどれだけのことができるかは、きっとこれからの参考になるであろうという気負いがあった。

キャラバン

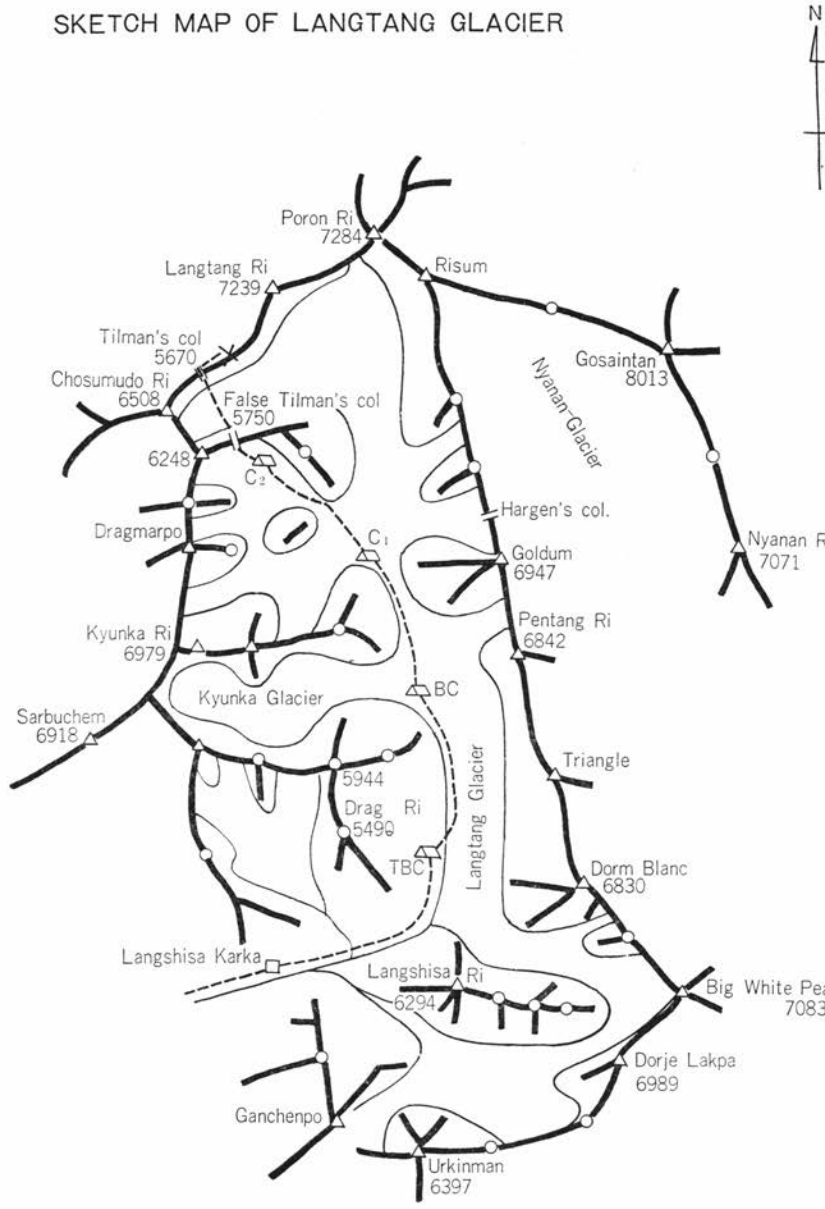
三名という少人数であったが、各自の経験から効率よく準備を進め十日で完了した。カトマンズの空は、モンスーン明けが真近いことを知らせるように、一段と青味を増し、雲は白くなってきた。

九月二十一日、シェルパ二名、キッチンボーイ一名、シェルパポーター十八名と共に、チャーターしたトラックでカトマンズを後にし、キャラバン出発地トリスリ・バザールへと向かう。カトマンズ郊外カカニの丘では、楽しみにしていたヒマラヤの展望は、残念ながら午後の雲の中であった。

九月二十二日、トリスリ・バザールよりキャラバン開始。トリスリ川左岸沿いに登降を繰り返し、四日間でシャブルベンシ着。この四日間は雨の中ヒルに悩まされながらのキャラバンであった。シャブルベンシよりランタン・コーラに入り二日でランタン村着。大岩壁直下のなかなか大きな村である。カトマンズから連れて行ったシェルパポーターは、ランタン村までにすべて帰ってしまった。ランタン氷河上のボッカを楽にするために、カトマンズからトラックをチャーターしてまで連れて来た彼らであったが、その目算はすっかり外れてしまった。ランタン村までのキャラバンで、シェルパポーターの贅沢さは、タマンポーターに比較してかなりのものだった。カトマンズで都会生活に慣れ切ったシェルパ達は、もう日当一〇ルピーのローカルポーターには向かなくなってしまっているのであろうか。

ランタン村より三時間程で、ランタン・リルン（七二四五メートル）の真下にある小村キャンジン・ゴンパ（三八〇一メートル）に着く。ここから見上げるランタン・リルンおよびキム

SKETCH MAP OF LANGTANG GLACIER



シュンは圧倒的である。ランタン谷の奥にはガンチェンポの均整とれた美しい姿が望まれる。カブの取り入れに忙しいこの村には、スイス人の建てたチーズ工場があり、現在はネパール人だけでチーズとバターを製造している。キャンジン・ゴンパからランタン・コーラ沿いにのぼるとガンチェンポの麓に達する。コーラが左に曲るとドーム・ブラン（六八三〇メートル）、ランシサ・リ（六二九四メートル）が望まれる。これらの山々が望まれる静かな美しい谷間に無人のランシサ・カルカ（四〇八〇メートル）がある。ここに至る道は、ティルマンの言った「世界一美しい谷」の名に相応しい景色を満喫させてくれる。

トリスリ・バザールを出発して九日目に、ランシサ・カルカより、ランタン谷最奥のカルカを過ぎ、パングリ・ゴルダムに達し、辺りに仮BCを建設。ポーター三人が残り、その他のポーターは雨の中を下っていった。パングリ・ゴルダムは標高四四八〇メートル、ランタン氷河右岸のサイド・モレーン上にあり、ドラグ・リ（五四九〇メートル）の大岩壁直下にある小さな浅い池である。

十月一日、曇後雨。われわれ三名、シェルパ三名、ポーター三名は、仮BCからサイド・モレーンを一時間程たどり、モレーンにおおわれたランタン氷河に降り立つ。ガラガラのモレーンに悩まされながらも、左手よりキュンカ氷河が出合う地点をBC予定地として荷物をデポする。仮BCへの帰路は雨で見通しが全くきかない。カトマンズ出発以来、天気は全くよくない。今年のプレ・モンスーンは「七〇年振りの悪天候」といわれたが、ポスト・モンスーンもそれを引き継いでいるのであろうかと不安になる。

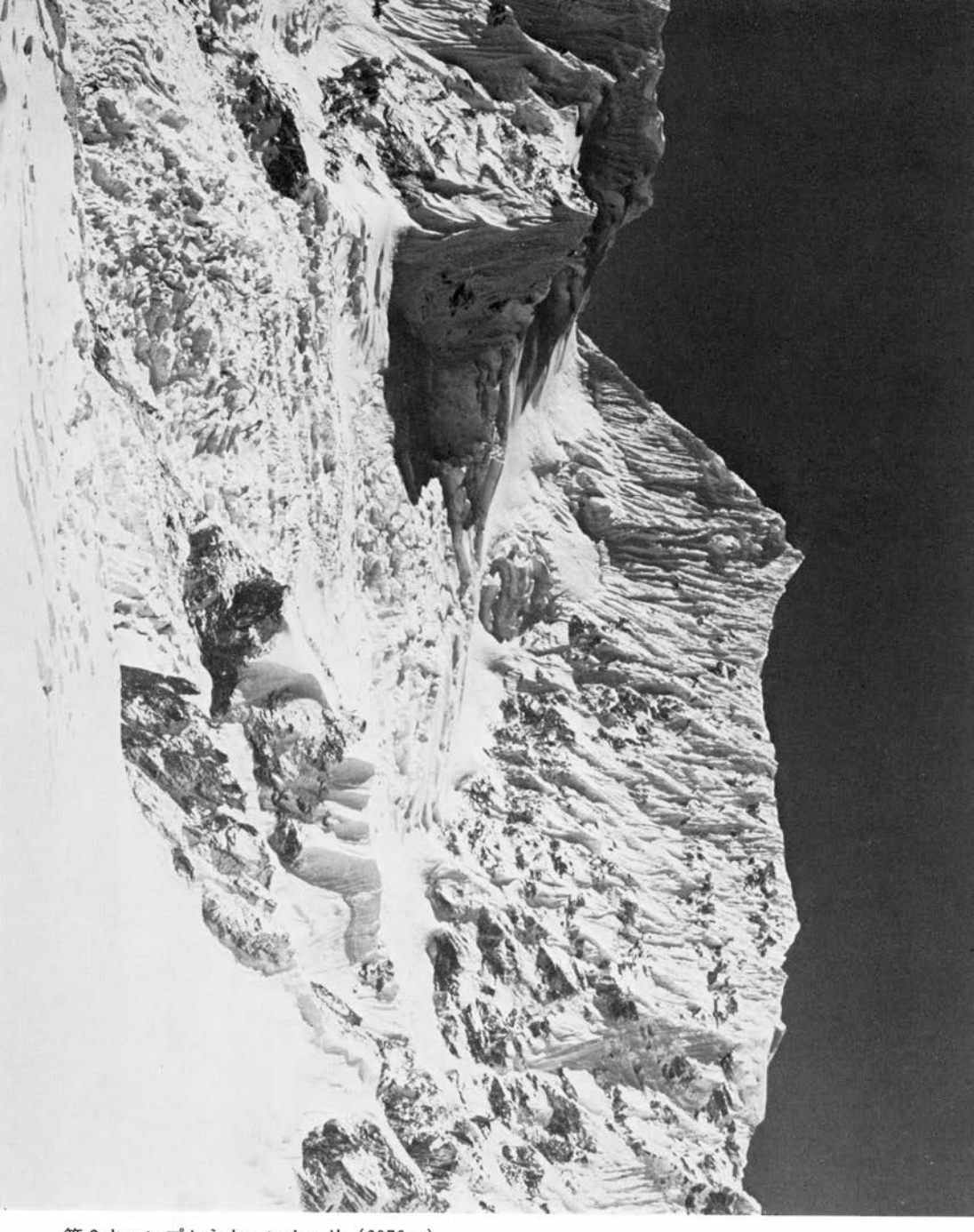
十月二日、雪、停滞。

十月三日、曇、昨日の積雪は約五センチあったが、ベタ雪であったために、モレーン上は濡れているだけである。BC予定地までボッカ。ランタン氷河のモレーンは、まだ人があまり入っていなく踏跡もないことから、クンブ氷河などに比しても格段に歩きにくいとのことであり、先が思いやられる。

十月四日、曇。必要物資はかなり運べたのでBC入り。残り物資の荷上げはシェルパ二名とポーターにあたらせることにする。目的とするランタン・リは氷河の最奥に遠く望まれ、仮BC・BC間の悪いモレーンを考えると先行不安である。われわれのパーティにとってはあまりにも遠過ぎると思われるが、ともかくできる限り先に進むことを考える。

偵察活動開始

十月五日、晴後雨。早朝は快晴でランタン氷河の奥に遠くランタン・リ、右手前にはあまり雪を付けないゴルダム（六九四七メートル）、キュンカ氷河の奥にはキュンカ・リ（六九七九メートル）、その東尾根上の約六五〇〇メートルの峰が望まれ



第2キャンプからキュンカ・リ（6979m）
View of Kyunka Ri (6979m) from Camp 2 — Langtang Himal (By M. Kaji)

←— 第2キャンプ上方からゴサインタン（8013m）
View of Gosainthan (8013m) from above Camp 2 (By M. Kaji)

ランタン氷河からランタン・リ
Langtang Ri (7239m) seen from Langtang Glacier (By M. Kaji)

ランタン・リの西南尾根からの展望、左から右へゴルダム、ペンタン・リ及びトライアングル⟶
View from the south-west ridge of Langtang Ri (7239m). Showing from left to right Goldum (6947m). Pentang Ri (6842m) and Triangle. (By M. Kaji)

る。BCの東側はゴルダムからドーム・ブランに延びる稜線から、ほぼ垂直に約二〇〇〇メートル落ち込んでいる壁が連なり、日が射し込むのは遅い。

心配したBCから先のモレーンも、仮BC・BC間に比べたら歩き易い。右手よりランタン氷河に落ち込む、ゴルダムとペンタン・リ（六八四二メートル）のコルからの急なアイス・フォールを見ながら進む。キュンカ・リとドラグマルポ間のコルからの小さな無名氷河とランタン氷河本流との合流点付近のモレーン上をC1予定地（標高約五〇〇〇メートル）として荷物をデポする。

十月六日、曇後雪。梶、山田、シェルパ一名C1入り。シェルパ二名、ポーター一名C1までボッカ、降雪の中をBCへ下る。

十月七日、晴後曇。C1はモレーンの上であるが、ここでは岩一つ下は氷である。ここからの展望はあまりよくないが、キュンカ・リとランタン・リの頂上部分が望まれる。ランタン氷河本流は右に曲って行くようである。

梶、上田、シェルパ一名上部偵察。比較的歩き易くなった氷河本流のモレーンを一時間程つめ、右岸のガレを登り、小さなアイス・フォール基部に達する。C1手前より見たこのアイス・フォールは幅が広く、突破は困難に思われたが、右端部から簡単に突破でき、雪田に達せられた。佐藤、シェルパ二名、ポーター一名C1入り。

十月八日、晴後曇。山田、シェルパ一名ニセのティルマンのコル手前C2予定地まで偵察。佐藤、梶、シェルパ一名C1西側にある無名氷河をつめ、キュンカ・リとドラグマルポのコルを目指すも、雲が出て展望は得られぬと判断し、アイス・フォール手前標高約五三〇〇メートルで引き返す。ここからの展望はすばらしく、ハーゲンのコルの奥にゴザインタン（八〇一三メートル）を確認する。八〇〇〇メートル峰にしては意外と思える小さな山容である。ランタン氷河本流は、C1の少し上方でやや東に方向を変える。この日の偵察で、われわれの持参した『岳人』付録二十五万分の一概念図は、基本的に正確であることを確認した。

十月九日、雪、停滞。

十月十日、晴後曇。梶、シェルパ三名C2予定地までボッカ。

十月十一日。梶、シェルパ一名C2（標高約五六〇〇メートル）入り。C2からの展望は全くすばらしかった。北にニセのティルマンのコル、チョスムド・リからドラグマルポに連なる小さな峰々。美しくヒマラヤヒダを付けたキュンカ・リ、ランシサ・リ、ドルジェ・ラクパ、ビッグ・ホワイト・ピーク、ドーム・ブラン、ペンタン・リ、ゴルダム等である。

十月十二日、晴後曇。梶、シェルパ一名C2より四〇分程の登りでニセのコルに達し、初めて本物のティルマンのコルを望

む。ここからはランタン・リ南西稜の全容が望まれるが、ティルマンのコルよりの下半分に比べて上部は相当手強いナイフエッジのようである。一時間程でランタン氷河源頭の雪田を横切り、ティルマンのコルに達する。コルから北側の展望は、両側の尾根が迫っており、プレプー氷河対岸の山々しか見ることはできない。チベット側の山々は高度もかなり低く、南側に見える山々に比べ雪の付き方も少ない。コルのチベット側には小さな雪庇が張り出しており、プレプー氷河に鋭く切れ落ちている。昔チベット人がこのコルをヤクを連れて、チベットより越え、今のランタン村に住み着いたという話があるが、全く考えられない。一九四九年ティルマンはこのコルにケルンを積み、五五年ランベールがそのケルンを確認したといわれるが、コルにはケルンが積めるような一つの露岩もなかった。プレとポストの積雪量の差によるものであろうか。

たぶんわれわれがティルマンのコルに足跡を残した四度目であろうなどと考えながら、いよいよランタン・リ南西稜に取り付く。二〇〇メートル程登った所にクレバスがある。この稜線上のクレバスをチベット側をまいて越える。この上部標高約六〇〇〇メートルの地点をC3予定地に決める。佐藤、山田、シェルパ二名C2入り。

十月十三日、雪、停滞。昨夕からストーブ四台すべての調子が悪く、これ以上C2にいられないため、下山を決定する。ここまでボッカをし、これからという時の下山決定はつらかった。原因は精製の悪い石油と考えられるが、ガソリン混入をすればこれ程悪い結果にもならなかったかも知れない。

十月十四日、快晴。佐藤、山田、シェルパ一名、ティルマンのコルへ。梶、C2右手、ニセコルから東に派生する小岩稜(約五八〇〇メートル)に登り、ランタン氷河屈曲点付近の写真撮影。

昨日の降雪のため小さな表層雪崩が頻発する。この時期の悪天候は理解に苦しむ。夕方、今山行初めて、夕日に輝やく山々を見る。

十月十五日、晴後雪。朝からいやな雲が流れている。梶、ニセコルに登り写真撮影。全員降雪の中BCに下る。

十月十六日、雪、停滞。

十月十七日、雪、停滞。

十月十八日、三日三晩降り続いた雪は、二・五メートル以上の積雪をもたらした。食糧、燃料の不足が心配され、降雪中であったが下山を決定。ラッセルを始めたとたん頭までもぐった。それを見たとたんに、シェルパはススリ泣きを始めた。四五〇〇メートルの高度で、胸まで、時には頭まですっぽりもぐっての粉雪のラッセルでは、前進は全く遅々としたものだった。ランタン氷河左岸、ペンタン・リとドーム・ブラン間の高度差二〇〇〇メートルの岩壁では常に雪崩れており、その音が見通し

のきかないランタン谷に不気味にこだまする。無雪状態ですら苦労したモレーンは、この降雪後では通れず、雪崩を心配しながらも右岸のトラバースを続けた。しかし、さしもの時期はずれの降雪も夕方には止み、谷は夕陽にダイダイ色に輝やいた。一〇時間ラッセルしても、ボッカしてさえ三〇分で来られる距離しか進めなかった。

十月十九日、快晴。終日のラッセルで仮BC手前まで進む。ランタン・リが雪煙をあげているのが遠く望まれる。氷河の中は暖かく、終日雪崩の轟音がこだました。

十月二十日、快晴。前方にランシサ・リ、ガンチェンポを見ながらのラッセル。雪崩の危険は去り、ラッセルは腰位になったが、全員かなり疲労している。真暗闇の中、ランシサ・カルカ上部、ランタン谷最奥のキシュンプ・カルカにたどり着く。ここで四人の日本女性トレッカーに暖かいもてなしを受けた。

この後、シェルパを食糧買い出しにランタン村まで下らせ、ランタン村よりのポーター三名と共にC1、BCを撤収した。帰途はランシサ・カルカから六日間のキャラバンでトリスリ・バザール着。なつかしのカトマンズに戻ったのは十一月四日であった。

最後に

われわれの第一目標であったランタン・リ試登は南西稜上、標高約六〇〇〇メートル(C3予定地)に達したのみであった。敗退の直接原因は、C2におけるストーブの不調であった。一台でも好調なストーブがあったなら、われわれは試登を続け、時期はずれの大降雪に窮地に追い込まれていたであろう。C2撤収決定後、キュンカ・リとドラグマルポ間のコル、キュンカ氷河源流の二地点でランタン氷河右岸主稜線に立ち、解明されていない部分の多いランタン氷河とチョスムド氷河を分けるこの稜線の踏査を行なうという計画は、降雪により放棄せざるを得なくなった。ランタン・ヒマールに関しては数年前から、日本山岳協会のシンポジュウム等において、「ランタン谷の解明」として研究が進められ、特にジュガール・ヒマールとの境界部分について著しい成果をあげた。そして現在では氷河右岸の一部を除いて、ほぼその全容が明らかにされた。もし、われわれが右岸稜線上に立っていれば、不明な部分の解明に少しでも役立てたことを考えると、残念である。

三名という少人数、十分でない装備・食糧、そして時期はずれの大降雪というハプニングを考えると、非力なわれわれとしてはまずまず満足いく山行であった。これは各自の今回以前の経験を、それぞれが認識した結果であると考えている。以前に全く山行を共にしたことのない者の、ヒマラヤ行としての危険は十分に認識して行動したつもりであったが、幸いにもその点での問題は全く表面化しなかった。チームとしては全くまとま

っていたが、最後に特にリーダーを定めなかったことによる指揮権の問題が起ってしまった。

毎年二十隊近くの遠征隊が入るようになったネパール・ヒマラヤであるが、彼らが残していく装備を全面的にあてにしての山行を組むことは、不可能のようである。しかし毎年遠征隊がカトマンズに残していく装備はかなりの量である。これが十二分に役立つようなシステムを考え出すことは、現在ネパールに出かける日本人登山家の数を考えると、できない相談ではないと思われる。われわれのように日本食を全く持っていなかったのは希れであろうが、現状では、カトマンズで調達できる食糧だけで長期的に、高所で行動するのは難しい。味の多様化、軽量化を計ることは甚だ困難だからである。

山岳　第六十六年（一九七一年）

進蔵日誌（下）　成田安輝
エベレスト（一九七〇年）　大塚博美
マカルー登頂（東南稜初登攀）　原真
ダウラギリ登頂（一九七〇年秋）　浅見正夫
P29登頂（一九七〇年秋）　川田哲二
チューレン・ヒマール登頂一九七〇年　住吉仙也
ダウラギリVI峰登頂一九七〇年　静岡大学山岳会
アンナプルナIII峰登頂（一九七〇年）　野村哲也
コー・イ・バンダコー登頂（一九七〇年）　真仁田美智子
コー・イ・バガール登頂（一九七〇年）　一瀬義典
ビナウイ谷登山記　中瀬司
カンジロバ・ヒマール主峰初登頂一九七〇年　木内義忠
ヒマラヤのみえる散歩道　松下征文
サラグラール周辺の山座同定　常慶和久
追悼・図書紹介・会務報告・英文梗概　神原達
A5判　二八四頁・写真六二葉・地図図版四十面・定価二三〇〇円　宮森常雄

バウダ・ピーク登頂（一九七一年）

愛知教育大学山岳会

一、はじめに

ネパール・ヒマラヤ登山が禁止されていた一九六八年春、本会海外登山研究会で、一九七〇年に開通するアジア・ハイウェイの自動車による調査旅行とヒンズー・クシュあるいはパンジャブ・ヒマラヤでの登山計画がかなり具体化していた。しかし、この時点でネパール・ヒマラヤの登山が解禁されるらしいとのニュースが入り、次いで三十八峰の解禁が発表された。それらのうち、今までの登山計画をネパール・ヒマラヤに変更した場合について種々の面より検討した結果、

1、小パーティで登頂可能な未登峯。(註1)

2、アプローチが短かい。

の二点より、ラムジュン・ヒマールとバウダ・ピークがリストアップされ、詳細な検討の結果、バウダ・ピークに決定された（後になって、ラムジュン・ヒマールはネパールの事情によって許可されないことを知った）。

さらに、バウダ・ピーク登山終了後、アジア・ハイウェイ、A1ルート沿線での学術調査および登山を同メンバーで実施するため、インドのモンスーン、イラン・トルコでの積雪を避けるため、一九七一年プレ・モンスーンに計画を実施することにし、一九六九年十一月、ネパール政府に登山申請をし、本格的な準備を始めた。

隊の編成は次のとおり。

(一) 隊員(註2)

仲井 豊（37歳・隊長）、花井俊彦（36歳・登攀隊長）、伊藤顕正（35歳）、杉浦勝美（26歳）、徳島和男（25歳）

(二) シェルパ

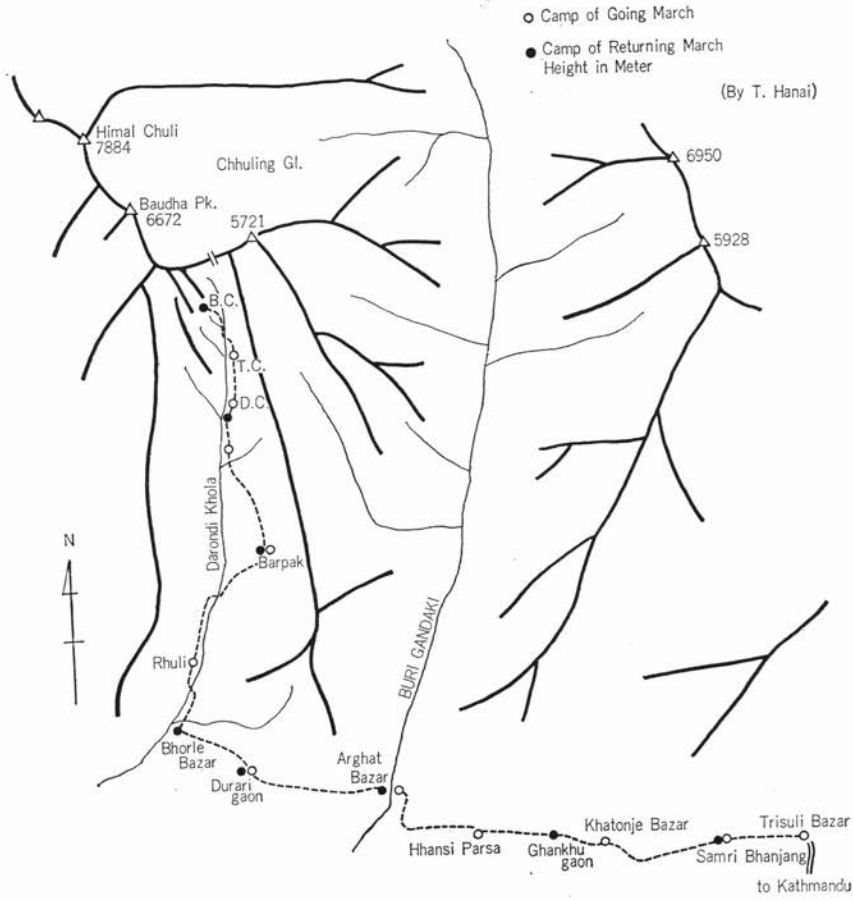
カルマ（36歳・サーダー）、プルキパ（48歳・H・A・P）、ジャンブー（25歳・同）、ミンマ（29歳・同）、ニマノルブ（22歳・同）、アンツェリン（40歳・クック）、サンゲ（28歳・キッチン・ボーイ）、ラルバハドール（30歳・メイル・ランナー）

(三) リエゾン・オフィサー

スリヤ・プラサド・シャルマ（26歳・交通警察・警視補）

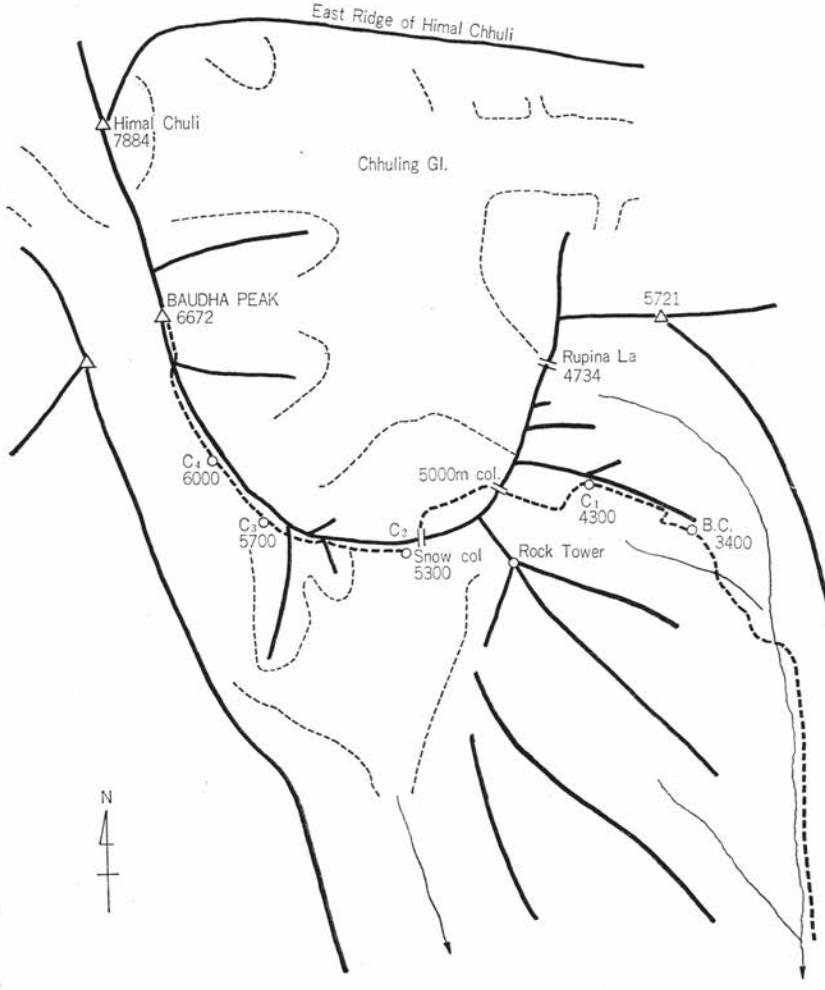
二、ベース・キャンプ設営

Approach March Route to Baudha Peak



Sketch Map of Baudha Peak

Height in Meter
(By T.Hanai)

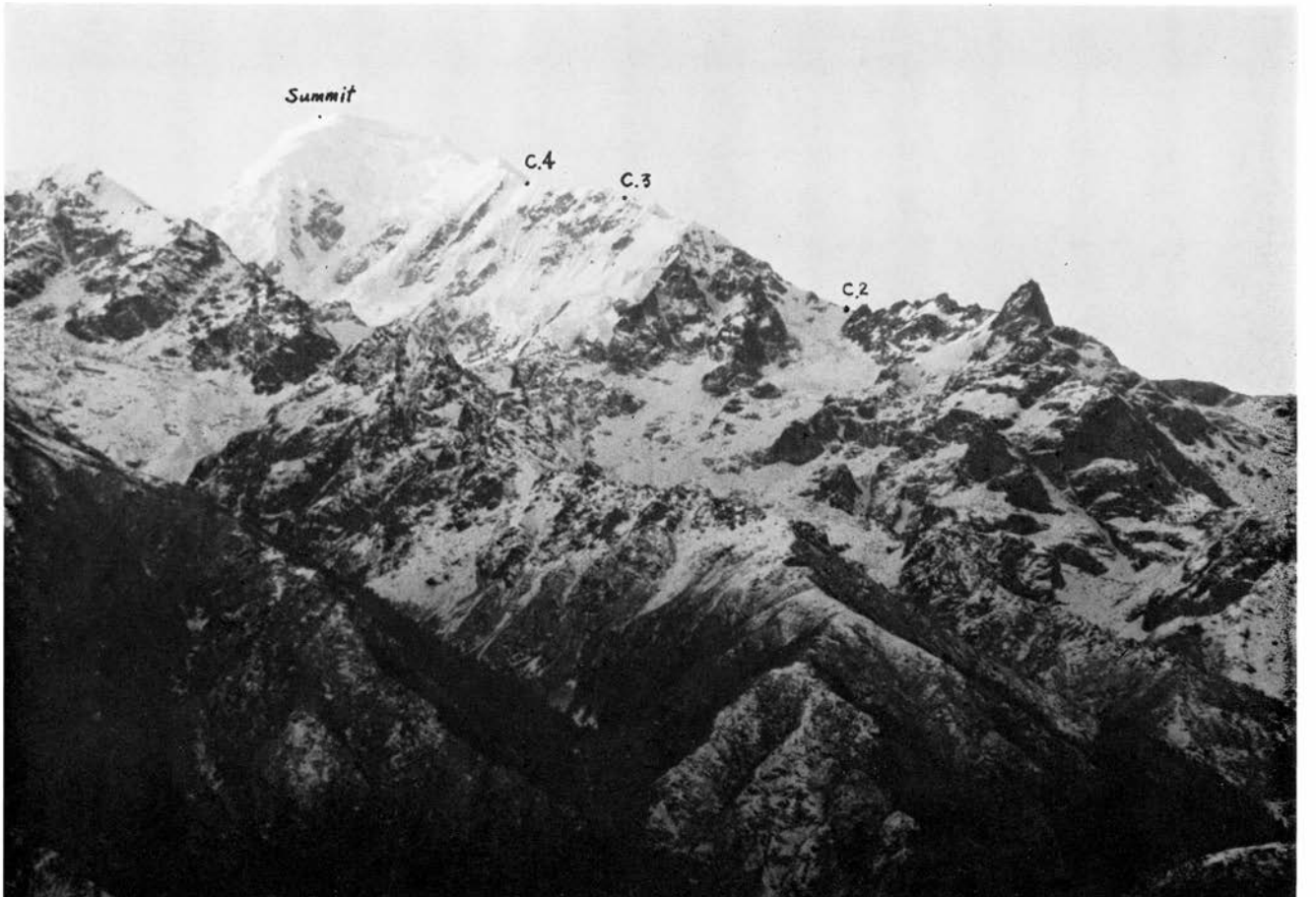


二月二十三日、本隊三名が空路カトマンズに着き、先発隊二名と合流して全員集結した。すでに、先発隊によって、昨年末名古屋港より発送した隊荷は、カルカッタから陸送されカトマンズで通関を終ってホテルの倉庫に積み上げられていた。ヒマラヤン・ソサエティを通じて、シェルパ、ポーターも正式に契約されており、あとは隊長による関係機関へのあいさつ、若干の食糧・不足装備の購入を残すだけだった。

二月二十七日、トラックでトリスリ・バザールに至り、二十八日より徒歩によるアプローチ・マーチが、七十八名のポーターと共に始まった。アルガト・バザールを経由し、バウダ・ピークを正面に見るダロンディ・コーラ最奥の部落バルパックに何のトラブルもなく三月六日に着いた。しかし、時期が早いために計画段階よりおそれていたアプローチでの積雪が、ここで現実の問題となった。前日降った雨は二〇〇〇メートル付近より上では雪で、まだとけきらない冬の雪の上に新雪が積もり、はだしのカトマンズ・ポーターは、これ以上進めないためポーターを変えなければならなくなった。裕福でトウモロコシの播種期にあたっているこの部落では、多数のポーターが一度に得られないため、仮ベース・キャンプ設営隊と隊荷輸送隊に分け、順次荷を運ぶことになり、三月八日、花井、杉浦、シェルパ二名、ポーター一〇名、三月九日、シェルパ一名、ポーター十七名、三月十一日、仲井、伊藤、徳島および残りの全シェルパ、ポーター三十四名の三隊に分かれてバルパックを出発した。先発隊は途中一泊の後、深雪に悩まされたが、三〇〇〇メートル地点にデポジット・キャンプを設営し、三月十一日に森林帯のなかの深雪をラッセルしてベース・キャンプ地を求めた。ベース・キャンプ（以下BCと略す）は、当初、ダロンディ・コーラより東南稜スノー・コルへ直接続く氷河末端四五〇〇メートル付近を計画していたが、ダロンディ・コーラとの合流点が蛇行した深いゴルジュになっており、深雪のため、ポーターの通過不能と判断し、変更を余儀なくされた。三月十二日、全隊荷をデポジット・キャンプに輸送し終ったが、大部分のポーターは、深雪のためここから帰り、僅か五名が残るのみとなった。三月十三日、先に予定したダロンディ・コーラ最上流の支谷三四〇〇メートル地点をBC地に決定したが、計画より約一〇〇〇メートル低く、キャンプ数が増すという決定的な欠点を持っていた。以後、中継キャンプを設けて、デポジット・キャンプから荷上げをする一方、三月十五日、仮BCを設営し、花井ら三隊員とシェルパ一名が入り上部へのルートをひらき、一方、残り全員でBCへの荷上げをするという二面作戦を展開した。

三月十八日、花井、徳島は八方尾根によく似た尾根より東南稜支稜上四三〇〇メートルにC1を設営し、複雑な支稜側稜をぬって四六〇〇メートルまでルートを開いた。

三月十九日、全隊荷の仮BCへの輸送を終わった。C1より



バルパックからバウダ・ピークをのぞむ
Baudha Peak (6672m) seen from Barpak village. Base Camp and Camp 1 behind the rocky ridge (By T. Hanai)

C２へのトラバース・ルート
Traverse route to Camp 2 — Baudha Peak (By T. Hanai)

Ｃ４から見たバウダ・ピーク。背景はヒマル・チュリ
Baudha Peak (6672m) seen from Camp 4(6000m), Himal Chuli (7884m) in background. (By T. Hanai)

C２，C３間の岩稜を登る
Climbing up the rocky ridge between Camps 2 and 3－Baudha Peak.
(By T. Hanai)

下りた花井らも合流し、全員でBC開きをし、続く二十、二十一の両日は全員BCで休養した。

三、登　頂

三月二十二日、既に設営されているC1へ向け荷上げが開始され、杉浦、徳島がC1に入った。翌日、杉浦らはC2へのルートを求め主稜よりほぼ真東に派生する平行した支稜の間の広い雪原より主稜上の五〇〇〇メートル・コルに達し主稜を偵察したが、主稜は岩稜になっており、ルートとしては適わしくないと判断した。二十四日、前日午後より頭痛を訴えた杉浦をBCに下ろし、前日C1入りした花井、伊藤が加わって主稜ルートを伸ばしたが、C2予定地のスノー・コルへの岩稜の下りが極端に悪く、担荷しての通行が不能のためこのルートを放棄し、主稜の五〇〇〇メートル・コルより、主稜チューリン氷河側を主稜岩壁直下をほぼ水平にトラバースして、雪のクーロアールを約二〇〇メートル直上するルートを開くことにした。C1からでは時間的ロスが多いため、二十五日、五〇〇〇メートル・コルに仮C2を設営し、二十七日、C2予定地のスノー・コルへのルートをひらいたが、トラバース末端およびクーロアールに三〇〇メートルの固定ロープをはった。このルートは、すぐ上部が主稜岩壁のため降雪時は常にチリ雪崩に襲われた。この頃より毎日午前中は晴天、午後は霧か雪で、チリ雪崩の洗礼を受けたが、他にルートが求められないので、このルートの安全性をいかに高めるかに苦心した。

三月二十九日、五三〇〇メートルのスノー・コルにC2を設営し、隊員、シェルパ各二名が入った。スノー・コルより上部は、C4上部の六二〇〇メートルまで、全ルート中最悪で常に緊張を要求されるルートだった。C2より約一〇〇メートルの急な雪壁を登ると、C3まで急な雪壁、小岩峰を混じえた雪、氷、岩のナイフ・エッジが交互に続き、北側はチューリン氷河、南側はダロンディ・コーラ、ドルディ・コーラの支流の氷河まですっぱり切れ落ちていた。主稜の悪さに悩まされてルート工作に手間どったが、二ヵ所の縄梯子を含めて、この間の全ルートに固定ロープを張って安全をはかった。

このルートを、カルマ（一九七〇年、J・A・C東海支部マカルー隊に参加）は「マカルー東南稜を小さくしたルートだ」と、ジャンブー（一九七〇年、J・A・Cエベレスト隊に参加）は「エベレストのノーマル・ルート以上だ」と評していた。

四月六日、キャンプ適地がなく、その上ルートが悪くて時間がかかるので、五七〇〇メートルの氷稜を削り拡げてC3を設営した。

四月十一日、C3が低いので、登頂の確実性を増すため上部にキャンプ地を求め、氷と雪のナイフ・エッジが続く極端なやせ尾根のなかの唯一の平坦な小台地である六〇〇〇メートル地

点にC4を設営して、杉浦、徳島、カルマが入った。この時点では、隊長を除く全隊員・全シェルパが上部キャンプに移っていたので、隊長がC1に入り、BC、C1間はキッチン・ボーイ、メイル・ランナーが荷上げに従事した。

四月十二日、無風、霧濃し。第一登頂隊の杉浦、徳島、カルマは、六時四十五分C4を出発し、前日あるかぎりのロープを使い六一五〇メートルまで開いたルートに導かれて、氷のナイフ・エッジを登った。しかし、ナイフ・エッジも六二〇〇メートルで終り、あとは頂上まで広い雪稜が大きな階段状に連なり、雪に被われた円い頂上に続いていた。第一次登頂隊の三名は十三時五分最高点に達したが、依然として霧につつまれて視界がきかないため、高度計の示度とそれから先は尾根が急に低くなることから頂上と判断した。トランシーバーが故障で持参しなかったため、連絡はできなかった。霧が晴れるのを二十分程待ったが、はっきりしないため下山し始めた。その後、急激に晴れ、十四時すぎにC4に入っていた花井らに頂上直下を下山しているのを望見され、十七時五分C4に帰着し、予定通りC3に十八時十五分帰着した。

四月十三日、薄明の五時三十分、花井、プルキパ、ジャンブーの第二登頂隊はC4を出発し、昨日とはうって変った晴天のなかを十一時登頂。堅雪上に残されたクランポンの跡により、昨日の登頂を確認し、四〇分滞在の後下山し、十五時三十分C4に帰着した。この日、C3、C2はそれぞれ滞在していたメンバーがBCまで撤収した。

四月十四日、前夜半より悪化し始めた天候の中をC4を撤収して下山中の花井らは、C2のすぐ上部で雷を伴った猛烈なブリザードに襲われ、C2下部のクーロアールからトラバースに移る地点で、霧に視界をとざされた上、チリ雪崩が頻発し、腰から胸までの深さのラッセルとなったので、岩壁に守られてビバークをし、十五日、BCに帰着した。

四月十六、十七、十八の三日間、湿雪に悩まされながらポーターを待ち、十九日BCを撤収した。入山時と同ルートで四月二十六日夕刻カトマンズに帰着した。

四、西アジア調査旅行

五月三十日、日本から別送したジープでアジア・ハイウェイ・A1ルートの調査旅行に出発した。インド・パキスタン・アフガニスタン・イラン・トルコの各国を通過し、七月二十五日、イスタンブールで全行程約一三〇〇〇キロの踏査を終えた。

この間、七月九日、イランでタクト・イ・スレイマン（四六五〇メートル）に仲井、花井、伊藤が、七月二十一日、トルコでエルジャス（三九一六メートル）に花井、伊藤が、それぞれ現地人一名とともに登頂した。

（花井俊彦　記）

（註1）計画段階では未登峯であったが、一九七〇年五月二日、慶応大学隊が東稜より初登頂した。

（註2）他に、伊藤紀道、井上茂樹が予定されていたが、家族の交通事故、病状悪化のため参加しなかったが、出発直前のため隊員補充が不能だった。

山岳　第六十五年（一九七〇年）

進蔵日誌（上）　成田　安輝
グルジャ・ヒマール登頂（一九六九年）　薬師　義美
モンゴル・ハルヒラー連峰　東京外国語大学山岳会
ワハン・イスムルグ谷左俣　広島大学医学部山岳会
冬季アイガー北壁直登、同下降（一九七〇年）　三羽　勝
南極点に立って　村山　雅美
ウシバ南峰西壁登攀（一九六八年）　塚本　珪一
レーニン峰登頂（一九六九年）　松本　龍雄
P29東面（一九六九年）　玉井　康雄
大平晟メモ　渡辺　真一
エベレスト第一次偵察（一九六九年春）　藤田　佳宏
エベレスト第二次偵察（一九六九年秋）　宮下　秀樹
マカルー調査隊（一九六九年）　日本山岳会東海支部　松浦正司
アイガー北壁新直登ルートの開拓（一九六九年）　加藤　滝男
ヒンズー・ラジ山脈コーヨー・ゾム登頂（一九六九年）　小笠原重篤
ヒム・ゾム登頂（一九六九年）　藤井信一郎
バンジャブ・ヒマラヤ（一九六九年）　梶　正彦
最近のブータン事情をみる　小方　全弘
ルケニア西稜登攀とスティール峰への縦走　東北大学山岳部
ネパールの気候に関する覚え書き　東北大学山の会　山田　知充
海外登山年表一九六九年（玉井康雄・中島寛編）
追悼・図書紹介・会務報告・英文梗概
A5判三三六頁・写真七一葉・図版三〇面・定価二〇〇〇円

ティリチ・ミール登頂（一九七一年）

増江俊三

はじめに

われわれがティリチ・ミール（七七〇八メートル）をディルゴル氷河から登頂しようと決めたのは、その二年前、隊員の津田文夫が単独調査に基づいてディルゴル氷河を、われわれに紹介したことに始まる。

われわれはこれを基に一九七〇年十月、在日パキスタン大使館へ登山申請書を提出、その許可を待ったが、翌一九七一年三月末、ようやくにして許可が下り、許可書を入手した。

しかし十六名の申請に対し、六名から不参加を表明されるに及び、われわれの計画は出発点に帰らざるを得ず、その結果、隊員十名に追加メンバー四名を加え、四月十五日、在日パ大使館に変更申請書を提出、十四名で出発準備を進める。五月十五日、出発の二日前になって、変更申請に対する許可を入手するも、十名のみ許可する、追加四名は不許可（日時がないため審査不能と云う理由らしい）という内容のため、われわれはやむなく隊をふたつに分け、四名はヒンズー・クシュ調査隊とし、装備・食糧はチトラルで分けることとし、五月十七日全員羽田を出発、ボンベイ、デリー、カーブルを経て、五月二十日、西パキスタンの首都ラワルピンディに到着した。

ティリチ・ミール登山隊の隊員は次のとおり。

増江俊三（38歳・隊長）、石田健（39歳・渉外）、津田文夫（33歳・渉外・医療）、沢村真治（31歳・装備）、田中嘉明（27歳・装備）、山岸幸寛（26歳・食糧）、若宮昇（24歳・装備）、宮波正行（24歳・食糧）、岡本明男（23歳・会計）、中川博人（22歳・記録）

リエゾン・オフィサーはムハマッド・ディーン大尉（26歳）。他コック一名、メールランナー二名。

調査隊の隊員は次のとおりで、ディルゴル氷河の支流ゴシャネル氷河の調査活動を行なった。

長田和己（39歳・隊長）、西公一郎（30歳・会計・装備）、鈴木尚（27歳・医療）、中野卓夫（22歳・食糧）

二十八日、パキスタン外務省でリエゾン・オフィサーを紹介され、三十日、日本から空輸した一トンの荷物と、現地で集荷した二トンの荷物、計三トンの荷物をトラックに積み、ラワルピンディを出発した。

天候が不順なため、荷物の空輸にあたって、PIA（パキスタン航空）の確約が得られず、ペシャワールで一日待機したが、より安全な方法として隊員、荷物とも陸路をとることとし、六月一日、トラック、マイクロ・バスに乗り出発。

道路に横たわる残雪がようやく切り開かれたばかりのロワライ峠を越え、翌六月二日、チトラルに入る。

キャラバン

チトラルでは、旧王族のブルハンディーン氏にすっかりお世話になり、追加購入の燃料と共に全装備および隊員をジープでショゴールまで送り、ブルハンディーン氏のお力添えとリエゾン・オフィサーの骨折りによってポーター六十四名を雇用、ポリス五名の保護の下に、キャラバンが開始された。

炎熱下の中のキャラバンでは、村々はまさにオアシス、樹蔭での休息にほっとする。ムジグラム、アルカリと進み、ここでアルカリ河と分かれ、ディルゴルにと入る。十日、大モレーン帯を登り、ディルゴル氷河の真中の台地にB・Cを設けた。

キャラバンはリエゾン・オフィサーの責任の下にスムーズに進められ、われわれにとっては非常に楽しいキャラバンであった。リエゾン・オフィサーは非常に責任感の強い軍人で、少々口うるさい事があったが、設営が終ると、「これからは私の責任外の事である。立派な登山をしてくれ」と云い、以後一さい口出しをしなかった。このような非常にりっぱな軍人と行を共にすることが出来たことは幸せであった。

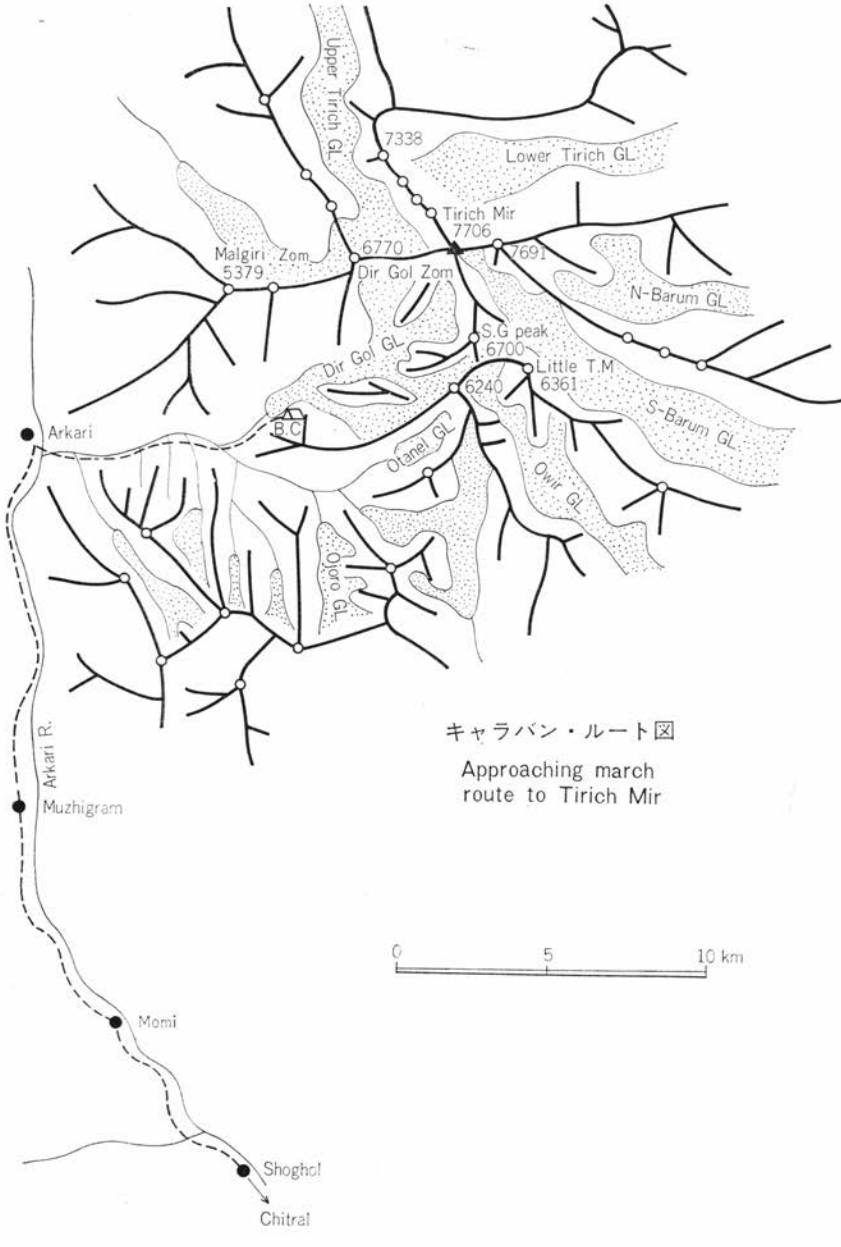
B・Cはディルゴル氷河のモレーン帯が終り、アイス・フォール帯の始まる地点で、氷河の左岸のモレーン台地にあり、高度約四二〇〇メートル、台地には小さい高山植物が美しい花を咲かせ、水場が遠いことを除けば快適なB・C地であった。

B・Cから頭上に眺めるティリチ・ミール主峰は、ディルゴル氷河のアイス・フォール帯から三〇〇〇メートルの高度差で、その全貌を一望でき、まさにヒンズー・クシュの盟主にふさわしく、実に堂々とそびえていた。

偵察活動

当初予定したルートは、アイス・フォール帯の中央部を頂上に向かって駈け上っているリッジだったが、B・Cより一望すると、上部のアイスリッジには終日雪崩が落ちており、後日上部のハンギングアイス・フォールから大ブロック崩壊が出て、下部の岩稜が全て洗われるのを目撃したこともあり、あまりの危険性に断念。他にルートを見出すべく、翌十一日より偵察を開始、氷河両岸とアイス・フォール内部を偵察した。

十二日、ディルゴル・ゾムを越えてティリチ・ミールへの縦走の可能性ならびにサウスグレーシャー・ピークから、ディルゴル氷河へ派生している支稜の登攀可能性を偵察すべく、田中、



キャラバン・ルート図

Approaching march route to Tirich Mir

ティリチ・ミール附近概念図
The Sketch map of Tirich Mir and its surroundings.

岡本の二名がディルゴルゾム左手のコルに向け出発、約五〇〇〇メートル地点でビバーク、翌日約五五〇〇メートルのコルに達した後B・Cに戻った。

十四日、沢村、若宮、中川の三名が前日のもう一つ左手のコルへ偵察に出る。約四八〇〇メートル地点でビバーク、十五日、コルに登った後戻る。

これらの偵察活動の結果、ディルゴル・ゾムにはルートを発見することは出来なかったが、サウスグレーシャー・ピークよりの支稜の末端に、岩稜に食い込む急斜面の雪渓を発見、これを詰めれば稜線に出ることが出来ることがわかった。かくして、翌日よりこのルートの開拓に全力をかけることを決定した。

登山活動

十六日、田中、岡本、アイス・フォールのルート工作、他は全員、途中まで荷上げを行なう。ハイポーター用の装備を持参しなかったわれわれは、荷上げを全て隊員の手で行なわなければならなかったため、最後まで苦しめられた。アイス・フォール帯はディルゴル・ゾム側にルートをとった。

十七日、ディルゴル・ゾム末端壁の直下、約四六〇〇メートル地点の氷河の中にC1を建設、一方、ルート工作はアイス・フォールの核心部、南西稜直下へ、クレバスやセラックスの間をぬいながら順調に進んでいるが、ディルゴル・ゾム側からの落石が激しかった。

十八日、ルート工作隊は支稜末端のプラトーに達し、アイス・フォールの突破に成功、プラトーではオーストリア隊のテントのペグその他を発見した。なお、この日、ゴシャネル氷河に入っていた調査隊四名がB・Cを来訪した。

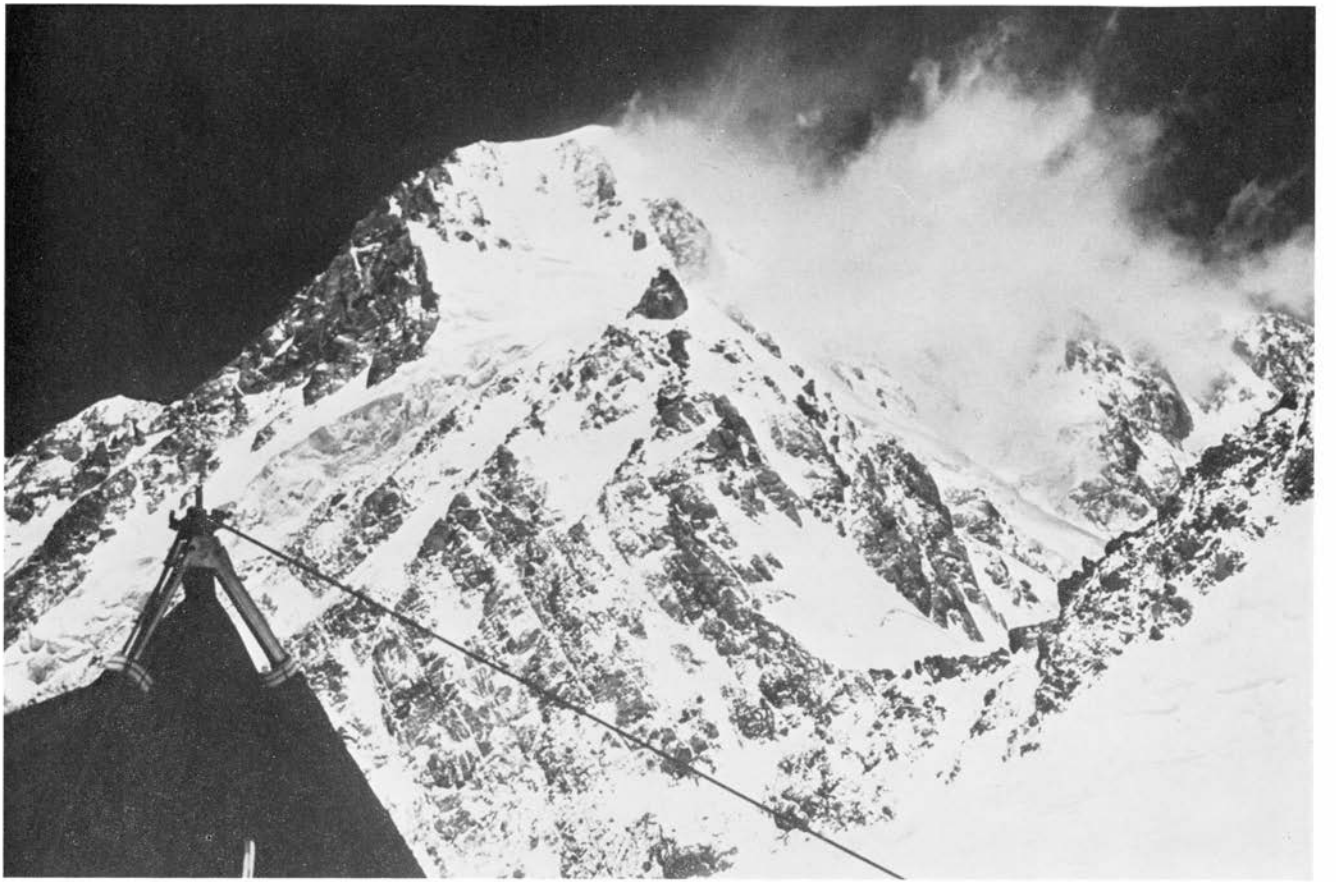
十九日、C2建設、高度約五〇〇〇メートル。沢村、中川の二名が入る。他全員でC1～C2への荷上げに全力を上げる。沢村、中川は上部へルート工作、予定のガリーを詰める。ガリーの下半はペニテント・スノーの発達した比較的傾斜のゆるい斜面であったが、上半は急傾斜で微妙な氷の斜面に苦しめられる。ガリーを詰めた稜線直下に小さい氷のプラトーを発見、ここをC3予定地とし、C2に下る。

二十二日、前記二名でC3を建設、高度約五八〇〇メートル。他全員でC2への荷上げが続く。調査隊の四名も荷上げに加わった。一方、C3への荷上げは高度差約八〇〇メールの直登に苦しめられながら進められる。二十四日、調査隊のうち三名は下山したが、以後中野が隊列に加わり、人手不足のわれわれには大助かりだった。

二十六日、稜線上にルート工作を進めるべく山岸、岡本がC3を出発、C3上のピナクルを右手にまき、何段かの大クレバスに妨げられたが、クレバスの消えかかる付近の急斜面を強引に突破、稜線上に出る。翌日再び両名によってこのルートを再

アイスフォールから見たティリチ・ミール主峰と南西稜
Tirich Mir and its South-west Ridge seen from the Ice-fall
(By Y. Tanaka)

ディルゴル氷河のBC付近から見たディルゴル・ゾム(6778m)(左)とティリチ・ミール(7706m)(右)
Dirgol Zom(6778m)(left) and Tirich Mir (7706m)(right) seen from Base Camp on Dirgol Glacier (By Y. Tanaka)



C４(6400m)からティリチ・ミール南面とサウス・コル(6500m)
South Face of Tirich Mir and South Col (6500m)
seen from Camp 4 (6400m)　(By S. Sawamura)

ティリチ・ミール頂上からティリチ・ミール東峰 (6971m)
Tirich Mir East (6971m) seen from the summit of Tirich Mir (7706m) (By A. Okamoto)

確認。更に上部に進み、C4予定地をサウスグレーシャー・ピーク手前のコルに発見、このルート偵察によってティリチ・ミール南面の全貌が明らかになり、頂上への目途がついた。

七月一日、田中、若宮の二名でC4を建設、高度約六三〇〇メートル。三日、両名によってサウスグレーシャー・ピークへの氷壁のルート工作が始められた。この氷壁はアイゼンの爪が数ミリしかはいらないほどの堅さだったが、しばらく登ると、氷と岩のミックスした地帯となり、ここを突破すると稜線に出た。雪庇が南側に発達しているので、ディルゴル側を登る。小さいコルを二つ越えると、サウスグレーシャー・ピークの頂上（高度六七〇〇メートル）に達した。この登りに二〇〇メートルのロープを固定した。

四日C2の津田、宮波、中野の三名、C2からC4に向けて荷上げに出発したが、C3に着くなり風雪となる。上部は全部行動中止、しかし、必要物資が全てC3に集結した。

五日、風雪強く全員停滞。B・Cから上は白一色におおわれる。休養のない登山活動が続けられ、隊員には体調不良、疲労が目立ってきていたので、この荒天はかえって幸いであった。この間を休養日とし、荒天明けと同時に頂上攻撃態勢をとることに決める。

六日、二日間続いた荒天も終わり、晴天となる。しかし朝から荒天の余波のブリザードが激しく吹き荒れている。その中をC3の全員C4へと荷上げに向かう。疲労を訴えるC4の田中、若宮を下に降し、山岸、岡本がC4に泊る。

七日、山岸、岡本はサウスグレーシャー・ピークを越え、ナイフエッジの稜線を高度差約二〇〇メートル降り、ディルゴル氷河と南バルム氷河が左右からせり上って合した最底鞍部、サウスコル高度六五〇〇メートルの地点にC5を建設して戻る。C3の五名はC4へ最後の荷上げを完了。ここに頂上攻撃の態勢は整った。

八日、アタック隊員を沢村、岡本と決め、山岸、中野をサポート隊とし、四名、C4を出発、C5に入る。

頂上攻撃

七月九日、アタック隊の両名は、三日間の食糧、装備を持ち、サポート隊と共に午前五時C5を出発。氷と岩の稜線をルートにとり、早いピッチで高度をかせぐ。しかし稜線を登りきる手前から粒雪のラッセルとなり、傾斜も強まり、スピードががくんと落ちる。十時三十分、稜線の登りが終り、七〇〇〇メートルの大雪原に出る。ここはB・Cから見える、上部ハンギング・アイス・フォールの上部にあたる。ここでサポート隊と分かれた。アタック隊は、更に大雪原をラッセルに苦しみながら進み、午後四時、頂上から南バルム氷河へ落ち込んでいる南稜に到着、この岩場でビバークに入る。高度七二〇〇メートル。

十日、コンロの故障で手間取り、午前八時、トランシーバーとビスケット、チーズのみの軽装で出発。南稜の右手の急斜面を詰める。高度が増すにしたがって再び粒雪が多くなり、岩稜が雪稜に変る付近より斜面も一段と傾斜を増し、くずれ落ちる足場とラッセルに苦しめられ、あえぎあえぎの登りとなる。

頂上へ約二〇〇メートルの地点で一時ビバークを考えたが、C4のトランシーバーで頂上直下に近ずいていることを知らされ、気を持ち直し、強引にこの急傾斜の雪稜を突破、その先はなだらかな広い雪原が頂上へと続いていた。

登頂午後六時五十六分、夕日で周囲の山々が紅色に輝いている時であった。記念撮影をし、頂上より少し下った所に、隊員全員の署名した日本、パキスタン両国の国旗を空罐につめ、積み上げたケルンの中に埋め、夕闇せまる頂上を後にする。

頂上からディルゴル氷河に向かっている稜線を約一〇〇メートル下った所に大きな岩屋を発見、二晩目のビバークをする。C2に休養に下りていた田中、若宮は回復して元気にC4に入り、疲労の激しいサポート隊の両名と入れ替わる。

十一日、七六〇〇メートル地点での寒いビバークの夜は明け、アタック隊は下山にかかる。登頂ルートの南稜から、ディルゴル氷河よりの雪壁にルートをとって降る途中、沢村がスリップして滑落、クレバスにひっかかり、助かるという事故があった。幸い大事に至らなかったが、この事故があってから行動が遅くなり、昨夜のビバーク地点に着いたのが午後二時三十分と云う遅い時間になってしまった。この地点でサポートに登って来た田中、若宮と合流、急傾斜の稜線をサポート隊に助けられながら無事C5に着いたのは午後十一時であった。十二日一日C5で休養の後撤収を開始、全員無事にB・Cに結集したのは十四日夕刻であった。

ピアーズ峰登頂（一九七〇年）

――ガブラル源頭氷河よりカチカニ氷河へのトラバース――

都竹　勝

計画から出発まで

我々が最初に選んだ山は、モンスーンの影響がなく、少人数でも登頂が可能であることを条件に、その地域をヒンズー・クシュに求めた。

アトラック氷河より、イストル・オ・ナール東峰（七二二六メートル）の登頂計画であった。その時期は札幌医大ＯＢ松浦氏、京工繊大ＯＢ佐藤氏のアドバイスで、一九七〇年五月を目標にした。この一年余り、その準備を着々と進めて、三月二十八日名古港より、西パキスタンのカラチ港に船荷物、約二トンを送りだした。

隊員の構成は次のとおりである。

隊長　都竹（つづく）　勝（38歳）岐阜県庁山岳会
京都工繊大学士山岳会

隊員　筋田雅則（25歳）川崎重工山岳部
岩佐善弘（23〃）岐阜登高会
日比野治美（21〃）岐阜登高会
中原良材（28〃）京都工繊大学士山岳会

四月四日、先発隊として筋田、岩佐が、現地の事情、船荷通関の手配等のため羽田からカラチに出発した。そして、これより一ヶ月遅れて五月三日、本隊の都竹、中原、日比野が出発、カラチで先発隊と合流、五月五日、日本領事館にて、植田代理領事のはからいで、日本に帰国される曽野明特命大使に公邸であいさつ。国内の情勢や登山活動について懇談したが登山活動については、首都であるイスラマバードの日本大使館で、細部について打合わせるよう助言をうける。

五月九日、総領事の今川氏等のご援助で無事通関した船荷物を、ラワルピンディまでトラック輸送の手配が終る。五月十五日、我々はラホール経由でラワルピンディへ、飛行機で約三時間飛ぶ。飛行場には住友商事成川氏の紹介で、ウルドゥ語の話せるミスターコーサリ氏が、通訳として隊に加わる計画で出迎えてくれた。

翌日、日本大使館を訪ね、松岡参事官、織田事務官に挨拶、登山活動について懇談する。当初の計画であったイストル・オ・ナール山塊は、国防上の問題等により入山は無理という結論になった。

我々は、第二案である、吉沢一郎氏推選の地域で、地図の空白部である旧スワート王国より、インダス河支流ガブラル源頭での登山活動と氷河の踏査。そして五〇〇〇メートル級の山脈を越え、旧チトラル王国のカチカニ氷河を経て、ソロラスプール→マスツジ→チトラルにトラバースすることの了解を得た。この間に諸手続きなども完了、カラチからのトラック荷物も到着、五月二十一日、キャラバン出発となった。

キャラバン

ラワルピンディより小型トラックに荷物をつみかえ、再度、関門で検査を受けながら、サイドセリフ→カラーム海抜二二〇〇メートルに着く。周囲の六〇〇〇メートル級のファラクサール、マンキャルなど、氷河を有する針峰が美しい台地をなした地である。

この村の村長兼警察署長デシタール氏に、土産に薬などプレゼントする。氏の好意で警察官二名を同行するよう手配してくれる。そして最奥の部落、ガブラル二五〇〇メートルに向かう。

五月二十六日～三十日、ガブラル部落を仮ベースキャンプとして、ガブラル川の右俣に、中原、日比野、コーサリ氏。左俣に都竹、筋田、岩佐と別れて偵察する。その結果右俣が本流であることがわかる。明三十一日をキャラバン出発日と決め、装備、食糧を再検討して、ポーター二十二名を雇うことにした。

この部落は無医村で、住民達に薬や往診をせがまれ、腹痛の老人を見舞ったが大変喜ばれた。子供達はカン詰の空かんなどを奪い合ったり、カメラを向けると早速集まって来、ポーズを作るなどほがらかで素直である。

五月三十一日、約束時間の六時半より早くポーターが集まる。隊員五名、通訳一名、ポリス二名、ポーター二十二名のキャラバンが始まった。部落民達の見送りがにぎやかである。ポーター一人の荷物は約三十二キロであるが、登り道はつらいようだ。途中ポーター達のお祈りがあって時間が経ったが、予定地のガッターに十四時過ぎに着いた。明朝早立ちを約して夏期放牧小屋に泊る。ポーター達は各自持参した麦粉などを水でねり、夕食分と明日の朝食、昼食分を一度に作り、火で焼いてチャパティをつくり食っている。

六月一日、ガッター発六時、朝のうちは良く歩く。途中谷に丸木橋をかけて進んだが、手なれたもので仕事は早い。日中は暑くて休む回数も多くなる。十二時、ハラハリ谷出合、二八〇〇メートルを左に眺めながら歩く。（偵察の折り中原隊は、この谷を四〇〇〇メートル近くまで偵察した。）マイダン十六時着、三二〇〇メートル。広い河原に小桜草が吹き、周囲の針峰に氷河がついて美しいが、とくにミヤングルサール（五九九六メートル）の山容はすばらしい。ここから右の谷をつめると、リンギーパスに行くことができる。ポーターの中には、日本の

松のような木の葉の灰と、松やにとを土をねって、煙草を作っているものがある。我々もかんでみたが口にあわない。

六月二日、ポーター達が寒いから早く出発せよと言うので、五時半出発。雪渓や岩場で道が悪く、弱いポーターの荷物を隊員が背負うなど、かなりのアルバイトであったが、目的地のガブラル氷河末端三五〇〇メートルのベースキャンプ予定地に十時に着いた。ポーター達に日当と手ぬぐい、薬などサービスすると喜んで帰って行った。ベースキャンプを設営し、今日、明日は休養日とした。

登山活動

六月四日、第一の目標はこのガブラル川源頭を偵察し、チトラル側のカチカニ氷河にトラバース出来るルートの確認と、このためのC1設営場所の偵察である。BC、五時四十分出発、氷河末端より左側にルートをとり、氷河湖の上部に出る。ここで互いにザイルで体を確保しながら通過（三九〇〇メートル）ガブラル湖（仮称）に降り、右岸を歩き、そして急な雪壁を登る。高度の順化が出来ていないのでくるしい。午後、中原、岩佐と、都竹、筋田、日比野の二隊に別れて左右のルート偵察、四二〇〇メートル地点、三峰（仮称）の下部にC1の適地をみつけ、一応のルートの目安をたててBCにもどる。十八時。十二時間行動で互いに疲れている。

六月五日、昨日の氷河横断ルートが悪く危険なので、筋田、岩佐、日比野の三隊員で氷河末端から右側に良いルートを捜しあてる。明日からの行動がらくになりそうだ。

六月六日、六時BCよりC1、四二〇〇メートルに、七日分の食糧、各自二十キロの荷上げC1着十二時、都竹、岩佐は上部ルートの偵察。筋田、日比野、中原はイグルーを作る。全隊員、C1、イグルーで泊る。

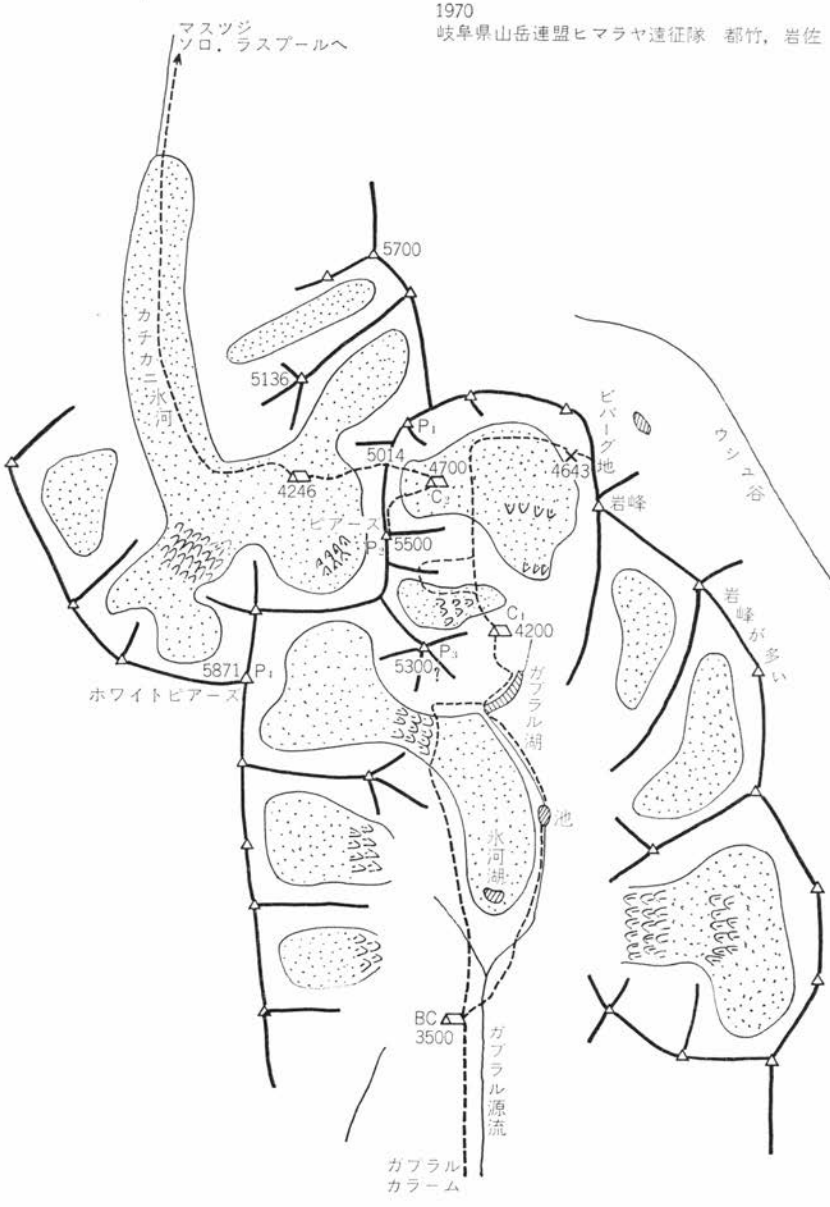
六月七日、全隊員、最奥地東側の窓、四六三四メートルに十三時四十五分着。ここからはファラクサールが東南東に位置して見えるし、下方はウシュウ谷であった。チトラル側には出られないことがわかった。

都竹、筋田、岩佐の三隊員は、ここを仮C2として、今晩ここでビバークし、明日P1、P2の窓に登り、チトラル側に降りるルートを偵察する事に決め、中原、日比野はBCに下山する。高度の順化が出来ていないせいか、夜十二時頃呼吸が苦しく目がさめる。朝まで寝ぐるしい一夜となった。氷点下十四度。

六月八日、仮C2を出発、P1、P2のクーロアールを登って十二時三十分、五〇一四メートルの窓に立つ。眼下にカチカニ氷河が長く横たわっており、チトラル側に出られることがわかる。しかし氷河まで標高差が八〇〇メートル余もあり、その上部四〇〇メートル程は六十度・七十度以上の氷雪壁で、簡単に下降が出来そうもないが、可能性ありと決めBCに下降。

ガブラル川，カチカニゴル　源流略図

1970
岐阜県山岳連盟ヒマラヤ遠征隊　都竹，岩佐



六月十日、中原、日比野、C1に荷上げ、他の隊員は休養。

六月十一日、全員で荷物の整理、BCからラワルピンディにおろす荷物と、チトラル側に持って行く荷物に分ける。午後より雲行きが悪く、夜中にみぞれとなる。

六月十二日、今日はポーター二名がBCに荷物を持ちに来る日である。昨夜からのみぞれで来るかどうか心配だったが、約束の時間に来る。荷物を通訳のコーサリーと各々四十キロに分け十一時頃下山に向かう。各隊員の手紙二百通をあずける。（結果的には日本に着かなかった。）四〇〇〇メートルでは雪が降っている。

六月十三日、予定ではC1への荷上げであったが、みぞれで停滞。十四日、十五日はBCにも雪が降り停滞。十六日、曇り空となり天候が回復するきざしがみえているが停滞。

六月十七日、十八日、BCを撤収しC1に荷上げ、心配した天候も回復して楽しいボッカが出来る。日比野、対面の山に登り偵察する。

六月十九日、C1より全員でC2、四七〇〇メートルに荷上げ、天候も良く順化も出来てさほど苦しくない。岩佐、中原、P2下部よりP3氷河上部偵察。

六月二十日、C1四時半出発、C2八時着。さらに筋田、岩佐、日比野は、窓、五〇一四メートルに、チトラル側で使用する食糧の荷上げを終る。都竹はC2でテントを張る。明日、P2（ピアーズ峰）アタックの計画で、筋田、岩佐はP2の雪壁を五〇〇〇メートルまで偵察し、上部に二〇〇メートルのフィクスロープを張る。夜は明日のアタック隊員を岩佐、中原と決め、全員天候を祈って早寝する。

六月二十一日、ピアーズ峰登頂。

雰時三十分、筋田起床、快晴で風も少なく絶好のアタック日となる。岩佐、中原、二時起床、夜明けを待ちつつ四時出発。朝の冷え込みで、十二本爪のアイゼンが快調に雪壁にきしむ。頂上まで標高差七〜八〇〇メートル、そのうち上部の雪稜を除いては、氷雪壁となっている。

高度の順化も充分出来ているので二隊員は、昨日のザイル工作地点（五〇〇〇メートル）に六時に着く。ここより上部は傾斜六〜七十度の氷雪壁が四〇〇メートルも続いている。気温があがらないうちにここを通過しないと雪崩の心配が充分ある。C2からは双眼鏡で、二隊員の登攀状況が手にとるように見える。トランシーバーで要所々々をアドバイスする。元気な応答がある。アイスバイル、ピッケル、スノーバー、アイスハーケンをたくみに使って、予想以上に早いピッチで頂上手前のピーク（コブ）に出る。九時、さらに頂上まで雪稜二〇〇メートル余を登り、やがて頂上直下で雪庇を乗りこえ裏側に姿を消す。

十時四十分「登りました。二人共元気です。風なし快晴」と元気な声、つづいて隊から、頂上での仕事の順を指示する。十

一時五十分、下山開始、天候が良く気温が上昇、足もとから雪崩が発生する。注意に注意を重ねてコブに降りる。十二時四十分、つづいて氷雪壁の下降であるが、雪崩が発生して危険があるので、太陽が西にかたむき壁に日陰が出来る頃まで休む。十五時下降開始、慎重に下降をつづけ、十八時十分、C2に着く。全員赤飯で登頂を祝す。

六月二十二日、五〇一四メートルよりカチカニ氷河に降りる。快晴氷点下六度。風が強く寒い。

C2出発八時、窓、五〇一四メートル着、九時三十分。今度の遠征の最大のヤマ場、カチカニ氷河への下降である。標高差八〇〇メートル余が、足もとから六～七十度の氷雪壁となって切れている。十一時下降開始、筋田六ミリの工作ザイル二本と九ミリのメインザイル一本を体につけて、先ず一七〇メートル下部の岩峰に向かって下降開始。ここに第一プラットを作り、岩佐、都竹、日比野、原の順で計画通り下降、また四十五キロの荷物五個をおろすなど大変な事だった。

さらに二〇〇メートル余を、筋田が下降偵察し、岩佐、都竹と下降、第二プラットを作り、さらに五〇メートル下降して、全員が小さな台地についたのは、夕やみせまる十八時四十分。さらに荷物を背負って急な雪壁を下降し、十九時過ぎ氷河上の大きな台地に着きテントを張る。十二時間もの緊張した行動で皆な疲れきっている。赤飯で互いに元気づけながら、疲れた体を寝袋に入れた。

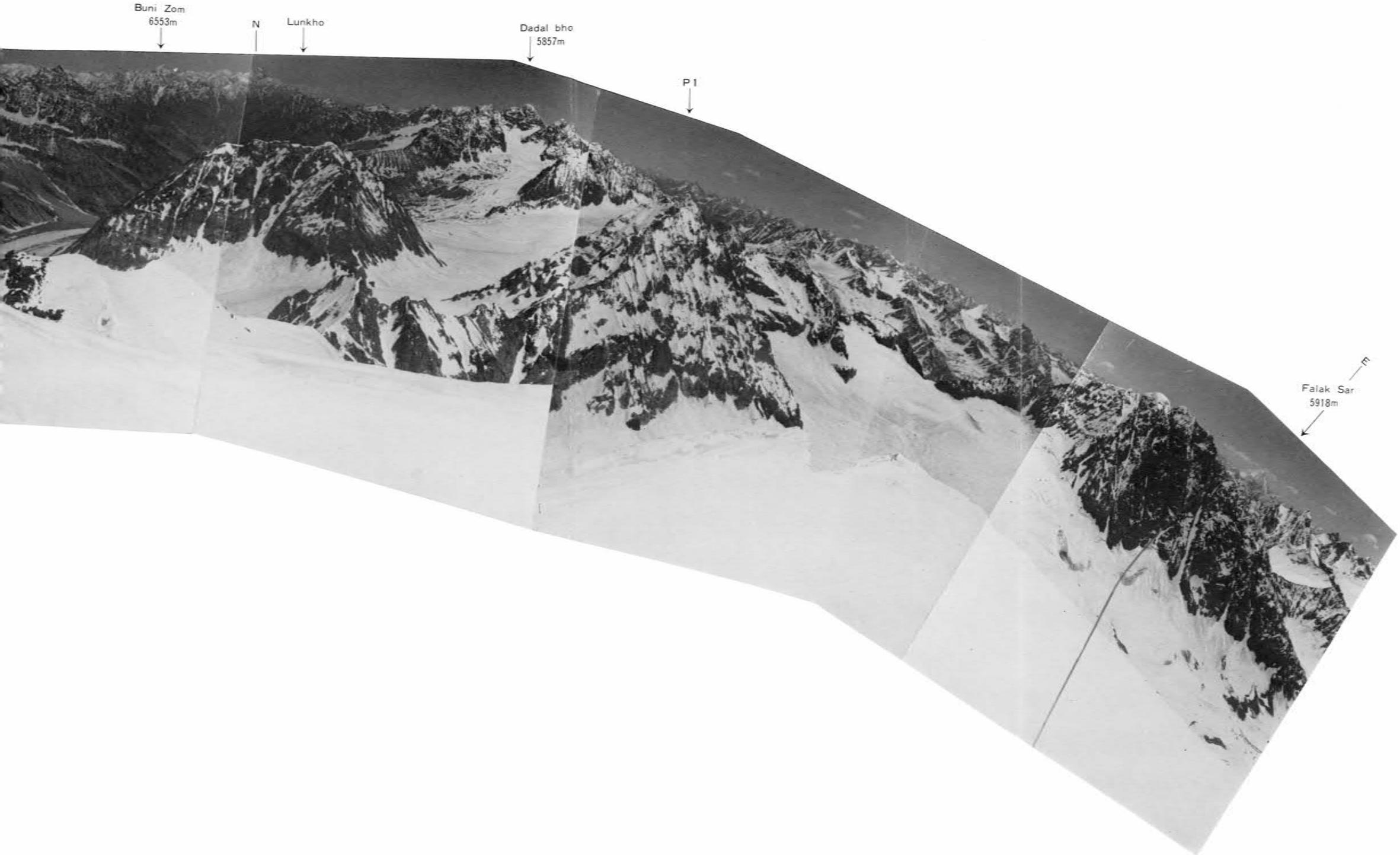
六月二十三日、二日間に亘り遠征最大のヤマ場を乗り越えて、今朝はほっとした感じ。日やけした顔を見せ合い、スケールの大きいカチカニ氷河の最奥地、美しい山々を眺めながら笑いと楽しい一日の休養を取った。

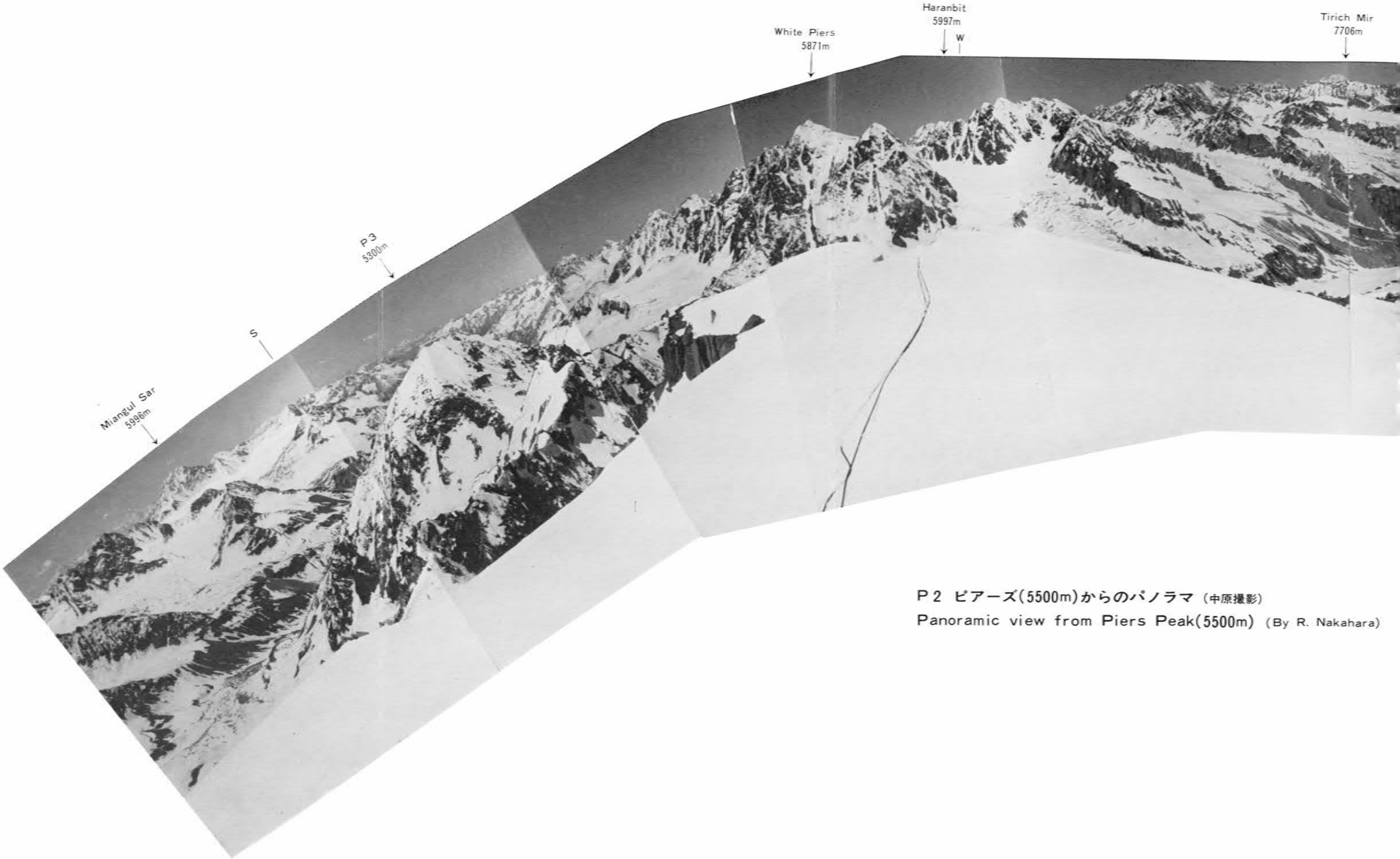
六月二十四日、キャンプ地を六時四十分出発、幾つかのヒドンクレバスに注意し、何度も何度もふりかえりながら、カチカニ氷河を降り三二三〇メートル地点でテントを張る。本谷は氷河の雪解けで濁流であるが、小谷の水は清く、頭や体を洗う。冷たいが四十日ぶりで気分は上々。

再び、キャラバン

六月二十五日、カチカニ氷河最奥の部落(四戸だけ)に着き、そしてソロラスプールの部落に入る。北西にブニゾム、南にカチカニが見える。石と木で作った住居と、部落全体が柳の木で青く美しい。言葉はチトラル語で、うまく話せないが大体わかる。夕方、子供達が英語の話せる青年をつれてくる。彼を仲に入れて話が通じる。また、キリスト教の宣教師がたずねて来る。彼は一人でギルギットに行くと言っていた。

六月二十六日、昨日雇ったポーター四人が約束の六時に来る。早速出発、昼頃雪解けで急に増水した濁流の谷を渡る時、ポーター達と部落民の献身的な協力を得て、無事渡渉することがで


Buni Zom
6553m
N
Lunkho
Dadal bho
5857m
P 1
E
Falak Sar
5918m



P 2 ピアーズ(5500m)からのパノラマ (中原撮影)

Panoramic view from Piers Peak(5500m) (By R. Nakahara)

きた。

この地のポーターは素直で強い。約四十キロの荷物を背負い、とうとう約束の三十六キロメートルを歩いて、マスツジには十九時三十分に着いた。十三時間の強行軍で、全員が疲れてしまった。農家の庭先の桑の木の下で寝る。二十七日は休養日、マスツジのバザールで現地食等を買う。意外に中国の品物が多い（マッチ、石鹸）。終戦直後の日本をおもわせる商品ばかりである。

農家では麦の取り入れが始まっているが、その方法は明治時代のやり方に似ている。集まって来る部落の人達の傷の手当や、薬をあたえるなど親善をはかり楽しい一日であった。

六月二十八日、ブニ村まで約四十キロメートル、ポーター一人を交替させて歩く。途中部落の人達が、桑の実を落してくれるなどの親切を受ける。テリチミール、イストル・オ・ナール、サラグラール等の七〇〇〇メートル級の山々を眺めての、十三時間行動でかなり疲れた。ポーター達は良く歩いてくれたので、約束以上に一人二日分として、三十ルピー支払った。大変に喜んでソロラスプールに帰って行った。ポーター達は何度もふりかえり、手をふってくれた。我々も手をふりつづけた。少しの間だったが心のつながりを感じ、目頭が熱くなる思いがした。

この村と言うより、ブニより奥地全体の行政長官宅で夕食をごちそうになる。長官は、旧チトラル王国の直系シャサーダ氏と従兄弟の間柄で実力者のようだ。二十九日、休養。道は悪いが、今年からこの地にジープが入るようになったからと、長官みずからジープの手配をしてくれた。日本のトランジスターを持っているなど、なかなかの日本通である。隊員のカメラがほしくなって、結局、中原隊員がお礼と併せてゆずってやった。

六月三十日、ジープでチトラルへ、悪路だが久しぶりの車で気分が良い。ジープでも一度にハンドルの切れない難所が数回もある。途中、入山して来たイタリヤ隊に逢う。成功を祈り記念撮影などの交歓を重ねる。車はやがてチトラルホテルに着いた。旧国王シャサーダ氏のアシスタントが、ホテルに我々を訪ねてくれる。氏はペシャワールに出張中とのこと。親切にバザール等案内してくださる。土産を渡しチトラルホテルに泊る。

七月一日、ジープでロワライ峠を越えディールへ。飛行機でチトラルからペシャワールに飛ぶ予定で飛行場に行ったが、天候が悪いからと欠航する。親切なポリスの手配で、ジープでロワライ峠、三二〇〇メートルを越えて、ディールの町に泊る。二人のスイス人登山家に逢う。彼等はワゴンに乗って来ていた。七月二日、ディール発七時二十分のバスに乗り、ペシャワール着、十七時グリーホテルに泊る。七月三日、日本に登頂とトラバース成功の電報を打ち休養。

七月四日、ラワルピンディへ。七月六日、大使館にあいさつ。松岡代理大使に細部について報告、特に奥地の状況と親善を深

めたことを報告した。大変喜んでいただいた。

七月八日、ラホール経由でカラチに入る。四日に大雨が一年ぶりに降り、死者二十名が出たとか。その後毎日夕立があるようだが、町は排水が悪く、水たまりで子供達が水遊びをしていた。七月九日、十日、領事館を初め、お世話になった人達にあいさつにまわる。

七月十一日、カラチ警察署に帰国のむねを報告、夜十二時、カラチ空港に住友商事成川氏等の見送りをうけて帰途に向かう。デリー、バンコック、香港、台北を経由して十六日十五時二十分羽田に着いた。

〔付記〕ピアーズ峰の命名について

ガブラル氷河末端の三五〇〇メートルに荷上げしたポーター達が、この山塊を指してピアーズ、ピアーズと言うので、P2（五五〇〇メートル）をピアーズ峰と命名した。ピアーズとは原地語で、ネギのことである。BCを撤収した六月十七日頃には、BC付近に小さな野生のネギが生えていた。

なおP4（五八七一メートル）は、この山塊で一番高いと思われるし、白く雪がついているので、ホワイト・ピアーズと命名した。

山岳 第六十四年（一九六九年）

グリーンランド氷床の横断（一九六六年） 池田錦重
パタゴニア氷床横断（一九六八―九年） 阪上秀太郎
富士山と私 松方三郎
回想の日高山脈 相川修
ランガール登頂（一九六八年） 立花種則
イストル・オ・ナールとジロ山群 佐藤京子
シャー・イ・アンジュマン登頂（一九六八年） 高木泰夫
アルゼンチン中部アンデスの登山 川上隆
コルディエラ・キムサクルスとイリマニ縦走 阿部重男
メルセダリオ南壁（一九六八年） 吉田三郎
マーカス・ベーカー峰登頂（一九六八年） 青山学院大学体育会山岳部
パンジャブ・ヒマラヤ 吉野勲
日印合同登山（一九六八年） 宮崎英子
羅臼岳と硫黄山の原名について 早川禎治
追悼・図書紹介・会務報告・英文梗概
イストル・オ・ナールの山座同定 田中栄蔵
海外登山年表＝一九六八年＝ 松田雄一 中島寛
A5判三〇〇頁・写真四八葉・図版二五面 定価二〇〇〇円

ダーラン山塊（一九七一～七二年）

国鉄山岳連盟ニュージーランド親善登山隊

ニュージーランド南アルプスの脊稜が、オタゴ地方の西部山岳地帯で高度を下げて幾つもの支脈を広げ、南西のそれはタスマン海にフィヨルドを形成する。国立公園フィヨルドランドの北部は、最も脊稜近く峡湾がくいこみ、景勝地ミルフォード・サウンドがある。このミルフォード・サウンドを包含する山々と分水嶺を、ダーラン山塊と名づけている。

脊稜山脈を割って東から北へ深く長大な流れが、マッケロウ湖にそそぐホリフォード谷、南をホリフォード谷とアーサー谷の源流の山々を境とし、西はタスマン海の岸となる山域である。峡湾の海面からいきなりそびえ立つ岩山は、標高二〇〇〇メートル前後の山頂をもち、懸垂氷河と残雪をかぶり、深いU字V字の谷が削られて、平地の少ない地域となっている。

こうした山々が初めて登られたのは、一八八三年名峰マイターピーク（一六九三メートル）が西側から踏まれ、一九〇〇年代の初期に主要な山頂は登られ、ダーランの最高峰マウント・ツトコ（二七五六メートル）は一九二三年に第一登がなされた。そして今日までほとんどのピークは登られたが、一九七一年十二月に初登された山や、無名の峰もあり、主要な山頂以外数人の登山者にしか踏まれていない。

ましてバリエーション・ルートによる登攀は、まだアプローチルートも定かでないこの山塊にこそと、再注目されだした。標高こそ低いが、急峻な岩壁が山頂から切れ落ち、残雪と氷河を宿し、磨かれた花崗岩を深くえぐったU字谷の側壁は、いたる所にそそり立っている。氷河の規模はタスマン流域のそれとは比較にならないが、ここでは悪相の懸垂氷河にルートを求め、それがポピュラーなルートとなっているが、決して安易なルートではない。

この魅力に満ちたダーラン山塊を、登山者は次のように区分している。

現住民マオリ族の酋長の名をつけたダーランの最高峰で、登頂のむずかしい山として知られるマウント・ツトコ、これをとりまく氷河と雪原の岩峰、ツトコ谷源流と北方の山々を北部ダーラン。

特徴的なカール底湖と美しい大滝をかけるターナー湖とアデレード湖をとりまく氷河と、スケールの大きな岩壁の山々を中

2010
Tutoko Saddle
Paranui 2150
Iceberg Lake
Alice 2179
Pawnbroker's Rock (Bivvy)
2757
2754
2745
Tutoko
Donne Glacier
Glacier Ck.
Hollyford River
Grave 2313
Harrison River
Turner pass 1980
Age Gl.
Cascade Ck.
1905 Benton Peak
Dave's cave
Turner's Bivvy Rock
Madeline Snow Basin
Madeline 2520
Syme 2260
Tarawai 2230
Cleft Creek
Bowen River
Tutoko River
Makere 2135
LAKE TURNER
Tewera 2326
2260
Waitiri 2133
Patuki 2330
2015
Karetai 2214
Chasm Creek
TAOKA ICE FALL
Taharoa
Underwood 2320
MILFORD SOUND
MIFORD HOTEL
HOSTEL
Revelation
Karako Glacier
Apirana 2070
Clinton River
1817
MORAINE Ck.HuT 1830
Moraine creek
Road Termina!
Moraine
North Branch
Gulliver River
2160~2150
2135 Third Pk.
High East Pk. Pk.
West Branch
Barrier Knob 1830
Gifford 2070
Caples Ck.
OLD ESPERANCE HUT
Barrier 2105
Sabre 2225
South Branch
Macpherson 1890
Talbot 2220
Gertrude valley
Marian 2135
2280 West Pk.
2310 Middle Pk.
East Pk. 2320
HOMER TUNNEL
HOMER HUTS 1855
2nd Pk.
Croscut 2313
MARIAN Ck.
SKETCH MAP OF DARRAN RANGE (NEW ZEALAND)
Ck. : Creek

央ダーラン。

世界で最もすばらしい風景の道といわれるアプローチに恵まれ、小さな氷河湖と豊かな残雪、訪れる人々が目を見張る岩壁の山々、ダーラン山塊を半周する流れの最奥部はアッパー・ホリフォードの山々と呼ばれている。

この地域のベースハウスとして、ミルフォード・サウンドのホテル又はホステルが利用され、住人はこの二軒だけで食糧などの売店がある。ここに公園管理のレインジャーが夏期のみ常駐し、旅行者、トランパー、登山者に対し野外生活の指導とアドバイスを行なっている。ここへの交通は、南の平野部の町テ・アナウからエグリントン道路が山間部に入り、ホリフォード道路と名を変え、脊稜山脈の終端近く岩山をくり抜いた、素掘りのホーマートンネルからミルフォード道路となって、峡湾でロードストップとなる。

また、テ・アナウからテ・アナウ湖を舟で渡り、ミルフォード・トラックに入り、マッキノン・パスを越え、アーサー谷を下ってミルフォード・サウンドに着く、トランパーの展望歩道がある。最も短時間には、クイーンズ・タウンかテ・アナウから軽飛行機で山脈を越えて、クレイダウ谷の出合を平にしただけの、ブッシュエアーポートにあっさり降ろしてくれる。

入山アプローチは谷と沢ぞいのジャングルからはじまり、湿地と渡渉はいたる所にあり、下草は木性のシダと矮草、そして一〇センチにも育ったコケの踏跡である。

トランパーの歩く範囲にはトレールもあるが、アルピニストの領域には人為的なものはまったく見られず、自らルートを求めなくてはならない、処女地に近いものがある。泊地として例外的にテントを使用しているが、天候の激しさから適さないために、北部ダーランでは全て岩小屋（ビビィ・ロックまたはケイブ）を使用し、中央ダーランにはアデレイド湖のモレーンの北端にハットがあり、その他は岩小屋を利用している。

アッパー・ホリフォードのエリアでは、ホーマーハットが周辺二五ルートの登山基地となっていた。山容とこうした条件は想像以上の気候を語り、スタミナとスピードが登山者に要求される。ちなみにミルフォード・サウンドの夏季一月の雨天十七日・月平均雨量六〇ミリ・一日最大雨量三〇〇ミリなどというデータがある。こうした条件が登山を難しくし、夏でも稜線には降雪を見ることがめずらしくない。

また、この期間二〇度を越す暑さはなく、平均一五度位で夜は涼しく、行動可能な時間も十七時間と長い。

そして、この地方にしか生存しないサンドフライが、昼夜の別なく人を刺すのが唯一つの毒虫であり、防虫薬でききめがある。

私達は初めて海外の山を目標として、氷河山域での登山を経

験する初歩的研究の場として、ニュージーランドアルプスを選んだ。目的の一つは海抜零メートルからの登山を心がけ、ダーラン山塊を前期の行動の場とした。ここで、現地の登山者が再注目しだしたニュージーランド一の難峰、マウント・ツトコと近接する二峰を登り、余日をもって広くニュージーランドアルプスを登山する計画をもって入山した。（秋山宏明　記）

行動概要

十二月二十九日雨、クライスト・チャーチをたち、空路をクィーンズ・タウン経由テ・アナウに着き、バスでミルフォード・サウンド、ジョンソン・ホステルに到着。直ちに三名がツトコ・トレールの偵察に出発。団長、隊長はレインジャー・J・エド氏に会い、登山届提出、山岳情報の聴取を行なう。他の隊員は荷物の整理を行なう。

三十日雨、三名はトレールをツトコフラット入口のブッシュの中にある雨量計地点まで進み、付近の偵察を行なうも、折からの増水のため上部へのルートの発見できず。他の隊員は荷上げ品の整理。団長、隊長はレインジャーから情報の入手を行なう。

三十一日雨、四名は減水したドライ・クリーク沿いにツトコフラット、ベースキャンプ地へのルートとツトコ川本流の渡渉点を発見。六名は雨量計地点への荷上げ。団長、隊長は気象受信所とレインジャー事務所に赴き情報を得た後、デポ地まで往復する。

一月一日曇後雨、三名はリマリッククリークからエイジ氷河の下端に着き、ターナーズ・ビビィ・ロックへのルートを探索。七名は残りの荷上げをし、リーダークリーク対岸にBCを建設。団長、隊長は長期天気予報を聴取ののちに入る。

二日曇後雨、昨夜の降雨でツトコ川増水、渡渉不可能のため停滞。

三日雨後曇、団長外三名タスマン氷河にむかうため下山。午後、全員リーダークリーク・ケイブに入った後、四名で上部の偵察を行なう。

四日曇後雨、一回目のアタックに向かうが、途中で雨になり、ターナーズ・ビビィ・ロックに入り、行動を見合わす。その後リーダークリーク・ケイブから荷上げをする。

五日晴・霧、初めての快晴の朝をむかえた。ツトコ（清水、宮原、佐藤）、マデライン（斎藤、中村、琢田）、サイム（秋山、丸山）に登頂。ツトコ隊は登頂後エイジ氷河でビバーク。

六日晴一時小雨、ツトコ隊の帰着を待ち、午後全員BCに下る。

七日晴、BCを撤収してジョンソン・ホステルに下山。

八日晴、ホーマートンネルまでバスで行き、バリアー・ノブとマクファーソンに登る。明日からタスマン氷河に転進する。

世話になったジャック・エド氏を囲んでのささやかな宴は、夜の更けるのも知らぬかの様だった。

本登山隊の編成は左の通りである。

団　長　湯川竜二（55歳）帝都高速度交通営団理事
隊　長　秋山宏明（35〃）東京南局品川電力区
副隊長　加藤勝美（43〃）（医務）新潟局新津工場
隊　員　斎藤新一（39〃）（会計）長野工場
〃　清水　功（33〃）（総務）東京建築工事局
〃　宮原弘之（29〃）（装備）東京南局新鶴見機関区
〃　小柳勝治（28〃）（記録気象）名古屋局北野桝塚駅
〃　中村浩一（27〃）（渉外）水戸局水戸電力区
〃　塚田定徳（25〃）（食糧）大井工場
〃　佐藤雅信（24〃）（食糧）盛岡局盛岡無線区
〃　丸山敏郎（24〃）（輸送）名古屋局稲沢駅
〃　成田　博（22〃）（通信）東京北局巣鴨駅

ツトコ（二七五六メートル）

やっと快晴の朝を迎えた。ツトコが気高く私達の前に聳えている。急な草付のかすかな踏跡を辿って行くと、尾根は露岩帯に変わり、間もなくマデライン・スノウ・ベースンの一角に出る。緩い斜面を登っていくと左上方に蒼然としたセラックがあらわれる。この斜面にはまだ陽がさしていない。

スノウ・ベースンの中途より左手の小高い雪面を登り、マデラインの弧を描いた岩壁の下方へトラバースしていく。マデラインからの小さな岩稜を横切り、緩斜面のトラバースを続ける。斜面は次第に急になり、ターナー・パスからの肋稜の下に出る。新雪の積っている四〇メートル程の壁を攀り、軟雪面を左上しターナー・パスにでる。

容易な岩稜を登り、二メートル程のギャップを通過していくと、次のピークとのコルに出る。

アンザイレンし、雪壁を五、六〇メートル登りスノウピークに出る。前方には岩峰がたちはだかっており、右側はドンネ氷河までの垂直な岩壁、左側はエイジ氷河への急峻な雪壁で、南主稜の稜線通しも、側面のトラバースも困難だ。

先程のコルまで戻り、雪と氷の混った壁を、斜面にむかって慎重にエイジ氷河へ下降する。左手の岩稜の末端近くまで下降し、それをめがけてラビーネン・ツークを横切っている時、小さなブロックが無数に落ちてきた。一瞬緊張し、ザイルを引きしめた。が、それは一度だけで皆ほっとする。

岩をまわりこみ、七〇度程の軟雪面を慎重にトラバースしていくと、次第に傾斜が緩くなり、更にトラバースを続けエイジ氷河のツトコ南壁懸垂氷河帯に入っていく。上部にはクレバスが断層の如く何段にも積み重なっている。巨大なセラックの下

をそそくさと通過し、クレバス帯に入る。

軟雪壁を登り、ずれ落ちたクレバスの五メートル程の垂壁を三ヶ所攀っていく。ビバークのためにと、乏しい食糧を節約しているので誰もがバテ気味だ。最後の垂攀を越すと軟雪壁になり、次第に傾斜が減じてくる。

ターナー・パスに続く南主稜に出ると頂上へはすぐだった。幅の広い頂上に立ち、記念撮影を済ます。四囲はガスでかくされ、冷たい風が頂上らしさを感じさせる。九時近くまで明るいので、クレバス帯を下ってしまおうと、凍りついたザイルを手に下降に移る。

クレバス帯をすぎ、緩斜面のトラバースの途中で、露出した岩のシュルンドのふちにツェルトを張る。すっかりガスに包まれ、雪も降ってきた。夜半に小さな雪崩がツェルトの裾をかすめた。身仕度をし朝を待つ。

六日、ガスの中をヘッドライトの光をたよりに昨夜の降雪に消え残ったトレールをひろいながら下降する。陽のさしはじめたツトコを感慨無量の気持でふりかえりつつ、皆の待つビビィ・ロックに帰りついた。

タイム　岩小屋六・三〇――頂上一七・四一――ビバーク地一九・四〇～四・三五――岩小屋八・四五

パーティー　清水・宮原・佐藤　（清水　功　記）

サイム（二二二六メートル）

枯草色の矮草を踏み、岩稜の下で雪渓に囲まれたような岩があり、低い天井のビビィ・ロックの前でアイゼンをつける。

丸味をもった露岩の面にひろがる雪渓は凍りついて、小気味よくアイゼンがきしむ。緩くて広い尾根を越え、ルンゼ状を岩塔の乱立する対岸にトラバースすると、上部で無名氷河とエイジ氷河を区切る尾根のコルに出た。この氷河は小さなもので、左岸から上部は露岩を配して広い雪原となって本流の氷河を包み、その舌端はいきなりツトコ谷側の岩壁におちている。

雪原は、そのまま稜線にはい上り、うっすらと新雪をまとった四つの岩峰が並んでいた。口をひらいたグレィシャーフィールドと本流のクレバス、足元はデブリの跡があり、慎重を期して三ピッチでトラバースを終る。

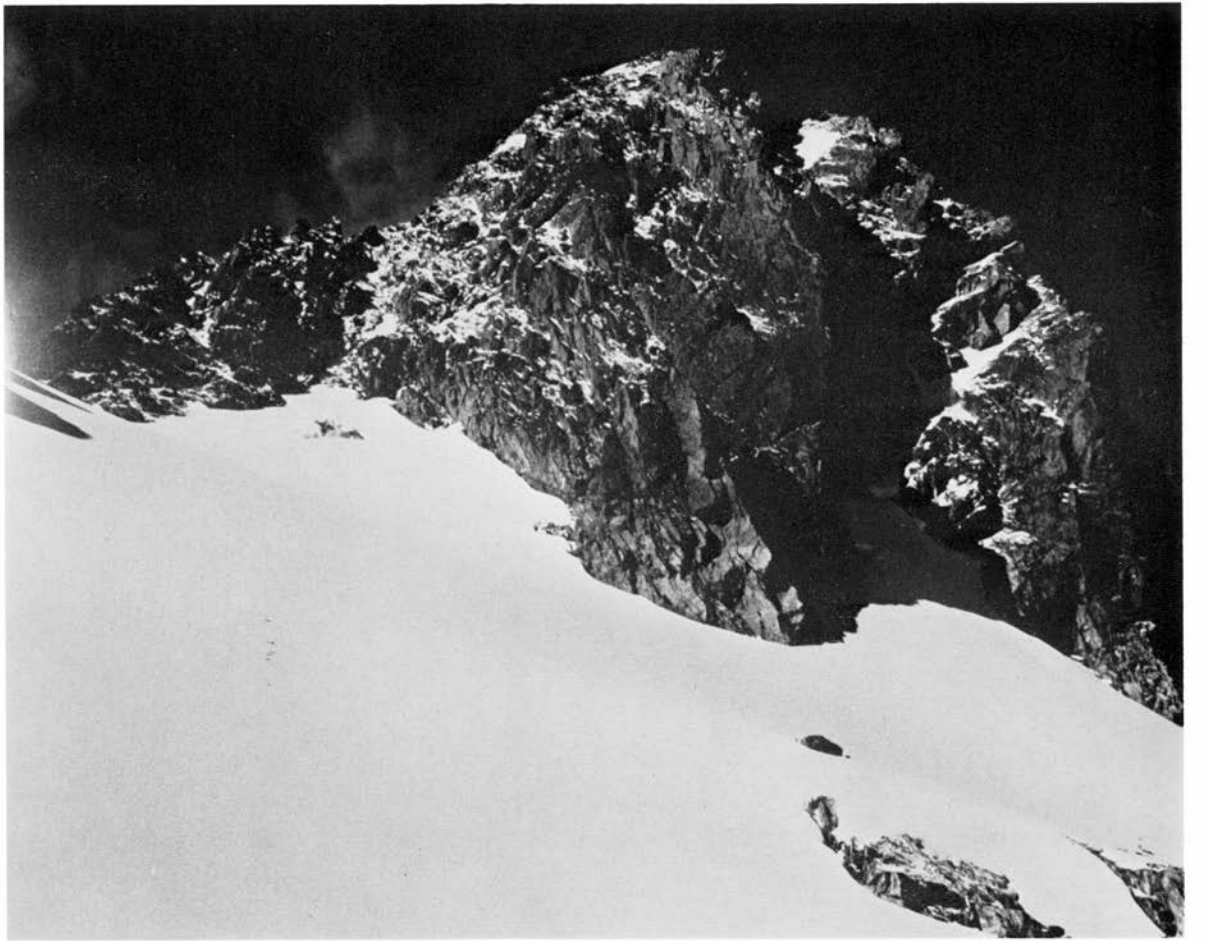
見た目より広大で傾斜のある段状のスノウ・プラトウを、右手の岩峰タラウイめざしてジグザグに足首のいたくなるような登りを続ける。

中央ダーラン核心部から、ダーラン主峰のアタックキャンプ地へのトラバースルートのあるマーケリー岩峰の下に位置するピキパァリ・パスを、吹き上がるガスの中で確認したが、ターナー側は視界が悪く見る事ができなかった。新雪がとけて岩はだをぬらす。タラウイの西面のしっかりした岩場を、大きなク

1970年6月21日初登頂したピアーズ峰(5500m)
Piers Peak (5500m)—dotted line shows the route of the first ascent on June 21st. 1970. (By M. Sujita)

5014mのコルからホワイト・ピアーズとカチカニ氷河を望む
White Piers and Kachikhani Glacier seen from Col 5014m (By M. Tsuzuku)

ツトコ峰（2757m）
Mt. Tutoko（2757m）—New Zealand.



サイム峰（2260m）
Mt. Syme（2260m）—New Zealand.

マデライン峰（2520m）
Mt. Madeline（2520m）—New Zealand

バリアー・ノブより北方を望む
View northward from Barrier Knob — New Zealand.

ラックルートにフリークライムし、二ピッチ目でスラブ状の岩稜となり、雪が凍りついているので、残りは三ピッチ位であるが、目標はサイムであり、登攀用具も不足し、登頂を断念して下降した。

基部にもどり、昼食をとりながらレイク・ターナーまで、山頂からそぎおちる圧倒的な傾斜のタラウイ東壁を、激しく動くガスの間に見る。北方に続く雪稜の下、プラトウ上縁のミルニーの岩峰基部をまきこむように、サイムめざして大きくトラバース。濃いガスが視界を迷わせ、現在位置さえさだまらなく、カンをたよりの登行である。

ガスの飛来の合い間に、無名氷河はマデライン・スノウ・ベースンとザッテル状を境にして水系を異にし、サイムはエイジ氷河に水を落すようにはりだした岩峰で、マデライン・スノウ・ベースンを見下ろす位置にある。サイムの南面のルンゼを、ザッテルからトラバースして、雪壁に大きなバケツを掘ってサイムにとりつく。ホールドが豊富で傾斜の強い赤味のある岩場を二ピッチ、アンサウンドな易しい岩と、残雪のミックスされたピッチをおえ、雪田下部でフリークライムに切りかえてザイルをはずす。

雑然とつみ重なる硬い花崗岩の、すいつくような岩をなだめるようにこなし、大岩のある肩につく。最高地点を求めて右へ斜めに登ると、東西に長く、雪と岩をはっきり区分した頂上に出た。人の登った形跡もない山頂の岩に小さなケルンをつみ記念とし、動くガスの間からツトコ、マデラインの雪壁を写真におさめた。

登ったルートをゆっくり、浮石の多いロック帯をフリーでクライムダウンした。ザッテルを形成する大岩の頭から、ターナーズ・ビビィに下る雪稜と岩場を使えると予定したが、五〇メートルもノッペリとした岩の下に大きなシュルントが開き、下降は不能とわかる。

ほかに安全なルートもなく、サイムの基部に西側から南面にのびあがるクレバスの、大きくひらいた急なルンゼにうつる。ひざまでもぐるいやな感じのトラバースを二ピッチして、マデライン氷河のセラックを右上にみて左へと急ぎ下降。スノウベースン左岸の雪渓と大きな露岩をぬってトラバースを続け、濃霧の中でルートファインディングにスタミナを使いはたして、岩屋に帰った。

タイム　AC岩屋六・五〇—ピキパァリ・パス九・五五—サイム一六・〇〇—岩屋一九・〇五

パーティー　L秋山宏明・丸山敏郎　（丸山敏郎　記）

マデライン（二五五五メートル）

ターナーズ・ビビィ・ロック上部の岩稜を越え、マデライン・スノウ・ベースンに入る。左には懸垂氷河をつけたツトコが、

スノウ・ベースンの前方には目指すマデラインの白峰が、二つの頂をのぞかせている。

ヒドンクレバスに注意し、二〇センチメートル程の新雪の中を、クレバスを迂回しながらマデライン氷河の右の岩稜にそって、氷河の中央部をめざして登る。スノウ・ベースンから氷河へと、広大な雪原の中を大きなクレバスが断面をみせて横切っている。一時間歩いても、もとの位置とほとんど変わらない感じの周囲の状況に、トレールを振りかえってやっと納得する。

やっとの思いでクレバスの氷河をまわりこみ、ルートをマデライン氷河中央部にとり、快調に高度をかせぐ。下から見えなかったクレバスが、上部に大きな口をあけており突破不能。新雪の下はブルーアイスのため、慎重に一〇〇メートル程ひき返し、右手の雪稜に出るため小さな岩稜ぞいに登る。六〇度程の急斜面、右は下部まで切れている雪壁、左は下方にクレバス、いやが上にも慎重にならざるを得ない。

やっと岩稜上部に出る。その上部がドーム状の雪稜、頂上はまだ見えない。一歩一歩高度をあげてドーム状の頂上に着く。向かい側に一〇メートル程低いピークがあり、ナイフエッジの雪稜ぞいに岩の露出したロウピークへも立つ。下りはアイゼンに雪がつき、滑りやすくやっかいだ。表層雪崩が我々の降りている傍を音もなくクレバスに落ちていく。慎重に、急いで下る。

マデラインアタックの喜びを胸に、ガスの出てきた鍋底のような雪原を、ヒドンクレバスに足をつかまえられビックリし、暑さにへばり、ロックケイブに帰り着く。

タイム　ターナーズ・ビビィ・ロック七・一〇―ハイピーク一二・五〇～一三・〇五―ロウピーク一三・二五～一四・一〇―ターナーズ・ビビィ・ロック一七・三〇

パーティー　L斎藤新一・中村浩一・塚田定徳

（斎藤新一　記）

マクファーソン（一八九〇メートル）

マクファーソンからモイア（Moir）に続く尾根の、側壁の下に広がる浮石だらけの草付斜面を、右方に登っていく。登るにつれ斜面は大岩の混ったガレに変わる。途中で休憩していると親子三人のハイカーが追いつき、流暢な日本語で話しかけてきた。

下から真すぐきている踏跡に出、間もなくホーマーサドルに着く。反対側はクラッドダウ（Cladda）川南支流の源流に、すっぱり切れおちている。草付と岩場が交互にあらわれる急な尾根を登る。岩はしっかりしていて易しいが、部分的にワイヤロープが固定されている。尾根の両側は谷底まで切れおちて、高度感のある所だ。やがて広い雪田に出、右に登っていくとトラバース・パスに続く広い頂上の稜線に出た。

岩の突起した頂上でダーランの展望を満喫し、みなぎる光を

全身に浴びつつ往路を下った。

タイム　ホーマートンネル入口九・四〇―頂上一二・〇〇～一四・一〇―トンネル入口バス停一六・〇五

パーティー　清水・宮原・佐藤・丸山　（清水　功　記）

バーリヤ・ノブ（一八二九メートル）

ホリフォード谷源流の一つ、ゲルトルーデ圏谷のドライクリークぞいに、小さなケルンと踏跡に導かれて歩む。

下界との境のような木立を過ぎ、左にタルボット、右にクロスカット、正面にバーリヤが屏風のような岩壁をめぐらす。典型的なカール底の草原に細いトレールがある。

周囲の大岩壁帯から落ちる無数の滝を見上げながら、伏流のゴーロをたどり雪渓に出合い本流を確かめた。タルボットの東北稜末端を左に廻りこむようなクリークの滝下を左岸に渡り、ザレとガラ場をなだめながら高度をかせぐ。クリークは二〇メートルの大岩のつまった滝場が三ヶ所あり、その上はスラブ帯のナメ滝になっている。

残雪からスラブ帯にルートをとって、乾いた花崗岩のスラブを快適に斜上し雪田を越える。細いナメがいく筋も流れる、傾斜の緩いスラブを過ぎ段状を上ると、流氷を浮かし氷河舌が岸をうめ、岩場から小滝がそそぐ岩場の懐にブラックレイクが、ブルーの空を写して静かなたたずまいを見せている。

レイクを左下に大まかな尾根状のスラブを直登し、障壁下部をなめて伸び上る大雪渓をトラバースぎみに斜上し、小さなレイクを見下しながら、ゲルトルーデサドルに着く。周囲の岩山は谷底から急峻に、何のためらいもなく頂稜まで一気に立上るものばかり、ミルフォード・サウンドも眼下の近くにあり、山の鋭さを改めて知らされる。ここまではトランパーも登って来ていた。

やせた矮草の中にかすかな踏跡があり、露岩帯を越し稜線から落ちる、南面の広大な頂上雪渓に入る。傾斜がきつく、キックステップをきかせて直登し、一呼吸の後になだらかな雪稜に達し、大岩が重なり合うようにして高くなった頂上に立った。

北面はスッパリとそぎ落ち、レイク・アデレイドを足下に見下す岩壁の山であった。居あわせたニュージーランドの登山者二名に、山名と地図を照合しながら昼食をともにする。強烈な太陽と、屹立する見渡す限りの岩山と氷雪のコントラスト、素晴らしい眺望をほしいままにし、悪天に苦労した北部ダーランに何度も目を向けて頂上を後にする。

稜線続きの手近な所にマウント・バーリヤがあるが、別隊との合流時間もあり、割愛してアデレイド側に下るニュージーランド・パーティーと別れた。雪渓を快調に下り、サドルで女性三人のパーティーとあいさつを交して、素晴らしい足をみつめた。彼女達はショートパンツであったのだ。タルボットの北壁

をあおぎ、中部ダーラン初めての日本人の足は、スラブから雪田へ、ガラ場から草原を集合時間を気にして急ぎ下った。

タイム　トンネル東口九・四〇―サドル一三・〇〇―頂上一四・一五～一五・〇〇―バス停一六・五五

パーティー　秋山・斎藤・中村・塚田

一月八日　天候晴

（中村浩一　記）

山岳　第六十三年（一九六八年）

ウェストン「日本氷河遺跡論」と明治十年代前半の氷河不存在論その他　岡山俊雄
ロシュ・ゴル　一九六七年　一橋大学山岳会
ヒリシャンカ・グランデ　一九六七年　田中元
マウント・コーベ　一九六七年　大野光彦
ペルー・アンデス　一九六七年　横地康生
マッキンリー山南壁中央稜　佐々木孝雄
山岳会初期の人々　中村清太郎
私の登山　松本善二
ヤジュン峰登頂（一九六七年）　増永迪男
ゴーレン・ゴル源流を探る（一九六七年）　宮森常雄
ヒンズー・ラジ　一九六七年　海老原道夫
ティリチ・ミール　一九六七年　高島一芳
エルブールズ山脈での合宿をふりかえって　浜野吉生
サンタ・マルタ山群紀行（コロンビア）　山本良三
ボリビア・アンデス（一九六七年）　関田美智子
ヘス峰登頂（一九六七年）　中村純二
小川登喜男君を憶う　成瀬岩雄
追悼・図書紹介・会務報告・英文梗概　松田雄一
海外登山年表＝一九六七年＝

A5判三三〇頁・写真四三葉・地図二一面　定価二三〇〇円

◇

山岳総索引

第二十六年第一号（一九三一）―第六十年（一九六五）までの総索引　定価一〇〇〇円

山の地名と歴史

原　全教

本稿は標式的な例として、秩父山地を対象として述べることにした。

序　説

一、山の地名

山へ行って気づくのは、山でも谷でもいたるところ、実に地名が多いということである。それら地名は、そのまま、今日私達が山へ行くについて、計画を立てるに当っても、仲間と話したりする場合に利用するためにも、一応知っておくのがべんりである。

山の地名（以下、略して単に「地名」という）には、一見すぐその意味が理解できるものよりも、理解できないものの方がはるかに多いことも、永い間山登りをしてきた者にとっての体験であり、やはり知っておきたいと思うのが当然であろう。

1　山里の発祥と地名の発生

原始から古代にかけて山里が発祥し、地名が生じ、狩猟などの採取経済に依存した時代、すでに山仕事の目標として、さらに仕事の場に往来する交通上の目安としても、一応地名が行き亘っていたものと推定される。

さらに、そのような古い時代には、山仕事に当るにしては個人の力は微弱で、すべて集団の力を結集する必要があったから、互いに説明の必要上、狭い地域に地名が集中したことであろう。それも初期には地形を意味する地名が多く、軽く普通名詞のように通用していたであろうが、時代の推移によりその意味が次第に不明になり、ついに単なる符号化してしまったのに、実用上は別段の不便も感じないで、現代にいたったものと考えられる。

2　言語と地名、日本語の問題

イ　従来、奇異な地名、耳馴れない地名は、たいていアイヌ語だろうと言われたものだが、日本語の系統と祖語が、果して北方系か南方系か未だ決定は見ないまでも、比較言語学の成果として、蒙古・朝鮮・北方少数民族・アイヌ・中国南方少数民族・東南アジア民族・琉球、それに古日本語など、十種程度の民族語の混成だろうという推定である。

地名の語源を解明するに当っても、このように山の地名以前の日本語研究の、大きい壁に行手を鎖されているのも現状である。こういう眼でみつめるとき、地名には右に列挙した諸語の混入を思わせるものや、時には生の形で介在しているかを疑わせるものさえある。

これらの解明は先学専門家の業績に仰いできたが、逆に地名の解明を進めて行くうちには、日本語研究の一助とならないものでもないとも考える。

ロ　方言の流動性

地名は全部、その地方の方言で成り立っていると云えるだろう。だが方言には空間の流動と時間に伴う転訛がある。たとえ現代のような情報伝達機関がなくても、いつの時代にも方言を伝送する境遇の人々と職業人があった。廻国巡礼僧・旅芸人・行商人・渡り職人などがまず挙げられる。

また古代中世に、中央より任命派遣された地方官である国司、守護などが当時の標準語としての中央語、前任地より伝播した方言などは、大きい影響力を及ぼしたことであろう。

一例として筆者の郷里能登半島の奥地にては、現在の状況は不明だが、六十余年前の往時を追想するに、中世の公文書や公卿日記に散見するような言葉が、日常用いられていたことを想起するのである。

3　地名研究の目的

一登山者として、地名が山里の生活生業によって生じたものであることから、逆にこれを解明することによって、記録に残らない山里と山の歴史を復原し、現在、私達が歩いている山の古い姿を知る一助にしようというのである。

二、山の歴史

ここで歴史の側から、山と山里について考えるとき、いくつかの方向がある。

1　はさきに述べた山里の生活史である。

2　は事件史である。

イ　これには山里内部に起ったもの。

ロ　山里から山を舞台として背景として展開した事件とに区別するのが妥当と思う。これには人災と天災とがある。

人災は山仕事や狩猟に於ける遭難事故と火災であり、天災は風水害に由るものが大半を占め、雪害も無視することはできない。

ハ　つぎは外部の事件で山里が巻添えを食ったものを意味し、これは戦争で、一般に歴史と云えば豪族の興亡に伴う戦争を連想するのが通念であった。

3　政治・戦争の歴史の側面をなし裏をなすのは文化史である。本稿では仏教文化と仏教的民間信仰とをとりあげ、地名との対応、今日の登山とについて考えてみた。

イ　信仰登山

ロ　禅風の弘通―主として曹洞門について

ハ　観音札所巡礼

ニ　石造文化―板碑―石仏

イ　信仰登山について

秩父山地が山域が広大で高いのに、信仰登山の道場となった山が少いということは、その地形に由るものと考えられる。信仰登山を修験道の立場から見た場合、行を主とする上から、参道の幾筋かを要し、参道の要所要所に地形の特徴が要望される。

ロ　禅風の弘通、主として曹洞禅の弘通は中世中期から末期にかけての全国現象であるが、とくに秩父山地においては、雁坂その他の高い峰を介しての草深い山里に、多くの道場の開創を見て、小豪族を代表とする農山村の不安な民心に対処して、行の宗風を以て現実肯定から生死一如の高い宗義を、言葉でなく実践を以て示したことにおいて、一大旋風をまき起したということができる。

なお臨済（りんざい）について一瞥すると、権門勢家に結びついて、祈祷をとり入れたり、本来の禅の姿から外れたような観があった。ただし塩山に開創された向嶽寺門下は、主流と離れて民衆を対象として行くことによって、却って禅本来の面目を宣揚した。

禅は天台・真言と異なり、山岳仏教ではないから、直接山には結びつかないけれども、高い峠の交通史に占める位置と、多くの名僧達の山に対する見方について、考えて見ようと思うのである。

ハ　民衆の仏教信仰上もっとも親しまれてきたのは、観音正しくは観世音菩薩の信仰である。全国では西国三十三ヶ所、坂東三十三ヶ所、それに秩父三十四ヶ所を合して、日本百観音霊場とした。秩父三十四ヶ所は外秩父の北西辺から、それに隣る奥秩父東辺にかけて、近くは一キロ、遠くは四キロ～八キロ程度にある寺々のうち、地形上特徴のある地点や、眺めのよい地点にある寺々をつないで札所とした。

小さい峠を介して山里に配された札所巡りをすることは、平地旅行と登山の中間的なものとして、今日のハイキングに一致し、観音信仰という精神の支えをもつことに、農山村における文化史の意義がある。

ニ　石造文化

秩父山地の峠の交通史から見て、今日豊富に残されてある板碑に着目した。中世全期に盛行した板状石の供養碑である。地

名が無形の目標であるのに、有形の目標として山路を飾った。秩父長瀞周辺に産する緑泥片岩という好適な材料により、武蔵の平野から山里にとくに発達した、工芸品としても文化財の価値の大きいものである。

そのほか同じ意義をもつ小石仏群も一考に価いする。

各説

一、地名と山里

1 山里の発祥

奥秩父の高燥な山懐や深い谷間に、多くの山里の存在を見受けるが、一般にこういう山里を、平家落人の隠れ里といったものである。

秩父側は後北条、甲斐や信濃側の山間部には武田の、両氏の遺臣が各々土着したことは事実であって、隠れ里というのはある程度当っているが、源平合戦の後、何もない山奥へ落ち延びた平氏一門が、村を開拓したというのとはちがっている。

これら山里の成り立ちは、ごく大まかに言うなら、本来すでに住んでいた農民の中から、有力者や指導者層の者たちが、武田や北条という大々名に臣附して、中世土豪から一度戦国武士へ脱皮成長し、両家滅亡ののち、郷土の故山へ帰って、再び先祖伝来の山里の姿に帰したと見るのが正しいであろう。

一方、地名や方言から考察して、ぜんぜん別方面から、ときには異民族さえも混入したことがないとも云えない。確然たる遺蹟遺物の発見をまって、はじめて公言すべき事であるが、各地の発見などから類推して、本稿の山里というものをも原始・古代の発祥と仮定して、これからの説明を進めようというのである。

人里が発生する条件の第一は、水と日光である。つぎに自然の災害—風と水—から生命財産を守らなければならない。南向きの平地で背後に山を負うていれば、風をさえぎるのに屏風の役目をし、前面に川をめぐらしていれば、山と川とが一族を守る砦の機能を発揮する。地勢上水田耕作は望めないが、畑作において家の周囲より、人口の増加に伴い、下流とまた奥地へ出作を試み分村もする。

2 峠の発達

採取経済から交易経済への過程において、谷の下流よりも、背後の山を越して他国他領との往来が期待される。各々の産物を以て有無相通ずるためには、同系の川下より、むしろ気候風土のちがう他国他領に依存する方が、有利となる場合が多い。

里の周囲の短距離の交通から、往還として峠の機能が大きくなると、峠の名前が複数名となり、命名法は相互に相手方の村名や里名がつけられる。

峠を介しての交易から婚姻に発展し、近親婚の弊害から避けられる。

3　中小豪族の成立

里の本家筋とか有力者は、指導者として一門一郷を率いて立ち、経済力と同時に武力を蓄積する。こうして地侍（じざむらい）・土豪が成立する。これは農民の中から自然発生することもあるが、本来は古代中世初頭に、各地の主要な土地を占拠した国司・郡司などの有力者の子弟が、分封独立して新規土地を開拓し、あるいは家柄によって先住者に君臨して、これを家の子に組み入れて新しい支配者となった例も多い。

他領と通婚すれば、共通の利害を生じ、より大きい敵に対する攻守同盟を結んだり、攻守同盟の必要から政略通婚も盛んになる。

二、事　件　史

1　武田と北条の興起

清和源氏の貴種出身たる武田氏は、甲斐源氏の棟梁（とうりょう）たる地位を得たものの、甲斐一国の統一さえ意に任せなかった。古代末期から中世初頭には甲斐の守護であったが、大族だから傍系や庶流も諸所に割拠し、その反服離合に悩まされつづけた。

それが漸く一段落ついたのは、晴信（信玄）の父信虎の代になってからのことだった。

それでも同格同族の逸見（へんみ）・小笠原はついに和親せず、信濃や武蔵へ走って永く宿敵となってしまったが、それが幸いしてか、近世まで家を保つことができた。

武田より約五世紀おくれて、北条は秩父山地の東北、武蔵鉢形に北関東の拠点を確保するや、従来群立していた武蔵七党その他の豪族は、その桁ちがいの政治力武力の下、競ってその傘下に入った。

ここに奥秩父の主脈を挟んで、二大豪族が対峙することになった。

天正十年（一五八二）に武田が、同十八年（一五九〇）北条が亡び去るまで、交通の中枢雁坂を中心にして大小の事件が連続するが、決定的事件はなかった。高い甲武国境が障壁をなしていたからである。

さきに述べたように、局地に群立していた中小豪族は、大豪族の他国の大きい戦争に従軍して、桧舞台に登場するうちに、戦国武士に脱皮成長して職業武士化して行った。

2　山岳戦展望

秩父山地を背景とし仲立とする事件（戦争）を、年表に依って展望しようと思う。

イ　安田氏滅亡

建久五年（一一九三）八月十九日　甲斐源氏安田遠江守義定（一一三四―九四）、源頼朝より討手を受け、香華寺放光寺（塩山市松里）に入りて自害、六十一歳、安田氏滅亡。

義定は武田家の家祖太郎信義の弟で、頼朝の挙兵には兄弟一

門を引具して率先参加して、源氏再興に抜群の勲功があったのに、再興の覇業成るや、頼朝の有力同族討滅政策の犠牲とされ、義定に謀反の野心があるとして突如大軍を差向けた。

義定は山梨郡牧之庄（現牧丘町）の小田野（皷川中心）に居城していたが、その辺（奥千丈）一帯に戦闘は連日繰り返され遂に滅亡した。

皷川（小田谷ともいう）辺に義定関係の遺蹟戦蹟は多いが、城址・居館などの関係以外の、戦蹟地名というものは、どうも地名に適宜宛字したものを、後世、字によって附会したものが多いようである。究明するとそれ以前、地形地勢によって名づけられたものが多いようである。

一例を挙げるならば、皷川は鎌倉の軍勢が皷を打って進軍したとか、切差・赤芝・漆川は切ったり差したり、その血が芝を赤く彩り、川へ流れて漆の如くどろどろになった、の類である。

ロ　武田信寿没落

応永二十年（一四一三）二月　武田信寿、かねて関東管領の執事上杉による大菩薩方面よりの連年の圧迫に耐えず、千野（塩山駅附近）の館を捨てて、柳沢の山城（伝柳沢峠北、御屋敷）に退去、十月二十三日卒（甲志）。

ハ　雁坂合戦

応永二十三年（一四一六）十月　右、信寿子安芸守信満、上杉禅秀（氏憲）に与して関東管領足利持氏に反し敗る。同二十四年二月六日、菩提寺天目山棲雲寺（大菩薩下日川奥）に入って自害（鎌倉大双紙）。墳墓県史蹟。

同三十三年（一四二六）八月二十五日、信満敗死後、天峰に拠り、孤軍克く管領勢を悩ましたる信満子信長も、武蔵七党勢八月一日雁坂より乱入するに及んで降参（前書）。雁坂、史書に見ゆる始ならんか。

この合戦は信長という典型的な山岳戦武士が、鎌倉方の大軍を悩ましたが、秩父側で鍛えられた伝統的な山岳武士武蔵七党との対決に敗れたという、注目すべき事件である。

ニ　奥千丈合戦

寛正六年（一四六五）七月二日　右信満曽孫信昌（一四四六―一五〇五）、多年専横の権臣跡部景家を誅す。景家父子、小田野城（前出安田義定故城）に於て自害。

安田氏滅亡後二百七十年、再び奥千丈山域が主戦場となった。時に信昌十六歳、弱冠よく武田一門の命運を賭けた大事件であった。この信昌が広厳院（後出）を開基して、甲斐曹洞第一道場たらしめ、ついで永昌院を開いて、これが後年秩父の地に五十三ヶ寺という多くの曹洞精舎が開かれる基となった、秩父山地文化史中特筆すべき人である。

ホ　逸見一門武蔵入り

享禄二年（一五二九）　かねて同族武田と不和なりし逸見若狭守義綱、一門重臣を具して武蔵へ入り、後、鉢形北条に付す。

侍大将として俸千五百貫を受け高松城（秩父郡皆野町）主たり（城址下大通院文書・小鹿野町光源院文書・鉢形北条分限帳）。

八幡太郎義家の弟、新羅三郎義光の孫清光が逸見姓を名乗り、その次男信義が武田を称したことから見れば、むしろ逸見の方が本家とも考えられる。

また義綱の俸千五百貫というのは、石高にして五千石～九千石くらいで、新規の召抱えとすれば大変な高禄であり、以前から秩父の豪族と親交があって、その推挙もあったであろうし、侍大将という実戦司令官の要職についたことも、武勇抜群だったことを物語る。後に北条が下総国府台（市川市）に里見氏との合戦で義綱は討死するが、剣術の甲源一刀流は義綱から出たといい、その菩提寺光源院の近所に子孫が現存し、戦争前までは秩父の逸見道場と云えば有名なものだった。

また義綱は、曹洞禅が雁坂を越えて秩父の奥地に弘通した、直接素因を作った人でもある。

ヘ　武田一門武蔵と通謀

永禄三年（一五六〇）十一月三日　武田廿人衆（警察隊）中牧（牧丘町）にて挙動不審の士を捕う。鉢形北条一門藤田右衛門佐にて、晴信叔父勝沼五郎信友と通謀ありし事実判明、信友自害せしめらる（甲陽軍鑑）。

ト　科人雁坂より放逐

年次未考　増城見八なる者、晴信の怒にふれ飯富兵部これを護送、雁坂峠上にて追放に処す（甲志）。

分国追放というのは、かなり重い罪であった。雁坂は、その一つの関門としての先規事例があったものでないかと思う。

ここで甲斐国志は雁坂の語源について「雁坂は駆坂の義にして科人駆逐に由るならん」と、一応穿った註を加えているが、私はこれを否定し、また鳥の雁とも採らない。

これは天下の往還で毎年道普請をするとき、草を刈るのがなかなか大役で、これに因んだ「刈り坂」と思う。

合羽坂（南相木川）、刈場坂（正丸峠東）など、この例である。

チ　武田勢武蔵進攻

永禄十三年（一五七〇）二月　武田勢武蔵討入（光源院蔵山県三郎兵衛尉制札）。

3　秩父山地大混乱

以上年表に示したものは、四世紀に亘る武田家が漸次隆盛に赴く過渡的現象であるが、以下は僅々十年間に武田家滅亡にいたる、その都度、秩父山地を大混乱大雑沓に陥れた一連の大事件である。ただし一々註解は加えない。

リ　武田晴信卒去

元亀四年（一五七三）四月十二日　晴信、武田勢総軍を挙げて大征西の途、病俄に革り信濃伊那郡駒場の陣旅に卒す。行年五十三、遺命により三年喪を発せず（諸史）。

ヌ　信虎葬儀

天正一年（一五七三）三月七日　勝頼（晴信嗣）、多年流寓客死せる祖父信虎の為に、信濃佐久郡竜雲寺東堂北高禅師（後出）を大導師と仰ぎ、大泉寺（甲府）に於て洞家五百僧を招じて葬儀を営む。甲斐国空前の盛儀なりと（甲志）。

ル　武田勢大敗

天正三年（一五七五）五月二十二日　勝頼甲軍総力を提げて、三河国長篠に於て織田勢と激突。宿将老臣五十人討死、将兵の死傷数千、空前の大敗を喫す（諸史）。

ヲ　武田晴信葬儀

天正四年（一五七六）四月十二日　勝頼、恵林寺（塩山市）に於て父晴信の葬儀を営む。山主快川紹喜禅師大導師となり、甲信臨済の長老衆僧随喜千余人、参列の一門臣下数千、参拝送迎の衆庶数万、涕涙悲泣せざる者なし。

ワ　武田氏滅亡

天正十年（一五八二）三月十一日　織田・徳川十万の大軍に急迫せられ、かねて約ありし郡内（都留郡）に宿将小山田信茂を頼らんとて笹子口に到りしとき、突如小山田の叛に会し、血路を日川の窮谷に求めて、田野（現景徳院）に於て一門自刃、勝頼三十五歳、夫人北条氏十九歳、子信勝十六歳、殉節の士四十人、侍女十余人、僧二人。

○同朝、勝頼妹於松を論して石黒七兵衛を附して自刃の場より逃れしむ。松、諸行武蔵案下（八王子北）に到り後出家す。

○近臣土屋惣蔵、田野奥、大蔵沢狭路に立ち、川上より襲い来りし裏切者を迎え、単身数十を切って日川の深渕に落し、主君自刃の寸暇を得せしむ。

○近臣田辺左衛門尉、主命に依り、甲斐源氏相伝重宝楯無鎧を奉じて自刃の場を去る（塩山市菅田神社宮司談）、現品同社蔵、国宝。子孫現存。

○近臣謀、武田氏軍旗二十余幅を奉じて雲峯寺に托す（雲峯寺住職談）、現品同寺蔵。

4　武田氏滅亡後の秩父山地

滅亡後の数ヶ月は混乱に明け混乱に暮れた。

カ　織田勢恵林寺を焼く

天正十年四月三日　織田勢恵林寺に乱入、晴信経営の大伽藍瞬時に焼亡、晴信禅要の師快川及び近隣名刹の長老、山内の大衆等百余、大山門楼上に焚死（諸史）。

ヨ　北条―徳川対陣

北条氏直、四万五千を具し、小田原より中山道を迂回して、甲斐巨摩郡浅尾原（茅ヶ岳西下）に到りて徳川勢と遭遇、正に大激戦に及ばんとせしとき、旧武田方たりし津金・小尾・小池の諸党勢、塩川西岸の山中より北条勢を夜討し徳川方を利す。

タ　鉢形勢来援

武田遺臣倉科（牧丘町倉科）の土大村三右衛門の乞に応じ、

鉢形城主北条氏邦八千を提げて雁坂口より来援したるに、すでに機を失し戦わずして撤退す（甲志）。

レ 大村伊賀殉節

天正十年六月五日　大村伊賀守（三右衛門と同人か？）大野の孤塁に徳川勢を迎えて全滅（牧丘町郷土史）。子孫故地に現存。

ソ 大村忠昌武蔵へ

同年十二月　伊賀守一門、与一郎忠昌、雁坂を越え栃本に土着（大村氏文書）。

5　鉢形落城・北条氏滅亡

以上は武田方の消息であるが、北条側では、

天正十八年（一五九〇）六月十四日　かねて豊臣軍、前田・上杉十万の重囲裡に在ること三ヶ月、鉢形城遂に落城。

この時数千の城兵は秩父山地に遁入し、その大混乱は八年前の武田の場合を彷仏させる。

6　敗戦による逃走と帰農

イ　家康による武田、北条遺臣収容政策

二大豪族の滅亡後、この両氏の分国甲斐と武蔵を承継した徳川家康は、さらに、山岳戦に長じ最も精強の聞え高き武田の遺臣約千名を家臣団に加えた。彼等によって従来苦杯を喫した家康は、彼等の武力を逆用して、爾後の関ヶ原、大阪両陣に於て最大の効果を発揮した。また北条滅亡の際は、八王子の守兵数百を家臣に組み入れ故地八王子に配置して、小仏の要関に対し江戸西辺を固める尖兵とした。

ロ　帰農

右に述べた徳川の、武田・北条の遺臣収容は巧妙を極め、彼等は新しい主の下に、兵農分離による職業武士として人生の再出発についた。しかし全体から云えば、ごく一部に過ぎない。武田氏衰運が著しくなった末期には、当時和親を結んでいた北条へ走ったものも多かったが、大半の者は戦列から落伍逃散して、それぞれの郷土へ帰り、弓矢刀槍を再び農具に持ち換え、再び立身栄達の日を見ることなく、近世農村統制の枠にはめられた。

7　事件と地名

以上は一応記録に見えた事件の代表的なもので、小事件は日常無数に起ったであろうが、地名とはなっていない。どんな大事件といえども、山里に先祖以来暮してきた人たちにとっては、一瞬の出来事としか映らないだろう。

事件の当事者たる武士たちにとっても、自分たちの郷土にはすでに、生活上交通上の地名がいたる所に出そろっていて、それを利用すれば事足り、それ以上、まして敗戦の記念地名など発生するわけもないだろう。

二大豪族の滅亡によって、一部は徳川その他の大名に出仕した者も可なりの数に上ることも、前項で述べたけれども、大半

の、恐らく数万に上ると思われる人々は、ただちに郷土に帰って安住し得たわけではなく、ある期間勝手知った間道を利用して縁故の家に潜伏し、山中や谷の奥に身をかくした者も多かったであろう。大体秩父山地全般に峠が多いのであるが、今日全く地元の人にも忘れ去られた峠が無数にあって、名のみ残っているものも多いのは、こういう非常の場合に逃れるための間道と推定してこそ、その存在の意義が理解される。

8　遺蹟と遺物

事件は地名とならないことを強調したが、事件の当事者たる大小豪族たちが生活した址は、多く遺蹟として多少の痕跡をとどめて、歴史を知る手がかりにはなる。城址とか館址などがあり、またその附近に関係地名が残る。

安田義定の遺蹟を跋川に索めれば、御所・仮宿・馬場・御生害石など、またそこの小田野城址に攀じれば本丸・二ノ丸・三ノ丸・井戸沢などの地名があり、また義定遺臣の末孫という家もあって、今に八百年前、旧主の悲運を語り伝えている。

墓は遺蹟とも遺物とも云えるが、事件遺蹟には社寺があり、社寺の縁起は史実とは云えなくても手懸りにはなり、そういう地域内には事件関係者の墓と称するもの、位牌などがあり、地名が無形の標識であるのに、こちらは有形の目標としての意義をもつ。

三、文　化　史

1　信仰登山

秩父山地には信仰登山の対象となった山はきわめて少い。これは地形に原因がある。信仰登山を狭義に解すれば修験道である。

修験道は実践とともに形式上の行事を重んじ、山を仏道修行の道場に見立てて、参道としての尾根や谷に修行の階梯を象徴した地形地物を利用する。この点日本に多い火山はまことに好都合であるし、火山でなくても地形の特徴があればいいのであるが、秩父山地は山城の広大な割には、信仰登山の対象となった山は少い。

第一に火山がなく出湯(いでゆ)もない。谷は深いが山は個性に乏しく、森林の深い連山型で、そのことは地名の面においても表現されている。つぎは岩山が少いこと、冬期の降雪が少いこと、以上のことから遠望した場合の山容が平凡である。

今、信仰登山の対象となった山として金峯と両神の二つを挙げる。

イ　金峯山

甲斐国志に「吉野に朝廷ありし頃、大和の金峯に集いし諸国の山伏、兵乱をさけて悉く甲斐の金峯に集まり」とある。

登山道は甲州九筋、信州一筋とし、九筋を大別すると、御岳(みたけ)

の金桜神社を里宮とする南口と、琴川に沿う米沢山金桜神社を里宮とする東口の二筋を主道とし、秩父山地西端に位する塩川ぞいの西口これにつぎ、他は途中においてこの三道に合する脇道である。

とくに東口は最古の参道として開けたといい、延喜式内金桜神社は東口里宮だという。現在は御岳筋が表口の感じがするが、入口の昇仙峡が地形的に奇抜であるからで、この道の要所は天保十四年（一八四三）に、御岳下の猪狩村の篤志家長田円右衛門が三十年を費やして独力開いたもので沿革は浅い。それまでは右岸の尾根を通った。

東口は天正十年三月、武田氏滅亡後の一連事件として、恵林寺焼打ちについで、織田方の将河尻鎮吉による金桜神社と、その別当雲法寺の被災により一そう衰微したようだ。

昭和二十五年、御岳の社殿は全焼したが、それらは甲斐源氏の祖、逸見清光と武田信義父子が建立した旧国宝であった。また信虎・晴信・勝頼の武田全盛期の居館が、甲府（現武田神社）に在ったし、御岳の御師が御岳衆という武士団の特殊の地位を保証され、それがそっくり徳川に承継されるなど、いろいろな好条件があったようだ。

金峯の栄えたのは、とくに東口の場合、南北朝から室町末に及ぶ三百年の長きに亘るものと云われている。

現在、かつての奥宮本宮であった金峯山頂は単なる遺址となり、純然たる登山者の対象となってしまったが、その口にも地名が豊富に遺り、信仰登山史と蔵王権現信仰史、金鉱採掘史など多くの研究課題が埋没している。

近くに富士という海内無双の山があり、金峯の繁栄もひとつには富士の繁栄につながるものがあったであろう。

ロ　両神山

金峯が二千六百米の高度をもつのに比し、両神は千七百余米に過ぎないが、全山奇岩怪峯そそり立ち、周囲をめぐらすに多くの谷を以てし、信仰の順序段階を示す参道の地形地物は多彩で変化を添えている。遠望はとくにすぐれ、武蔵野を走る列車から、外秩父の前山にのぞく峨々たる山容は幻想に充ち、欧洲の古城を想わせる。

参道としては沢に五筋、尾根通り四筋が考えられ、それが山頂へ集中している点、効果的である。

尾根筋は高度の関係で薮がひどく、現在は歩行困難であるが、なお突如足許に神仏の石像を見出し往時を偲ばせる。

この山には神仏の石像が多く、四十年前に調べた図面で計算すると約百体に及んでいる。

これだけ多くの石像が集中している例は珍しく、なおひとつの理由は、明治維新後の排仏毀釈にも奥まっていて、役人の目を免れたことにも在ると思う。

ハ　信仰登山と現代登山

信仰登山の要旨は信仰と実績の両面に存する。老練にして強力な先達の指導の下に集団訓練が課せられ、六根清浄や精進潔斎という言葉に示される、身体を清めることによって心中の邪念を払いのけようとする。

仏教修行上五十二の段階を経て、菩薩―仏の最高位に到達するのに山を見立てた着想は非凡であり、山の特徴を生かして沢に尾根に参道を設定して、多くの参道を山頂の一点に集中させようと企図したことは、今日、多くの山の会が、全体の合同訓練と懇親を兼ねて実施する集中登山と全く揆を一にする。

未知に対する好奇と憧憬は、平面より山という立体地形に対して、肉体の駆使により高められ、それに伴う冒険と畏怖を乗り越える心身両面の自己克服は、仏教聖道門における自己究明に外ならず、初期修験道も外見の修行形態が単純で、このようなものであったと想像される。

頂上へ立ち得た喜び、満足感は修験道における修行一段落、大願成就という詞によって示される。東洋人とりわけ日本という立体的な風土に生を享け、修験道発足以来現代に達する千年の伝統をもつ、日本人の胸に萌す宿命的感懐であろう。

二　地名との対応

山の地名は、原始古代から中世へ山里の発生とを仮定し、その生活から生れたものと強調してきたが、事件史の章においても述べたように、歴史上の大小事件によっても、それを記念する地名は残らなかった。

ところが信仰登山の場合、金峯を一例として見ても明らかなように、おびただしい地名を遺し遺蹟を物語ること、山里の生活上の地名に劣らない。

信仰登山が地元の人々の、やはり生活の一部としてとけこんでいたことを物語り、地元の人々の山を神格化し、農事増産、人間的幸福に及ぶ漠然とした願望を山に願う東洋人共通な原始神道的なものに、天台、真言の秘密仏教面における加持祈祷が加わって山岳仏教に展開し、さらにそれらを混成した修験道によって具体化され、単調な山里の生活に民俗行事としての慰安娯楽ともなったのであった。

ある山を信仰登山として想定し、頂上に日本神道や仏教守護神の諸天などを合祀し、尾根に沢に仏教修行の段階としての地名を附し、地形の特徴少いときは石像を設置して補い、参道の単純さを補強しようとした。その石像が有形目標としてそのまま地名となる。

また金峯でも両神でも、富士や、大和の金峯、木曽御岳の地名を借用したらしいものも多くある。

つぎに考えることは信仰登山の対象となった山は、地元にとっては、自分たちの生活の延長の信仰と娯楽を兼ね、諸国より参集する行者の為に、受入態勢を整備して収入源とした。

その面の経済発展により、原始的な山里より近世型の連村街

村の形態に進む。

今日、御岳下の猪狩、西口塩川ぞい、東口の琴川ぞい、北口川端下などにわずかにその面影をのこして、そぞろ回顧の足をとどめさせる。

本来の農耕林産より、宿泊労役の金銭収入の貴重さは、山の開山先達に最大の敬意を払い、生活地名を抹消しても、それらの人々の遺した地名遺物を尊重して現代に伝えてきた。

2 曹洞禅の弘通

秩父山地における文化史上、最大の事蹟は曹洞禅の弘通である。とくに注目すべきは、

一に、事件史に見てきた豪族の興起によって弘通発展し、それらの衰微滅亡による多少の消長はあっても、次の支配者たる豪族によって尊重され、さらにその豪族も亡び去っても、在地山里の人々によって支持されて現代に及んでいる。

二に、一寺の開山となった僧が、敵方に対しても積極的に弘通に当り、怨親平等の仏教精神、禅の面目をよく発揚して、高祖道元禅師の遺誡を実践躬行したこと。

三に、当時挺身弘通に当った洞門の竜象たちは、峻しい甲武・甲信・武信・上信・上武の高い山波を越して、草深い山里に道場を開いて、つぎつぎと弘通して行った、山の交通史上の意義である。

地名との相関、禅僧たちの山歩きと今日の登山との対応にも考えて行きたいと思う。

禅風弘通略年譜

イ 秩父臨済禅発祥

年次未考　元朝の帰化僧、鎌倉瑞鹿山円覚寺開山無学祖元（一二二六―八六）法嗣高峯顕日（一二四一―一三一六）甲斐より秩父へ、大血川（三峯東南）山中に大日向山太陽寺開創（甲武山里各古老）。

ロ 多摩奥の臨済禅

弘安五年（一二八二）　璧雲、多摩川最奥川野に浄光院開創（新篇武蔵国風土記稿、以下略して「武記」とす）。

観応二年（南朝正平六年、一三五一）　鎌倉巨福山建長寺三十七世物外可什、足利尊氏の請により、多摩川峯谷口に金鳳山普門寺開創（武記）。

ハ 甲斐臨済の大宗

元徳二年（一三三〇）　高峯（前出イ）下第一座夢窓疎石（一二七五―一三五一）鎌倉の重臣二階堂道蘊の招を受けて牧之庄（塩山市松里）に乾徳山恵林寺（前出事件史）開創、甲斐臨済の大宗たり。

これより先、夢窓、乾徳山頂に於て一夏面壁（坐禅）あり、山下徳和に小庵を結ぶ（徳和古老）。

永和四年（一三七八）　紀伊国由良荘（和歌山県美浜町）興

国寺開山心地覚心三代の法嗣抜隊得勝（一三二七―八七）、甲斐山梨郡高森（塩山市竹森）鹿羅山岩壁、笛吹川一ノ釜岩上に於て面壁、高森に鹿羅山高森院開創。

康暦二年（一三八〇）　抜隊武田信成の請により塩山向岳寺開創。東国法灯派大道場たり。（向嶽寺史・甲斐名勝志・竹森里談）。

門風秩父にも及ぶ。

ニ　曹洞禅秩父に入る

宝徳二年（一四五〇）　相模国足柄郡大雄山最乗寺開山了庵慧明法嗣無極慧徹、足利義教の帰依を受け武蔵国入間郡竜ヶ谷（越生町）に長松山竜穏寺開創、外秩父西北より奥秩父東辺に法筵を布く（高山不動、無極願文）。

ホ　甲斐曹洞第一道場

寛正一年（一四六〇）　了庵三代の法嗣、伊豆国賀茂郡大見村妙高山最勝院開山吾宝宗璨法嗣雲岫宗竜、甲斐八代郡中山（一宮町金沢）に、豪族古屋対馬の請により妙亀山広厳院開創（最勝院・広厳院各伝、妙亀譫語集、日本洞上聯灯録）。

武田信昌以降累代の外護を受け、甲斐曹洞第一道場の名高く、門末六百九十寺、法灯甲斐一円に遍く、遠く安房、武蔵秩父、多摩の山野を光被す。

ヘ　甲上信曹洞禅大宗

推定右同時代　吾宝門下第一座拈笑宗英（一四〇九―八二）信濃国小県郡祢津（東部町）に定津院開創、門末三百六十、秩父山地西北辺に門風振う（洞聯、最勝院・定津院各伝、甲斐国社記寺記）。

ト　禅風秩父越根本道場

文明十三年（一四八一）　広厳雲岫（前出ホ）法嗣同院二世一華文英（一四二三―一五〇八）従兄武田信昌の請により、山梨郡落合村矢坪（山梨市矢坪）密刹禅定院を改めて洞院となし竜石山永昌院を創す。秩父山地西辺最奥まで曹洞禅弘通の根本道場たり（譫語集、永昌院・大通院・光源院各文書・甲志・武記）。

チ　禅風大菩薩を越ゆ

文明十四年（一四八二）　一華（前出ト）永昌院開創について、武蔵国多摩郡三田領柚保庄（青梅市根ヶ布）領主三田弾正忠氏宗に招せられて、密院故址に高峯山天寧寺創（天寧寺文書、大永一年鐘銘、譫語集）。

一華、川上除野に成就庵創、爾後一華月例本寺広厳院拝登の宿所たり。明治初廃絶、直下日原川に成就庵渕の遺名存す。

リ　禅風奥州より秩父へ

年次未考　陸中黒石（水沢市）正法寺開山無底良韶法孫天光良産秩父郡大野原（秩父市）に大林山広見寺開創。大宮郷及浦山（現秩父市）に禅風普及す。

ヌ　禅風上毛より多摩へ

年次未考　上野国群馬郡白井（子持山下）雙林寺開山月江正文三代の法嗣益芝永謙、武蔵国多摩郡二俣尾に長勝山福禅（後海禅）寺開創、後三田氏香華寺となる。

ル　禅風大菩薩を越ゆ

年次未考　一華（前出ト）法嗣永昌二世菊隠瑞潭、武蔵国入間郡木蓮寺村（入間市）に金竜山瑞泉院開創（譫語集、永昌院文書）。

ヲ　禅風雁坂越（一）

享禄以後　菊隠の嗣永昌三世一樹存松の嗣、永昌四世悟宗純嘉（一五六〇寂）、逸見若狭の請により、高松城下、日野沢畔に高松山大通院開創（武記、大通院・永昌院文書、譫語集）、近隣洞門の重鎮たり。

ワ　禅風雁坂越（二）

享禄二年（一五二九）　悟宗の嗣、永昌五世敬翁性遵、同じく逸見若狭の請により秩父飯田（小鹿野町）に坂松山光源院開創、禅風秩父郡西北隅に至るまで逼し（永昌院・光源院文書）。

カ　北信より秩父へ

年次未考　定津（前出ヘ）三世雲鷹玄俊法嗣才屋全芸秩父郡信濃石（小鹿野町）に長慶山鳳林寺開創（武記）、経路は十石峠―志賀坂越ならん。

ヨ　北信禅風の大宗

永禄二年（一五六九）　上杉輝虎（謙信）の帰依僧、越後国魚沼郡上田郷、金城山雲洞庵八世北高全祝（事件史ヌ）遥かに武田晴信の請により信濃国佐久郡大井庄（佐久市岩村田）大田山竜雲寺を中興（竜雲寺・永昌院・大通院各文書、永昌院及竜華院宛晴信書状、雲洞庵及竜雲寺宛勝頼書状、甲志、北越雪譜他）。武田氏新版図北信曹洞の中心たり。

タ　竜雲寺千人法疃

元亀三年（一五七二）四月　大檀越晴信竜雲寺に於て九旬の法疃を修し、多年各地山野に陣没せる彼我将兵の菩提を弔す。東堂は北高、首座に永昌六世謙室大益を充てしむ。駿甲上武信の洞門の竜象総て千五百一堂に会す。会中遠近の僧俗雲集し、千曲川原に仮屋を設け参拝宿泊に宛つ。戦国空前の盛儀にして世に千人法疃と唱う（前出各寺文書、甲志、甲陽軍鑑）。

弘通の時期

年表に記したように弘通の時期は、武蔵竜穏寺開創の宝徳二年（一四五〇）から甲斐広厳院の寛正一年（一四六〇）に始まり、武蔵天寧寺、海禅寺へつづき、その間、甲斐永昌院が創せられ、これより武蔵瑞泉院・大通院・光源院開創など、そして戦国のさなか、永禄（一五五八）の百年を最盛期とし、爾後、元亀・天正・文禄・慶長を経て、近世初頭寛文（一六六一）に及ぶ百年を後期とする。

永昌院と向嶽寺と雁坂

永昌院は山梨市の中心から約四キロ西、笛吹川西の棚山の尾根に抱かれた山懐にある。開山の一華文英禅師は、近くの塩山市竹森の出身で、父は武田の当主刑部大輔信昌の父信守の弟六郎光守、高森十三村の地頭で高森を姓とした。故に禅師は典型的な武田武士の家柄を出身とする。

年表にもあるように、臨済法灯派の名僧抜隊得勝禅師は諸国行脚の末、塩山に向嶽寺を開いたが、その前一華禅師郷里の鹿羅山で坐禅し、後ふもとに高森院を開いた。

一華禅師は十三歳で出家して向嶽寺に入り、抜隊禅師亡きあと、その嗣峻翁令山禅師について受戒得度していることも、郷土における深い法縁に因るものと信ずる。

一華禅師の受業の師峻翁禅師は武蔵多摩郡成木村（青梅市）出であることから、一華禅師が後年その近くの柚係に天寧寺を開いたことも、開基となった三田氏宗が、恐らく峻翁禅師から一華禅師のことを聞いたからであろう。

さて永昌院の二世菊隠禅師は入間郡に瑞泉院を、四世の悟宗禅師は秩父に大通院を、五世の敬翁禅師は同じく光源院を開き、三寺の末寺は五十ヶ寺に及んでいる。

禅僧と山の因縁

結果を先にいうなら、広厳院や永昌院・定津院門下の禅僧とその法孫たちは、中世末から明治中期に及ぶ四世紀半を、雁坂・大菩薩から西は信州峠、北は十石峠・志賀坂など大小の峠を越すことで、人生の大半を費したことになる。

禅の方は天台・真言・修験道と異なり、山岳仏教ではないから、比叡や高野のような山寺はない。奥深い山里の一角に介在しているだけのことである。

多くの寺が山里に開かれ、多くの禅僧が山を越していても、直接関係のある山もなく、峠に地名ひとつ遺っていない。やはり山里の人々のつけた地名を、そのまま用いたに過ぎない。現在の登山者とて同じで、地名は山里の生活史より一歩も出ていないことを、改めて思い知るのである。

永平の家風

何故、曹洞の宗風が、草深い山里に隈なく浸透して行ったか、答は単純で明らかである。それが高祖道元禅師の厳しい教えに由来する外に理由はない。

禅師が宋で三年の修行を終えて帰朝するに当り、本師長翁如浄禅師の餞別の言葉に「凡そ大宋国広しといえども、大法を附すは日域の僧道元只一人」と絶讃極言し、さらに「国王大臣に親近すべからず、城邑聚落に住するを得ざれ、直に須く深山幽谷に閑居して一箇半箇を接得し仏種子をして断絶せしむること勿れ」と。

この語に解説の要はないと思うが、短い五十四歳の生涯、禅師はこの教えを徹底的に守り通された。

深山幽谷というのは高度や深さのことではない。権勢や名誉

を求めてはいけない。繁華な場所に住んではいけない。山水風物の美に執着してもいけないが、深山幽谷を歩くことを苦にしてもいけない。

草深い山里で、地侍や農民を相手に、必ずしも高い禅の第一義を説かなくても「行も亦禅なり」で、衣食などは農民以下の枯淡な生活を守り、苦渋に満ちた農山村の人々に対して現実肯定の「行の宗風」を説いた。言葉よりも実践を以て示した。縁に触れれば、小豪族対立の中を敵方へも赴いて法を説き精舎を建立した。敵味方という対立を絶した高処に立ったればこそ、戦国乱世の渦中に、広い弘通をなしとげたとも云えるし、山里相互間には交易通婚も依然と続き、大豪族対立は海面の荒波の如きもので、海面下の静穏さの状態が山里の本来の姿であったと見るべきで、山の低い近畿地方の争乱に、絶えず農民がまきこまれたのとは大に異なる。

高い峠を越すのは、本寺へ法要参列のため、或は本寺から末寺へ、開山忌法幢会に行くとか用務を帯びていたとしても、峠を越すのは、用務のための道中という手段ではない。一歩一歩が禅であり、道に迷い日が暮れれば樹下石上も亦安禅の境地である。

何の為に山へ登るのか、他に問う以前自ら掘り下げるべき自己究明の境涯に属する。

ここで筆者自身の過去を語ることを許されたい。十六歳から二十歳の四年間若狭の草深い山寺で自己究明に身命を賭けた。行挫折して五十余年、永平の家風は一刻も念頭を去らない。禅の第二義的なものとして山を歩きつづけた。しかし古稀を過ぎた今にその回答は出ていない。

3　観音札所（略）

4　石造文化

まず石造文化の代表的文化財板碑について見て行きたい。秩父長瀞や上州神流川ぞいの三波川産の緑泥片岩の特質を利用した板状梯形の供養碑である。時代は鎌倉初期貞永から室町末期に及んでいる。分布は秩父盆地の主邑を中心とし、遠心状に次第に疎らになりつつも、秩父や多摩奥地に及び、信濃佐久相木地方、甲斐国中にも及んでいる。殆どのものが年号を認めることができ、史料価値の高いものもある。すでに先学諸家の発表があるので、筆者はここで詳細を述べないが、高い秩父山地を越えての、この特殊の仏教文化の分布を、やはり交通史上の現象としての紹介にとどめる。一方甲斐の側には石幢が存し、形状は円柱・多角柱である。

最早や与えられた紙数がつきるので、この源流と系統を一言するにとどめる。

中国山西省の主都大同と、それより南の朔県に至る仏寺、道教の廟などに造立されている六角柱・多角錐状の仏頂尊勝陀羅尼幢が、日本に分布した板碑・石幢の渕源であるとの仮定に

到達したのである。

年代は遼の重熙四年以降、金の大定、元―明の嘉靖に及んでいる。私の駐軍地域が局地的であったから、南方の河南・浙江方面には遺物も多く年代も遡り、年号も唐宋など漢民族朝のものがあるだろうと推測するのである。局部的ながら年代では日本と一致し、世情騒然民心の不安という点も相似性がある。

もちろんこれだけでは東西同時発生、暗合とも云えるが、形態から見て、板碑の集合体と考えられる六面幢があるが、この関係は逆で、中国石幢の原形が六面幢となり、その簡略化が一枚石の板碑となって大量造立を見たのであろう。そしてこの伝播の役割を荷ったのは、日本からの留学僧と、宋や元朝、大陸から来朝した臨済の高僧たちであろうと思う。板碑に彫られた文面は多く浄土思想であるが、造立者の戒名に関しては大体臨済系が占め、一部時宗系もある。

大陸よりの分布系路は大陸―九州（殊に国東地方）―四国阿波―安房（千葉）―関東平野―秩父及神流川―再び関東平野及各地方。

以上不備乍ら板碑の章を終るが、両神山のおびただしい石像、十文字峠の六里観音(六体)など、石造文化にも多くの課題が残されていて、中世近世にかけての秩父、甲斐の石造技術の進歩と、多くの名もなき名工の存在を推測するに難くない。

後記

本稿はここ数年来執筆中の「山の地名と歴史」と題して日本を十地方に分けた中から総説の一部と第一部「秩父山地篇」の序説の両抄録である。今回権威ある本誌に発表の機を得たことは筆者の光栄とするところである。五十年に亘り山名の教示、宿泊その他のお世話を受けた秩父山地の諸家、資料の披見に便宜を計られた社寺などの厚誼に対し深甚の謝意を表し、殆ど故人となられた方々の冥福を願うのみである。

追悼

武田　久吉氏（一八八三―一九七二）

日本山岳会の母胎或は前身とでもいうべき、日本博物学同志会の中心的メンバーのひとりであり、従って山岳会創立の発起人七人の中のひとりであった武田博士逝く。

創立に当って発起人は、それぞれの役割を果されたのだが、武田さんの果された役割は中々大きいものであった。溯ると、先ず明治三十七年二月の雑誌『太陽』に出た小島烏水「甲斐の白峯」をよんで、いかなる人か、せめて顔でも見たいとおもい、同志の高野鷹蔵氏から山崎紫紅の縁で、小島烏水の所在をつきとめ、高野・武田の両氏と小島烏水との出合いとなる。次いでウェストン師が帰英の直前、小島、武田、高野、それに岡野金次郎の四人が招かれ、山岳会の設立をすすめられる。さていよいよ創立するに当って、弱冠のものばかりではという話が出て、最長老の城数馬氏が加わることになるのだが、城氏を引張り出したのは、山草会で城氏と懇意だった武田さんの頼みによるものであることは、いうまでもない。（『山岳』第六十一年所収「山岳会創立前後」武田久吉稿参照）

山岳会が創立され、明治三十九年四月には会誌『山岳』第一年第一号の発刊となるが、この初号の校正は全部武田さんの担当ということになり、ゲラ刷を郵送したのでは間に合わぬと、毎日弁当持で本所の印刷所へ通ったという。（『小島烏水 追憶』二十五頁）。その時代に麹町富士見町から本所へ通うのに、どんな交通機関があったか、いずれにしても大変な熱の上げよう、気の入れようであった。山の会も山の雑誌も本邦初出とあれば、このくらいのことは当然かもしれないが、われわれ後至者はこの意気込み、この労苦を大いに多としなければなるまい。この第一年第一号に武田さんの「尾瀬紀行」があり、筆者の生涯を通じて変らなかった尾瀬への執心が、ここに端を発しているのは不思議な宿命とも言い得よう。

小島、高頭、高野、中村、三枝といった面々が、所謂日本アルプス探検時代に高峻山岳をつぎからつぎへと、登り攀じ踏んでいった頃、武田さんは或は札幌に或は仙台にあり、つづいて渡欧留学となって、この仲間に加わっていないことは『山岳』にはっきりと現われているところだが、考えようによっては中中興味あることだ。植物あっての登山という立場を、終始厳格に堅持して譲らない武田さんにしてみれば、たとえ当時東京住いで時間に余裕ある境遇であっても、同志と探検行を倶にした

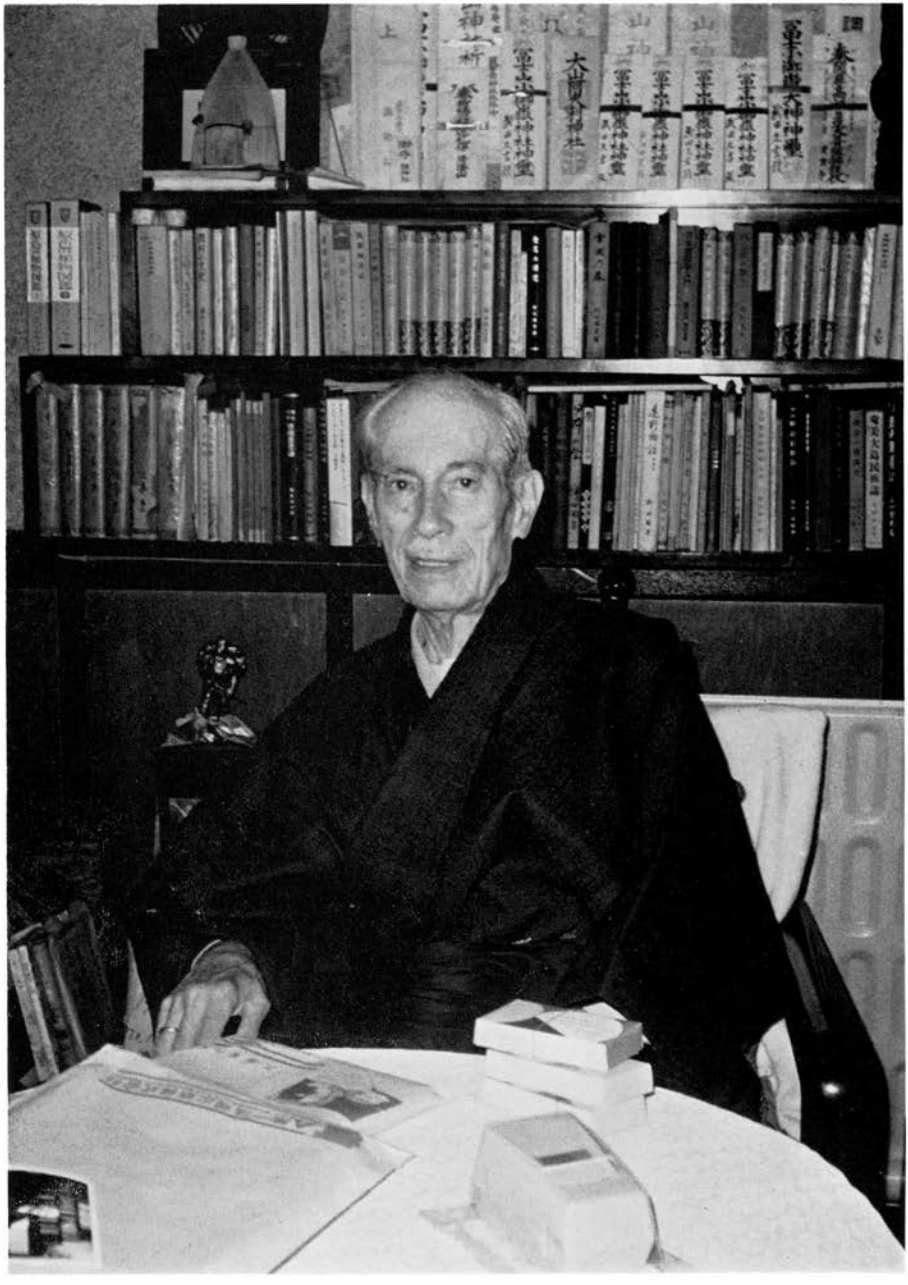
かどうか、私には疑問にさえ思われる。こういったことも生前伺っておきたかったが、今となってはもうおそい。

滞英中ハイランドの山に遊ばれたことは、辻村伊助の「ハイランド」紀行に「平たく云へば、武田君の口車にのせられて出かけたやうなものだが、……」とあるのからも、はっきりしているが、スイス・アルプスへはついに杖をひかれなかった。武田さんの滞英時期とウェストン師の三回目の滞日時期とが、丁度同じだから無理な話だが、壮年のウェストン師と武田青年とがアルプスの峰々を、一本のロープに結ばれて攀じる機会があったならばともおもう。また辻村伊助、近藤茂吉両氏のスイス・アルプス行も武田さんが同行ならば、イキナリ手ごわいシュレックホルンにかからなかったろうと、辻村さんが洩らされたことが、『スウィス日記』巻頭「追憶」の中に記されている。「本来私も此の行に加わる心算であったのを……」とあるが、これが実現していれば『スウィス日記』の内容は余程違ったものになったかもしれぬ。不図しためぐり合わせ、といったことが心に浮ぶのである。

大正三年（一九一四年）二月帰朝後は、〃京都、琵琶湖畔の大津、東京、それから後は諸方に採集兼研究旅行に寧日なく、やがて大正六年の一月に、東京に定住するようになって以来、日本山岳会の幹部の人達との往来が繁くなり〃そうこうする内に〃大正八年十月十五日、高野君の健康状態の関係で、日本山岳会の事務所が急遽私の家に移り……私は庶務を掌った。……編集の仕事も半分以上は手伝わなくてはならない。……そんな事で『山岳』第十四年第一号の如きは、雑録と雑報と会報五十余頁の原稿は私一人で拵え上げたし、第二号の雑録の半分は私の筆に成ったものである。……〃（雑誌『アルプ』八八号―一九六五年六月刊―65～66頁参照）。

近頃の言葉でいえば、優雅な生活で時間のゆとりもたっぷりあったろうが、それだけではあるまい。庶務を引受けたとあれば、『山岳』編集は木暮さん、会計は梅沢さんが分担されても、事務所あての雑務処理は並大抵のことではなかったとおもわれる。四十代の若さとはいうものの、やはり山岳会に対する熱意と愛情が、ひとかたならぬものであったにちがいない。その時代に武田さんの残されたことで、特筆しておかなければならないのは、新たに会員章の制定を見たこと、新旧会員章の引換という煩雑な手続を処理されたことである。しかも新会員章、即ち現行のもののデザインは武田さんのハンド・ライティングによるものであることは、ＪＡＣがつづく限りいつまでも記憶されるべきであろう。（会報二四七号所載「会員章覚え書」松田雄一稿。同二八三号所載「ＪＡＣ会員章図案の作者」永原輝雄稿、参照）

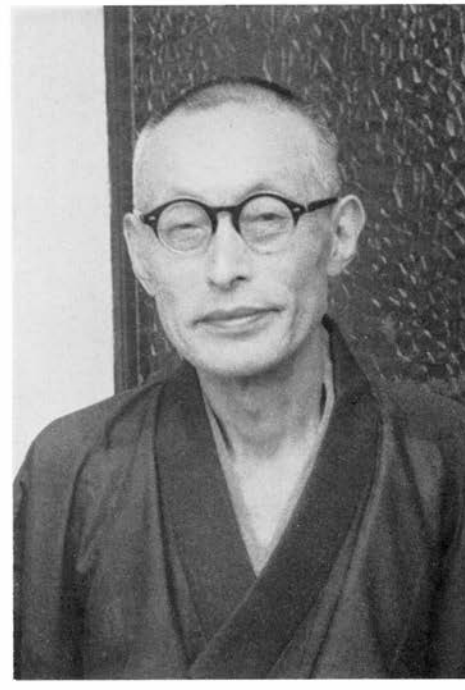
本会の事務所が約二年にして、下目黒在住の会員志村寛氏の許に移ったのは、武田さんの北大講師赴任の事情によるものであろう。年譜によると、その後も京大だの九大だのの講師を引



名誉会員　武　田　久　吉　氏
Hisayoshi Takeda (Hon. mem.)
(1883－1972)

名誉会員　牧野平五郎　氏
Heigoro Makino (Hon. mem.)
(1886～1972)

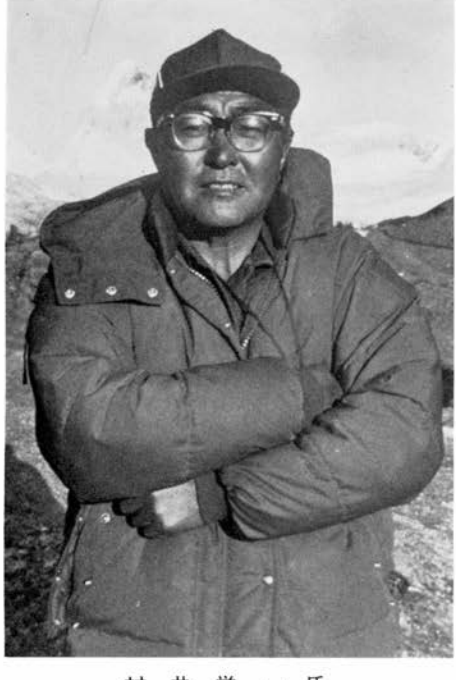
名誉会員　岡埜徳之助　氏
Tokunosuke Okano (Hon. mem.)
(1879～1972)



佐藤隆太郎 氏
Ryutaro Sato
(1891～1971)

岩崎京二郎 氏
Kyojiro Iwasaki
(1899～1971)

逸 見 真 雄 氏
Masao Henmi
(1907～1972)



村 井 栄 一 氏
Eiichi Murai
(1911～1971)

受けられたようだが、いずれも長い期間ではなかったのであろう。私などは武田さんはいつも東京が本拠で、気随気侭に山旅に出かけ、山姿花姿の撮影をたのしんでいられる、羨ましい境遇の先輩だと思いこんでいた。おそらくこれは私の思いすごしでなく、四十代五十代の武田さんは、なんの束縛もなく悠々と山の世界に、また植物の世界に没頭し得る幸福な人であった。

亡くなる三、四年前までつづいた長い登山活動のあいだ、武田さんが山行をともにした仲間は博物同志会以来の友人をはじめ、大変な数であろうが、私のみるところでは最も気心の合った山の友は木暮理太郎氏であった。両者の出会は大正二年七月、JAC創立より九年後のこと、雑司ヶ谷の鬼子母神の境内にある〝あやめ〟という料亭で、焼鳥を食べ乍ら、梅沢親光、南日重治、中村清太郎、辻本満丸、山川黙の諸氏が秩父会なる会合を催したときである。〝その席上に、鐘馗髭いかめしい偉丈夫の木暮理太郎君が泰然として異彩を放って居たことは、頗る注目に値することであった〟と武田さんの文にある（雑誌『アルプ』八八号所載）。

『アルプ』誌上五回（一九六五年六月～十一月）に亘って連載された「木暮君と私」によれば、この気を許し合った両先輩が、いかにたびたび楽しい山旅を共にされたかを窺い知ることができる。木暮先輩は昭和十九年五月逝かれたが、戦後私に「木暮君がいなくなって、つまらないね」と幾度も言われたが、武田さんより十年も年長なのだから、これは少々無理な注文であろう。『高山植物写真図聚』の共著者田辺和雄君も愛弟子であり秘蔵ッ子だったが、これも先年ナイロビで客死した。こんなことを考えると晩年の武田さんの身辺は、往年の同志の多くは先に逝き、或は往来もままならぬ老境に入って、懐旧談に耽ける機もなく、ときに寂寥を感じられたのではあるまいか。然し〝言語を話さない草木に対峙して、彼等の心情を読み取る業は、一朝一夕の訓練ではなし得ないものである事は、門外漢の到底窺い知るを得ない境地である……〟と「秩父宮記念学術賞を受けて」（会報二九九号所載）に御本人が記されたように、物言わぬ伴侶を生涯持ちつづけられたことは、ほんとうに倖わせであった。

JACの近頃の小童共、語るに足らずとでも感じられたのか、集会にも殆んど出席されず、昭和四十年十月十五日久保講堂で行われた創立六十周年記念講演会で「山岳会創立前後」なる講演を行われて以来、会としての公の席に顔を出されなかった。それがどうした風の吹きまわしか、四十六年六月東京小石川六義園の有志の集りに初めて出席され、その集りの雰囲気が気に入ったのか、翌四十七年にも出席するとて、前年の利根川奥の平ヶ岳ヘリコプター登頂の調査報告の原稿までまとめていられたのが、二旬にみたぬ短かい病臥のすえ集会当日の三日前ついに永眠されたのである。

想うに九十年に及ぶ武田さんの生涯は、なにびとにもなにごとにも煩わされず、私どもからみれば、天衣無縫な幸福なものであったといってもよいであろう。ただ日本山岳会としては創立発起人七人の方々のともされた七つの灯(ともし)の、最後までのこった一つの光が、ついに消えたことを寂しくおもう。

(追記) 私個人として武田先輩とのつながりは、大正七年以来半世紀を越えて、いうなれば因縁浅からぬものありであるが、ここには一切ふれぬこととした。

(一九七三年三月五日記)

(藤島　敏男)

*

この蕪雑な一文は、武田さんの伝記の資料になるようなものではない。いうなれば武田さんを偲びながらの閑談であって、閑談をする気になったのは一に藤島(敏男)君のそそのかしによるのである。

武田さんとのおつきあいが始ったのは、既に半世紀前であって、一高旅行部の小集会に木暮理太郎「老人」……武田さんの時々使われる話言葉……とお二人ご出馬を願ったときである。紹介者もなく麹町のお宅にでかけたのは、中学の先輩だったからかもしれない。

武田さんと一緒に山旅をされた方は、もう極めて少数となったであろう。そう考えられるだけ武田さんは長寿だったわけだが、秩父宮記念学術賞をもらわれた直後に、祝意を表しながら久しぶりにおじゃまをし、いつものような長話になってしまった。この時の自分の心つもりは米寿に対しての祝意が主であったが、受賞については随分喜ばれたらしい。これも長寿であったればこそと思われる。

武田さんを「親玉」と呼ぶようになったのがいつか、藤島君も忘れていようし山口成一さんは鬼籍の人である。昭和初年、山には朴の花が美しく咲いている六月、この三人が川治から黒部にとまり万歳越の残雪をふんで湯の花へと下り、更に甲子温泉で柏餅をだされて喜んだ山歩きをしたときに、偶然上野駅で武田さんと一緒になり、川口駅に近づいた車窓に「稲こき親玉号」とある農具の広告をみて、「あそこにも親玉が」と武田さんに笑いかけたことがあるので、もちろん武田さんも「親玉」の愛称(?)を知っておられた。その晩は宇都宮で仮泊して黒部まで行をともにしたあげく、武田さんは、しきりに三人の誰かを仲間にしたいらしく勧誘されたが、終に「ポン引」(ここでは客引を意味する)は成立せずわらって別れたが、その後日談は忘れてしまったものの、過日も藤島君との笑い話になったのである。

今になって残念至極なのは、ご一緒に尾瀬に遊ばなかったことである。大正六年の初夏会津駒に登ったあとで、色々と聞きただされたことがあるが、この時の自分の尾瀬行は、武田さん

の本格的尾瀬行より以前に相当するらしいのは、不思議のような気がする。武田さんと二人で山の散歩に雁ヶ腹すり山にでかけたことがあるが、初冬の自然に身をまかせるだけであったので「戸沢君は羨ましいね」と、写真撮影のあいだ寝ころんでいたのでひやかされたりした。この山の散歩で、枯草の根際に氷が朝顔状に附着しているのを発見したので、武田さんも何枚か撮影され、アイスウイングといわれたこともあった。

武田さんは自分の貴重な先達ではあるが、所謂先生ではない。そのようなおつきあいである。山よりもウエモノ（植物のことで、武田さんもこの呼称を使ったりしたが、これは山口さんか藤島君の言いだした言葉だ）や、路傍の石仏（世間での用法もおかしく道祖神は仏さんではあるまい）の話をした方が多い。庚申塔に興味を覚えたのは、或は武田さんより先であったかもしれないが、熱の入れかたは雲泥の差、「戸沢君……を見て来たよ、あれは珍らしい」と言われた時、こちらは半分忘れていたりした。記憶力の抜群さは周知の通りであるが、藤島君と丹沢山塊に登った報告文を読まれてずっと後年に、確認的な質問をされてああそんなこともあったかと、主客転倒した例もある。

武田さんの植物の同定は慎重であったらしい……学者として当然ではあるが。奈良で採取した矮小の菫（スミレ）を持参して「これは何ですか」と「伺いを立てた」（この一句は山口成一さんの武田さんに関聯して用いたもの）ところ、花の咲くまで預ろうという。又つい先年四国からもらってきた黄梅に似た花木の名称を知りたくて、花だけでもいいが念のためにと葉も併わせてお目にかけたところ、中国産らしいが、鉢植ならそれを見たいとのお託宣であった。わかっておられたらしいが念を入れられたのだろうが、鉢持参は叶わなくそのままになってしまった。

戦時中に刊行の『道祖神』は当時として珍らしいもので、後来の者に稗益を与えられたものではあったが、増補改版をすすめたが実現せずに、やっと最晩年の『路傍の石仏』で新生された。この本の構成は武田流であるが、慾をいえば、庚申塔と道祖神の二冊に分けて、もっと図版をふやしていただきたかった。本といえば『高山植物写真図聚』二帙は大版でもあり見事な出来で続刊が望まれたが、結局用紙が独乙製のため入手不能が最大原因と、武田さんはその解説書に署名されたときに話された。

植物界の先輩では白井光太郎、牧野富太郎両博士には敬意を抱かれていたらしいが、後輩の中では殊に写真を仲だちとして山口成一さんとはウマがあって、よく「山口君が生きていたら何と言うだろうね」といくたびか口にせられたし、植物など専門の面では田辺和雄君は最適の伴侶であり、たのみにしておられた様子であったが、共に十分の齢を重ねずに他界してしまった。もう少しどうにかなったと思われるフシがあるゆえ、自分としてもまた誠に残念である。

武田さんの屋敷は震災も戦災も免れて、「門中門」……道路か

ら玄関までに門が二つある……を入ると玄関の軒下に蛙股風の飾りがある今は残り少い明治建築であり、庭から縁先まで大木をまじえてウエモノだらけである。ここでそもそもの最初に通された室は、壁際の畳の上まで書物であり『甲斐国志』の一列が印象に残っている。そしていつ頃からか書庫応接兼用の玄関で紅茶をいただきながら、あれやこれやの話となって、前後五十余年に及んだわけである。

長逝された年の冬には体力に衰老のきざしがあったが、とにかく冬をさけて庚申塔の撮影に行かれたというから、よもや「九十叟」を名乗らずに昇天されようとは、到底考えられなかったのである。

この閑談を終えようとして、ふと武田少年が霧積温泉道でゴマノハイにつきまとわれた話が思い出されたが、ゴマノハイの経験者はもうこの世にはいないであろう。これで打切りとしよう。

（一九七三年二月記）

（戸沢　英一）

（編者註）筆者戸沢英一氏は元会員三二九番。文中の山口成一氏は昭和十七年歿会員番号五〇〇番。

*

昭和十五年、中学を卒業した私は、その夏の終りの頃、当時既に有名観光地となっていた尾瀬を訪れることになった。この時、古本屋から『尾瀬と鬼怒沼』という一冊の本を買ってきて、いろいろとコースを研究した。この本の著者と同じように、静かな尾瀬、人のいない尾瀬を知りたかったので、枝折峠から奥只見を経て三条の滝に出るコースで入山し、下山は至仏山を越えて狩小屋沢を下降するコースを決めた。夏の終りでもあったし、最も一般的でないコースであったので、奥只見でも登山者には全く会わなかったし、狩小屋沢では、小学生の女児二人を伴って登ってきた中年の紳士に出会っただけであった。この紳士は沼井鉄太郎氏であり、沼井氏とのこの対面が、翌年私が台湾の登山に出かけたり、後に日本山岳会に入会するきっかけとなった。

ともかく、まだまだ静かな尾瀬であり、帰京後も何回も『尾瀬と鬼怒沼』を繰り返して読んだ。たまたま、その頃送ってきた中学の同窓会の名簿をぱらぱらと見ていたとき、私よりも四十年も先輩に「武田久吉」という卒業生がいるのが眼に入った。どこかで聞いた名前だなと思って考えているうちに、それが『尾瀬と鬼怒沼』の著者の名であることに気がついた。名簿にはただ理学博士と書いてあるだけで、職業は記入してなかった。そのとき以後、武田先生の名が急に身近に感ぜられるようになり、『登山と植物』とか『尾瀬と日光』とか先生の著書が出版されると、その都度買い求めることになった。こんな経緯からいっても武田先生は学校の先輩であると同時に、私を山へ導いていった恩師でもあったといえよう。

武田先生と直接いろいろお話しするようになったのは、今から十七、八年前、私が『山日記』の編集に関係するようになってからである。お話しするといったが、実は先生に叱られてばかりいて、こちらは弁解したり、あやまったりするだけであった。武田先生は、山の名称、登山用語等に関して実に厳しい方であった。校正でも気が付かなかったような小さいミスでも、決して容赦されなかった。時にはずいぶんきついことを言われたり、皮肉たっぷりの話され方で、こちらも腹が立ったり、言い返したりしたが、きっと失礼な奴だと思われただろう。武田先生が山名、地名等について研究を重ねられ、絶えず著書でも触れておられた実績と自信。そして後輩を指導し育てようとされる好意と情熱。また昔の地名が無知や商魂によって次つぎと変えられたり、また誤って読み書きされていく状態に、先生としてはとても耐えられることができなかったのであろう。「平蔵の頭」を「アタマ」と読んだときには、先生は呆気にとられたような顔をされ「きみ、それは『アタマ』ではなくて『ヅコ』だよ」といわれたのが特に印象に残っている。ともかくその頃は『山日記』が発行されると、武田先生からどんなお叱りがあるだろうと、そればかりを気にしていたのである。

しかし武田先生は一方において、後輩の面倒をよく見られ、なかなか親切であり、厄介なことでも気軽に引受けて下さることが多かった。私がたまたま中学の後輩であるからといって、私だけに示された好意ではなかったに違いない。私が十年ほどかかって、北アルプスや南アルプスで撮った高山植物のカラースライドを、全部先生に見ていただいて、正確な植物名を付けていただきたいと、武田先生にお願いしたことがある。先生はにこにこされながら「千何百枚もあるスライドを全部見たら、二日か三日かかっちゃうよ。君の方で調べて名前に自信のないのだけ選んでくればいいじゃないか」と答えられた。そして結局、数百枚のスライドを持っていって、何時間もかかって全部教えて下さった。「きみは昆虫だけかと思ったら、植物もずいぶん詳しいね。もう自分で同定しても間違うことないよ」などと賞めて下さり、私のスライドにない植物についても、細かい相違点を説明して下さった。七年ほど前、学研の文化映画「登山の基礎」その他二編を、武田先生と私が監修に当ったときも、先生は足まめに会社を来訪され、その熱意にもびっくりしたが、つねに私の方を立てて撮影責任者に「春田くんがよく知っているから委せておけば間違いないから」というような口添えを、いつもいただいていた。そして映画が完成して、文部省推選になってからも「なかなかよくできたね。君も大へんだったろう」と何回もねぎらって下さった。けれども少し後になって「あの映画だけどね、ピッケルをリュックサックの上に横に付けるときは、石突きの方を左側にした方がよかったのではなかったかね」とおっしゃった時は、当時既に八十歳を越えておられた先

生が、非常に注意深く見られ、また抜群の記憶力を持っておられ、かつ登山の安全に心を砕いておられるのを知って、頭の下がる思いであった。

先生は特に気にしてられたわけではないが、御自身がいつまでも年をとらないことを強調されていた。時たま、中学の同窓会のことに話が及ぶと、先生は「クラス会といっても、もう何人もいないんだが、この前会ったときは、みんな杖をついたり、耳から補聴器の紐をぶら下げたりして、孫やひ孫の話ばかりなんだ。やっぱりぼくが一番若いらしいよ」と嬉しそうに話されていた。事実、八十歳を過ぎてからでも先生は、一人でどこへでも出掛けられたし、階段でもとんとんと昇降され、およそ老衰とか恍惚とかの片鱗も見られない元気さで、さすが若いときから六十数年も山に登っている体力、健康は凄いものだと、私はいつも驚嘆していたのである。もちろん眼も耳も、年齢を感じさせないほど、しっかりしておられた。

先生と一緒に乗っていたタクシーが急停車したとき、私が「交通事故は恐いですね」といったら、先生はすまして「ちっとも恐くないよ」と答えられた。私がびっくりしていると、先生は「ぼくはもうこの年だから恐いものなんかないよ。戦争中だって一回も防空壕に入ったことはないんだよ。爆撃でも交通事故でも、やられたらそれっきりだと思っていりゃいいんだよ。ぼくは病気になっても長く床につかず、きっとぽっくり逝くだろうと思っているよ。」

先生は、死は意識する間もなく瞬間に訪れるものと、割切っておられたらしい。この種のお話はその後もあったが、いつでもけろりとして自説を述べられていた。そして八十九歳を以て、苦しまれることもなく短時日の病臥で急逝されたのである。先生と私との交わりも、さほど長い期間ではなかったが、先生の面目躍如たるいくつかの思い出を並べて、その生前を偲び、その遺徳を慕いたい。会報『山』に連載した「山と蝶のものがたり」も、先生方の初期の御努力を世に伝えたいと思って書き始めたが、先生の御批評もなく、お叱りもいただけなかったのは残念である。

（春田　俊郎）

略　年　譜

明治十六年（一八八三）三月二日駐日英国大使サー・アーネスト・メイスン・サトウを父として東京市麹町区飯田町に生れる。

明治三十四年（一九〇一）三月東京府立尋常中学校（現日比谷高校）を卒業し、九月東京外国語学校入学。日本博物学同志会々員として植物の研究をはじめる。

明治三十七年（一九〇四）外語校独語学、英語学、国語学及び言語学修了。

明治三十八年（一九〇五）十月城、小島、梅沢、高頭、高野、山川氏ら六名と発起人となり、日本山岳会を創立し、明治四十三年渡英まで幹事として活躍し、草創期の会のため尽瘁した（会員番号五）。

明治四十年（一九〇七）三月札幌農学校（現北海道大学）講師、九月東

追悼

北帝大予科講師（明治四十二年十一月まで）。
明治四十三年（一九一〇）三月渡英、五月王立キュウ植物園腊葉館並に同園ジョッドレル研究所において植物学を研究（大正五年一月まで）、六月ロンドン大学において植物学特別講義を聴講、七月ノーフォーク海岸植物探検隊に参加、十月王立理工科大学入学。
明治四十四年（一九一一）同校特待生となる。
明治四十五年（一九一二）七月同校植物学科卒業、学位 D.I.C. を授与さる。十月同校において学生の指導と講義を受持つ（大正三年八月まで）。
大正三年（一九一四）十月バーミンガム大学研究科に在学、主に淡水藻の研究に従事（大正四年七月まで）。
大正五年（一九一六）二月帰国。帰国後は再び日本山岳会の幹事あるいは評議員として多年にわたり会務に尽す。四月京都帝大医科大学講師（大正六年一月まで）。八月五日理学博士を授与さる。
大正六年（一九一七）十二月中村組植物研究所において有用植物の研究に従事（大正八年三月まで）。
大正九年（一九二〇）九月北海道帝大水産専門部講師（昭和十年十一月まで）。
昭和二年（一九二七）十月京都帝大農学部講師（昭和十四年三月まで）。
昭和六年（一九三一）十一月九州帝大農学部講師。
昭和十年（一九三五）十二月日本山岳会名誉会員。
昭和十六年（一九四一）六月農林省高原開発調査会委員（昭和二十年まで）。
昭和二十年（一九四五）十月白百合学園教官（昭和二十二年一月まで）。
国立公園中央審議会委員。
昭和二十二年（一九四七）三月GHQ天然資源局農業部技術顧問。十月国立公園中央委員。
昭和二十三年（一九四八）十二月日本山岳会々長（昭和二十六年四月まで）。
昭和二十四年（一九四九）二月GHQ天然資源局農業部高級顧問（昭和二十六年十二月まで）、七月国立公園中央審議会委員（昭和二十六年八月まで）。
昭和二十五年（一九五〇）二月学術奨励審議会委員（一級官同格）。
昭和二十七年（一九五二）三月米国地質調査所技術顧問（昭和三十五年六月まで）。
昭和三十五年（一九六〇）八月文化財専門審議会臨時専門委員（第三分科会）。十一月紫綬褒章を授与さる。
昭和三十六年（一九六一）二月文化財専門審議会専門委員（第三分科会）。
昭和三十九年（一九六四）十一月勲四等（旭日小綬章）に叙せらる。
昭和四十三年（一九六八）七月文化財保護審議会専門委員。
昭和四十五年（一九七〇）三月「多年にわたる高山植物の生態に関する研究」に対し秩父宮記念学術賞（第六回）授賞。
なお国立公園協会評議員、日本自然保護協会理事、日本植物学会名誉会員、武蔵野文化協会々長、国際民俗学会（パリ）委員であった。
昭和四十七年（一九七二）六月七日午後九時十八分通信病院にて逝去、享年八十九歳。

著作目録

The Vegetation of Japan (1913)、高山植物（大6・同文館）、高山植物の話（大13・大阪毎日新聞社）、中等植物新教科書（大15・積善館）、尾瀬の植物景観（昭3・大日本山林会）、尾瀬と鬼怒沼（昭5・梓書房）、日本地理大系別巻富士山（編著）（昭6・改造社）、高山植物写

真図聚壱（田辺和雄と共著）（昭6・梓書房）、同弐（昭7・梓書房）、高山植物図彙（昭8・梓書房）、同第二版（昭12・養賢堂）、Alpine Flowers of Japan（昭13・三省堂）、登山と植物（昭13・河出書房）、高山の植物アルス文化叢書一（昭16・アルス社）、尾瀬と日光（編著）（昭16・山と溪谷社）、道祖神アルス文化叢書一二（昭16・アルス社）、農村の年中行事（昭18・章華閣）、同ドイツ語訳（1949）、日本の自然美（昭21・富岳本社）、高山花譜（船崎光治郎と共著）（昭22・富岳本社）、民俗と植物（昭23・山岡書店）、Systematic List of Economic Plants in Japan（1949）、日本高山植物図鑑（田辺和雄、竹中要と共著）（昭25・北隆館）、富士山岩波写真文庫（監修）（昭25）、尾瀬岩波写真文庫（監修）（昭26）、日光岩波写真文庫（監修）（昭26）、野の花―春岩波写真文庫（監修）（昭26）、高山の花岩波写真文庫（監修）（昭27）、針葉樹岩波写真文庫（監修）（昭27）、上高地岩波写真文庫（監修）（昭28）、日本の森林岩波写真文庫（監修）（昭30）、御花畠山岳講座第三巻（分担執筆）（昭29・白水社）、高山植物をたずねて（昭30・同和春秋社）、高嶺の花（昭31・山と溪谷社）、山の樹木登山講座第三巻（分担執筆）（昭33・山と溪谷社）、原色日本高山植物図鑑（昭34・保育社）、同続編（昭37・保育社）、高山植物（昭38・保育社）、尾瀬と鬼怒沼日本山岳名著全集3（昭41・あかね書房）、山への足跡（昭45・二見書房）、登山と植物日本岳人全集7（昭45・日本文芸社）、路傍の石仏（昭46・第一法規出版）、明治の山旅（昭46・創文社）

（略年譜及び著作目録作製にあたっては、昭和四十五年三月日本学術振興会刊の第六回秩父宮記念学術賞授賞理由、武田久吉著作展目録、日本岳人全集『登山と植物』等に拠るところ大であった。なお右著作展目録には春田俊郎氏による解説があり、また『博物之友』、『山岳』に登載された著作については、春田、横山厚夫氏によってそれぞれ纏められている。――編者）

牧野平五郎氏（一八八六―一九七二）

大先輩には先生呼ばわりする方もありますが、牧野さんは「さん」付で呼んで少しも不自然でない存在でした。われわれとは親子以上の年齢の隔たりがありましたが、いつも気軽に接することの出来る方でした。長い経歴を物語るものとして、わたしが葬儀のときに読んだ弔辞を掲げ、ご冥福をお祈りいたします。

合掌

弔　辞

わたしたち山岳愛好者が斉しく慈父と仰いでいました牧野平五郎さんが、ちょうどお盆の十五日午前八時三十分に永眠されました。わたしたちは去る五月二十九日、富山県自然保護協会の会合で、和服姿の牧野さんにお会いしたのが、公の席へ出られた最後になってしまいました。あの時はご老齢とはいえ、まだまだお元気であったのに、誠に突然のご逝去におどろきました。

牧野さんはお若い頃よりスポーツを愛好され、特に富山県の山岳を何にもまして好んでこられました。わが国に趣味として

の登山が導入され、明治三十八年に日本山岳会が創立されましたが、富山県へもこの風潮をひろめようとされ、創立より五年目の明治四十三年十月に、富山県の第一号として日本山岳会の会員になられ、会員番号二〇六番を取得されたのでした。

大正に入ってからは、お仕事の関係で岐阜県神岡町との間を往来され、仕事の合間に乗鞍岳や薬師岳等へも登行されていました。

大正十二年一月に、槇さんをリーダーとする厳冬期立山の松尾峠遭難があり、この遭難救助に尽力されました。翌十三年五月には秩父宮殿下ご一行の案内役として、積雪期の立山へスキー登山をされています。

昭和三年には、富山県体育協会の設立に併せて山岳部門を担当するため、越中山岳会を創立して自らその会長になられたのであります。越中山岳会は富山県における山岳団体の草わけでありますが、その後これを日本山岳会の支部に昇格しようと努力されていましたが、戦時となり昭和二十三年三月の戦後にいたり、ようやく日本山岳会富山支部が創立され、元老として会の育成にあたっていただきました。同年七月には支部を中心として県内山岳団体を統合し、富山県山岳連盟が結成され、その会長に就任していただきました。

老年に向かわれるにしたがい、自然愛好の気持はますます強くなられ、昭和三十七年四月には富山自然保護協会を設立され、その会長として特に立山の自然を守るために力を尽され、なかんずく立山ルートの建設については、県や開発会社に厳しい註文をつけて現在にいたったのであります。

また、昭和四十年頃より山岳遭難の多発を大変心配され、槇さんとともに若い登山家の育成のために、文部省登山研修所の開設を働きかけ、わが国唯一のこの機関を、立山千寿ヶ原に誘致し、これが実現をみるにいたったのであります。晩年は、さらに県内の自然保護を考えられ、県定公園の指定に関しては自ら総ての箇所を詳に回られ、決定されたのでありました。

これらの業績から、昭和三十八年には厚生大臣表彰を、翌三十九年には勲四等瑞宝章を受けられ、昭和四十二年十一月には日本山岳会名誉会員に列せられたのであります。

牧野さんは、このような自然愛護と若い登山家の育成のために亡くなるまで常に努力をされました。終戦後の混乱期には長期に亘り、富山市および富山県の公安委員をつとめるとともに、現在まで県観光事業審議会委員、鳥獣審議会委員、遭難対策審議会委員などをつとめてこられました。また、立山緑化研究委員会委員長としても、立山の開発による破壊の修復に実績をあげてこられました。わたしたちは富山県の山岳会が、この偉大な先達のご業績の上に今日あるを思い、さらに一層の努力を重ね、住みよい富山県にしてゆかねばならないと、誓いをするものであります。

牧野さん、永々お世話になりました。あなたのご遺徳をしのびつつ、み魂よ安かれと、ご冥福をお祈り申しあげ、お別れの言葉といたします。

（四七・一〇・六）

略　歴

明治十九年（一八八六）四月二十三日　富山市初音町に生れる。早大商科中退、富山鉄道取締役、富南鉄道常務、富山電気鉄道副支配人、監査役等を歴任。

明治四十三年十月　林並木氏の紹介で日本山岳会に入会（会員番号二〇六）。

昭和四十二年十一月　日本山岳会名誉会員。

昭和四十七年八月十五日　逝去。

（中田　勇吉）

岡埜徳之助氏（一八七九―一九七二）

去る一月九日逝去された岡埜さんは、享年九十二歳だったから、本会々員としては最年長者ではなかったかと思う。御自身書かれたものに従って記すと、同氏は明治十二年（一八七九）十一月二十日、東京都台東区に於て誕生、嘉永元年十月創業の岡埜栄泉堂（菓子商）を昭和十八年八月末日廃業されるまで、連綿と続けられた。

日本山岳会へは辻村伊助、冠松次郎両氏の紹介で明治四十四年十一月入会、会員番号は二七一号であった。昭和四十二年十一月名誉会員に推挙された。

山歴については、明治三十六年富士山六回、同四十三年木曽御嶽一回と書かれているが、三十六年中に六回も富士に登られたのか、或いはその頃何年かの間に六回登られたのかは不明、また大正初期冠氏と甲武信、破風、木賊、三宝、雁坂を歩き、その後老母の意志によって山行を断念し、何ら山歴という程のものはないとも記されている。

戦前、岡埜さんは本会の小集会、有志晩餐会等にはよく出席されたように思う。古い『山岳』などを調べたら、そのことが判る筈である。筆者がよく記憶しているのは、戦後のことであるが昭和三十四年十一月五日夜、茨木猪之吉氏の追悼会を国際文化会館で催したときのことである。会は交野武一氏の肝煎りにより松方氏の司会で故人と関係深かった足立源一郎、鶴田吾郎、石井鶴三、堀進二、高野鷹蔵、冠松次郎、松本善二、田部重治、東良三、槇有恒諸氏と共に岡埜氏も茨木さんの思い出を語られた。「私は商売がら茨木さんが小諸にいた時分よくお菓子をお送りした。茨木さんが店へおいでのときは、その風体に恐れをなした小僧が〝旦那さん、お会いになってもいいですか〟といったこともあった」と会報二〇八号四頁に記録が残っている。

また現在の本会ルーム新設に際しては、その基金募集に率先大口の応募をされていることは、会報二六九号九頁記載の通りで、募金委員を感激させたこともあった。またその後の本会エベレスト登山隊募金にも応じられている（会報二九七号七頁）。

これらのことから、岡埜さんは入会以来かわることなく本会に深い愛情をそそがれ、亡くなるまで会の諸行事に関心を寄せ、ただそればかりでなく、率先実行に移されたのだと思う。たとえ現役は退かれても、岡埜さんのような古い会員が多ければ多い程、会はその奥行きも深く、クラブとしての会の滋味が濃まやかになると思うのだが、岡埜さんはまさにそのお手本のような人だったのではあるまいか。

去る昭和四十五年八月二日、冠松次郎氏の葬儀が谷中の養福寺で行なわれた際、お孫さんか誰か、若い青年に手をひかれ、旧友との永別に参じられた岡埜さんをお見かけしたのが、筆者には最後であった。合掌。

（望月　達夫）

追　悼

佐藤隆太郎氏（一八九一―一九七一）

永年会員佐藤隆太郎氏は、会の記録によると、大正九年十月信太儀右衛門氏の紹介で入会（会員番号七五一番）、会籍にあること五十年を越える古い会員であったが、生前『山岳』や会報等への寄稿もあまりなく、また現在の会員のなかで同氏と昵懇だったと思われる方も不明なので、会報に現われた資料を基にして録する次第だが、あるいは会員のなかによくご存知の方がいるのかも判らない。そういう方があったらぜひ稿を寄せられたい。

佐藤さんは昭和四十五年十二月に永年会員となったが、その時同氏の略歴を紹介した記事（会報三〇七号）によると次のようである。明治二十四年八月十七日秋田県横手市黒川村川原に生れ、北大農学部卒業後農事試験所などに勤務した。（後年、麻布学園の先生もやっておられたと記憶する。）

山歴は明治、大正年間岩木山、岩手山、早池峰、飯豊山、蔵王山、朝日連峰、月山、鳥海山などの東北の山々、大正末期北アルプス、中央アルプス、南アルプス、白山、北海道日高山脈、芦別岳、大雪山、四国石鎚山、九州九重山、開聞岳、祖母山、英彦山、樺太突岨山等、ほとんど全国に及んでいる。

会報一〇四号（昭和十六年四月）の会員通信欄に、同氏寄稿「九州の旅」があるので、左に掲げてみよう。

……御蔭を以て全コース余すところなく巡遊いたし、幸ひ好天に恵まれ、高千穂始め久住山等全く晩秋と思はるゝ天候に有之候。十二月の二十六日夕、出立いたし伊勢両大神宮を参

拝して同夜高松に渡り、琴平を経て道後に参り、翌二十九日別府より宮崎を経て元旦に霧島温泉より高千穂を第一として新燃を経て韓国に参り、大浪池に日は暮れ七時半霧島館にかへり候。鹿児島神宮を拝し桜島に渡り、雨のため指宿に参り二泊いたし開聞岳に登り日奈久を経て阿蘇に参り候。久住町にて工藤局長の御指図を経て久住の頂上にて心行くまま、九州の諸峯を次々に望見いたし有難く存じ候。更に再び別府にかへり宇佐八幡を参拝し、英彦山に樹氷の美を賞したるを最後として、九州を辞し札幌に帰り申候。

右には年の記入がないが、昭和十五年十二月から同十六年一月にかけてのことと思われる。また工藤局長とあるのは本会員工藤元平氏（一八八九～一九六八）（『山岳』六五年二一四頁参照）のことであろう。

佐藤さんは、永年会員に推された昭和四十五年十二月十二日の年次晩餐会には病気のため出席されなかったので、同月二十日松田、神原両理事がお見舞をかねて永年会員章をお届けした（会報三一〇号一〇頁）。その時同氏は思いのほかお元気で、五十年前の入会当時の思い出、徳本峠での三田幸夫氏との邂逅、親友ビスワス氏（ヒマラヤン・ジャーナルの編集者をつとめたことのある植物学者、北大に留学したことがある。一九七〇年十二月二十九日歿）の想い出等をなつかしく語られたという。

佐藤さんは六義園の閑談会へは喜んで出席されたし、年次晩餐会へもよく出席されていた。私が何度か言葉を交わしたのは閑談会の折りであったと思う。昭和四十四年の年次晩餐会から欠席されているので、その頃から病気になられたと思うが、四十五年五月二十四日付の会員通信（会報三〇一号三頁）には次のような記述が見られる。

会のエベレスト登頂に同慶の至りと書いたあとに、「小生まったく病弱、廃人となり一度も集まりに出られず、ただわずかに毎日新聞の記事と『山』とにて知るだけです。三田さんとは大正九年はじめて穂高行のとき、徳本峠の茶屋にて知り合い――当時上高地バスはなし、三田さんはまだ大学生だったように思います――親交をいただき今日に及びました。／近く有志閑談会のご通知をいただきましたが、年次晩餐会は大きくなりすぎました。むかし虎の門に事務所のあったころ、高頭会長、また世話役は穂高で行方不明になった茨木画伯に非常にご厄介になりました。会場は晩翠軒、中国料理でした。三十余名の小集会で大正から昭和のはじめにかけての集まりは楽しみでありました。当時の味が忘れられず、神谷さん方のご尽力で閑談会がいまなおつづけられることと存じます。／（中略）医者通いも思うにまかせず、甚だ哀れなものになり面目もありません」

しかし佐藤さんの病気が一時よくなられたのは、その翌年四十六年六月十二日の中屋健一、斎藤桂、伊倉剛三氏らが世話人となった第十四回閑談会に顔をみせていることから判断される

（会報二一三号一〇頁）。この会には今は亡き武田名誉会員も出席されたので、私の記憶にも、はっきり残っている。

だが、それから半年後の四十六年十二月二十四日、佐藤さんは八十歳で逝去されたのだから、閑談会へはかなりの無理をして出てこられたのではないかとも思われる。大智院隆誉教雲芳園居士と謚する。

生前山登りについて、あまり書かれたものもないだけに、古い時代のことを、もっとお訊きしておくべきだったと思うのだが、今となっては、もうそれもできない。またいささか仙骨を帯びた、あの飾り気のない温容に接することもできない。謹んで冥福をお祈りする。

（望月　達夫）

岩崎京二郎氏（一八九九―一九七一）

故岩崎京二郎氏は京やんの愛称で、大勢の山仲間に囲まれながら、七十二年間を山と自然科学に生きた岳人で、去る昭和四十六年二月発病し四月に入院後、奥様の献身的な看病の甲斐もなく、秋風の吹き始める初秋の九月五日、忽然とその多彩な生涯を終られました。

日本山岳会々員としては、小集会や年次晩餐会で時折りお姿をお見かけしましたが、いつもにこにこと腰の低い態度で、誰にでも愛想よく、明朗そのもののお話ぶりは、現在の富士銀行の前身である豊国や昭和の銀行時代から、銀行マンとして、永年の生活からにじみでた人柄によるものと思われました。

明治三十二年四月東京に生まれ、日大専門部を終えて、豊国銀行に就職され、その後昭和銀行から富士銀行と統合改名した後も優秀社員として残り、各所の支店長代理を経て在籍二十五年、無欠勤の表彰を受けられました。

昭和四十二年富士銀行目白の支店長代理を最後に停年退職され、以後丸新フェルト紡織株式会社に再就職後十三年勤務、同四十二年退職後四年間は、気の向くまま足の向くまま各地を歩かれました。年間自分の年齢だけ歩くのを念願として、七十二回の山行を達成され、留守を守る奥様の縁の下の力もちの協力が、いかに大きかったかを計り知らされました。

故人の山の経歴は、最初昭和マウントクラブというハイキングの会の会長として指導に当られ、また一方山小屋クラブの主要委員として、科学班のリーダーを永年続けられ、その当時の活躍は目覚ましいものでありました。頃は昭年十四、五年のハイキング華かなりし戦前、各私鉄沿線の山の開拓時代、特に小田急沿線の丹沢山塊に取りくまれて、物凄いヤブ山であった当時の西丹沢山域の踏査記録などは、岳界注目に値するもので、

丹沢の神様いやパイオニヤとして、後世に丹沢党を生んだ親分とでもいえる存在であったと思います。

その頃執筆者グループで、ハイキング・ペンクラブという集まりを、ハイキング誌の編集者たちと計って設立委員となられた岩崎氏は、その他の委員と合同執筆して、単行本『丹沢山塊』、『奥武蔵』、『新しき山の旅』などを次々に刊行し、ハイキング界の指針とした頃の熱情は、今も忘れることができません。

その頃私は数少ない女性の中で、山の雑誌に拙ない文章を発表していたため、ハイキング・ペンクラブ会員にお誘いを受け、山小屋クラブの科学班のリーダーとして活躍されていた岩崎氏と共に山行する機会を得、関東周辺の自然科学を目的の山行に数多くお供するようになりました。私が初期の頃よくお誘いを受けたのは、当時の武蔵野線や東上線沿線の山域で、毎日曜日電鉄の旅客課長や、現在の新ハイキング編集長の沢田氏等が招集されて未開山地のコース開拓や、指導標の建設に協力した頃で、今だにその当時の思い出は忘れられません。その頃年間五十回以上歩く好敵手は岩崎氏で、ある年物好きな山仲間で競い合い、五十四回歩いた私が一回の差で氏に勝ち、会から山岳講座一揃いをいただいたことがありましたが、そのライバルが晩年七十二回の山行で、その時の鬱憤を晴らされたのではないかと、若い頃の昔がしのばれます。

数多くの教えを受けた植物の中でも初冬の奥武蔵などで、「これがむらさきしきぶの実ですよ」と、にこにこして教えて下さった時以来、忘れることのなかった実を山で見る度に、ふとその時のことを思い浮かべます。

岩崎氏は若い頃北アルプスその他の高い山へも登られましたが、やはり自然科学研究が目的で、科学博物館の植物や地質学教室にも熱心に参加され、晩年は歴史、民俗、史蹟、城址などを訪ねる山行にまで及び、体力に応じた歩き方をして、後進の人たちを指導されました。

最近は、昔のハイキングの執筆者が戦後再び相集まり再起して作った新ハイキングの取締役委員となり、亡くなる直前まで書き続け、残された文章は数えきれない程沢山あります。新ハイキングの三羽鴉、小林、沢田両氏と共に岳界になくてはならない、重要な人物であったことは、周知のことであると思います。

氏は良き先輩として尊敬されると共に、良き指導者として若い人たちにも愛されました。毎年山の友情を深めるための集い、山俗会が催されますが、氏の演じる黒田節の剣舞に見とれたり、酔う程に連発する洒落に笑わされたりしたものですが、聞くところによると、空手や剣道の免許もあり、道場を持ちたいという希望もあったとか。その他の特技としては卓球の選手、駄洒落の大家などは有名なもの、多趣味で温厚誠実な反面、大の酒豪で奥様のご心痛は一方ならぬものがあり、その内助の功は大

きなものだったと察しられます。

入院中「病気が癒ったら、ヒマラヤの山を眺めにゆきたい」と、奥様に語られたそうですが、今は亡き故人にヒマラヤの山との対面の念願を実現させてあげることが、私のせめてもの霊にたむける心の花ではないかと、その機会を待ちつつ、哀悼の意を表する次第です。

略　歴

明治三十二年（一八九九年）四月十八日　東京に生まれる
昭和三年二月　富士銀行京橋支店勤務
昭和四年三月　日本山岳会入会（会員番号一一一六）
昭和十一年　富士銀行目白支店長代理
昭和二十九年　丸新フェルト紡織㈱会計課長
昭和四十六年（一九七一年）九月五日逝去（享年七十二歳）

山　歴

関東周辺全山域、特に丹沢山塊、道志山塊、箱根、天城、外秩父、奥武蔵、北アルプスなど。晩年歴史、民俗、史蹟、城址を探る山行多数。

（坂倉登喜子）

逸見　真雄（まさ）氏（一九〇七―一九七二）

逸見さんと私とは学校の先輩後輩の間柄で、逸見さんの方が四年先輩であった。私が立教大学山岳部入部願をもって、当時赤レンガ造りの体育館の二階にあった部室を尋ねてみると、ほこりっぽい部屋の片隅に一人、山の本を静かに読んでいた逸見さんとの出合が初めてであった。色の黒い小柄な物静かな人で、黒ぶちの丸い眼鏡がいやに大きく感じ、鼻から少しずり落ちた様子が深く印象に残っている。

当時（昭和三年）の学生登山界は、積雪期の記録的登山を競っていた頃であったが、逸見さんは山岳部のリーダーとして、広い範囲に活躍して部の基礎をつくる一方、記録、編集の仕事にも熱心で『部報』の発刊も、逸見さんの力によってなされた。私との在部生活は二年程であったが、黒部川より金木戸川へ（昭和四年七月）、鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳（昭和五年三月）、大沢小舎周辺の山々（同年三月）、御山谷生活（同年四月）、その他多くの山々で教えを受けたことは、その後の私の山への考え方の基盤となったことと思う。

本会には昭和五年（一九三〇）入会している（会員番号一一

六一)。そして昭和八年には理事となり山岳、会報、山小屋、山日記を担当し、『山岳』第二十九年一号、三十六年一号及び二号の編集を手がけている。私達のグループとして逸見さんが初めて本会に入会し、一時期はよい仕事を続けておられたので、堀田弥一君、浜野正男君や私も後輩として本会に入会させてもらったのに、逸見さんのような有能な人が、何故か会から遠ざかってしまったのか不思議でならない。逸見さんは総てに内向的で表面に出ることは人に譲って、一人コツコツ地味な努力をしていることを好む性格の持主であったような気がする。私達のナンダコット遠征計画にも熱心な協力はあったが、リーダーとしての参加は自ら避けていたのではないだろうか。それは何故であったかは、聞く機会を失ってしまったのが残念でならない。

社会生活も五十二歳の若さで退いてから、不幸にも脳溢血、肺炎、結核と病魔は逸見さんを襲った。長く続いた闘病生活の間、何回か便りを出しても音沙汰は得られなかったが、後で御遺族の方から伺うところによると、ひどい自閉症になっておられたとのことだった。病院から自宅療養、そして又入院の生活を繰返して居られたが、その間は読書と散歩と植木に没頭されていたようだが、その植木も野草の地味なものを好んでいたそうで逸見さんらしいと思う。何時も変らぬ穏やかな逸見さんには別にエピソードとてなく、さすがの山仲間からさえ渾名のつけようもないので、「逸見さん」とか「真(まこ)ちゃん」とか親しまれていた。小柄の身体からはみ出るような白い特大のリュックを背に、急峻な雪渓を直登する動的な姿、また渓流を眺めながらパイプの紫煙を追う静的な逸見さんの姿は、四十年前とは思えぬ程、私の脳裡にハッキリと焼きついている。私達のよき先輩として、また本会の会員としても惜しい人を失ったと思う。故人の霊が久遠に山に安らかならんことを祈ってやまない。

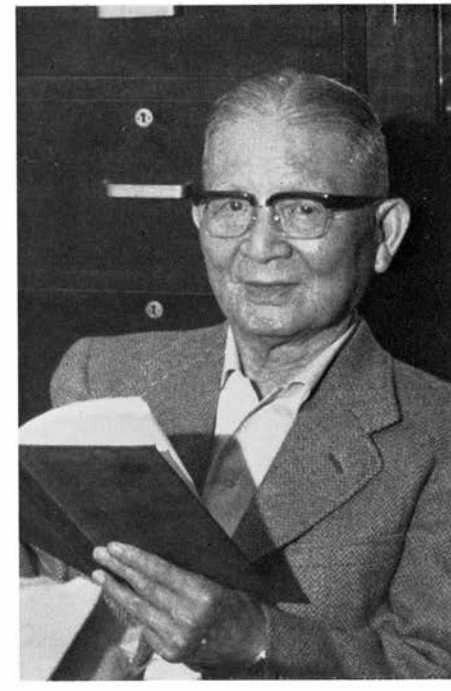
略歴

明治四十年二月十五日　札幌市北三条西十五丁目に出生
大正十三年　札幌第二中学校卒業(第九期生)
昭和六年　立教大学商学部卒業
同　年　豊年製油株式会社に入社
昭和三十五年　凸版紙器工業株式会社に入社
昭和三十六年―昭和四十七年　脳溢血、肺炎、結核のため入院加療
昭和四十七年六月二十八日　逝去

主たる山歴

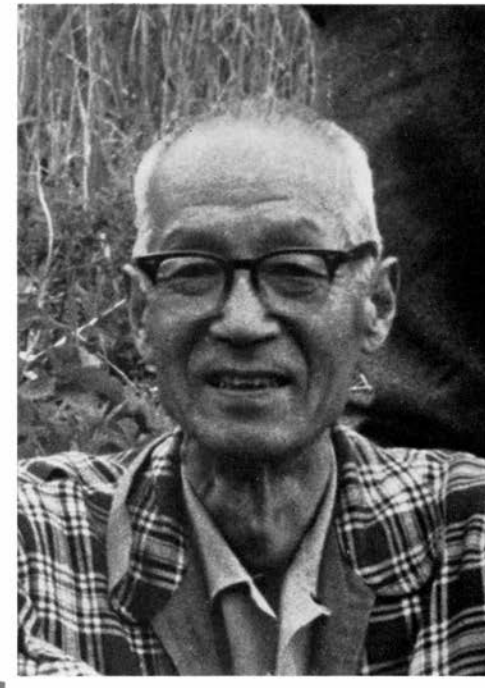
札幌二中時代山岳旅行部に属し、坂本直行氏、徳永正雄氏等と活躍、同校部報『ヌタック』一号及び二号に記録掲載。

立山・剱より小黒部・鹿島槍方面	昭3・7月
剱岳八ツ峯	3・7
奥秩父釜の沢溯行	3・9
槍俣川より至仏山(単独行)	3・11
薬師岳	3・12

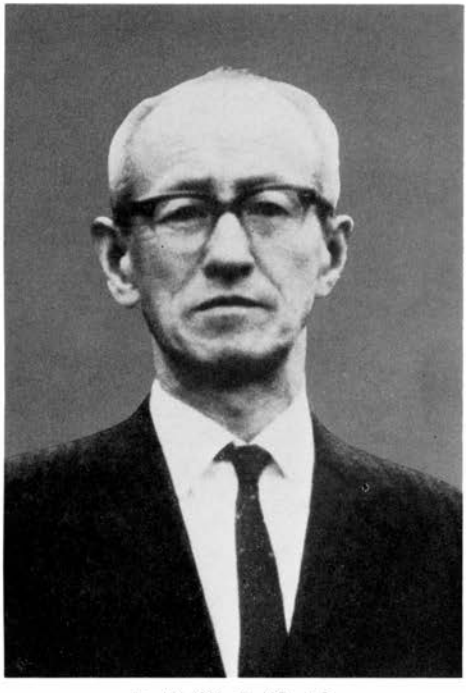


大 島 堅 造 氏
Kenzo Ohshima
(1887～1971)

袋 一 平 氏
Ippei Fukuro
(1897～1971)



永 原 輝 雄 氏
Teruo Nagahara
(1898～1970)

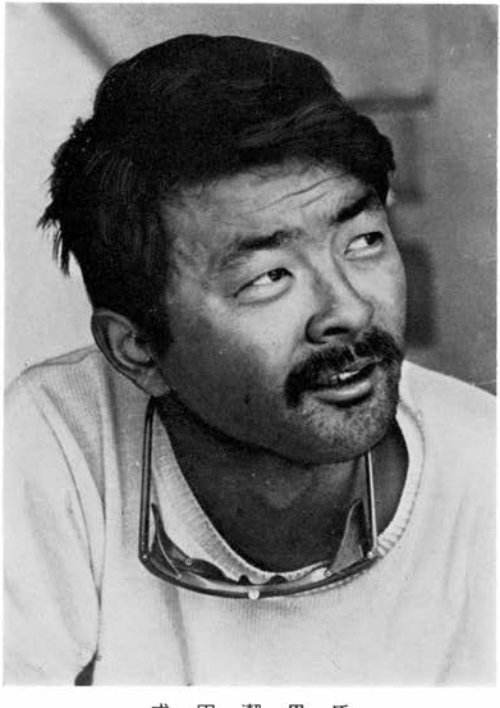


水 田 健 之 輔 氏
Kennosuke Mizuta
(1897～1972)

入 沢 文 明 氏
Bunmei Irisawa
(1902～1971)

手 塚 英 信 氏
Hidenobu Tezuka
(1940～1971)

千々岩　玄氏
Fukashi Chijiiwa
(1942－1971)



成田潔思氏
Kiyoshi Narita
(1941－1970)

昭4・3月	黒部五郎小舎を中心として
4・7	塩見・悪沢・赤石・聖・加々森山
4・7	黒部川より金木戸川へ
4・8	秩父行（単独行）
4・9	三国峠・清津川・白砂山
4・10	秩父行（単独行）
4・12	甲斐駒・鳳凰山
4・12	五竜岳・唐松岳
4・10	鹿島槍ヶ岳
5・3	鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳
5・3	大沢小舎付近の山々
5・4	御山谷生活
5・7	乗鞍より笠・槍・穂高
5・7	針ノ木・立山・劔
5・7	黒部別山・黒部川・奥のタル沢湖行
5・8	カクネ里・五竜岳・白馬岳
5・9	爺ヶ岳
5・10	八ヶ岳（単独行）
5・11	仙丈岳
5・12	乗鞍岳
5・12	鹿島槍ヶ岳と爺ヶ岳越え

追　悼

昭和五年三月（一九三〇）　日本山岳会入会、会員番号一一六一番
昭和八年十月　理事（山岳・会報・山小屋・山日記担当）
昭和九年～十年　同（会報編輯担当）
昭和十六年二月　幹事

（小原　勝郎）

村井　栄一氏（一九一一―一九七一）

〝八〇キロの巨体の貫禄で、リマでは在留邦人の歓迎会や税関との交渉など一手に引き受け、山へ入ってはBCの留守番役。スキあらばかっぱらおうというインディオを、唯一つ覚えたスペイン語「ムチャス・グラシアス」（有難う）の一語でおっぱらってしまった。キャラバンでは馬上の姿が正にヘッフェ（隊長）殿であった。〟とは長野県山岳協会ペルー・アンデス遠征隊報告書に載った村井隊長紹介の言葉であるが、正に彼の面目躍如たるさまを言い尽しているのに、更めて感無量の思いをしている次第である。

彼は中学のときから同郷の馬場忠三郎先輩の山とスキーのお弟子さんであった。昭和五年の春明治大学に入学、初めて山岳部の室へ来た時も、よく締った肥満型の元気溌剌とした若者で、入部して間もなく「ポンジ」とあだ名が付けられたことが思い出される。

部員としての彼は、実に意欲的に山行をしていた。特に昭和七年から八年にかけては、南アルプスに取りつかれたように歩き回り、新しいルートを開拓していた。その後、事情があって

部活動を退いたことは誠に残念なことであったが、OB会である炉辺会員として活躍していた。また、ハンネス・シュナイダーによるアールベルグ・スキー術の日本における開拓者の一人である馬場先輩の指導を受けて、引続きスキーに専念し、戦後スキー・クラブ、スキー学校等を設立し、相変わらず指導に意欲を燃やしていた。

昭和四十四年五月病気にかかり東京順天堂病院に入院し、手術（胃がん）を受け、一時小康を得たが、昭和四十六年十二月九日病再発、亡くなったことは誠に残念である。

彼の死後、夫人のお手紙により、かつてはあれ程山に執念を燃やしていた彼が、一人息子の登山を嫌い、山の話はしたがらず、家には山の道具は一つも置いていなかったことを知り、何事にも徹底した彼の性格を更めて懐しく思うとともに、彼の冥福を祈る次第である。

（一九七二年十二月記）

略歴

明治四十四年五月二十四日　長野県上田市に生れる。
昭和五年三月　上田市立中学校卒業。中学三年よりスキー、登山を始める。
同年四月　明治大学専門部商科入学、体育会山岳部入部。
昭和六年　日本山岳会入会（会員番号一三三五番）。一時会籍を離れたが、昭和三十六年復活会員となる。
昭和十二年三月　明治大学政治経済学部卒業。大阪寿重工業（株）入社、京都に住む。
昭和十三年―十六年　宇都宮連隊入隊、中支派遣土橋部隊本部付にて杭州で宣撫工作にあたる。
昭和二十一年以降　高等学校の教科書関係の仕事につく。
昭和三十三年　郷里上田市に帰り、東京神田の（株）大修館書店に勤務。
昭和三十七年十一月　ウェーデルン・スキー・クラブ設立、名誉会長、東京都スキー指導員会参与。
昭和四十年　全日本スキー連盟公認ジャパン・イー・エム・スキー・スクール設立、長野県細野で開校。
昭和四十一年　長野県山岳協会副会長。
昭和四十二年　上田山岳会会長。
昭和四十四年五月　東京順天堂病院に入院、手術（胃がん）を受ける。
昭和四十六年十二月九日　病死。

山歴

昭和四年八月　前穂高岳―奥又白谷下降。乗鞍岳。
昭和五年六月　三ツ峠岩登り二回。
七月　劔岳、白兀山、赤谷山縦走。
八月　烏帽子岳―笠ケ岳縦走。
九月　菅平四阿山屏風岩岩登り。
十月　神津牧場行。甲斐駒ケ岳―鳳凰山縦走。
昭和六年一月　乗鞍岳。
一月―三月　菅平猫岳スキー行。
四月　北ア立山。
五月　三ツ峠岩登り。丹沢。東北船形山。
六月　八ケ岳。菅平。

八月　西穂高、前穂北尾根、奥穂高岳。
九月　菅平四阿山屏風岩岩登り。
十月　南ア鋸岳、駒ケ岳。
昭和七年一月　菅平猫岳スキー行。八ケ岳硫黄、横岳山行。
二月　蔵王、五色家形山スキー行。
三月　上越柄沢山、七ツ小屋山、巻機山。
四月　菅平猫岳、四阿山スキー行。
六月　茂倉岳―谷川岳縦走。三ツ峠岩登り。
七月　南ア遠山川―西沢溯行聖岳、東谷、兎岳―大沢渡―北又沢下降。
八月　穂高明神岳。
九月　菅平猫岳。
十月　槍ケ岳―大喰岳。南ア東岳―赤石岳―大沢岳。
十二月　南ア遠山川―聖岳―大沢岳―福川―小渋川縦走。関温泉スキー合宿。
昭和八年一月　菅平四阿山。飯山スキー行。
二月　上越清水、割引山スキー行。
三月―四月　菅平スキー行。槍ケ岳―奥穂高縦走。
五月　乗鞍岳。
七月―八月　北ア燕岳―西岳―一ノ俣。南ア賀々良沢溯行賀々森山、諸河内沢下降。奥燕沢溯行上河内岳、茶臼岳、前燕沢下降。西沢溯行聖岳、奥聖岳、赤石岳、荒川岳、三伏峠縦走。北ア常念岳―大滝山縦走。
九月　菅平四阿山岩登り、菅平ローン・スキー行。
十月　横須賀内海サンド・スキー行。南ア三峰川溯行、仙丈岳―地蔵峠―市野瀬。
（以上明治大学山岳部部報『炉辺』五・六号による）
昭和三十三年以降　北ア・立山、白馬鑓、八ケ岳。とともに毎年夏スキー行。
昭和四十二年　長野県山岳協会ペルー・アンデス遠征隊（ネバド・ワンツァン南峰登頂、サンタクルス・ノルテ西壁登頂）に隊長として参加。

（藤井　運平）

大島　堅造氏（一八八七―一九七一）

大島さんが主宰されて、昭和十一年住友山岳会編著の『近畿の山と谷』（当時ベストセラーであった）を開くと第一に、

一、自然に親愛して敬虔なれ
一、火気を儆戒して細心なれ
一、天然の保勝浄化に専意なれ

この巻頭語を実践して自然を愛し、山火事防止（当時阪神地方岳徒の習練道場だった六甲山の山火事は、毎年何度となく発生した）、山を傷つくるな、と諭されて慎重な登山を会員に大島さんは奨められた。氏の登山は実に慎重敬虔で、万々一事故でも起したら銀行や家族に申訳けないと、常にそのお心構えであった。だから日本アルプス行などには、必ず高名なガイドを二、

三名以上同行せしめた。そして愛されて伴われた人達は、大町の伝刀林蔵、桜井一夫兄弟、芦峅の佐伯平蔵、同宗作、同和一、などの諸氏であった。

ある年の晩秋、新雪まだらな木曽駒へお伴したとき、大阪から上松に着くと、大町のガイドがすでに待っているのにびっくりした。もちろん大島さんが招いて置いたのである。

御著書『山の古典と共に』の巻頭に「この書をテニアンで戦死した次男大島欣二の霊に捧ぐ」とある。欣二さんも山好きでよく父君と、また友人たちと登山した。慎重な大島さんは万全を期して、甲南高校（旧制）――京大山岳部のベテラン伊藤愚氏（後年北京で客死）が補導役を嘱され常々同行、コーチを兼ねた。

四十余年前のこと、毎日曜日住友山岳会員と六甲山へ登られたが、昼頃になるとご持参のスコッチを（ご自身は酒も煙草も嗜まれない）同行者に渡して一人下山された。わけをお伺いすると、今年は厄年だから自重して半日登山で帰ると申された。ここにも謹厳慎重さがうかがえる。

高名な登山家になった方々が山を志した動機について、「大岳の偉容に打たれて」とか「ある名著に感激して」とかよく承るが、大島さんの山好きは、ご生地が東上州で朝な夕な、西北方に赤城の連峰、西に噴煙をたなびかす浅間山また荒船山、北方に日光男体山、南遠く秩父連山、秋冬の晴れた日などには雪を頂く秀麗な富士山の姿も、秩父の山越えに見えた。その平野に育ってはぐくまれたとよく承った。

それから「一日に二マイル歩けば医師に用事はない」、「きれいな空気に勝る良薬はない」という外国の格言をモットーに、「山の不動の姿を愛し自己人格の形成の土台にする」と、毎日曜かかすことなく、遠くまた近くの山々を実によく歩かれた。特別多忙な職席にあり、また驚くばかりの勉強をなさるお方がよくも、かく歩けたものと誰もが驚嘆した。

「私がはじめてリュックを手にしたのは、住友銀行の先輩国府精一氏がドイツ留学の帰途、スイスからみやげに求めてきてくれたものだ。それまでは黒いもめんの筒形の物入れを作り、一方を閉じて弁当などを入れて胸で両端を結んでいた。」（『山の古典と共に』）といわれているところから考えると、ずい分お若い時からの登山家だったことが知られる。

少年の大島さんは非常な秀才で、東京府立一中（現日比谷高校）時代には谷崎潤一郎氏と並称されたと承る。東京商大（一ツ橋）を卒え住友銀行に奉職後も親交を重ね、谷崎氏が来阪されたとき、お二人で天ぷらをたべて食あたりして遂に一日欠勤された。

入行以来、公休の外は一日も休まなかったが、この欠勤がただ一つのものだったと、後年山で焚火を囲んだときなどよく拝聴した。

大島さんは四十を超えたお年で「チーズとクラッカーからなる非常食二日分と、着替の肌着などをルックにつめて携行した（北アルプス行）。その目方は約六貫匁（22・5キロ）となったが、これぱかりはいつも自分で背負い、ガイドには渡さなかった」（『山の古典と共に』）の強壮ぶりを示された。

住友での登山先輩に今村幸男氏（住友信託会長）、国府精一氏（住友生命専務）あり、また別宮貞俊氏（日本山岳会々長、住友電工社長）もいた。大島さんの感化でか、川田順氏（住友本社理事、歌人）も立山などに登られた。住友山岳会員はことごとく門下生みたいなもの、住友部外の岳友では藤木九三氏、西岡一雄氏、足立源一郎画伯、百瀬慎太郎氏（大町対山館主）などが特にお親しかった。

昭和六年、小島烏水氏（当時横浜正金銀行桑港支店長）を桑港正金に訪れて初対面。またウォルター・ウェストン師とも文通を交し、サイン入りの写真を贈られた。その写真は日本山岳会本部に寄贈されている。

「私が盛んに登山したころ、老人組で日本アルプスに行かれた方に三菱本社総理事江口定条氏、元古河組総理事中島久万吉男爵がある……。また元日銀総裁結城豊太郎氏など盛んに登られた……。」（『山の古典と共に』による）財界超一流のお歴々である。

大島さんの山歴は大正四、五年に始まり登山年齢五十余年、六甲に始り六甲に終った。戦後もよく一人お歩きの姿を六甲でお見かけ申し上げた。

屋後（御影町）の山（六甲）に始り近畿の山々——比良山系、大峰山系の諸峰、鈴鹿山脈など——で山歩きを重ね、昭和二年七月（その八月には秩父宮殿下槍穂高に登らる）佐伯平蔵をガイド頭に立山——針ノ木行で始めて北アルプス踏破、翌三年には穂高縦走、つづいて後立縦走、爾来第二次大戦の期間を除いて、毎夏或は秋必ず北アルプスを訪れた。

大島さんは赤倉の別荘でスキーを楽しまれたが、氷雪期の登山はおやりにならなかった。おそらく四月の針ノ木行が最も早期の登攀だったと思う。

昭和六年、住友山岳会々長。

昭和九年、日本山岳会入会、会員番号一五五番（紹介者は別宮貞俊・中原繁之助の両氏）。

昭和六年、住友山岳会は東六甲水無谷に山小屋を持った。一階歓談室兼食堂、二階寝室、当時としては贅沢なものだった。惜しむべしこの小屋、昭和九年の室戸台風で流砂に完没放棄された。昭和十一年表六甲御多福山に再建。共に会員の訓練道場として活用され、また新進育成の場として、どれだけの効果があったか計り知れない。前者は幽すいな谷合にあり登山者の目に殆どふれなかったが、後者はよく見えるところで多くの登山者を羨望せしめた。両者とも物心両面、大島さんの御援助によ

り出来たもので、全会員均しく感謝を捧げていた。その訓練育成の功は氏の山歴に加えて特記したいと思う。

海外の山行では米、瑞にいく度も行かれ、

一九二一年　瑞　ジュネーブに至る。そのときアルプスに遊ぶ。
一九二八年　米　マウント・ヴィクトリア。
一九三五年　米　サン・アントニオ峰。
一九三六年　米　テュオラーメン高原（二、七〜八〇〇メートル級）。
一九五二年　瑞　マッターホルン撮影行。

ブック・コレクターとしての大島さんの名は余りに有名で、語学の天才といわれた氏（七ヵ国語を自由にするという）は、多年にわたり収蔵された内外の稀覯をことごとく精読通読、山でよく有益な話をお聞かせ願った。昭和十年七月、大阪堂ビルに在った清交社に、日本山岳会本部のお歴々を迎えての関西支部の集会で講演された「古代欧州のアルピニズム」を拝聴し、かく纏めると平素山で断片的に承るのと違い、新たな感激を覚え、その博覧と強記に思わずため息をついた。岳書の外に山岳画も愛され、邸宅の廊下などで沢山の名画を拝見した。

大島さんは優れた銀行家であると共に国際的に知名の国際金融、世界経済、外国為替の権威であることは遍く知られている。

学者としては戦前、彦根高商（滋賀大学）講師。戦後、甲南大学教授。また大蔵省、日銀顧問。

一九三六年七月、米政府主催の太平洋問題調査会（I・P・R）に出席、以来数々の国際会議に招かれている。戦後、

○大阪倶楽部において「世界経済の動きについて」の毎月一回の講演、晩年まで続く。
○日本貿易会における月一回の講演を継続。
○日本経済新聞に昭和二十八年〜四十年頃まで世界経済の動向を主題に毎週論説を掲ぐ。

その他国際経済学者としての数々の真価を示された。

病を得て住友病院入院中も筆をとられたと伝う。畢生の作として心血をそそがれた「戦後の為替理論」は概ね脱稿、七二年春刊行（東洋経済より出版予定と伝え聞く）になっていたが、その完成を見ずのご長逝はお心残りと拝察される。

別なご趣味に「また、蜜蜂の飼育がお好きで、つい二、三年前まで朝な夕な網をかぶってご自身でお世話をしておられた。あの謹厳な風貌にひき比べ、まこと微笑しい想がいたします」（住友社内報『銀泉』より）。

主な著書

・外国為替講話（大正十四年、大阪織物同業組合での講義に加筆されて出版）
・最近の為替と国際金融（昭和十年）
・大島さんが主宰されて住友山岳会編著の

ポケット版　近畿の山と谷　（昭七年）
増補改訂版　〃　（昭十一年）
・国際金融の諸問題　（昭二十六年）
・一銀行家の回想　（昭三十八年）
・春風秋雨八十年―非売品として刊行、知友に贈らる　（昭四十二年）
・山の古典と共に　（昭四十五年）

略　歴

明治二十年一月十一日　群馬県新田郡大島村（現太田市）にて姓氏村名を冒す名家の四男に生る。
東京府立一中（現日比谷高校）卒業。東京商大（一ツ橋）へ進学、明治四十二年卒業。住友銀行入社（明治四十二年七月）。紐育支店―本店支配人を経て常務・専務、銀行在職三十四年間。昭和十八年、住友本社監事。
戦後、京阪神急行電鉄（阪急）取締役、日本経済新聞社々友。
叙勲　勲四等。
逝去　昭和四十六年十一月二十四日。享年八十五歳。
葬送　昭和四十六年十一月二十五日。於、西宮市本町下　正念寺。
法名　慈導院泰堅覚翁居士。
墳塋　東京小石川　護国寺。

（松井久之助）

袋　一平氏（一八九七―一九七一）

袋さんを知ったのは無論戦前のことだが、いつの頃か今となってはさだかでない。多分同氏が昭和十六年六月に『霧氷圏』という紀行随想集を出された頃かと思う。袋さんはその時代さかんに山登りやスキー行をやっていて、当時の『山と渓谷』誌などに屢々寄稿されていたが、その本もたしかそれらが基になっていたかと記憶する。また『山岳』第三七年第一号に載った同氏の「登山再編成論」を、私は戦地で読んだ記憶がいまでも残っている。しかし、一緒に山を歩いたのは唯一回で、それは私が札幌在勤時代、昭和三十五年の九月に深田久弥、風見武秀両氏と三人で北海道の山登りにやって来られたときである。
深田さんらと小樽から船で利尻島へ渡ると、先着の袋さんらが迎えてくれた。そこから礼文島へゆき礼文岳や久種湖を探勝したのだが、海抜四九〇メートルの一等三角点のある礼文岳は、深田さんが「標高こそ低いが、一面ハイマツに覆われた頂上は、内地の三千米級の気分があった」と書いているように（『山があるから』一四頁）、私たち一行を大いに喜ばせた。袋さんは余り口数の多い人ではなく、始終満足した面もちで風景を観賞し

ていたようだ。

高沢光雄君と私が利尻島から帰ったあと、袋さんらは利尻岳をきわめ、さらに十勝岳や大雪山に登り、札幌の私のところでゆっくり休養して帰られた。

袋さんは戦前本会々員になられたが、戦後連絡がとだえて、丁度この頃は会籍を離れていたのだが、北海道登山の折り深田さんや私がすすめたのが因で、会員に復活した。その後袋さんは、本会の海外連絡委員会（ソ連担当）で大いに活躍されたが、この時期に会員に復活されたことは、会のためにも、また袋さん自身にも大変よかったのではないかと、今にして思うのである。

袋さんは本会員のなかでは数少ないソ連邦の山の研究家であり、古くは会報八〇号に「エリブルース」を、一〇〇号に「ソヴェト一登山家の話」を寄稿されたり、ベレーツキイ『スターリン峰登頂記』（昭和三十二年六月）やアバラーコフ『アルピニズムの基礎』（昭和三十三年四月）などの訳業があり、また昭和二十八年から三十四年頃の山渓誌にもソ連登山界についての寄稿が数篇あるが、会員に復活してからは、海外連絡委員会のソ連担当委員として会のため貢献され、また会報にも「カフカズのこと」（二四七号）、「グルジア登山隊の来日」（二五四号）、「ソ連の山―一九六六年」（二六〇号）、「ソ連の女流アルピニスト」（二六五号）、「アルピニアーグ」（二六八号）、「ソ連岳界一九六八年」（二八五号）等を寄せられた。

さらに袋さんにとって喜びに堪えなかったと思われるのは、昭和三十八年秋、ソヴェト・アルピニズム四十周年記念祝典に招かれ、多年同氏が憧れてやまなかったグルジアを訪れ、親しくカフカズの風物に接したことであろう。これがキッカケとなって昭和四十一年にはグルジアからソ連の登山家が来日し、また日本からもカフカズへ登山隊が出かけるようになったのだが、袋さん自身も同年秋には詩人ショタ・ルスタヴェリ八〇〇年祭に招かれ、グルジアを再訪している。その後日本からカフカズやパミールの山を訪れる登山隊が漸増したが、袋さんの先駆的功績は少なからぬものがあった。昭和四十一年の登山については同氏編の『カフカズの山旅』（昭和四十三年二月）に詳しい。

毎年袋さんから戴く年賀状には、前の年の山歩きのことなどが克明に記され、奥さんと一緒に写した写真が印刷されているものが多かった。山登りも、よくご一緒にされたようだから、ご主人に先きだたれた奥さんのことを思うと、まことに同情に堪えない。

会にとっても数少ないソ連の山の研究家であり、また会籍三十年を超える古い会員であった袋さんを失ったことは、まことに悲しみに堪えぬものがある。

（望月　達夫）

追悼

略歴

明治三十年（一八九七）十月二十七日　東京下谷に生れる。
明治四十二年　語学に興味を抱き神田の英語塾に入る。山への魅力にとりつかれたのも、この時代で、上州三山などに登る。
大正六年　化学研究員として三菱に入社。漢口に渡る。
大正八年　漢口の三菱をやめ東京に戻る。東京外国語学校専科でロシア語を学ぶ。
昭和三年　映画輸入会社「一支商店」に入社。宣伝、翻訳関係を担当。
昭和五年　日本映画「何が彼女をそうさせたか」、「吉田御殿」の二作品をもって訪ソ。以後ソヴェト映画の輸入、上映に努力。
昭和十一年　日本山岳会入会、会員番号一六八五、紹介者は足立源一郎、茨木猪之吉両氏。戦後一時会籍を離れたが、昭和四十一年に復活。
昭和二十二年　戦後初めてソヴェト映画「石の花」を輸入上映。
昭和二十三年　ソヴェト映画輸入問題でGHQの弾圧にあい、以後映画関係の仕事を断ち、翻訳、雑文に専念。
昭和三十八年秋　ソヴェト・アルピニズム四〇周年記念祝典に招かれ、グルジアを訪問。
昭和四十一年　日本グルジアの登山交換実現、グルジア側から六月来日、日本側（横浜山岳会）七月にグルジアに渡る。その秋、詩人ショタ・ルスタヴェリ八〇〇年祭に招かれ、グルジアを訪問。
昭和四十五年五月中旬　白馬岳栂池へ行ったのが最後の登山となる。夏肺ガンの疑いで入院手術、秋退院。
昭和四十六年（一九七一）七月二日　肺ガンのため逝去、七十三歳。

登山歴

昭和九年　烏帽子―穂高縦走。
昭和十年　槍平、谷川岳、白馬岳、鳳凰―早川尾根、白馬連峰、上ノ原スキー。
昭和十一年　蔵王山スキー、志賀高原スキー、奥日光スキー、蔵王スキー、尾瀬、針ノ木―五色ケ原―薬師岳―槍ケ岳、八ケ岳。
昭和十二年　霧ケ峰、志賀高原竜王越、上越国境、立山、北鎌尾根。
昭和十三年　鹿沢、日光、刈田岳、春の北アルプス、尾瀬、悪沢岳、赤石岳、立山、剣、大日岳。
昭和十四年　峨々温泉―刈田岳、八方尾根、燕―常念岳、奥秩父、八甲田山。
昭和十五年　志賀高原、乗鞍岳スキー、八幡平、餓鬼岳。
昭和十八年　開聞岳、久住山、剣山。
昭和二十六年　谷川岳。
昭和二十九年　丹沢、仙元峠、川乗山。
昭和三十一年　丹沢、後立山縦走、三頭山。
昭和三十二年　鹿沢スキー、穂高。
昭和三十三年　塩沢スキー、飯豊山。
昭和三十四年　川乗山。
昭和三十五年　伊豆天城山、中央アルプス、北海道の山。
昭和三十六年　菅平。
昭和三十七年　扇山、八ケ岳、那須連峰。
昭和三十八年　丹沢。
昭和三十九年　赤倉スキー、金峰山。
昭和四十年　大岳山、大山、富士山。

昭和四十一年　グルジア登山家と涸沢。
昭和四十二年　御岳山。
昭和四十三年　日光スキー。笠ケ岳―槍見温泉。
昭和四十五年　天元台スキー、白馬栂池。

永原　輝雄氏（一八九八―一九七〇）

永原さんのことは『山岳』前号に収載する予定で、神谷恭氏にお願いしてあったのだが、同氏の健康がすぐれず遂に原稿が得られなかった。併し同氏が永原さんの御遺族から入手された資料が届けられたので、不適任と知りつつ編者として記しておくのだが、同氏は曽て会の書記を一年数ヵ月もやられたので、特に土曜会常連の方々のなかには親しいむきも居られる筈だから、そういう方の執筆を重ねて期待したい。

永原さんは大正九年外国語学校（支那語科）を卒業後三井物産に勤務し終戦後まで務められた。日本山岳会へは昭和十二年（一九三七）二月、中司文夫、西堀栄三郎両氏の紹介で入会、会員番号一六九三であった。（同氏の書いたものでは広瀬潔氏の紹介とあるが、『山岳』三二年一号には前記のようになっているので、記憶の誤りであろう。）後年終身会員となる。

永原さんは本会々報にかなり沢山の寄稿をされている。特に同氏が昭和四十二年八月、本会のルームに毎日務めるようになってからは、その回数が増えたように思う。会が事務所を現在の向井ビルに移したのは、昭和四十二年七月だから、永原さんが常駐されるようになったのは、その直後であり、退職されたのは昭和四十四年三月頃ではなかったかと思う。

以下同氏が会報に寄せられたものから記してみたい。

永原さんが山が好きになったのは、古い日本山岳会員で著名な水彩画家であった大下藤次郎氏の息、正男氏と中学二年頃に親しくなり、小石川関口駒井町の大下家へ屢々遊びにゆき、そこで烏水の著書などの山岳書に接し『雲表』や『山岳』を借覧したことが動機となったという。中学三年のとき秋の修学旅行で新雪の男体山に接し、尓来山のとりことなり、富士、箱根を振り出しに山へ行き始めた。中学五年の夏休みには白馬岳の雪渓を踏んだが、その時同行七人の中に百瀬慎太郎、石川欣一、松宮三郎の三人の日本山岳会員がいた。大正六年の春、新聞で日本山岳会が赤坂三会堂で展覧会をやるのを知り出かけていって、山岳図書や高山植物の鉢植に接して山への思慕をそそられた。その夏は単身上高地を訪れて槍ヶ岳や焼岳へ登った。秋には大下正男氏と三峯へ行き、当時一高生だった黒田正夫氏に会い、一緒に雲取山から大菩薩嶺を越えたことがある。

その後外国語学校に入学、在学中ボートを漕がされて山に縁

遠くなった。大正の中頃から社会人になり、勤務の関係で地方や海外に出たりして、山を顧る暇もないまま時は過ぎた。しかし、その間インド在勤の好機を得て、ダージリンからヒマラヤを覗くことができた。

日本に帰ってまた山に生き返った。そして本会に入会したのだが、海外や地方在勤が永くなかったら、同氏は当然もっと早く入会されていたように思う。（会報二七二号八頁）

永原さんの父君は昔、帝国ホテルに勤めていた時、アーネスト・サトウ公使と付合いがあり、そのことから武田久吉氏とも親しくなって、日本山岳会の古いことを、あれこれ興味をもって調べ、それを会報に寄せられた。私は、その一つ一つに非常に興味を覚えたことを思い出す。末尾に同氏の寄稿を一括して記しておく。会報への寄稿ばかりでなく、本会の会合にもよく顔を出して、晩年はクラブ・ライフをたのしんでおられたと思う。

また登山のほかにも音楽を愛し、画を描き、鎌倉彫、随筆、詩歌を好み、趣味ゆたかな日をおくられたと聞いている。そして家庭にあっては孝心深いお子さんたちに囲まれ、自分の幸せを友人たちに、よく語っておられたという。

幽明境を異にすると知って、今さらながら寂寥かぎりない。心から冥福を祈る。

会報への寄稿（カッコ内は号数）

家族もちの山行（一七一号）、山の味（一七三）、石楠花（一八一）、山の尋ね人（一九七）、山小屋の女あるじ（二一〇）、東京支部記念山行に参加して（二四六）、野中至翁晩年の富士登山（二五五）、サトウ公使の別荘（二六〇）、山男とパイプ（二六三）、山小屋に生きる（二七〇）、私と日本山岳会（二七二）、ウェストン翁の手紙（二八〇）、JAC会員章図案の作者（二八三）、アーネスト・サトーの山と植物（二八八）、退職ごあいさつ（二八八）、雑学教室（二九四）、武田久吉先生と私（二九九）。

略　歴

明治三十一年（一八九八）九月三日、東京市麹町区内山下町に生まれる。
大正四年　八月早稲田中学四年富士登山。
大正五年　八月白馬岳に登る。
大正六年　四月東京外語入学、七月上高地、槍ケ岳、焼岳。十一月秩父、大菩薩越え。
大正七年　一月草津、三月金時、長尾峠。夏北支満洲旅行。
大正九年　三月外語卒業、三井物産会社へ入社。
昭和三年　一月五色温泉スキー行。
昭和四年　八月一ノ俣キャンプ。
昭和六年　一月四谷スキー行。燕、槍、穂高縦走。
昭和七年　一月ビルマ、ラングーン出張所へ転勤を機にダージリンでヒマラヤ見物。
昭和九年　山とスキー映画製作。
昭和十一年　十月白馬岳。
昭和十二年　一月野沢スキー、二月富士滞頂。十月16ミリ映画「冬の富

士」国際コンテストに入賞。二月日本山岳会入会。
昭和十三年　二月野中至氏に冬富士の映画を見せる。三月奉天支店転勤。
昭和十五年　九月済南支店転勤。
昭和十九年　華北砂糖協会青島支部長、華北交易統制総会同支部長となり二十年終戦、総会引継ぎのため残留。
昭和二十一年　四月引揚げ。三井物産運輸部長代理。
昭和二十二年　七月三井物産解散のため退職後は平安倉庫、大村組、神奈川埠頭倉庫、宇徳運輸、宇徳海運等に勤務、四十二年七月同社退職。
昭和三十年　一月相州大山。
昭和三十三年　二月富士二合目スキー（横浜山岳会）。
昭和三十五年　二月大穴スキー行、十月大山。
昭和三十七年　五月大山集中登山。
昭和三十八年　二月菅平スキー行、五月大山。
昭和四十年　二月谷川スキー行、五月大山、十一月日本山岳会六十周年記念山行、明神、明星登山。
昭和四十一年　二月菅平スキー、十月大山。
昭和四十二年　八月日本山岳会事務局に勤務。十月高尾山、十一月静岡支部もみじ会参加。
昭和四十三年　五月木暮翁碑前祭参加、十一月もみじ会愛鷹山十里木、十一月大山単独行、十二月湘南大楠山。
昭和四十四年　二月尾瀬戸倉スキー（横浜山岳会）、三月末日本山岳会退職、五月ヤビツ峠（横浜山岳会）、七月大山。
昭和四十五年（一九七〇）十二月一日　逝去、享年七十二歳。
（なお永原氏は昭和八年から十二年の間と、昭和二十四年以降横浜市に居住されたことから、横浜山岳会に古くから入られ、その名誉会員であった。横浜山岳会々報第四六三号に石川治郎氏の追悼文が載っている。また神谷氏との関係も、同じ横浜の住人だったことにあるのではないかと想像する。）

（望月　達夫）

水田健之輔氏（一八九七―一九七二）

水田健之輔君は昭和四十七年六月十日、七十四歳をもって逝去された。謹んで哀悼の意を表す。思えば昭和十六年六月、私は日本住宅営団に勤務したが、殆んど時を同じくして水田君と調査課で働くこととなった。私はその前永らく東京市に勤め、山岳部に属して山行をしていたが、その後山を愛する彼と山行を共にすることとなり、その八月に、共に富山市より入山して剱岳に登頂し、平蔵谷を下って平の小屋を経て針の木峠を越えて帰京した。針の木小屋に泊った時は、そこに永らく滞在して画業に励んでおられた茨木画伯と久しぶりに出合い、その夜はスケッチや油絵を見せてもらい、山の話を聴いたが、私達が帰京して間もなく、画伯が山中で行方不明になられ、不帰の客となられた報に接して驚いた印象が深く残っている。

その後私は度々彼と山行を共にすることがあり、私が山村の民家を調査研究していた事から、同君も民家に興味を持たれ、

その後小生が発行している『民俗建築』誌にも飛騨の白川その他山村民家の記録を寄せられ、後にはその発行と編集を一手に引き受けられることとなった。

君の山行は関東一円の両毛国境、奥秩父連山等を初めとして、南北アルプスから、東北は阿武隈山脈地方から早池峯朝日岳に及び、西は加賀白山から四国石鎚、剣山に及び、四十年頃健康を損ない体力の衰えるまで、前後百二十数回に及んでいる。

最後に君が山岳界に残された次の事柄について特に記録に留めておきたい。それは昭和三十四年四月、「今日わが国登山スキーの興隆と共に山の遭難の激増し、有為の青年が犠牲となり家庭の深刻な悲劇を思うにつけ、独仏、ソその他の諸国のように組織ある登山学校によって正しい指導の必要を認め」自ら先ず同志の後援によって登山学院を開講し、爾来三十七年末まで四年間に毎年二期の講習を行ない、毎期平均三十名の講習生を集めて、一期を三ヵ月として月平均八日間に十六時間の夜間講習を行ない、その間、日曜毎に登山の演習を行なった。また学科内容として、(一)登山入門(登山の意義と歴史)、(二)登山計画、(三)装備(服装、用具、食糧)、(四)山の自然(地質、地形、動植鉱物)、(五)地図、(六)気象、(七)医学(衛生応急手当等)、(八)登山技術(演習を含む)、(九)冬山技術(演習を含む)、(十)遭難(原因、対策)、(十一)山と芸術(絵画、文学、音楽、写真)、以上の講習と演習に対して、講師として前後三十数名の各方面の専門的エキスパートを依嘱し、且つ教材資料として数冊の冊子も執筆印刷して配布し、自ら率先して指導に当っていたが、この企画は営業的経営としては赤字となり、充分に報いられなかったとは云え、彼の登山生活の最後を飾る事業として、その志は講習を受けた二百数十名の若き岳人の胸に記憶され、語り継がれることであろう。これをもって水田健之輔君の追悼の辞に代え、御冥福を祈る。

略　歴

明治三十年(一八九七)十月五日生まれ。
大正十二年　日本大学社会科卒。
大正十二年　東京市役所公園課勤務。
大正十三年　同潤会管理課勤務。
昭和十六年　住宅営団主事。
昭和二十年　大日本労務報国会総務部参事。
昭和二十一年　七月日本山岳会入会(会員番号二三〇三番)(紹介者は田部重治、石原憲治)。
昭和二十三年　信用堂印刷会社勤労部長。
昭和三十二年　日本住宅公団嘱託。
昭和三十九年　石原建築事務所勤務。
昭和四十七年(一九七二)六月十日逝去、享年七十四歳。

登　山　歴

昭和六年　八月富士山。
昭和十三年　五月武甲山。
昭和十四年　二月二子山武川岳。三月丹沢表尾根。五月奥多摩馬頭刈尾根。六月富士見峠越え尾瀬沼。七月大菩薩小金沢縦走。八月白馬岳。

九月丹沢主脈縦走。十月武甲山。十二月足柄山、金時山、明神、道了山。

昭和十五年　二月丹沢玄倉、雨山峠。三月奥武蔵棒の嶺より白谷沢遡行。四月稲含、赤久縄、西東御荷鉾山、御正体山。六月甲斐駒ケ岳。七月金精峠、白根山。八月中房温泉より燕岳、槍ケ岳。十月男体山、乾徳山。十一月熊倉沢遡行伊豆ケ岳。

昭和十六年　三月不老山、湯船山、明神山。五月丹沢高松山、入笠山。六月尾瀬から燧岳。七月丹沢塔ケ岳、北岳。八月立山、剣岳、針の木峠越え。九月楠形山、日光霧降高原。十月大谷ケ丸から滝子山。十一月九鬼山、小倉山、三増峠。

昭和十七年　一月霊仙山、伊吹山、四明岳。二月金峰山から信州峠、三峰山。七月苗場山から赤湯を経て法師温泉。八月白峰三山縦走、七面山。九月箱根駒ケ岳、塩見岳。

昭和十八年　一月帯那山、大地峠、高柄山。五月早池峰山。妙義山。七月十文字峠から甲武信岳。八月羽前朝日岳、加賀白山、木曾御嶽、乗鞍岳。九月伯耆大山。十月両神山、天城山。

昭和二十二年　六月四十八瀬、勘七沢。七月八海山、飯豊山。八月早池峯山。十月十文字峠から甲武信岳。

昭和二十三年　二月奥多摩三頭山。八月越後米山。十月那須茶臼岳より朝日岳。

昭和二十四年　三月奥久慈、男体山。七月雲取山。八月富士山。

昭和二十五年　八月谷川岳。九月房総の山々。

昭和二十六年　六月三峯山。七月奥秩父釜の沢から甲武信、国師、金峰山。十月筑波山。

昭和二十七年　四月吾妻渓谷と岩櫃山。五月草津白根山。八月尾瀬ケ原より燧岳、表両毛国境主脈縦走。南アルプス本谷山、聖岳、赤石岳。

昭和二十八年　七月日光太郎山。八月南アルプス鳳凰三山縦走。十月八溝山。

昭和二十九年　五月両神山。六月大峯山、吾妻耶山。八月八ケ岳縦走。

昭和三十年　七月日光女峯山、高原山、鶏頂山。八月常念岳、蝶ケ岳、穂高岳。日光表尾根縦走。

昭和三十一年　七月日光白根山。木曾駒ケ岳。八月会津田代山、奥秩父西沢遡行。

昭和三十二年　八月石鎚山、剣山、雲の平。鈴鹿、霊仙山。

昭和三十三年　七月乗鞍岳、黒部渓谷。八月日光連峰縦走（大真名子、小真名子、帝釈山、女峰）。

昭和三十四年　七月奥秩父東沢から国師岳。八月谷川岳、白馬岳、会津駒ケ岳。

昭和三十六年　九月霊山、阿武隈の山々。安達多良山。

昭和三十七年　二月矢祭山。六月尾瀬。十一月五十人山。

昭和三十八年　金精峠から奥鬼怒。

昭和四十年　七月那須岳から甲子へ。

（石原　憲治）

入沢　文明氏（一九〇二―一九七一）

入沢君との交際は永年、趣味を同じうする事から、また双方の親父同志が親しくしていた事から、また晩年には同病相憐れ

むというか……病気まで同じうしてしまったのだから、こんな交際も珍らしいのではないだろうか。併し趣味の点では、お互いに笑って楽しまれる事で過せるものの、病気の事となっては、こと命に関する事だから唯笑って済ませるものではないので、随分小生も病気の事については彼に忠告を与えていたのだが、まさかあんな元気だった同君が先立つとは、全く考えてもいなかっただけに、今以て彼の急逝は残念で堪らない次第である。

最初に同君に会ったのは大正十年の冬、赤倉温泉のスキー場で、同君が当時漸く流行し出したテレマーク滑降で、鮮やかなシュプールを練習場に残している時からで、未だ単杖のリリエンフェルト式締具の時代の事だから、赤倉のスキー練習場における同君のスマートな滑降振りは、言わば衆人の注目の的であったのである。衆人とは言っても当時の事だから、数える位しかいない数少ない練習場の事ではあるが、元来が明朗な性格の同君の事であるから、誰とでも気軽に話し合うという性質の人であり、同君が、他人を非難したり苦情を言ったりする事は、曽て一度も聞いた事もない人だから、忽ち夜になって同宿の香雲閣の同君の部屋を訪れたり、こっちの部屋を訪れられたりして、忽ち親しくなってしまったのである。当時、同君は一高のスキー山岳部の委員であり、此方は未だ中学生であったが、言わば兄貴分の同君は、恰も学校の先輩が後輩をいたわる様な態度で、兄弟の如く晩年迄付合ったのである。赤倉で知り合って以来、翌年から五色温泉に一緒に行った回数も何回位あったか、チョット数え切れない位であった。

元来がスポーツ好きの同君の事だから、山登り、スキーの他にテニス、ラグビーと相当こなしていたが、大学に入ってからは東大のラグビーの選手として大いに活躍もしていたのだが、小生もまた高等学校時代にはラグビーもやっていたので、この点でも矢張り、同君と益々親しくなるばかりであったのだ。それから同君が大学を出て間もなくゴルフを始め、此方もまたゴルフを始めたという事で、言わば家庭的の交際から趣味の交際として同君とは学校は違っても益々離れ難い間柄となってしまったのである。学校は違って、晩年に至る迄親しく付合った友人は、小生にとっても数少ない竹馬の友の一人なのである。また一方学問の点でも勉強家の同君は小生が大学生になって、山登りにばかり夢中になって碌に学校に出ないので、卒業論文に苦労しているのを同情してくれて、論文の原稿迄書いてくれるという親切心まで、同君にすがってしまったのだから、一面、同君は趣味の友だけでなく、恩人でもあるわけである。

大学を出て同君の活動的な明朗な性格は、同君に一番適した新聞記者生活に入ったという事は、誰から見ても誠に賢明な道を選んだと思うのである。

それは朝日新聞社時代の事であったと思うが、確か高松宮殿下だったと思うが、盲腸の手術か何かで東大病院に入院された

事があったが、何しろ相手が高貴の方だから、各新聞社も御病状の変化の速報にヤッキとなっていたのは当然の事であるが、同君の御尊父が宮内省の侍医で、主治医であったのでこのニュースに関しては、常に朝日新聞が他社を抜いていたので、同君もこの時だけは小生に嬉しそうに語るのであった。

同君は学生時代からお酒の方も相当の酒豪であり、また通でもあり、小生もよく銀座のバー辺りで交際もしたが、同君は「親父は侍医の頭、息子はバーの神」という異名を振りまいていられたものであったが……、と言って同君は決してお酒のために乱れるような事は一度も見せた事もないし、実に明朗な綺麗なお酒であった事は、矢張り同君の毛並みのよさ、明朗さが原因であったのだ。

趣味も広く、人柄も明朗で、その上新聞記者でもあったのだから、同君程交際範囲の広い人もあまりないのではないだろうか。

山岳会に入会したのは割合遅かったのではあるが、体協と山岳会の密接な役割を果たしてくれたのは勿論、同君であり、国体登山などでも、常に同君が後ろだてとなって重要な役を果たしてくれた事は、見逃がす事の出来ないことである。何んでも頼めば快く引受けてくれ、謙虚な同君は決して自らを宣伝するような事はせず、山岳会としても同君の好意は決して忘れてはならない事なのであり、それだけに同君の早死は誠に残念な事でもある。

晩年、胃潰瘍の疑いで入院していた時、この点だけは小生の方が先輩で、同君より一年程前に入院手術をして、退院後も経過良好で今日に至っているので、当時、彼にも胃潰瘍など恐るるに足らず、手術を随分勧めたのだが、この点だけは同君は案外臆病で仲々応ぜず、結局はガンに移行して早死するようになってしまったのだが、小生も今になって何故もっと積極的に、手術を早くとすすめなかったのかと、今更ながら残念で堪らないのだ。夫人のお話しでは晩年、成瀬君も手術であんな元気になったのだから、手術をしようかなーと言ってましたとの事だったが、時、既に遅かったという事を後に聞き、小生も親友でありながらもっと激しく積極的に勧めるべきであったと、後の祭りながら責任の一端を感じているのである。

年齢からいっても未だまだ先の長い年であったのだから、尚更小生も責任を感じている次第である。

晩年よく東京駅辺りで通勤時刻に——パッタリ会う事が多く、その時でも、これも矢張りお互いに年齢のせいか、また同病相憐れむというか必ず「どうだい……胃の方は……」で先ず話が始まるのであり、またゴルフ場などで会っても、いつもの通りお互いに胃の調子の話が、先ず初っぱなの会話になるようになってしまっていたのだから、それだけに同病で生き残っている小生にとっては、今以て同君の死は諦らめ切れず、スッキ

リしないのである。

ここ数年来、山岳会の同好の士で山岳会ゴルフ会を毎年、我我のホームコース、相模で催しているのだが、相模の創立以来の会員の同君は、いつも面倒な世話役を引受けてくれ、若い連中の相手となって、あの明朗さは常に若い連中の尊敬の的であったのだ。晩年は確かに昔の元気は衰えて、一ラウンドが精一杯のようではあったが、それでも、山岳会ゴルフ会の時は若い連中に「入沢さん、もう一ラウンド」などと言われると、少しも嫌な顔も見せず結局「久振りで二ラウンドやった――」などと、如何にも朗らかな笑顔を見せていたのが、小生には未だ判然眼の底に残っているのだ。

御尊父が在世当時、斯界の名医として聞え高く、反面「医は仁術なり」そのもののような、非常に親切円満な常識家であったとは、小生親父から夙に聞いていたので、この親父にしてこの息子ありと、常に同君を慕ってはいたのだが、彼の名医の御尊父の令息であったのだから、御尊父のお弟子さんも今の医学界に沢山居られるのだから、同君の病気は何んとか早目に見破れなかったものかと、今以て残念に思うのである。

それに一面、家庭においてもよき親父であったという事は、夫人のお話しによれば御本人は勿論自らの元気を信じて、若し夫人が同君より先立たれるような事があっても、後は自分が不自由のないように「洗濯機の使い方を教えておいてくれ……」と云っていたとのお話であったが、これなども如何にも家庭の人としての、夫人に対する優しさだと思うのである。一面、同君もまさか夫人より先に亡くなるとは考えてもいなかった自信があったと思うと、尚更小生にとっては同君の早逝は悲痛の種なのである。

（成瀬　岩雄）

略　歴

明治三十五年（一九〇二）二月八日誕生。教育大学付属中学、第一高等学校を卒業し、
昭和二年　東京帝国大学法学部を卒業。
昭和四年　新聞連合社入社。
昭和六年　東京朝日新聞社入社。
昭和十五年　大政翼賛会宣伝部入会。
昭和十七年　外務省大使館一等書記官拝命。
昭和十八年　東亜旅行社（現日本交通公社）入社。
昭和二十六年　日本交通公社理事就任。
昭和三十八年　交通印刷（株）会長就任。日本温泉協会副会長就任。
昭和四十二年　山陽電気軌道（株）、山電航空（株）常務取締役就任。
尚この他日本ユースホステル協会常任顧問、中林エンタープライズ（株）相談役、昇仙峡観光取締役を兼任。
昭和四十六年（一九七一）十月二十九日逝去。

日本山岳会へは昭和二十二年入会（会員番号二六一一）、理事あるいは評議員として戦後体協に加盟した日本山岳会と体協との関係、特に国民体育大会登山の企画実施について尽力された。それらの点については渡

辺公平氏の「入沢文明さんを惜しむ」（会報第三一八号収載）にも述べられている。（編者）

真田　昌孝（さなだ　まさたか）氏（一九〇六―一九七二）

真田昌孝君とは大正十三年、彼が四高に入った頃からよく一緒に山に登った。初めは中学も高等学校も違っていて知っていなかったが、友人の野村米男君が真田君と同じ中学で、それを通じて一緒に山に行くようになった。野村君は中学時分からよく山に登り、その頃は法政大学の仏文科にいて、亡くなった田中菅雄君とも親しかった。夏休み私が金沢に帰ると野村、真田の三人で立山から槍の方まで方々歩き廻った。その頃のことが次々と思い出される。三人で早月川、馬場島の磧でテントを張って夜中の雨で浸水。ずぶ濡れで水電取入口の小舎（今は立派な何とか荘があるらしいが）に逃げ込んだことがあった。天候回復を待って早月尾根を登った時、雪崩にやられた羚羊の屍体が雪渓の上に横たわっていた。その時はそのまま通り過ぎたが、後で真田君が羚羊の角は高価なものだと聞いて来て、あの時、角だけでもとって来たら、当分の山登りの費用が助かったろうにと残念がっていた。

黒部の東沢から赤牛岳に登ったことがある。道のない急な斜面の藪の中を登ってる中に日が暮れて、綱で身体を支えて眠った。夜中に真田君が大きな声で叫んだ。「誰かが水筒からゴクンゴクン水を飲んだ」と言うのである。その日は水筒の水がとっくになくなっていて、水のことばかり考えていたので、そんな夢を見たらしい。翌朝赤牛岳の池塘のある所に出て、あわててその水を飲んだが、気がついて見た時は小さな虫が沢山泳いでいる汚い水だった。

その後三人寄ると色んな思い出話が何時迄も尽きなかった。

真田君は本当に山が好きだった。若い頃は勿論だが、戦後から近年にかけて時々便りが来て、日帰りで倉ヶ岳に登ったとか、大嵐谷にキノコを採りに行ったとか言って来た。一人で行ったり、近頃は奥さんと一緒の時も随分多いようだった。県の催しや、県山岳協会や四高旅行部の会にも出かけていた。大体一週間おき位だが、多い時は毎週続いて登っていたこともあった。

研究心が強く植物に就いては詳しかった。四高旅行部の関係で植物の先生と同行して覚えたり、先生のいない時は採集して来たので名前を教わったりしていた。彼の残した山の手帳には山草、野草の名が書き連ねてあった。俳句もやりかけていた。山の手帳に句が書いてあったり、俳句の先生の手紙が貼りつけてあったりした。昭和三十九年の秋頃、手取川流域に温泉が出るらしいとの話から、地質の先生に関係をつけて何回かボーリ

ングをやり、うまく泉源に当り四十一年の春、旅館が建つことになった。本人の話では宿の主人がお礼に何をしようかと言うので、何もいらないから句碑を建てて欲しいと言ったそうだ。そして「……の出湯かな」とか「……寒椿」と言うから、野村君と二人で素人が句碑を建てるのは、悪名を千載に残すことになるから是だけは止めなさいと散々言って、本人もやっと思い止ったようだった。

真田君は碁が強かった。その碁を有効に使っていた。大学卒業の単位が足りなくてフランス語をとった。野村君は仏文科だから、彼は碁を教えて、フランス語を習うと言う交換教授をやった。中司文夫さんの便りに「彼は酒一本の代償で碁を教えに来てくれた」とある。

昭和十三年の夏、二人で飯豊山に登るつもりだったが、真田君は急用で行けなくなり私一人で行った。今年（一九七二年）五月二人で行こうと約束していた。ところが二月初め入院したと聞いた。普段丈夫なんだから大したことはあるまいと思っていたら、三月二十九日奥さんから電話があって、うわごとを言ってると言う。「金ちゃんが飯豊で待ってるから行かなきゃならない。」これは重態と思って三十日金沢に行き、野村君と北陸病院に駈けつけたが意識はハッキリしていなかった。四月一日奥さんから亡くなられたと言う電話があった。

手塚　英信氏（一九四〇―一九七一）

略歴

明治三十九年（一九〇六年）九月一日　金沢市に生まれる。
大正十三年四月　第四高等学校文科入学。
昭和二年四月　九州帝国大学法文学部入学。
昭和四年六月　帝国学士院よりローマ法の研究に付学士院賞を受く。
昭和五年四月　九州帝国大学大学院入学。
昭和六年四月　同大学法文学部副手就任。
昭和八年四月　東京市役所書記就任。
昭和二十一年四月　（株）福井工務店代表取締役就任。
昭和三十九年七月　日本山岳会入会（会員番号五七五七）紹介者は藤島敏男、村尾金二。
昭和四十年一月　金沢地方裁判所調停委員になる。
昭和四十一年五月　石川県山岳協会理事長になる。
昭和四十三年八月　社団法人石川県体育協会より山岳団体育成に功ありとして表彰を受く。
昭和四十六年八月　菱和自動車輸送株式会社に入社。
昭和四十七年四月一日　死去。

（村尾　金二）

五月五日の真夜中、けたたましい電話のベルが異常な音をた

てた。

「ルート工作の方は順調、四月下旬から五月上旬にかけてアタックの予定」というヒマラヤからの便りを受けとってから、登頂の可能性も七分三分で極めて困難を予想されていたが、あるいは良い報らせも、今日か、明日かと待ちこがれていた自分には、この午前二時という時刻が気になってならなかった。

もしかしたら悪い報らせ、一番心配していた最悪の事態ではないかと一瞬息を詰めた。案の定、この一報は手塚との別れを決定的なものにした。

JAC信濃支部の会員として、また松本県ヶ丘高校山岳部OB会の県陵山岳会の先輩、後輩として共に山に情熱を注いだ間柄だった。

三ヶ月前、県陵山岳会が二度目の遠征としてダウラギリ五峰に八名のパーティーを送ってから、順調なルートの延びと共に手塚の活躍もしばしばの便りで期待どうりだった。それなのに、頂上直下五〇〇メートルの地点でスリップし、ザイルを結んでいた他の二人と共にコーナボン氷河の底に消えていったという。標高差四〇〇〇メートルの滑落のため、遺体の確認さえ出来ずして、帰国しなければならなかった同僚の気持ちは、いかばかりであったろうか。

彼は県ヶ丘高校を卒業すると同時に大阪の美津濃に勤務し、好きな山を続けながら関西登高会をはじめ、その道の先輩達と交渉を持ちながら、技術と知識を培かっていたが、山に登るには近い程良しということで、三年程して松本へ帰ってきてしまった。JACへ入会したのもその頃である。

四人兄弟の末っ子で、母はすでに亡く、父親の他界したのも松本へ帰って二、三年した頃だった。母親がわりの姉からは特に期待され、可愛いがられていたようだ。父はアルプスのガイドで晩年は西岳の小舎で静かに余生を送っていた。ヌーボウとした表情に似ず、山でのファイトとセンスは抜群であった。それは親譲りであったかも知れない。

海外への登山がようやく活発になり、ドルの持ち出しも自由になったその頃、われわれも長年の夢実現とばかり、ヒマラヤ、アラスカの山々を研究しては、その度に挫折する時期であったが、一九六七年県陵山岳会は初の海外遠征をニュージーランドに送ることができた。

手塚と共にそのメンバーに加わった私も、かなりの無理をしたが、硬い氷やもろい岩と戦いながら多くのものを学んだ。タスマン氷河を中心にクック、タスマン等九つの峰に立ったが、ヒラリーを生んだここの山は確かに手ごたえがあった。

二十時間を要したクック峰アタックの時、特に青氷のアイス・キャップでバケツのようなステップを切り続けた思い出や、その数日後、難しさでは右に出るものがないと、地元で言われているタスマン峰に挑んだわれわれは、垂直に切れたナイフエッ

ジの下降で立ち往生させられたにがい思い出。「ここではスリップは許されない。もし自信がなかったら、それは自分の技術が未熟だからだ。」とお互いに結論しあったその彼が、スリップで命を落とすとは……。

それから二年後、JAC信濃支部のアラスカ遠征に参加した彼が、豊富な経験と技術を生かし、チームの中心として大いに働いたと報告を聞いている。

「岳人は山で死んではならない。それは最大の敗北であるからだ」と私は常に言っていた。しかし誰よりも山を愛し、夢にまで見たヒマラヤで死んだ彼が、幸せだったと思ってやりたい気持ちでいっぱいである。盛大に行なわれた合同慰霊祭で、泣きながら校歌を歌うわれわれを見つめる彼の写真は、何を考えていただろうか。

今も冷たいヒマラヤの氷の中に眠る彼、願わくば安らかにと冥福を祈りたい。

彼はこの時わずか三十一歳だった。

略歴、山歴

昭和十五年（一九四〇）五月十日　誕生。
昭和三十二年　松本県ケ丘高校山岳部に入り、北アルプスを中心に山行を重ねる。三十四年チーフリーダーとなり、また富山国体に県代表として参加。
昭和三十四年　高校を卒業し美津濃に入社して大阪に勤務、大阪の岳友と共に山登りに精進する。その後松本山の店、ついで松本スバル自動車に勤務するようになってから、JAC信濃支部の合宿を中心に若きリーダーとして活躍した。
昭和四十二年　県陵山岳会（県ケ丘高校山岳部OB会）のニュージーランド遠征に参加、クック、タスマン、その他に登頂。
昭和四十三年二月　日本山岳会入会（紹介者は浅輪幸久、塚本茂樹氏）。
昭和四十四年　JAC信濃支部アラスカ登山隊に参加、マッキンレー、ホウレイカーに登頂。
昭和四十六年　県陵山岳会ダウラギリV峰登山隊に参加、第一次登頂隊員として登攀中五月五日、高度六八〇〇メートル地点に於いてスリップのため他の二隊員と共に遭難死去。

（中野　和郎）

千々岩　玄氏（ふかし）（一九四二―一九七一）

君がネパール・ヒマラヤに眠ってからもう二度目の冬山がやってきた。

君は大学時代から山へ山へと精進していった。ある時は理科系として初めてのマネージャーにも選ばれて、部の世話もよくやっていたようだ。君が自宅から通学していたこと、私共が聊か山への理解があったこと、あるいは自宅の写真暗室の利用などで、君の在学中はあたかも部室の延長みたいで多くの部員と

も接することができた。このことは君の卒業の後もつづいていたが、私はそれに満足している。

君の山行は両親の血がつながっているという人もある。しかし私共の山行は狭い台湾に限られたことであった。その中でも未開の高砂族に接することができたのは、まことに有意義であった。君の山行はこれに比べたら本格的であって、学生時代の精進はもとより、山行のために職場を松本に選び、早速大町山の会に入会し、東京に転じてまもなく日本山岳会にも入会している。

あるとき「本人は憧れのヒマラヤで死んで本望だろうが、遺族はたまらないだろう」と慰められたこともある。しかし誰よりも残念であったのは君自身であったと信ずる。親兄弟はもとより、在学時代から社会人となってからも、君は多くの人から愛された。その人々の期待を裏切る結果となって、君はほんとうに死にきれない想いであろう。

この度のネパール・ヒマラヤ遠征について、君に二つの夢をかけていた。一つは艱難を乗り越えて前人未踏の雪嶺をきわめることによって、その人柄は大きく成長するだろうし、第二は未開の民族に接することによって、その人間性はさらに深められるだろうということであった。

君の現地からの通信に「同じ東洋人として生まれながら、かくも貧しい生活をしている人があると思うと責任を感ずる」という意味の一節があった。シェルパ達も君をよく慕っていて、事故のときにはみな泣いてくれたということだ。

君は二十九年間、ほんとうに私どもの期待に応えてくれた。この度の遠征についても、先発隊としていろいろな労苦を克服してその任務を果し、死の瞬間まで卒先して難しいルート工作に専念していたということだ。よくやったよ。

朝夕仏だんに合掌しては「君さえ無事に帰っていたら」と想いながら嗚咽を繰り返している。この歎きの涙はとうていつきない。しかし君の一生を通じて最高の生き方をしてくれたこと、そして君は山行によってその真面目な生き方を、求道にも通ずる真摯な態度で追求していたことを信じて満足している。これから先、歎きの涙を満足の涙に代えるようつとめていきたい。

（一九七二・一二・一七）

（千々岩助太郎）

略歴、山歴

昭和十七年（一九四二）四月十七日　台北市朱厝崙にて誕生。（父、助太郎氏は曾て台湾山岳会理事であった頃、故沼井鉄太郎氏と親交があり、『山岳』第五十四年に同氏の追悼文を寄稿している。）
昭和三十七年四月　九州大学農学部入学、学友会山岳部入部。
昭和四十一年三月　九大農学部農業工学科を卒業し、四月石川島芝浦機械（株）入社、松本工場勤務。
昭和四十一年八月　大町山の会へ入会。
昭和四十三年四月　新明和工業（株）川西モーターサービス東京工場勤

務。
昭和四十三年七月　日本山岳会へ入会（会員番号六五一〇号、紹介者は古原和美、深田久弥の両氏）。
昭和四十六年二月　結婚
昭和四十六年八月　九州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊々員として参加出発。
昭和四十六年（一九七一）十月六日　ダウラギリⅤ峰登頂のためルート工作中雪崩のため遭難死。

*

昭和二十七年―三十三年（阿蘇山、久住山、三郡縦走）
九州大学山岳部時代　昭和三十七年―四十一年
（穂高、立山、遠見尾根、祖母・傾・山手本谷遡行、剱岳、赤牛岳周辺、湯俣尾根・赤牛岳北東尾根、雷山、傾山、剱岳池ノ谷、野北岩場、韓国岳霧島山群、剱岳北方稜線、白山三山周辺、大タテガビン、九重山、笠ケ岳東面、滝谷）
大町山の会時代　昭和四十一年―四十五年
（鳥帽子岳、雨飾山、爺ケ岳北稜、樅池、爺ケ岳奥ノ稜、布引岳東尾根、唐沢岳幕岩、立岩、餓鬼岳、五竜岳、樅池、唐沢岳北尾根、五竜岳G2中央稜）
（千々岩助太郎編『ダウラギリへの道――千々岩玄追悼文集――』（昭和四十七年十月刊）による。）
（編者）

成田　潔思氏（一九四一―一九七〇）

ウォーキートーキーでベース・キャンプの隊長からの声が事務的に響く。
「エベレストでわれわれの仲間の成田さんが、四月二十一日、心臓麻痺で亡くなったという連絡を受け取りました。明日の撤収は充分気を付けて下さい。」
場所は、マナスル山群のバウダ峰の第三キャンプ。私も成田君と時を同じくしてヒマラヤ遠征を試み、仲間の一人を転落事故で失いながらもようやく登頂に成功し、頂上に立った二人を迎えて、登頂の模様を聞いていた矢先に知らされた訃報であった。仲間の死でともすれば沈みがちな雰囲気だったところに、ようやく明るいきざしが出そうなところに、またしても暗く重い空気がただよった。テントの中では、誰も一言もしゃべらなかった。
あの成田が心臓麻痺で死ぬなんて、誰もが信じられなかった。ベース・キャンプには、エベレストや東京の仲間達から、いろいろと詳しい便りが来ていた。肺炎をこじらして体の調子が良くなかった。体の調子が良くなり、C1からC2まで荷物な

しで登り、C1まで帰り、夕食後に胸が痛いと言っているうちに、小さく「ウッ」と言ったきり二度と帰らぬ体になってしまった……。

思い起こせば、君との出会いは十年以上も前の昭和三十五年、横浜・日吉の汚い山岳部の部室だった。折からヒマルチュリに行っていたわれわれの部の遠征隊の山田二郎隊長から、山岳部の新入部員にあてたメッセージに、次のような言葉があったことを今でも覚えている。

「ヒマラヤに行く事が最終であるような、小さな夢は持つな。山ではアブノーマルな事が起こるのがノーマルなのだ。形式だけの技術、物ごとを指摘されなければ動けない登山者は、山登りの世界ではたちまちにして落伍者となること必定である。」また、多勢の先輩達から「考える山登り」をやれ、と教えられ、「山では死ぬ事がある。それでも何故お前は山に行くのか?」等、若いわれわれには難解な問いかけをされ続けて育った。特に君が、四年生で山岳部のチーフリーダーをしていた時は、チーフリーダーとしての責任から、この解答のない質問に日夜取り組み苦悩していた。曲り角に立っている、学生登山の宿命だったかもしれないし、また、四年間の学生生活に対して青春の価値づけをする為の、試行錯誤だったと笑われるかもしれないが、四年間は山をその真中に据え置いて、意義のある人生を戦っていた君の姿が今も目に浮ぶ。

大学を卒業し、大手の水産会社の社員となった君は、早朝四時からの魚市場での仕事から夜遅くまでの会社の残業まで、非常なファイトで業務にあたり、社会人として立派に職責を果してきたばかりか、大いに将来を嘱望されていた。君にすれば、あの学生時代の山登りに悩んだ事を考えれば、会社での仕事は目的と結論がはっきりとしているから簡単であったと言うに違いないが、君は常日頃「われわれは山登りで生活しているのではない。しかし危険の多い山に登る以上、それは趣味だけの問題ではすまされないし、中途半端なものではない。」と言っていた。そのように言い、また実行してきた君だから、エベレストでは必ず、われわれの期待に応えて立派な山登りをしてくるという確信が、君にもわれわれの仲間にもあった。もとより昔から体力的にも君は非常に頑健であった。しかし高度による障害は、あの普段は野蛮とさえ感じさせる頑丈さも吹き飛ばしてしまうのだろうか。ヒマラヤには続々と遠征隊が出ているが、高度に対する研究が進んで、高度障害の原因が一日も早く解明され、その対策が講じられん事を祈りたい。

略歴、山歴

昭和十六年(一九四一)十二月二日生まれ。
昭和三十九年三月　慶応義塾大学経済学部卒業。同年四月日本冷蔵株式会社入社。

昭和四十四年七月　日本山岳会入会（紹介者宮下秀樹、辰沼広吉両氏、会員番号六七五七番）。
昭和四十五年四月二十一日　エベレスト登山中C2にて病死。（『山岳』第六十六年六十三頁参照）

昭和三十五年四月　慶応義塾大学体育会山岳部入部。
昭和三十五年七月　北アルプス千丈沢合宿。
昭和三十六年三月　北アルプス裏銀座春山合宿。
昭和三十六年十二月　南アルプス赤石岳冬山合宿。
昭和三十七年十二月　剣岳冬山合宿。
昭和三十八年五月　北鎌尾根―北穂高岳。
昭和四十年十二月　穂高岳。
昭和四十二年三月　白馬岳主稜。
昭和四十五年一月　エベレスト遠征隊参加。

（岡部　紘）

山岳　第六十二年（一九六七年）

会員第一号城数馬氏のこと	藤島敏男
アンデスからアマゾンへ（一九六五年）	同志社大学山岳会
アコンカグア南壁（一九六六年）	原　真
東グリーンランドの山（一九六六年）	池田錦重
アンナプルナ北方山域の踏査（一九六五年）	薬師義美
山内ピッケル抄録	平柳一郎
山と明治天皇	広瀬誠
越後の県境を探る	日本山岳会越後支部
ハンター及びフォレイカーの登頂	錦織英夫
グランド・ジョラス北壁ウォーカー稜の登攀	伊藤敏夫
コー・イ・バンダコール登頂（一九六六年）	板橋元一
ミール・サミール一九六六年	中馬敏隆
バダクシャン山地の旅	安川茂雄
アラスカ・ボナ峰登頂	東京教育大学山岳部・同OB会
ペルー・アンデス（一九六六年）	エーデルワイス・クラブ
ボリビアの山（一九六五年）	岡島成行
ティエラ・デル・フェゴの山旅（一九六六年）	安間荘
アーサー・ジェフリーズの富士登山	成瀬岩雄
追悼・図書紹介・会務報告・英文梗概	
海外登山年表　＝一九六六年＝	松田雄一編

A5判三七〇頁・写真九〇葉・地図二十五面・定価二〇〇〇円

図書紹介

遥かな山やま

泉靖一著　A5判　三四七ページ
一九七一年十一月　新潮社
発行　定価一二〇〇円

日本の「山の本」には自伝物はまれである。この本は著者の「一つの人生と、そして一つの時代の記録」である。偶然とはいえ、「過ぎ去ったことを、好んで話したがるのは、老化現象のはじまりのようである」と本書のかきだしに記して、終章の筆をおいてから半ヵ年後に、著者は忽然と世を去ってしまった。本書は、『アルプ』誌に約三ヵ年にわたって連載された文章をまとめてできた。著者とほぼ同じ時代に山登りをやっていて、戦後になって面識をえた私は、連載がはじまってからは毎号をたのしく読んだ。今日、一本に装を改めた本書を手にして一層の感銘をうけた。本をひもどくとき、山の仲間が私の近くで昔話を語りかけている想いにつつまれる。

泉靖一（一九一五―一九七〇年）の名は、異色な学風の文化人類学者として世に知られていよう。とくに、南米・ペルーのコトシュにおける仕事は、南アメリカ最古の文明の確認ということで、斯学ではたかく評価されている。しかし、氏の学問の軌跡が「山」ときわめて深いつながりのあることをこの本は物語る。泉氏が登山家であったことを知っていた人は、そう多くないと思うが、少年時代の「山」との出会いが契機となり、学生時代には当時としてかなり先鋭的な山登りに熱をあげ、やがて山登りが広い空間への探検的旅行に展開し、その旅行がいわゆる学術調査を伴うかたちに進展して、遂いに文化人類学という、日本の学界でも新しい分野の学問研究の第一線の研究者に育ってきたのである。したがって、泉氏の学風には野外調査旅行（フィールド・ワーク）を主要手法とするところに特色があった。

この『遥かな山やま』は、大正四年の著者の誕生からはじまり（プロローグ―山と知りあう）、昭和四十三年メキシコの調査旅行を大学紛争の激化のために中断して、独り帰国するところで終っている（エピローグ）。まさに激動する日本の半世紀の歴史でもある。

泉氏は父君が京城帝国大学におられた関係で、金剛山群がはじめての山であった。一九三三年、泉氏が京城大学予科に入学したころには、まだ大学山岳部が存在していなかった。すでに日本内地では学生山岳部が一つの黄金時代を画していた時代に、朝鮮ではまだ近代スポーツ登山の黎明期であった。そのなかで泉氏は、積雪期の済州島遠征ができるまでに山仲間を組織し、同時に済州島についての卒論をものした。氏の生涯を貫く、山・探検・学問という一体的な行動パターンは、すでにこ

の時代に芽ばえていたようである。

本書の前半約四分の一を占める朝鮮時代が、内容としては文字通りの山岳書であって、戦前の朝鮮の山々の姿がいきいきとしている。しかし、本書の大半は登山家の書というより、探検家の物語と呼んでよい。一九三六年の北支旅行からはじまる約十年近くの間に、支那大陸を中心としたいくつかの学術調査旅行が語られている。この期間は日本の近代的学術探検史のなかで注目すべき一時期であるが、泉氏はこの分野ではむしろ先駆的役割を果していた。終戦前後のきびしいときの泉氏の行動が、短い文章で語られているが、人間としての泉靖一の一面が如実に躍動している感がある。

母校を敗戦とともに失い、学者としての社会的地盤が崩れたなかで、氏は自ら研究活動の足場をつくっていく。それはあだかも、氷壁に自らのステップを切っていく登山者の行動のように受けとれる。

戦後の激動期がすぎ、一九五〇年代にはいって、泉氏は東大を拠点に南アメリカの調査研究のリーダーとして活躍する。第一次（一九五八年）から第四次（一九六六年）アンデス学術調査団が、有名なコトシュ遺跡の発掘に成功する。この辺の記述は、野外科学の研究にまつわるいくつかのエピソードが語られていて面白い。

著者がこの壮大な自伝のタイトルに『遥かな山やま』とつけた意図は、本書の主な内容からすると一見してそぐわないように思える。しかし、泉氏が本書の終章を書き終ったとき、後生に再び「山への回帰」を心にいだいていたのではないかと想像する。また、自分の歩いてきたそれぞれの時期を語るとき、氏自身は常に朝鮮の山々に追想を走らせていたのではないか。

本書の巻末には、梅棹忠夫氏の「泉靖一における山と探検」という一文がのせてある。本書を理解するにきわめて適切な解説であるが、それ以上に、泉氏が生きてきた時代の山・探検・学問の一つの文明史的評論としても、すぐれた文章である。

〔渡辺　兵力〕

われらのものならぬ世界

ロベール・テズナ・デュ・モンセル著　桑原武夫・高田方一郎訳　B5判　二一三ページ　一九七二年一月　筑摩書房発行　定価一〇〇〇円

筆者のように、登山家の気品よりは俗物性の方をより多く観察して来たと確信する者にとっては、いささかの悔恨なしには読めないほどに、美しくきびしい品格を持った山の物語である。

著者のロベール・テズナ・デュ・モンセル氏については、巻末に共訳者の桑原武夫氏が要を得た紹介をしている。それによると著者は「G・H・M（高地山岳グループ）の会長をながく

つとめたフランス有数の登山家であり、また名文家としても知られている」という。日本ではあまり知られていない人物だが、法学博士であり、拓務省の植民地監察官となってベトナムにきたこともあり、その帰途日本にも立寄ったという。現在は大銀行の連合体の会長をつとめているという。

「痩せ型の、知的な、といっても神経質的では全然ない風貌をした瀟灑な紳士であった。しかし趣味は高雅で、てらっとした感じはどこにもない。むしろストイックな感じであった。独身で、当時（一九三七年春）はオートゥイユの上品なアパートに、ヴェトナム人の老コックと二人で住んでいた」。「私は日本で貴族といいうる人に会ったことはないが、ヨーロッパの貴族のよさということを考えようとすると、彼のことが思いうかぶ」と桑原氏は評している。デュ・モンセル氏はよき時代の典型的なアマチュア登山家ということになるらしい。日本でもよく訳されている売れっ子職業登山家たちの、読者におもねた文章とは異なる気品と、きびしさがあるのはそのためであろう。

はしがきにおいて著者は「山はここでは口実にすぎない。以下に読まれる物語は、何よりもまず一つの証言である」と言う。第一次大戦にはじまり、第二次大戦に終ったひとつの青春の証言という意味であろうか。著者が書きたかったことは「スポーツ上の成果の報告というよりも、むしろ山の呼びかけ、その美しさ、そしてもろもろの危険を前にしての魂の状態の反映である。」きわめて個人的な経験のうちに「どのような真実を見出すかは、おのおの読者の自由である」とも言っている。

手記は一九一四年（第一次大戦）から始まる。父も兄も戦争に動員されるが、著者の「年齢は大人のゲームへの参加を禁止した」。著者は「生命を賭けない努力はすべてとるに足りないものと考えていたので」彼の「眼が容赦するのは真の戦闘員だけだった」と感ずる。彼は戦闘者とは無縁の銃後の社会といったものに、嫌悪と軽蔑を感じながら、ついに戦いの機会を得ず休戦が訪れる。そのとき十六歳だったという。導入部の文章は少しきざで凝りすぎているような気もするが、少年期を脱しようとしていた著者が、登山という行為の中に求めたものが何であったかをうかがい知らせる。

初期の登山はコル・デュ・ジェアン、プレアルプ、ヴァノアーズ・アルプス、ドフィネ、サヴォア等で始まる。ハード・トレーニングを重ねていった結果、以前から著者が感じていた「戦争とアルピニズムとの間の神秘的なつながり」が確かめられる。著者は言う。「私は非常な慎重さによって抑制された危険の陶酔をも、そこに見出した。これは危険に対する嗜好だろうか？　そうであることは疑いない。しかしそれは生まれつきのよい精神による、自己の限界の追求を可能ならしめる限りにおいてのみ言えることである。アルピニズムが高貴の称号をかちえるのは、無用の危険追求によってではなく、逆に、その制裁のきびしさによってである。」

大学で、エドゥワール・ド・ジゴールというG・H・Mの会員と知り合い一緒に登り始める。このあたりの個人的な出会いから始まる山の友人関係というのが、山岳会主義の日本ではな

かなか味わえないところであろう。本書では山での人間の出会いや別れが、実に魅力的に描かれており、個人主義的な登山家の世界が好ましく伝わって来る。

著者はついに「真のアルピニズムのカテゴリーに入るもの以外には、ほとんど注意を払」わないような状態になり、ホテルの客たちは「背景の一部にしかすぎなかった」と断ずる時期を迎える。

しかし著者はこうも言う。「今になって私は自責する。彼ら(ホテルの地味な客たち)は、現在は消滅してしまった礼儀正しく、機智にとんだ集団を形づくっていた。彼らは私たちの無言の侮蔑に応えるために、とても味なことをやってのけた。調子の高い『民衆へのアッピール』の中で『ピッケルをふるってアルピニズムを行なう迷える者たち』をやっつけたあと、G・B・M—低地山岳グループ—を創立することを思いついたのである。低い国(オランダ)の女王が当然のことながら名誉会長に推された。会の紋章は『きのこ』と『なめくじ』と樅の木をまとめたものだった。」

G・H・Mに対してG・B・Mをこんな風に紹介する著者のいきな風刺を買いたい。いきといえば、こんな文章も出て来る。「誰にも行先を知らせていない山行から帰って来てテーブルにつくと、食堂全員の視線が集中した。風呂に入り、ひげを剃り、頭から爪先まで着替えて、山行の苦労の跡をいささかも現わさないように振舞うことを、私たちはいきだとしていた。その理由は、あとになって或る有名なアルピニストによって与えられた。ある日彼は私にこう言ったのだ。『僕は仲間の服装に非常に気をつかう。私たちの体がザイルに繋がれたまま岩壁の下で発見されることもあるかも知れないからな。』彼のおかげで私は、大きな愛情は自分自身を、死においてすら、尊重することを要求するものだということを知った。」

あげていけばきりがないが、山に関する珠玉のような名言があちこちに散らばっている本だ。

やがて著者は「シャモニー・ガイド組合の料金表に載っていない大胆な冒険に乗り出していくことをためらわない」登山家に成長していく。その過程で、アルマン・シャルレ、アンリ・セゴーニュといった一流の登山家たちと知り会って行く。

「オリンポスの入口で」という章に描かれている、山小屋でのセゴーニュ一行との偶然の出会いは透逸である。

マンメリーをそらんずるほどになっていた著者は「必習コース」としてグレポンを登り、つづいてピック・ラ・ファールを登る。そして苦闘の末に失敗する「グラン・シャルモーズの北面」あたりが、本書の前半の山場となっている。

「懐しき孤独」のなかでは著者の登山思想が語られる。

「こういった質問(どうして山へ登るのかといった質問)に山男は答えない。浮浪人のように言葉を濁してしまう。山男は自分自身も知らない、また説明もしたがらない秘密を持っているからだ。彼の選択した孤独な途は、日常の生活では内面的な欲求を満足させることの出来ない人間たちの歩む途なのだ。」

「現在はあらゆるものが山男の計画をつぶそうとする。彼の

周囲をとりかこみ、締めつける制約からどうやって脱出するのか？　おしよせる大衆におびやかされていない山はもう存在しない。」

「自然保護のために働く人はいる。しかし同時にまた人間の内心にある、神秘なものに対する嗜好を尊重すべき時が来ているのではないだろうか？

私はこのような願望に応えるガイドブックを何度も夢想したことがある。それぞれの山のために全ページ大の挿絵があてられ、巧みな陰影で山の美しい姿と見事なプロポーションが示される。山頂は軽やかな雲でなかば隠され、淡い線のみでえがかれる。ルートは適度に不確かのままで残され、山の構造が示す論理的なルートのみに限定し、それ以外は排除される。太い実線ではなく、気ままな点線でルートは示され、読者の精神が点と点の間から脱出できる余地をあたえる。」

「ルートの困難さの度合いは、気のきいた控え目ないいまわしで記述される。たとえば『芸術家むき、実業家むき、大胆むき、向うみずむき……』と。」

「そして最良のガイドブックとは、けっきょくのところ全ページ白紙のものではなかろうか。私がいま何ほどかその息吹きを伝えようと試みている、その当時は、ガイドブックなどというものはほとんど存在しなかったし、あっても幸いに不正確だったので、アルピニストはばらばら資料を寄せ集めるという、おどろきと魅惑にみちた作業をやらなければならなかった。あらゆるルートは忍耐強い準備と積極的自発的な行動を必要とした。そのいっぽう何という火のような情熱がつねに目覚めていたことか！」

「その頃はまだルートの選択が困難さの尺度によってきまるのではなく、もっとも有名な山々、その地方の女王としてだれしもがみとめ、その山についての物語が記憶の中で詩のように歌われている山々が対象になっていた。」

「グレポン登頂に成功すれば、登攀者としての資格にはなるが、山男の資格をえるには不充分だった。」

たしかに著者は、一時代前の滅び行く登山家であるかも知れない。現代の山の世界をむしばんでいる浅薄な風潮を拒否しようとするその姿勢の中には、一流本物の姿があり、それがかえって読者の心を打つ。このあたりは日本の若い読者に味読してほしいところだが、同時に世相に流されつつある大家連中にも、えりを正して読んでもらいたいところである。

冬のメージュ・サントラルの頂上から下りながら著者の冥想はつづく。「高山の焼付けた刻印は消えることはない。それは人間の魂の奥底にいつまでもつづく喜びと、癒えることのない悔恨を植えつける。それはわれらのものならぬ世界の喜びと悔恨である。その世界に私たち、新しいプロメセウスは、ある恵まれた日々、失われた楽園の反映のいくつかを盗み取りにいくのだ。」

シャルモーズでの失敗の翌年、モンブラン山塊に残された課題、コル・ド・ブレティエールの北斜面の初登攀に成功する。つづいてエイギーユ・ヴェルト南西面、ラ・バル・デ・ゼクラ

ン南東壁とつづく。

ヨーロッパの屋根モンブランの登頂については、著者らしい意見が述べられている。「そこへ登ったということで虚栄心がくすぐられる一つの有名な山をしか、そこに見ない大衆と混同されたくなかった」という理由で、著者はこの山の登頂にはとくに気を配り、ブレンヴァ尾根から登り、ボッス尾根からおきまりの、しかしきわめて美しいコースを通ってフランス斜面に降った。翌年も著者はモンブランへ向かうが、その途次、旧友エドアール・ド・ジゴールの訃報を聞く。

二度目の大戦が終ったとき（大戦中のことはあまり書かれていない）、著者は山岳兵としてアルプスにいた。旧ドイツの軍人だったオーストリア人と登ったドルーゼンフルー南壁の記述で本書は終る。「戦闘は、たとえ敵であろうとも、人間を尊敬することを教えたのだった」と著者は言う。

かつての敵と共に山を登る最後の章は、著者の戦争や山や友情に対する考えを象徴するかのようである。

登山行為の中に著者は戦いを求め、勇気と克己心をもって生命の危険をおかすことを肯定する。限界状況の中で自らを内省し、友情を得、人間の邂逅と別れを体験する。こうしたきびしい行動と思索の世界が、明晰な文体で語られているのが本書の特徴である。

素朴な男の世界が知的な文章で語られている。登山行為をこのように再現し得る著者の内部には、桑原氏も言うように「文学の素養の深さ」がうかがわれる。

ドルーゼンフルー南壁の登攀を終えて、オーストリア人と別れる場面が本文の末尾となっている。

「人間はつねに出発する。あらゆるところから、いずこでもないところへ。つながりがようやく出来た途端に、それは破られなければならない。

『さようなら、カルル。』

私は彼をはじめて名でよんだ。彼は一種の身振りをした。暗闇の中で、私たちは手を握った。彼はゆっくり、一語一語と単語をさがしながら、初めてフランス語でいった。

『私は……是非もう一度……お会いしたいです。』

狭い渓谷の上方に、空は完全に澄みきっていた。暗い線で空を囲んでいる山々は、空に明るい深さをあたえていた。そしてひとつの共通の愛を通じての邂逅のなかに、人間たちの血だらけの闘争の思い出が今宵、この空の深みの中で、私たちから消え去った。」

一読して余韻が残る本である。それは著者が多くの説明や情緒を省略し、行動の核心のみを取り出して、まるで短編小説のように配列しているからである。そしてこのように流麗な文章というのは、そうとうに苦心の作であろう。原著には写真はないそうだが、日本訳には八枚の写真が入っている。

フランスのすぐれた登山家が書いた、いかにもフランス的な本という感じがする。日本人が、このままの文章を真似てもそぐわないという気はする。アルピニズムはどうしても日本人の場合、仮り物になりやすい。そこであらためて、日本人らしい

山の文章とは、どんなものかという疑問に思いが飛ぶ。

原文を読む能力のない筆者が、翻訳文についてとやかくいう立場にはないが、ひとつだけ疑問がある。かた仮名訳の単語が少し不統一で気になる。英独仏さまざまな登山用語が頻出するのは少し目ざわりである。日本登山界の用語の混乱をありのままに反映したといえばそれまでのことだが、原文がフランス語の名文だとするならば、出来るだけ日本語の訳語を見つけ、やむを得ぬものはフランス語を使用してもよかったのではないか。

ザイル・パーティーというような訳語には、それが常用されていてもどうも疑問を感ずるし、「カットしかけていたステップが微塵に砕けちった」とか「それから左をトライしてみた」とかは、完全な日本語に訳せばよいと思う。この種の問題は論ずるにやすく、行なうに非常な困難を伴うが、それだけになにがしかの配慮がほしかった。

〔原　真〕

中央アジア探検史

深田久弥著　合判　五六二ページ　本文中に挿絵多数　一九七一年九月　白水社発行　定価二〇〇〇円

深田さんの中央アジア探検史の研究が、いつ頃始められたのか、定かには判らないが、いま私の手許に残っている昭和三十五年十月十八日付の同氏の手紙には、こんなことが述べられている。「近頃ヒマラヤだけでなく中央アジアに手を伸ばしていますが、まだその方の知識が乏しく、この方で威張れるようになるには、まだまだ年月がかかりそうです。まず手当り次第に探検記を読んでいます」。同氏の精細なヒマラヤ研究が進む過程で、自然に中央アジアの魅力に引きこまれたことを、この手紙はよく示している。それから十余年、朝に夕に同氏は尨大な中央アジアの探検記、旅行記の類を読破し、亡くなる頃にはわが国でも屈指の権威にまでなられたものと思う。

深田さんが中ア探検史を纏めたいと企図されたのは、既に西域探検紀行全集の計画された頃（昭和四十年）であろう。当時同氏は既に『シルクロード』を角川新書として刊行（昭和三十七年十一月）しており、深田さんらしい書き方で、私は将来刊行されるであろう中ア探検史に大きな期待をかけていた。同氏の急逝によって一頓挫をきたしたかに思えた本書が、この度上梓のはこびに至ったことは、故人を知る一人として喜びに堪えない。

本書は探検史とはいうものの、所謂編年体に叙述されたものではなく、有史以来中央アジア探究に大きな影響のあった人物を拉し来たって、その人物を中心に叙述したものであり、深田さん一流の評価が各章に漲っている点に特色がある。古代からの記述であるから、当然アレキサンダー大王であるとか、張騫であるとか、玄奘や高仙芝などの大遠征、大旅行が、概ね一人

一章に興味深く述べられており、その精確な叙述から考えて、調査には想像に余る困難があったかと思う。近代探検以前の叙上の人物は、他に法顕、マルコ・ポーロ、シュラーギントワイト等二十四章に及び、これで第一部をなしている。

第二部の近代探検史上の人物としては、当然のこととしてプルジェワルスキー、ヘディン、スタインをはじめ、わが国では河口慧海、橘瑞超を含め十四章に亘り各探検家の業績、特色を述べ、第一部同様読者をして飽かしめない手際は、流石深田さんならではと思わせる。各章末に主要参考文献が添えてある。

本書は全篇三十八章からなっているが、実は正確にいうと、その中八章は深田氏が遺されたメモ等をもとにして、長沢和俊氏が執筆したものである。深田氏が書くべくして書き得なかった未完の部分である。本書全篇に亘る整理校合と共に、この長沢氏の努力は特筆すべきもので、同氏及び熱心に協力した白水社の藤原一晃氏の尽瘁なくしては、おそらく本書はかかる形で日の目を見ることはなかったろうと、敬意を表するに吝かでない。最近法顕伝の邦訳等に立派な業績を挙げ、かつシルクロードの旅にも同行した長沢氏にして、はじめて出来得たことと思う。

細かい点で気のついたこと。二十七章三三七頁に、クリシュナ(Krishna)の暗号をKAとあるのは誤りでAKが正しい。パンディット探検家の暗号は原則として、本人の姓名の頭字と尾字をとり、それを逆にしたものである。Kishen Singh(別名Krishna)は従ってAKとなり、Mani Singhは GM、Hari Ramは MH、Sarat Chandra Dasは DCS と記録されている(『山岳』第三四年一号、一七九頁参照)。また三三八頁に「クリシュナやキシェン・シンの……」とあるが、前記のようにこの二人は同一人であるから、これは著者の思い違いであろう。

巻末に探検年表をつけたことは便利であるが、本書のごときものに索引がなかったことは些か惜しまれる。見返しにダンヴィルの地図を入れ、かつ本文中に主要行程図や写真版を数多く入れたこと、また巻頭にヘルマン・シュラーギントワイトの油絵から複製した写真版三葉を挿入したことは、本書の価値を高め、興味深いものにしている。尚巻頭の一葉は、カブールのスタインの墓に詣でる著者の写真(一九六六年春)であるが、著者亡きいま感慨あらたなものを覚える。

西域探検紀行全集の別巻として刊行されたものだが、形も大きく(合判)、九ポイント一段組としたのは、深田氏生前の希望だったと伝えきく。

中央アジア探検に興味と関心を寄せる人には欠くことの出来ぬ書であり、これだけ広汎に亘って探検家を纒めた書物は、海外にも類がない点を強調して擱筆する。

〔望月　達夫〕

会務報告

一九七一年七月～一九七二年六月

◇**七月理事・評議員会**　七月七日（水）ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、山崎、藤井、丹部、中島、村井、渡部、坂下、板倉、熊谷、野上、佐藤、金坂、小原、望月、山下
▽議事、報告
一、事務局員勤務規定改正の件
二、上高地山荘改築の件
三、学生部の件
四、自然保護の件
五、その他報告事項
（詳細は「山」三一四号参照）

◇**九月理事・評議員会**　九月二日（木）ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、藤井、坂下、山崎、野上、渡部、松永、村井、丹部、大森、宮下、牧野内、折井、佐藤、今井
▽議事、報告
一、上高地山荘の件
二、自然保護の件
三、アマチュア規定問題の件
四、会員名簿の件
五、山日記の件
六、海外遠征隊への推薦状発行の件
七、国際山岳連盟の件
八、その他報告事項
（詳細は「山」三一六号参照）

◇**十月理事・評議員会**　十月八日（金）ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、山崎、丹部、板倉、神崎、野上、熊谷、村井、松永、神原、大森、折井、加藤、金坂、島田、望月、佐藤、津田、織内
▽議事、報告
一、自然保護の件
二、年次晩餐会の件
三、エベレストメダルの件
四、上高地山岳研究所の件
五、台湾登山隊の件
六、韓国山岳会来日の件
七、海外遠征隊への推薦状発行の件
八、その他報告事項
（詳細は「山」三一七号参照）

◇**十一月理事・評議員会**　十一月四日（木）ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、山崎、藤井、宮下、中島、板倉、神原、松永、野上、坂下、折井、望月、佐藤、村山、金坂
▽議事、報告
一、上高地山岳研究所の件
二、エベレストメダルの件
三、自然保護の件
四、事務局員服務規定の件
五、「山岳」覆刻の件

六、韓国高所医学研究会の件
七、コーリ氏来日の件
八、海外遠征隊への推薦状発行の件
九、静岡支部二十周年の件
十、岩手支部創立の件
十一、その他報告事項
（詳細は「山」三一八号参照）

◇十二月理事・評議員会　十二月十三日（月）ルーム
出席者　吉沢、中屋、山崎、藤井、熊谷、坂下、大森、村井、板倉、神原、中島、野上、折井、金坂、織内、今井

▽議事、報告
一、上高地山岳研究所の件
二、南ア大井川椹島山荘の件
三、図書利用規定改正の件
四、岩手支部設立の件
五、書評委員会の件
六、その他報告事項
（詳細は「山」三一九号参照）

◇一月理事・評議員会　一月十七日（月）ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、山崎、藤井、宮下、中島、野上、熊谷、村井、坂下、村山、織内、小原、金坂、折井、望月、中田、加藤、今井、山口

▽議事、報告
一、秩父宮記念学術賞の件
二、上高地山岳研究所の件
三、書評委員会の件
四、エベレスト報告書の件
五、現地支部長会議の件
六、その他報告事項
（詳細は「山」三二〇号参照）

◇二月理事・評議員会　二月三日（木）ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、山崎、坂下、神原、板倉、野上、松永、大森、中島、神崎、熊谷、村井、望月、織内、金坂、津田、村山、折井、高山、今井

▽議事、報告
一、岩手支部設立の件
二、会費値上げの件
三、上高地山岳研究所の件
四、秩父宮記念学術賞の件
五、「山岳」創刊号復刻の件
六、次期役員の件
七、その他報告事項
（詳細は「山」三二一号参照）

◇三月理事・評議員会　三月九日（木）ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、藤井、山崎、野上、板倉、坂下、大森、中島、金坂、山下、今井

▽議事、報告
一、上高地山岳研究所の件
二、岩手支部設立の件
三、図書室職員の件
四、会員総会の件
五、エベレスト報告書の件

六、その他報告事項
（詳細は「山」三二二号参照）

◇**三月臨時理事・評議員会**　三月三十日（木）ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、山崎、藤井、板倉、丹部、坂下、松永、野上、村井、宮下、金坂、望月、村山、伊倉
▽議事、報告
一、昭和四十七年度通常会員総会の件
二、昭和四十七年度役員の件
三、給与規定の件
四、上高地山岳研究所の件
五、その他報告事項
（詳細は「山」三二三参照）

◇**四月理事・評議員会**　四月十四日（金）ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、山崎、藤井、丹部、宮下、神原、野上、坂下、中島、織内、加藤、金坂、佐藤、津田、山下、今井、林、山口
▽議事、報告
一、上高地山岳研究所の件
二、昭和四十七年度会員総会の件
三、その他報告事項
（詳細は「山」三二四号参照）

◇**支部長会議**　四月二十一日（金）ニュートーキョー成渓クラブ
出席者　三田、成瀬、吉沢、藤井、山崎、宮下、板倉、坂下、加藤、折井、伊倉、笠原（岩手）、柴田（秋田）、後藤（山形）、藤島（越後）、山本（静岡）、山本（山梨）、中田（富山）、熊沢（東海）、塚本（信濃）、今西（関西）
▽議事、報告
とくに議題を定めず、支部の現況等につき懇談的に話を進めた。
（詳細は「山」三二四号参照）

◇**昭和四十七年度通常会員総会**　四月二十二日（土）向井ビル四階会議室
出席者　三田会長以下七十六名（委任出席三一二名）
▽総会次第
一、会長あいさつ　三田　幸夫
二、昭和四十六年度事業報告　山崎　安治
三、支部報告
秋田（柴田）、富山（中田）、岩手（笠原）、関西（今西）、越後（藤島）、静岡（山本）、山梨（山村）
四、昭和四十六年度収支決算報告　山崎　安治
五、昭和四十六年度財産目録報告　山崎　安治
六、監査報告　今井　雄二
（以上承認）
七、昭和四十七年度役員選出の件
四十七年度役員として次の各氏を選任した。
〈理事〉三田幸夫、成瀬岩雄、吉沢一郎、中屋健弐、神原達、松永敏郎、大森薫雄、宮下秀樹、中島寛、坂下心一、丹部節雄、神崎忠男、板倉勝正（以下再任）、林和夫、伊倉剛三、松丸秀夫、近藤信行、広谷光一郎、須田紀子、帰山毅（以上新任）
〈監事〉今井雄二（再任、任期二年）
〈評議員〉島田巽、佐藤テル、望月達夫、織内信彦、村山雅美、金坂一郎、藤島玄、今西寿雄、中田勇吉、高山忠四朗（以上再任、任期三年）伊藤秀五郎（新任、任期三年）

八、昭和四十七年度事業計画案の件　山崎　安治
（原案どおり承認）　藤井　運平
九、昭和四十七年度収支予算案の件　山崎　安治
（原案どおり承認）　藤井　運平
（詳細は「山」三二四号参照）

◇**五月理事・評議員会**　五月五日（金）ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、神原、松永、宮下、坂下、神崎、板倉、林、伊倉、松丸、近藤、須田、広谷、帰山、今井、山下、津田、島田、加藤、小原、佐藤、織内、村山、渡辺（兵）、金坂、中島、丹部、大森、望月、中田、高山

▽議事、報告
一、上高地山岳研究所の件
二、経理規定、旅費の件
三、事務局佐々木光子氏退職による新任者採用の件
四、ルーム賃貸契約更新の件
五、常務理事互選の件
中屋、林、伊倉、宮下、中島、坂下、板倉の七氏と決定。
六、四十七年度理事会務分担の件
中屋（総務・財務）、林、（山研・総務）、伊倉（総務・財務・支部）、宮下（青年懇談会・高所登山研究会・指導・総務）、中島（山岳）、坂下（会報）、板倉（支部・自然保護）、松丸（山日記）、神原（海外連絡）、近藤（図書・書評）、松永（指導）、広谷（遭難対策）、大森（医療）、須田（婦人懇談会）、丹部（日山協・海外連絡・都岳連）、神崎（集会・青年懇談会）、帰山（青年懇談会）
七、常任評議員互選の件
島田、加藤、小原、織内、村山、渡辺、金坂と決定。
八、その他報告事項
（詳細は「山」三二四号参照）

◇**六月理事・評議員会**　六月九日（金）ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、林、伊倉、松丸、神原、近藤、松永、広谷、大森、須田、中島、坂下、丹部、神崎、板倉、帰山、小原、織内、金坂、今井

▽議事、報告
一、山岳研究所建築に関する件
二、火災時における処置に関する件
三、秋田支部長任期満了、重任承認の件
四、印鑑取扱いに関する件
五、名誉会員章制定に関する件
六、現地小集会、現地支部長会議に関する件
七、その他報告事項
（詳細は「山」三二六号参照）

◇**小集会**
▽第二七二回　昭和四十六年七月一日（木）於・九段会館
エベレスト国際隊帰国報告会　植村直己氏
伊藤礼造氏
▽第二七三回　昭和四十六年七月十五日（木）～十六日（金）於・ルーム
第二回　スケッチ教室　山里寿男氏
▽第二七四回　昭和四十六年七月二十七日（火）於・ルーム
マナスル西壁登頂　高橋　照氏
▽第二七五回　昭和四十六年八月十四日（土）～十五日（日）於・数馬

山崎屋

（詳細は「山」三一六号参照）

▽第二七六回　昭和四十六年九月十五日（水）於・奥多摩川乗山（出席者四十名）

（詳細は「山」三一八号参照）

▽第二七七回　昭和四十六年十月十五日（金）於・ルーム

ヒマラヤ遠征に関する実務　丹部節雄氏

▽第二七八回　昭和四十六年十一月十五日（月）於・ルーム

山の唄教室　西丸震哉氏

▽第二七九回　昭和四十六年十二月十五日（水）於・ルーム

忘年会

▽第二八〇回　昭和四十七年一月十五日（土）於・八方尾根黒菱平（出席者五十数名）

（詳細は「山」三二一号参照）

▽第二八一回　昭和四十七年二月十五日（火）於・ルーム

エベレスト見物スライド　川喜田壮太郎氏

▽第二八二回　昭和四十七年三月十五日（水）於・ルーム

ヒマラヤ映画上映　高橋　照氏

新島義昭氏

▽第二八三回　昭和四十七年六月五日（月）於・ルーム

ノーマン・ハーディ氏夫妻を囲んで

◇主なる行事および集会

▽マナスル隊交歓会

昭和四十六年九月六日（月）於・ルーム

（詳細は「山」三一六号参照）

▽第十二回登山技術講習会

昭和四十六年十一月二十一日（日）～二十三日（火）於・富士山御庭小屋。参加者二十八名

（詳細は「山」三一九号参照）

▽昭和四十六年度年次晩餐会

昭和四十六年十二月四日（土）於・マツヤサロン。出席者二百六十八名

（詳細は「山」三一九号参照）

▽第十回「この一本展」昭和四十六年十二月四日（土）於・マツヤサロン

（詳細は「山」三二〇号、三二一号、三二二号、三二三号参照）

▽第八回秩父宮記念学術賞授賞式（一九七〇年日本山岳会エベレスト登山隊に対し）

昭和四十七年三月三日（金）於・銀行クラブ

（詳細は「山」三二一号参照）

▽深田久弥氏を偲ぶ会　昭和四十七年三月二十一日（火）於・国際文化会館（詳細は「山」三二三号参照）

▽第二十六回ウェストン祭

昭和四十七年六月三日（土）～四日（日）於・上高地

（詳細は「山」三二六号参照）

▽第十五回有志関談会

昭和四十七年六月十日（土）於・六義園　出席者四十三名

（詳細は「山」三二五号参照）

▽第三回現地支部長会議

昭和四十七年六月十六日（金）～十八日（日）於・鳥海山

（詳細は「山」三二六号参照）

×　×　×

◇海外登山界との交流

▽本年度は三十三ケ国六十九団体と機関紙の交換を行なった。

▽日高名誉会員にネパール国文化勲章授章。
（詳細は「山」三一四号参照）
▽十月九日～十月十八日、台湾山岳会の招きで三田会長ほか十三人の会員は台湾をおとずれ、玉山登頂を行なった。
（詳細は「山」三一八号参照）
▽一月三日、本会と韓国山岳会合同の高所医学に関するセミナーが韓国ソウル市のアカデミーハウスで開催され、本会から住吉仙也、中島道郎、長尾悌夫、大森薫雄、関口周也の五氏が参加した。
（詳細は「山」三二〇号参照）

◇その他のトピック

▽第三回日本ヒンズー・クシュ会議
昭和四十六年十一月十四日（日）～十五日（月）於・福井県芦原町芦泉荘。参加者百四十一名
（詳細は「山」三一九号参照）
▽上高地山岳研究所の新築に着手、総額一〇〇〇万円の規模で建築資金の募金を開始した。（「山」三二五号参照）

◇山岳第六十六年（一九七一年）　一九七二年三月発行予定のところ実際には十一月に刊行された（編集者望月達夫、中島寛）。

一九七二年度役員

会　長　三田幸夫

副会長　成瀬岩雄、吉沢一郎

常務理事　中屋健式、林　和夫、伊倉剛三、宮下秀樹、中島　寛、坂下心一、板倉勝正

理　事　松丸秀夫、神原　達、近藤信行、松永敏郎、広谷光一郎、大森薫雄、須田紀子、丹部節雄、神崎忠男、帰山　毅

監　事　山下一夫、今井雄二

常任評議員　島田　巽、加藤泰安、小原勝郎、織内信彦、村山雅美、渡辺兵力、金坂一郎

評議員　堀田弥一、田口二郎、佐藤テル、望月達夫、辰沼広吉、藤島　玄、津田周二、伊藤秀五郎、今西寿雄、中田勇吉、高山忠四朗、伊達篤郎

支　伊藤秀五郎（北海道）、笠原潤二郎（岩手）、柴田均二（秋田）、後藤幹次（山形）、伊達篤郎（宮城）、伊藤弥十郎（福島）、藤島　玄（越後）、塚本茂樹（信濃）、三井松男（山梨）、山本朋三郎（静岡）、熊沢正夫（東海）、中田勇吉（富山）、小林雄次郎（石川）、今西寿雄（関西）、織田　収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、三谷孝一（熊本）

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXVII 1972 **Issued in April, 1973**

Contents

(In English)

Eastern Kanjiroba Himal, 1971……By Sadao Yoshinaga…… 1

Manaslu-West wall, 1971……By Akira Takahashi…… 4

Expedicion Japonesa a Puna de Atacama, 1970-71……By Ichiyo Muko……10

Traverse of Middle Range in South Ice Sheet of Patagonia
……By Takeo Yoshizawa……13

Crossing the Central Plateau of Afghanistan Alone……By Masahiko Kaji……16

Langtang Himal, 1971……By Masahiko Kaji……18

The Ascent of Baudha Peak, 1971……By Toshihiko Hanai……19

Tirich Mir, 1971……By Shunzo Masue……21

The First Ascent of Piers Peak, 1970……By Masaru Tsuzuku……24

Dharan Mountains, 1971-1972……By Hiroaki Akiyama……26

(In Japanese, except the articles mentioned above)

My unkle, Katsunobu Itakura……By Katsumasa Itakura… 103

A Nomenclatural Study on some Japanese mountain district
……By Zenkyo Hara… 161

In Memoriam:
Hisayoshi Takeda, Heigoro Makino, Tokunosuke Okano, Ryutaro Sato, Kyojiro Iwasaki, Masao Henmi, Eiichi Murai, Kenzo Ohshima, Ippei Fukuro, Teruo Nagahara, Kennosuke Mizuta, Bunmei Irisawa, Masataka Sanada, Hidenobu Tezuka, Fukashi Chijiiwa, Kiyoshi Narita.…… 179

Book Reviews…… 222

Club Proceedings…… 230

Editor : Tatsuo Mochizuki

Assistant Editor : Hiroshi Nakajima

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sakura Bldg, 1-6-1 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo.

(April 1972~April 1973)

President : Yukio Mita

Vice-Presidents : Ichiro Yoshizawa, Iwao Naruse

Honorary Secretaries : Kenichi Nakaya, Gozo Ikura

Honorary Editor : Tatsuo Mochizuki

Honorary Librarian : Nobuyuki Kondo

Honarary Treasurer : Kenichi Nakaya

Auditors : Yuji Imai, Kazuo Yamashita

Committee

Kazuo Hayashi	Koichiro Hirotani	Katsumasa Itakura
Gozo Ikura	Tatsu Kanbara	Tadao Kanzaki
Tsuyoshi Kiyama	Nobuyuki Kondo	Hideo Matsumaru
Toshiro Matsunaga	Hideki Miyashita	Hiroshi Nakajima
Kenichi Nakaya	Shigeo Ohmori	Shinichi Sakashita
Noriko Suda	Sadao Tanbe	

Council

Tokuro Date	Gen Fujishima	Yaichi Hotta
Toshio Imanishi	Hidegoro Itoh	Ichiro Kanesaka
Taian Kato	Tatsuo Mochizuki	Masami Murayama
Yukichi Nakata	Katsuro Obara	Nobuhiko Oriuchi
Teru Satoh	Tatsumi Shimada	Jiro Taguchi
Chushiro Takayama	Hirokichi Tatsunuma	Shuji Tsuda
Hyoriki Watanabe		

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Hidegoro Itoh	*Iwate* : Junjiro Kasahara
Yamagata : Kanji Gotoh	*Akita* : Kinji Shibata
Fukushima : Yajuro Itoh	*Miyagi* : Tokuro Date
Shinano : Shigeki Tsukamoto	*Echigo* : Gen Fujishima
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto	*Yamanashi* : Matsuo Mitsui
Toyama : Yukichi Nakata	*Tokai* : Masao Kumazawa
Kwansai : Toshio Imanishi	*Ishikawa* : Yujiro Kobayashi
Fukuoka : Daisuke Suematsu	*Sanin* : Osamu Oda
Kumamoto : Koichi Mitani	*Higashi Kyushu* : Akito Noguchi

Eastern Kanjiroba Himal, 1971

By Sadao Yoshinaga

Kanjiroba Himal, which lies in the Great Himalayan Range between Dhaulagiri to the southeast and Saipal, Api to the northwest, is one of the most remote mountain range and is the least-known of the whole of Nepal Himalaya. For nearly ten years since 1961, British expeditions led by J. Tyson were active in this area, exploring and mapping almost whole of the range. There are, however, some minor blanks on their map (*G. J.* 1967), especially in the eastern part of the range. The aims of our expedition, jointly organized by the Shigakukai and the Osaka Alpine Club, were to explore this unknown range and to do some climbs on nameless mountains there. The team was composed of the following four members: Kazuyuki Abe (leader, Shigakukai), Sadao Yoshinaga (OAC), Koji Mizutani (OAC) and Shoji Miyoshi (Shigakukai). We left Osaka on August 22, 1971.

After the necessary preparation for a week in Kathmandu, our whole party including liaison officer K.B. Rana and our two Sherpas, left Pokhara on September 4. The first day of the trek toward west was rainy, but we had generally fine days except minor occasional showers for following nearly a month. The trek with thirty five porters was sometimes troublesome but very interesting and impressive observing the various changes of landscape, vegetation, local inhabitants, etc, between mild Nepalese midland and climatically polar zone of the Great Himalaya. Several passes, some of which were over 4500 m, were crossed enroute effectively for acclimatization to high altitude. At Jangla Pass, the first glimpse of Kanjiroba Himal was obtained. On September 28, twenty five days after leaving Pokhara, we were in Ringmo, the last little village on our march-in trek.

From Ringmo village, the southern end of Phoksumdo Tal on the Survey of India map, we went north by a narrow track leads to Phoksumdo Khola across the right bank cliffs of the lake. From the track, Kang Tayga (ca. 6000 m) was seen to the southeast beyond the lake before we entered into the khola. Then we proceeded on the broad and flat river bed of Phoksumdo Khola along the stream. Next day the valley narrowed and we walked pleasantly through the forest of silver-birch, above which sheer icy precipices of Kanjeralwa overwhelmingly stretched

on the right bank. In the afternoon of the same day, the last of September, we reached a grassy karka, locally named Perikapwa, and our Base Camp was established there. (4110 m) Near the camp some yaks could be seen grazing on the gentle slope of the left bank hills.

The following day, without taking any rest, a reconnaissance party was sent to the upstream of the khola, to make clear the river system of this area. At that time, we did not have any information of the upper half of the khola, so we were much surprized to find on our way a big unknown lake locally called "Tsho Karpo". This had never been visited by any foreigner and only some Ringmo villagers rarely reach to there looking for grazing yaks. At the bank, we saw the clean view of the upper part of the valley, and in the center of it, a grand white dome, shining in the sun light and domimating other neighbouring peaks around the valley, could be seen.

The highest peak of the northeastern range was once photographed in 1958 by a Japanese expedition led by Kawakita from northeast, and was considered to be the second highest of the whole Kanjiroba Himal (*Sangaku* vol. 54, 1959). After the first reconnaissance, we confirmed that the grand white peak we saw at the head of Phoksumdo Khola was correctly the same peak as that photographed by Kawakita's expedition in 1958. We named this fine peak "Tsho Karpo Kang", connected with the local name of the beautiful hidden lake just south of the peak.

On October 4, Camp 1 was placed on the river bed (4600 m), and the following day was fully spent for further reconnaissance. The uppermost of the khola was surrounded by awful precipices and above them, two glaciers, which we called the North Glacier, flowed down from the upper great snow field, widely spread on the foot of the peak. The height of the great snow field was estimated more than 5500 m.

The closer North Glacier was first tried. It seemed to provide the most simple route, though by no means the easiest, onto the great snow field. On the left glacier, day by day we gained height but the higher we climbed, the more frequently we encountered the falling seracs. A week later, this route was consequently abandoned. Immediately after the retreat, we turned to the South Glacier, which is generally moderate and is easily accessible from the river bottom.

This, however, is not drained by the great snow field and great difficulty lies on the cliffs of the left bank of the glacier, over which our route is to be extended.

Camp 2 was placed on the glacier (5120 m) on Octobcr 14, and unfortunately, from the evening of the following day, we had an unexpected heavy snowfall. It continued for three days without any halt. We could do nothing except fighting against the overwhelming snowstorm in the uncomfortable small tent with incessant fears of avalanches.

The sky at last cleared up in the early morning of October 19. In a few days the route on the glacier regained, and on the cliff route 350 m length of rope was fixed. Three days later, we settled Camp 3 at the crest of the ridge, which divides the North and South Glaciers. From the camp on the narrow crest (5550 m), the great snow field was easily gained. Although the weather was threatening, on October 24, Miyoshi and Mizutani left Camp 3 and reached the foot of the summit ridge which seemed to provide the most feasible route. It was the most laborious work to make route across the broad snow field struggling in the waist-depth snow at such an unfamiliar height.

Next day, October 25 the same pair started from Camp 3 at 7 a.m. and arrived at the highest point reached on the day before at 11 a.m., after crossing the great snow field. It was the most favourable weather, so thay were convinced that the summit would be reached within a few hours from there. They found the lower part of the ridge had less difficulty than previously anticipated.

Leaving the most of their heavy gears there, they started to climb up the steep snow ridge, which directly leads to the shoulder, in fine physical condition. On the lower half they suffered from deep snow, and after an exhausting climb for four hours they reached the shoulder, from where the summit was easily led by a gentle ice slope. At 4:15 p.m. they were on the summit of Tsho Karpo Kang (6556 m).

From the summit, they had a splendid panoramic view of all western Nepal, including the full ranges of Kanjiroba Himal, although a few peaks of Jagdula Lekh and some of Kagmara peaks were concealed behind the closer ranges. Kanjiroba Main Peak, successfully climbed by the Osaka City University in the previous year, was due west, showing the sheer wall of east face, and the closest Hanging

Glacier Peaks were awfully rising in front of them. To the north, they saw a continuous chain of innumerable minor peaks of Nepal - Tibet border between Mustang to the east and Humla Karnali region to the northwest.

After staying on the summit for a quater hour, they started to descend the ridge. In perfect contentment but exhausted, they returned to the camp at 7 : 20 p.m. Within the following ten days our entire camp dismantled. From Ringmo village, we headed to further west Jumla by the way of Tibrikot, Kaigaon and Churta. We reached Jumla on November 17, and there we fortunately caught a STOL light plane which brought us to Kathmandu in only a hundred minutes.

Manaslu-West wall 1971

Akira Takahashi

(Translation : I. Yoshizawa)

Manaslu (8156 m) was the first eight-thousander in the Himalaya climbed by the Japanese Alpine Club under the leadership of Mr Yuko Maki in 1956, after two previous attempts (1953 and 1954) from the east side. Then Japanese mountaineers climbed Himal Chuli (1960), Peak 29 (Dakura, 1970) and Baudha (1970 and 1971) one by one, and so at last they brought the era of the first ascents of the so-called 'Manaslu Three Giants,' to an end. But the west side of Manaslu had been considered 'impossible without wings,' by H.W. Tilman who saw it from afar and by the Manaslu reconnaissance party of the Japanese Alpine Club (1952) led by Dr. Kinji Imanishi.

This year we had planned to find a route on the West wall and make the second ascent of the peak, descending the East face which was climbed by the Japanese expedition in 1956. The West face, to be exact the North-west wall, is a 4000 m high precipitous and dangerous wall of ice and rock, with an inclination of about 40° on the average. We had no certain knowledge of possible routes or suitable camp sites. Accordingly we sent a two-man party in the autumn of 1970. They were expected to find a way to a Base Camp and then a route to an Advanced Base Camp, to collect possible information about Sama village which is situated

at the eastern foot of the mountain and is said to be very hostile, especially to foreign mountaineers. They accomplished these tasks satisfactorily in sixty days.

Our team was made up of eleven selected climbers (mostly members of the J.A.C.) drawn from seven alpine clubs, each of which belongs to the Tokyo Metropolitan Mountaineering Federation. All the expenses were shared by the members and they each contributed $ 1500 at the beginning. But when the reconnaissance party returned they realised that a lot more material (equipment and provisions) would be needed and the individual share was increased to $ 2500 each. The total foreign currency spent by us in Nepal was just $ 10,000. We packed the old and familiar equipment which had been used by us on mountains several times previously, as well as the newest first-class climbing gear. We purchased 13,000 m of rope for fixing, 200 snow-bars and wire, and duralumin ladders as well. After our successful climb there remained only two coils of rope each 200 m, while the snow-bars were used up completely. Ice-pitons were useless and we used only screw-pitons. As the rocks were mostly slabs, we used 20 per cent rock pitons and 80 per cent expansion bolts.

Our caravan left Pokhara on 5 March accompanied by 300 porters with 12 tons of baggage. This was fifteen days later than we expected because it took a full month to transport our baggage overland through India. The Government of India annulled unilaterally the Commercial Treaty controlling the border between India and Nepal as from 1 January and it became invalid. Moreover, the Finance Ministry of India completely prohibited any transportation of trucks for Nepal as from 17 February[1]. Accordingly, we changed the plan previously decided. We would not be able to use eighty days for our activities on the mountain. We would be into the monsoon if we did not reduce our time scale. The distances between camps must be lengthened and the numbers of camps cut down as much as possible. So the difference in altitude between camps became 1000 m. We had expected to establish seven or eight camps on the mountain but by the change of plan we kept the number down to five, so we could climb to the summit ahead of the advancing monsoon. In the end it worked out very well.

It took eleven days for our caravan to reach the Base Camp site previously chosen. We walked up the Domen Khola which flows into the Dudh Khola at a point from which it was a one day trip to Bimthang. Base Camp was established

on the upper limit of the forest line at a height of 3500 m.

At the beginning we had intended to set up our Base Camp on the upper plateau some two hours distance from here, but as the snow was so deep and porters could not carry our baggage through the drifts we had to put our Base Camp on the moraine, densely covered here with coniferous trees. It was, however, very convenient for we had plenty of firewood nearby and timber for crevasse bridges.

Camp 1 was established on a plateau (4500 m) after climbing up through an 800 m ice-fall with numberless crevasses. This was finished on 21 March, one week after Base Camp. We had planned to put our Advanced Base Camp on the plateau at the end of the West ridge and so we despatched three route-making parties for reconnaissance. But at first they could not find a suitable transport route as they pushed on among seracs or ice-fall areas. Three days later, on 24 March, the same day that we heard the radio-news that Base Camps had been erected by the I.H.E. and French expeditions respectively, one of our reconnaissance parties found a long but good and easily negotiable transporting route running directly under the North Peak of Manaslu.

But when we saw the West ridge on the way up, we found that the lower half of the ridge was really an unnegotiable vertical ice-wall and not suitable for bringing up stores on the shoulders of the Sherpas. Then, after some talking, we decided our route should be made on the North-west wall in the middle of which a great traversing terrace ran to the middle step of the West ridge.

One week after establishing Camp 1, we set up Camp 2 (Advanced Base Camp, 5500 m) on a broad basin-like snow-field which was to be called the west-side Sanctuary of Manaslu. Camp 2 site was an ideal safe place protected from avalanches which continuously fell from the upper wall, having many enormous step-like crevasses in between. Moreover from here, on the western sky-line we could command a wonderful view of the Himalayan great ranges ; from left to right Annapurna Himal, Dhaulagiri peaks, Kang Guru, Himlung Himal, Cheo Himal, and others.

Now, our climbing activities began from this splendid stronghold. The inclination of the North-west wall on which our traversing route lay is 45° on the average

and frequent avalanches broke off from the upper slopes. Moreover, once new snow fell, we were always frightened by the ceaseless surface avalanches. At times we had to plough through waist-or breast-deep snow and consequently the relaying of equipment was delayed. This year generally we had extremely bad weather and sometimes 1 m of snow fell in a day.

While we and the Sherpas were climbing up and down this great slope on which handrails were fixed over a distance of 2500 m, we were safe from avalanches and even when they swept down on us, the jumars saved us from the final danger. But when block avalanches occurred our fixed ropes were cut to pieces, between 200—300 m at a time, and snow-bars were twisted and knocked off ; thus we were at our wits' end to refit and repair.

On 8 April, eleven days after establishing Camp 2 we succeeded in putting up Camp 3 (6500 m) on the middile step of the West ridge of ice. Kasa-iwa (kasa means 'umbrella' and Iwa means 'rock' in Japanese) which now confronted us on the West ridge at an altitude of about 7000 m, seemed to us the most difficult climbing on the whole expedition. To pass this disagreeable obstacle, we had to strengthen Camp 3 and pile up indispensable materials there. All members were moved out for carrying on this traversing route, but when frequent avalanches continued to fall it was impossible to move despite the fine weather. Contact between camps became very difficult. From Camp 2 to Camp 3 it took seven to eight hours up and three hours down in good conditions, i. e. having no ploughing. Accordingly, it often took twelve hours to make the round trip. Meanwhile, the route-making parties at Camp 3 had been working hard in waves on the ice ridge under Kasa-iwa since their arrival there. They reached the foot of Kasa-iwa in three days and completed the fixing of ropes all over the route.

From 11 April, Kasa-iwa, a 250 m high overhanging wall which resembled a half-open Japanese paper umbrella, was attacked continuously by the two-man route -preparing parties. Though the route between Camp 3 and the foot of Kasa-iwa was satisfactorily made with fixed ropes, it took them three or four hours to cover. So they had only four to five hours a day to work on this rock face. Accordingly it was not surprising that they needed twenty days to get past this critical point.

We did not climb directly to the top of Kasa-iwa as it did not look inviting,

instead we sought a route in a re-entrant (dièdre) which was overhanging from the left. After 20 m vertical ice-wall, we could reach the next rock wall. Taking off crampons and overshoes, with vibram soles only, we managed to make a route on this smooth rock slab with expansion bolts and étriers. Later we set a wire ladder on this wall and succeeded in sending four selected Sherpas above Kasa-iwa. Most of the 100 expansion bolts which we had in our stock were spent here. The grade of Kasa-iwa wall is VI in places but generally speaking it was V, A2. But the upper part of this dièdre was a slab covered with new snow under which a thin layer of verglas was plastered. As it was very dangerous here, we made a depot on a slope 20 m above with comparatively thick snow on it, driving in some snow-bars around. Now we had two depots, the other one was in a bergschrund at the foot of Kasa-iwa.

On 6 May by eight o'clock in the evening, eight days after breaking through Kassa-iwa and at the same time twenty-eight days after establishing Camp 3, we at last succeeded in putting up Camp 4 (7100 m) on the snow-cornice upon Kasa-iwa. Here was a kind of window through which wind blows incessantly, so much so that a tremendous snow-cornice formed. And even when the other camps were windless, this high eagle's nest was always exposed to strong wind. The height of this site was a little higher than, or equal to, that of the so-called North Col, we tentatively decided its altitude at 7100 m. Lifting of equipment on Kasa-iwa was done co-operatively by members of Camp 3 and Camp 4. Camp 3 party carried them up to the depot at the foot of Kasa-iwa, while four Sherpas of Camp 4 descended to the upper part of Kasa-iwa, and lifted the packages up by cables hanging in the air. Then they were carried to the upper depot. When it was fine, lifting work continued some hours, but if it was very windy they could do nothing except sleep in their tiny tents. Though the work was very severe, they succeeded in bringing up about 1000 kg of necessary materials.

Meanwhile, at the same time, a two-man route-making party in Camp 4 had been searching continuously for a route on the West ridge. But the rock ridge between Camp 4 and the summit plateau proved to be a series of little overhanging walls with which we could do nothing. If we took this rock ridge route, it was clear that we would have to invest more days in it than already taken for the Kasa-iwa climb. Earlier we had considered a possible route on the hanging glacier which perched on the flanks of the South-west wall. So we made the final decision

to try this glacier.

To begin with, we descended the south side about 100 m down a 60° wall of hard ice to reach the end of the hanging glacier. From here an airy fall of 3500 m to the moraine of the Domen Khola could be seen. The ice here was extremely hard owing to the strong wind blowing up from below. We could not cut even one step without swinging more than thirty times. Then we climbed to the bottom of the bergschrund between the West ridge and the hanging glacier, sometimes on the wall or ribs of the West ridge side and sometimes on the ice-wall of the hanging glacier by using ice-pitons and étriers. Six days later on 12 May, we got through to the top of the hanging glacier and prepared a cable line for lifting up the equipment by fixing ropes to two screw-pitons. We think the grade of the rock here is about IV, but it was very difficult climbing owing to its high altitude. As the hanging glacier was very steep, there might be expected to be extremely high danger of avalanche, so we fixed ropes along the West ridge side and climbed up an ice-couloir which emerged on to the summit plateau.

On 16 May at 4 pm ten days after establishing Camp 4, we put up Camp 5 (final camp 7360 m) on the plateau. Here stood nine climbers consisting of three route-making members, two summiters and four Sherpas, after four days' laborious carrying. They had here six oxygen bottles and four days' food for two members, so only two summiters could remain. The other seven descended to Camp 4 praying for success for the other two.

The forecast of the All-India Radio was: NW wind, velocity 60 km/hour, temperature minus 22°C at 7500 m, and WSW wind, velocity 90 km/hour, temperature minus 40°C, weather thunder showers at 9000 m. It was 2500 m from Camp 5 to the summit and the difference of altitude was 800 m. We wanted one more advanced camp if possible, but we had no more materials nor any strength remaining. We decided to try a return trip at a dash and planned the start time at 3 am. But it was an almost impossible enterprise without any support at such a tremendous height. In spite of these unfavourable circumstances, the two climbers left Camp 5 at 5 am and tackled the great sloped plateau of ice and *skavra*, sinking at times to their knees. On 17 May at 12. 15 pm, with hardly any oxygen remaining the two-man summit party stood at last on the top of Manaslu.

Just under the summit they found the ice-piton which was driven in by Toshio Imanishi of the Japanese Alpine Club and Gyalzen Norbu when they climbed Manaslu for the first time fifteen years before. They drew out this precious piton and brought it all the way back to Tokyo with them, just as the French party fetched the Japanese 'rising sun' flag from the top of Makalu this year. This memorial piton was later presented to Mr. Yuko Maki who led the third J.A.C. Manaslu Expedition in 1956.

SUMMARY Manaslu West wall Expedition, 1971—Leader : Akira Takahashi. Ascent : 17 May, Manaslu (8156 m) by West wall—K. Kohara and M. Tanaka.

Notes 1 Nepal—India Trade and Transit Treaty was renewed on 13 August 1971

Expedicion Japonesa a Puna de Atacama 1970—71

By Ichiyo Muko

Our party was composed of eight members, not only climbers but also having research themes as well. We left Japan in August 1970 for Bolivia where we climbed several peaks in Cordillera Real and had research tour to the volcanic zone of Southwest Bolivia.

At the end of November, we moved to Chile to explore Puna de Atacama which was our main purpose. There we climbed Ojos del Salado (6880 m), Nevado Cazadero (6660 m) and other peaks. Besides, we succeeded running through Puna from Licancabur (5930 m) of north to Ojos del Salado of south.

The members were as follows : Ichiyo Muko (35, Leader, journalist), Tsuyoshi Nishimura (33, geologist), Fumihiko Imamura (31, photographer), Takaya Takeshita (29, anthropologist), Akinobu Nakamura (29, medical doctor), Norio Yamamoto (27, botanist), Yoshihiro Kanai (25, surveyor), Kazutaka Muko (25, geologist & meteorologist).

First Stage

From Sept. 4 to 8. Made a search for a Japanese climber who had been

missing in Huayna Potosi (6094 m) near La Paz.

Second Stage

From Sept. 12 to 30. Established base camp at the lakeside of Jankho Khota in the central part of Cordillera Real. Takeshita and I were not strangers here. In the previous expedition undertaken by the Tokio Univ. of Foreign Studies in 1964, 20 peaks were climbed such as Chachacomani (6074 m), Ancohuma (6427 m), Sajama (6531 m) of Cordillera Central, etc. (*Sangaku* vol. 60, 1965)

This time we entered just south of Chachacomani and ascended eight peaks including Wila Lloje (5596 m) and Jankho Lacaya (5545 m) by the grandeur of which I had been impressed so much six years ago.

In Cordillera Real the rainy season had already begun and we were distressed very much by thunderstorms, deep snow and that notorious *nieve-penitentes*.

At first we intended to make a circuit tour of Cordillera Real as its eastern side is little known. But this plan was abandoned for the shortage of llamas and porters, because Indios were very busy to seed their potatoes at that time.

Third Stage

From Oct. 27 to Nov. 7. Five members drove a jeep to the volcanic zone of Southwest Bolivia. We intended to climb Sapaleri which is on the boundaries of Bolivia, Chile and Argentine. But we could not reach the mountain by the engine troubles of the jeep only to find many volcanoes higher than 6000 m.

Fourth Stage

From Dec. 7 to 26. Our base camp was set up at the lakeside of Laguna Verde below the San Francisco Pass which divides Chile and Argentine, and is almost the southernmost point of Puna de Atacama.

We succeeded to reach the foot of Ojos del Salado by cutting through sandy valley on two jeeps. After having made advanced camps, we succeeded to stand on the tops of Ojos del Salado and Cazadero. The latter was the highest virgin peak of the Andes. Its summit was about a kilometer away to Argentine from the frontier.

Just below the summit of Ojos del Salado, we found volcanic gas rising from the crator. This means that this mountain is the highest active volcano in the world. On its summit we found the memorial left by Argentine party in 1958.

This time six Chileans joined us. They were Sergio Kunstman (42), Pedro

Rosende (43), Juan Tangol (36) and others.

Fifth Stage

From Jan. 16 to 26, 1971. Explored the north of Ojos del Salado to find the possibility to cross Puna de Atacama.

Sixth Stage

From Jan. 27 to early March. With four Chileans we explored the northern part of Puna and drove southward along the frontier. On the way we tried to climb Llullaillaco from the western side.

Here and there, we found fragments of Camino del Inca (Inca Road) half buried in the sands, which is believed to have reached to Copiapo.

List of ascents.

Cordillera Real			
Achapata	5450 m.	18. 9. '70	I. Muko, Y. Kanai
Pico Sumiko	5400 m.	18. 9. '70	T. Takeshita, N. Yamamoto
Jankho Huyo	5512 m.	20. 9. '70	F. Imamura, A. Nakamura
Wila Llojeta	5244 m.	20. 9. '70	I. Muko, N. Yamamoto
Wila Lloje	5596 m.	20. 9. '70	T. Takeshita, Y. Kanai
Jankho Lakaya	5545 m.	23. 9. '70	T. Takeshita, N. Yamamoto
Culin Thojo	5368 m.	23. 9. '70	Y. Kanai, K. Muko
Cerro Potorercuchu	5200 m.	30. 9. '70	I. Muko, Y. Kanai
Puna de Atacama			
Los Perdidos	6300 m.	12. 12. '70	T. Takeshita, S. Kunstman, P. Rosende
Nevado Amarillo	6050 m.	14. 12. '70	T. Takeshita, S. Kunstman, P. Rosende
Nevado Cazadero	6660 m.	14. 12. '70	T. Takeshita, S. Kunstman, P. Rosende
Cerro Faro	5700 m.	14. 12. '70	Y. Kanai
Ojos del Salado	6880 m.	19. 12. '70	T. Takeshita, Y. Kanai
Llullaillaco	6710 m.	11. 2. '71	L. Campos, N. Flores

Traverse of Middle Range in South Ice Sheet of Patagonia

By Takeo Yoshizawa

We, the three members of Sophia University Alpine Club, succeeded the first traverse of the Middle Range in South Ice Sheet of Patagonia from November, 1971 to February, 1972. There were two reasons why we aimed Patagonia. First, though the altitudes of Patagonia's mountains are not so high (almost all the mountains are below 3000 m of height), the region has very large glaciers (twice as large as the glaciers of Karakorum) and the weather conditions are worst in the world. Secondly, we must do all the labor by ourselves. There is no porter nor sled pulled by dogs in Patagonia. These factors make Patagonia one of the most attractive untrodden zone in the world.

The members wers as follows ; Toshio Takeuchi (29, leader), Takeo Yoshizawa (27), Takeo Tsuzuki (26).

Yoshizawa and Tsuzuki flied in advance from Tokyo on October 1971 to Santiago to get the permission to enter into Patagonia. They visited the Foreign Ministry daily and finally got the permission on October 23 by the cooperations of Mitsubishi and Co., and recommendations of the Mission and also our university. However, their tough labor was rewarded sufficiently. We paid merely escudo 300 for our 800 kg of loads as customs fee. Furthermore Chilean Navy proposed to bring us to Puerto Eden where we expected to settle our base. These matters were unexpected gratefulness of the permission paper of the Foreign Ministry.

Our original plan was as follows ; after preparing at the base in Puerto Eden, first we would settle the depot place on our way of the traverse route. We expected to carry the loads up from Fiordo Europa and settle on the Ice Sheet above the basin of Europa Glacier. Then, we would approach the north end of the Ice Sheet from Fiordo Falcon and begin the traverse to the south. Supplying at the depot place on our way we would reach the south end of the Ice Sheet and return to

the depot place, and then descend to Fiordo Europa. We decided to hire fishing boat from Puerto Eden to Fiordo Europa and Fiordo Falcon.

The Navy's icebreaker sailed from Valparaiso on November 4 to Puerto Eden. On 8 th, the captain kindly entered into Puerto Eden in the bad weather. A boat of police came to meet us and also they prepared two rooms of the hospital for us. Puerto Eden was a very little fishing village (population 140) but we felt familiar with the inhabitants because almost all of them were Mongolean descendants.

On 11 th, we sailed from Puerto Eden to Europa Fiordo. After 30 hours of voyage on a little fishing boat we entered into Fiordo Europa. But there drifted so many pack-ices, we could land 20 km shorter than the expected landing place.

We were left at the point in lat. 50° 17'S and in long. 73° 58' W. We unloaded 250 kgs of equipments and foods there. Though we promised with the captain to come here again 15 days later, we felt as if we had been exiled. It was incessantly raining and sponge-like thick moss covered all over around there. Water immediately oozed under our feet. It was the place to have 7000 mm of rain in a year.

During the days, we continued to reconnoitre and carry up the loads. We worked about 11 to 16 hours a day but hardly could we find the route to the Ice Sheet. The weather would not change better. During the 15 days we could see the sun only several hours. It rained, sleet and strong wind. On 21 st, our tent was broken at last. We abandoned to reach the Ice Sheet and settled the depot place just below Iruka-Dake (Mt. Dorphin that we temporarily named) far short from the expected place. We also couldn't make clear the route to the Ice Sheet from there. When the fishing boat came back, we could not have confidence whether we would reach the depot place after severe traverse.

After four days of rest at Puerto Eden, we sailed again to Fiordo Falcon on December 3. Fiodro Falcon also drifted much more pack-ices on the surface than expected. We were forced to wait landing for the next two days. On 6 th, we persuaded the captain to anchor at the place 10 km short from the expected landing spot. We were again obliged to carry more distances by a rubber dinghy to the end of the Glacier. We worked in the rain hearing the terrible sound of dropping lumps of ice. On 9 th we settled C 3 on the shore of the Glacier lake which lay at the tip of HPS 16 Glacier.

On December 15, we could reach the snow covered place (700 m) on the upper unnamed Glacier at last. It had also been very tough work in rain and sleet.

We spent ten days from C 3 to there. However, as soon as we departed in that disgusting rain, we encountered horrible crevasses. We could be careful for several hours in thick gas against the crevasses, but soon became to go straight desperately.

On 20 th, it was unbelievablly perfect clear sky. We carried up gasoline tank to the expecting C 7 place. On the way from a col, we could see the Ice Sheet for the first time. The sudden perspective made us forget ourselves for a while. We were going there ! What a beautiful panorama of the stretching grand peaks around Fiordo Falcon ! And the glaciers ! We went on our work desiring, " at least, we should touch that Ice Sheet."

On 22 nd, we dropped down the gasoline tank into a crevasse. Strong wind, rain, and thick gas disturbed us to find out it for the following two days. On 25 th, we could find it at the bottom after two hours of search. It was the Christmas present for us that year. For seven days after that day, we eagerly carried up the loads.

On 28 th, it was clear up again and we reached the ridge on the basin of Falcon Glacier. From the ridge, we could see panoramic view of the Ice Sheet. Riso Patron mountains, Don Vosco, Marajhon, Trino, also, even the head of famous Fitz Roy could be seen. The very panorama was the best reward for us completely exhausted.

On December 31, we succeeded to settle C 11 on the col just before the Ice Sheet began. We had spent so many days to carry up that we had little surplus left of foods and fuel. Would the sled go smoothly on Ice Sheet ?

On January 3, just a month had passed since our departure from Puerto Eden. We began to march down to the south on Ice Sheet. What a big change of the nature ! We could only see white peaks far beyond the skyline. We merely moved our legs counting the number of steps. It was a very very monotonous march pulling the sled to the south. We were like swimming pleas in the middle of the ocean. We settled C 12 just the west of 1524 m Peak that day.

From the next day, however, the weather changed worse again. We could rely only on our compass in the thick gas and rain. Nothing could we see along the march. We were surprised at the huge scale of the Ice Sheet again and again day by day, although we did seek the vast Ice Sheet to Patagonia. Sometimes, we fell in anxious when we met slight ups and downs. But we could not see anything to judge our position except the numbers of our step according to the direction of the compass.

On 16 th, we could not endure without seeing anything to know our position

actually. We stopped the march and decided to reconnoitre in thick gas. We climbed up the highest place near and waited the change of weather in the small tent. Several hours had passed, we felt surroundings become a little lighter. We crept out and at last saw the depot place and the origin of Europa Glacier behind thinner gas. All cried out joyfully. We had marched correctly following the compass for 11 days ! We hurried to withdraw C 18 and marched down with confidence to the south till 9 : 30 pm in the twilight.

On 20 th, we settled C 22 where we saw 1341 m Peak at just west side. There, we decided to abandon the further traverse because we concluded that our phyisical conditions, foods supply and the severe conditions of the southern Ice Sheet would not allow us to return safely.

On 21 st, we settled C 23 at the foot of 1341 m Peak and ended our traverse of Ice Sheet. The distance was 100 km as the crow flies and walked 400 km totally. We named the 1341 m Peak as "Cerro Akira" and the Middle Range of Ice Sheet where we traversed as "Altiplano Japon". There we left our sled and began to seek the route down to Fiordo Europa.

It took a week to reach the depot place via steep ice walls and Cerro Akira. The route was very dangerous with very thin snow covered ridges and crevasses. We researched around the depot place till the fishing boat would come for us. On February 17, a day before our promissed date, the fishing boat appeared in Fiordo Europa. We hugged with the fishermen. We could come back to Puerto Eden. Athough our impressions of the village had been "grey" in the rain and covered with thick moss on November 8, it was really an "Eden" for us this time.

Crossing the Central Plateau of Afghanistan Alone, 1971

By Masahiko Kaji

There is a vast desert plateau with average of 3,000 m in the central Afghanistan where few sedentary farmers and nomads live only.

I was attracted by the deserts from Pakistan to Iran when I travelled by bus after I had finished to attend the expedition to Himalaya in 1969. I had spent all the four years of my university life to realize getting the summit of Himalaya. Happily, I could

get one of the summit, Hanuman Tibba 5928 m in Punjab Himalaya, but I found completely different world by that bus trip then.

Sand, mirages, tornados ! What a vast and maddeningly monotonous death world! I thought it was the very place that would satisfy my desire to seek "romanticism of travel".

On mid-June, 1971, I came up Kabul to cross the central plateau alone on camel back. After a while I reached there, I left Kabul for reconnaissance. I travelled through the plateau on busses and trucks for half a month. The journey gave me very useful informations. I learned that the planned crossing would be much more difficult than expectation because of the shortage of food and water, burning heat, and mental pressure of the monotonous scenery. In addition to these severe nature, thieves and wolves would make the travel twice as hard to accomplish. Moreover, I knew very easily that riding and taking care of camel was too difficult for laymen. I was forced to take horse instead of camel to my travel from Kabul to Herat through the desert. The distance is about 650 km as the crow flies.

I bought a horse in Kabul for US $45 with saddle, bit and stirrups. I had never even touched horses before. An American hippie, my room mate, in the inn laughed at me. Also, it took me a time to persuade gaining the two months' extention of visa for the travel. I did not prepare sufficient foods in order not to draw attention of the native tribesmen.

I left Kabul for Herat early in the morning on July 23. It took me two hours to pass through the streets of Kabul. When I crossed over a small hill around noon, Kabul disappeared from my sight and the desert extended vastly ahead.

In the former part of the travel from Kabul to Chakucharan, I was suffered more from the inhabitants than thirst or hunger. Many times I was about to abandon the travel. On the first day, when they knew that I was an alien, they desired money, tobacco and cap, and threw stones, if I refused the requests. Foods for me and the horse was difficult to get. Once, I was almost stolen my horse by a man who said teaching English in the elementary school. When I began to beat down the price of foods, the Afghans showed me knives or spears without saying words. But I could reach Chakucharan on August 4 after 11 days of march. There was a little airfield in Chakucharan.

After a day's rest, I started for Herat. In the latter part of my travel I should have passed more dried areas. As in the other areas of the Middle East, caravans with camels and donkeys were replaced by modern transportation facilities liketruck or bus in the central plateau. The travel became much harder by the extreme heat and

short of water and foods. These conditions weakened me and also my horse severely. Adding to that, what I could see were only the endlessly stretching barren hills, and couldn't see any green at all.

After 9 days of riding from Chakucharan, I at last reached on the evening of August 14. The travel took me 23 days and walked about 800 km. I was always suffered from thirsty and starvation during the travel. When I entered Herat, I at once sold my horse. I didn't fall sentimental but I felt free from the cares any more. I walked into the crowded street. My travel ended unbelievably calmly, though I had been excited and strained against the unknown severe world in Kabul.

Langtang Himal, 1971

By Masahiko Kaji

We were very lucky to have a visit to Langtang Himal and could see many beautiful unclimbed peaks around the Langtang Glacier in the post-monsoon, 1971.

The members were as follows; Masatoshi Sato (31), Masahiko Kaji (25), Kazuo Yamada (25).

According to the original plan made in Tokyo, each member came up to Kathmandu from various places in early September, 1971. Sato came from 75 days of trekking through North-West Nepal, Yamada, from Assam after the expeditin to South Peak of Annapurna in pre-monsoon, and Kaji came from the desert of Afghanistan.

We began to prepare almost all the equipments in Kathmandu. We bought many used equipments of the International Everest Party. On September 21, we started from Kathmandu to Trisuli Bazar with two Sherpas, a kitchen boy and 18 porters by a truck. After 9 days of walk from Trisuli Bazar. We established the temporary Base Camp (4480 m) at Pangri Goldum on the right bank of Langtang Glacier where is the foot of the big rock wall of Drag Ri (5490 m).

We chose the Base Camp where the Kyungka Glacier met with the Langtang Glacier. It was very hard to carry up loads from TBC to BC (4800 m), as the route was almost covered with unstable moraine. We could enter into BC on October 4.

From BC we could see Langtang Ri far beyond the upper Langtang Glacier, Goldum (6947 m) with little snow on the right side, also, Kyungka Ri (6979 m) on the upper Kyungka Glacier, and 6500 m- Peak on its east ridge. We carried up

the loads to C 1 (abont 5000 m) also on moraine where Langtang Glacier meets with a little unnamed glacier which originates the col between Kyungka Ri and Dragmarpo.

On October 8, we made two reconnaissance. I ascended the unnamed glacier to 5300 m with Sato and a Sherpa and found Gosainthan (8013 m) behind Hargen's col.

On October 11, we settled C 2 (5600 m). The panorama from there was wonderful. In the north, we could see "False" Tilman's col and stretching little peaks from Chomsdo Ri to Dragmarpo. And also, Kyungka Ri with beautiful flutings, Langshisa Ri, Dorge Lhakpa and so on, could we identify.

On October 12, I reached to Tilman's col via the False col with a Sherpa. From there we could see whole the southeast ridge of Langtang Ri. The upper part seemed to me a considerablly keen knife-edge. The perspective from the col was not so wide. I could see only the mountains of the opposite bank of Prepoo Glacier. The altitude of the mountains of Tibet were lower and less snow than the mountains seen in the south. The Tibetan side of the col had cornice and sharply down to the Prepoo Glacier, so I could not believe the story that the ancient Tibetan passed over this col with yaks at all.

I ascended to the southwest ridge of Langtang Ri, and found a crevasse at 200 m above and finally reached to 6000 m and established C 3.

On October 12, Sato and Yamada came up to C 2 with Sherpas. They found that all the four kerosene stoves were out of order. We concluded that we should abandon the ascent. The cause of the damage of the stove must have been the low grade of kerosene got in Kathmandu and also the high altitude. The decision was very painful for us.

On October 15, all the members descended down to BC in the snowfall. We were surprised that it continued for three days. The snow lay 8 feet around BC. If we had continued our ascent, we would have suffered severely by the off-season heavy snow. On 18 and 19, we climbed down the glacier very slowly, and at last returned to Kathmandu on November 4.

The Ascent of Baudha Peak, 1971

By Toshihiko Hanai

The West Asia Expedition, 1971 organized by the Aichi University of Education

Alpine Club had the following aims:

1. Ascent of Baudha Peak (21,890 ft=6,672 m) in Nepal.
2. General Survey of the Geology, Geography, Plants, Folk-customs and Historic sites in the countries along the Asian Highway A-1 (from India via Nepal, Pakistan, Afghanistan, Iran to Turkey).
3. Mountaineering in Iran and Turkey.

1. Members of Expedition

Members: Yutaka Nakai (37) (Leader), Toshihiko Hanai (36) (Mountaineering Leader), Akimasa Ito (35), Katsumi Sugiura (26), Kazuo Tokushima (25).

Sherpas: Karma (36) (Sirdar), Phurkipa (48) (High Altitude Porter), Jangbu (25) (do.), Mingma (29) (do.), Nimanurbu (22) (do.), Angtshering (40) (Cook), Sange (28) (Kitchen Boy), Lal Bahadur (30) (Mail Runner).

Liaison Officer: Surya Prasad Sharma (26) (Sub-Inspector of Traffic Police)

2. Procedure of Expedition.

Feb. 27 Left Kathmandu with 78 porters.

Mar. 6 Arrived at Barpak (the remotest village on Darondi Khola) via Trisuli Bazar and Arughat Bazar.

Mar. 8,9 and 11 Left Barpak in three parties with changed porters. Set up transit camp and carried up loads.

Mar. 15 Set up temporary Base Camp (3400 m). One party carried up loads from transit camp, the other prepared to explore the upper route.

Mar. 18 Established Camp 1 (4300 m).

Mar. 19 All the loads were gathered at BC.

Mar. 29 Established Camp 2 (5300 m).

Apr. 6 Established Camp 3 (5700 m).

Apr. 11 Established Camp 4 (6000 m).

Apr. 12 K. Sugiura, K. Tokushima and Karma (Sirdar) started from Camp 4 at 6:45 a.m. in thick fog. Reached the summit at 1:05 p.m., and stayed there for 20 minutes. Returned back to Camp 3 at 6:15 p.m. via Camp 4.

Apr. 13 It was clear sky that day. T.Hanai, Phurkipa and Jangbu departed Camp 4 at 5:30 a.m. Reached the summit at 11:00 a.m., stayed there for 40 minutes. Returned back to Camp 4 at 3:30 p.m..

Apr. 19 Withdrew Base Camp.

Apr. 26 Returned back to Kathmandu by the same route.

3. Outline of the Route to the Summit

From the Base Camp established at the head of Darondi Khola to Camp 1 was easy, wide and snowy ridge branched away from the Southeast ridge.

From Camp 1 to Camp 2, we crossed a wide snowfield, traversed snow walls and climbed snowy couloir.

From Camp 2 to Camp 4 via Camp 3 was the most difficult part and we fixed ropes almost all the way. From Camp 2 to Camp 3, knife-edged ridges of snow and steep rocky ridges appeared one after the other. From Camp 3 to Camp 4 were knife-edged ridges of snow and ice.

From Camp 4 upward there stretched knife-edged ridge of ice. Near the summit, however, it became a broad snowy ridge. The summit was a dome covered with snow.

4. Other Climbings

After the ascent of Baudha Peak we rode along the Asian Highway A-1 from Calcutta, India to Istanbul, Turkey by Mitsubishi-jeep (made in Japan), making scientific general survey.

Meanwhile, on July 9, we climbed successfully Takht-i-Suleiman (19,812 ft= 4,650 m) in the Elburz range in Iran by Y. Nakai, T. Hanai and A. Ito. We also got to the summit of Erciyas Dagi (12,484 ft=3,916 m) in the Central Turkey on July 21, by T. Hanai and A. Ito.

Note: The first ascent of Baudha Peak was made on May 2, 1970 by Keio University Expedition (Yoshiyuki Kobayashi, Kiyoyasu Shibata) by the East ridge.

Tirich Mir 1971

By Shunzo Masue

We decided to make ascent of Tirich Mir (7708 m) from the Dir Gol Glacier in 1969, according to the report of Fumio Tsuda, one of our members who made reconnaissance that year.

As the result of the troubles of member change of our party, we could get the permission of Pakistani Government only for ten of us and the added four members were not allowed to enter into Tirich Mir. We were then, forced to divide our

party into two groups and aimed Tirich Mir by ten members and the left four made research around the Goshanel Glacier, a branch of the Dir Gol Glacier. We arrived at Rawalpindi on May 20.

The members of Tirich Mir group were as follows; Shunzo Masue (38, leader), Ken Ishida (39), Fumio Tsuda (33), Shinji Sawamura (31), Yoshiaki Tanaka (27), Yukihiro Yamagishi (26), Noboru Wakamiya (24), Akio Okamoto (23), Hiroto Nakagawa (22).

Liaison officer was Muhamad Dean (26, captain of Pakistani army).

The members of Goshanel Glacier group were as follows; Kazumi Osada (39, leader), Koichiro Nishi (30), Hisashi Suzuki (27), Takuo Nakano (22).

We started from Rawalpindi on May 31 with three tons of loads to Chitral by bus and truck. We reached there via the Lowarai Pass on June 2.

At Chitral, we were much obliged to Mr. Bruhandean, the ex-royal family in various matters. He sent all of us with loads and also the newly purchased fuel by jeeps or Shogoal. Moreover, he took care of us on hiring porters.

On June 10, we could settle our base camp at the central plateau of the Dir Gol Glacier. We should also note about captain Dean. He led 14 porters very well and smoothly marched to the base camp. After settled BC there, he would not bother our behaviour at all. We were very lucky that we could meet such a responsible officer. BC was settled just below the ice-fall (4200 m). There were many flowers around there and the main peak of Tirich Mir could be seen very well. It standed grandly. We thought it worthy to call Tirich Mir, the King of Hindu Kush.

We found it difficult to attack the summit by our planned route to the summit by the ridge from the center of the ice-fall. At the upper iced ridge, snowslide was occuring inccesantly. We abandoned that route at once and began to search the new one from the next day.

After three days of reconnaissance by two teams, on 15, we decided to take the route from the steep snow slope under the end of a branch ridge, near the South Glacier Peak to the upper ridge.

On June 16, Tanaka and Okamoto tried to make the route in the ice-fall. All the others carried up the equipments. As we did not prepare the equipments of high-altitude-porters, we were forced to carry by ourselves through the expedition.

On 17, C1 was established at 4600 m and the route making team broke through the ice-fall and reached the plateau at the end of the branch ridge.

On 19, established C2 (5000 m) and there Sawamura and Nakagawa entered. The others carried up the equipments to C1 and C2.

On 22, Sawamura and Nakagawa settled C3 on the little ice plateau just below the ridge (5800 m). The loads carrying to C3 was very tough.

On 26, Yamagishi and Okamoto left C3 and ascended through several big crevasses and reached the ridge. Next day, the same two members climbed up again and found the place for C4 near the col in front of the South Glacier Peak. By this reconnaissance, we could make clear all the south face of Tirich Mir and had the prospect to get the summit.

On July 1, Tanaka and Wakamiya settled C4 (6300 m).

On July 3, Tanaka and Wakamiya got the summit of the South Glacier Peak.

On July 4, and 5, prevented all the activities by the heavy snow and wind. However, as the required equipments had already been brought at C3 that we got lucky rest for the two days.

On 7, Yamagishi and Okamoto settled C5 (6500 m) at the saddle where the origins of Dir Gol Glacier and South Bulm Glacier meet. They returned back.

On July 9, Sawamura and Okamoto, with the support of Yamagishi and Nakano, started from C5 at 5 a.m. to the summit with three days of foods and equipments. At 10:30, they reached the large snow field where we could see from BC very well. They reached the bivouac place on the south wall at 4:00 p. m. (7200 m).

On July 10, they started climbing the steep rock wall at 8:00 a. m. They took only transceiver, biscuit and cheese. They continued laborious climbing and once thought to bivouac at 200 m below the summit, but the members at C4 couraged them to continue. They again began climbing the steep snow wall and at last they got the summit at 6:56 p. m. when just the surrounding mountains were brightening in the setting sun.

After taking pictures, they buried both Japanese and Pakistani national flags and began to descend. They bivouacked in the big rock cave 100 m down from the summit on the ridge that night.

On 12, both the attacking and supporting members took rest at C5 and all the members gathered again at BC in the evening of July 14.

The First Ascent of Piers Peak, 1970

Traverse from Gabral valley to Kachikhani glacier

By Masaru Tsuzuku

The mountains of Hindu Kush has some advantage for small scale expedition because the area is slightly influenced by monsoon and even in small number we can get the summit. We at first aimed Istor-o-Nol, but could not get the permission by Pakistani Government. Then we were forced to choose the second plan to explore around the source of the Gabral river. The members were as follows; Masaru Tsuzuku (38, leader), Masanori Sujita (25), Yoshihiro Iwasa (23), Harumi Hibino (21), Ryozai Nakahara (28).

April 4; Sujita and Iwasa left Tokyo for Karachi in advance for the customs entry and other preparations.

May 3 The others arrived in Karachi and joined the advanced members.

15 All the members arrived at Rawalpindi via Lahore.

21 We carried two tons of loads on a midget truck and arrived at Kalam (2200 m) via Saidu-Sharif.

26 We established the provisional base camp at the innermost village in Gabral Valley. We found the right side valley is the main streem of Gabral River by the reconnaissance.

31 We started our caravan from Gabral village with an interpreter, two policemen and 22 porters. Many villagers saw us off. We arrived at Gatter at 2:00 p. m.

June 1 We arrived at Maidan (3200 m) at 4: 00 p. m. Miangulsar (5996 m) seen from Maidan was wonderful.

2 We settled BC at the end of Gabral Glacier (3500 m) at 10 a. m. The porters went back from there thankfully with drags and towels as gifts from us.

6 After two days of reconnaissance, we settled C1 (4200 m).

7 All the members climbed up to the East side col (4634 m), the innermost place of the Glacier. From there, we could see Faraksul to ESE and Ushu valley under our feet, and found that we could not go to Chitral side via this route. Settled provisional C 2 there and Tsuzuku, Sujita

and Iwasa bivouacked there.

8 The three members climbed up to the col (5014 m) between P 1 and P 2. From there, we could see the Kachikani Glacier lay down below us and found we could go to Chitral side. Although we ought to descend 800 m of altitude, with 400 m of 60°–70° of steep ice wall, we thought it possible to climb down to the Kachikani Glacier. Then we returned to B C.

12 Two porters arrived at B C. Besides loads, we asked them 200 letters to Japan. However, the letters were not sent to Japan at all.

13–16 We were forced to rest by heavy snow and sleet.

17 We withdrew B C and carried up all the loads to C 1.

19 We carried the loads up to C 2 (4200 m).

21 Iwasa and Nakahara attacked P 2 (we named Piers Peak). They started from C 2 at 4 a. m. and got the summit at 10:30 a. m. They luckily had a fine weather. They returned back to C 2 at 6:10 p. m.

22 All the members climbed down to the Kachikani Glacier from the col (5014 m). We started from C 2 at 8 a. m. and reached the 5014 m-col at 9:30. We began to climb down the steep snow wall from 11 a. m. Sujita first climbed down to the rocky peak, 170 m below, supported by three ropes. He settled the first plat and the other three followed with five pieces of loads. Each of them weighed 45 kgs. Then, we made the second plat at 200 m below. We could set tents on a large plateau (4246 m) at 7 p. m.

24 After a day of rest, we went down on the Glacier all the day. Bivouacked at 3230 m.

25 We arrived at the innermost village of the Kachikani Glacier and then lodged in Sor Laspul.

30 We arrived at Chitral by Jeep and stayed in Chitral Hotel. On the way to there, we met Italian Party.

July 1–8 We returned to Karachi via the Lowarai Pass, Dir, Peshawar and Rawalpindi.

Dharan mountains, 1971~1972

By Hiroaki Akiyama

The southwest area of New Zealand-South Alps has many branches and forms fiords facing Tasman Sea. The areas surrounding famous sight spot, Mirford-Sound, are called Dharan Mountains in the Fiordland National Park. It was in 1883 that one of the Dharan, Mighter Peak (1693 m) was first climbed from the west side, and by early 1900 years, almost all the peaks were ascended. Even the highest Mt.Tsutoco was first climed in 1923. However, there remain many unnamed peaks and merely very few numbers of people got the summit of Dharan mountains except major peaks. Moreover, there still lie so many virgin routes to explore. Although the altitudes of the peaks are not so high, the Dharan has become to be marked again by alpinists according to these reasons.

We chose the New Zealand Alps as the first step to our expedition of overseas' mountains and planned to climb the most difficult Mt. Tsutoco and the two neighbouring peaks. Also, we wished to climb other mountains as many as we can afford the time.

Blief Summery of our activities

On December 29, we arrived at Johnson Hotel at Mirford-Sound. As soon as we reached there, we began to reconnoitre the route of Mt. Tsutoco as well as to prepare equipments.

On 30 th, it was rain, three members continued the reconnaissance but could not find the route by the rise of river.

On 31 st, rain, four members found the route along Dry Creek to the Base Camp.

January 1, cloudy and sometimes rain. Three members reached the end of the Age Glacier and sought the route to Turner's Biby Rock. The left seven members established B C at the opposite bank of Leader Creek.

On the 2 nd, cloudy after rain, stopped any activities by the rise of river.

On the 3 rd, rain after cloudy, three members include the leader climbed down and went to the Tasman Glacier. The left members all entered into Leader Creek Cave and the four made reconnaissance.

On 4th, began the first attack, but abandoned on our way by the rain.

On 5th, we had first clear sky in the morning there. The Mt. Tsutoco was ascend-

ed (by Shimizu, Miyahara and Sato), Maderine (by Saito, Nakamura and Tsukada), Saym (by Akiyama and Maruyama). Tsutoco members were forced to bivouac at the Age Glacier after they got the summit.

On 6th, all descended to B C.

On 7th, withdrew B C and went back to Johnson Hotel.

On 8th, went to Homer Tunnel by bus and climed Barrier Nob, and MacFarson.

The members of our party were as follows; Ryuji Yukawa (55, leader), Hiroaki Akiyama (35, acting leader), Katsumi Kato (43, deputy leader), Shin'ichi Saito (39), Isao Shimizu (33), Hiroyuki Miyahara (29), Katsuji Koyanagi (28), Koichi Nakamura (27), Sadanori Tsukada (25), Masanobu Sato (24), Toshio Maruyama (24), Hiroshi Narita (22).

list of the ascended mountains

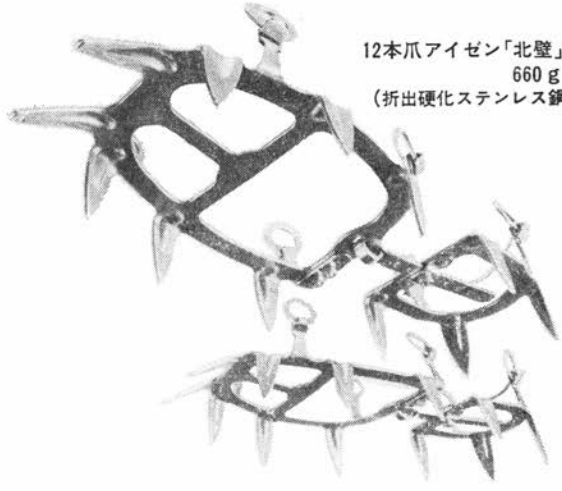
Tsutoco	(2756 m)	by Shimizu, Miyahara, Sato	Jan. 5 1972
Saym	(2226 m)	by Akiyama, Maruyama	Jan. 5 〃
Maderine	(2555 m)	by Saito, Nakamura, Tsukada	Jan. 5 〃
MacFarson	(1890 m)	by Shimizu, Miyahara, Sato, Maruyama	Jan. 8 〃
Barrier Nob	(1829 m)	by Akiyama, Saito, Nakamura, Tsukada	Jan. 8 〃

山に賭ける男が選ぶ
本格派
美津濃山の用品。

世界の四大スポーツ品メーカー
美津濃
MIZUNO

山の用品は豊富な美津濃製品からお選びください。

氷・雪・岩を噛むステン アイゼン「北壁（きたかべ）」



12本爪アイゼン「北壁」12
660 g
（折出硬化ステンレス鋼）

- 極寒の地においても耐衝撃性（爪の曲り、折れ）がクロームモリブデン鋼等より強い
- さびにくい、2.2mmと云う薄さに、材料の持つ強靱さが加わり、フレキシビリティがあり斜面に対して安定がある。
- リングが内側に倒れなく、はきやすい。
- 10本爪アイゼン北壁10（620 g）

- エバニュー製品各種
- ピッケル
- アイゼン
- 登山ヘルメット
- ザイル
- クライマーベルト
- カラビナ
- ハーケン
- アブミ
- ショイゴ
- ハンモック
- ハンマー
- コンロ……

登山・キャンピング・スキー・体育用品

Ever New エバニュー

軽登山靴の決定版。

軽くて歩きやすく しかも登山靴としての機能も内蔵。

本格的な"夏"登山には世界の一流アルピニストとともに世界の屋根を征服した ヒマラヤン®A・ヒマラヤンピーク®ヒマラヤンライト®など《オニツカ》の登山靴をお選びください。

Onitsuka Tiger

歩けば歩くほど軽快

ヒマラヤンリンカン®S

コットンデニム製　リンカン®Lタイプもあります。

競技専用シューズの総合メーカー オニツカ株式会社 神戸・大阪・東京・福岡・名古屋・札幌

山とスキーの専門店

キスリング
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島３－38－９
片桐盛之助
電話 東京 (831) { 1794番 / 6680番

登山とスキーの
日本最古の専門店

好日山荘

東京店
〒104 東京都中央区銀座西2の5
電話 (561) 3600・0966
スキー用品部 電話 (561)0966
振替 東京 113657

大阪店
〒530 大阪市北区曽根崎上1-47
日新ビル1階
電話 (364) 0933(代表)
振替 大阪 68763

福岡店
〒812 福岡市須崎町1－4
電話 (28) 3440

山友社 たかはし

登山・スキー靴

四谷本店
新宿区三栄町３
TEL(351)1912,7432

八重洲口
中央区八重洲２の５
TEL(271)1560,8575

新宿ステーションビル4階
サービスショップ
TEL (352) 6564

40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案
1952年日本山岳会マナスル偵察隊
全装備納入以来高所用天幕専門
製作・海外遠征隊には各方面より
御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント　**吉田喜義商店**

東京都杉並区桃井1丁目3番3号
電話 東京（399）2548　（398）8469（夜間）

山岳会の刊行物と服飾品

山岳	第64年	¥ 2,000
〃	第65年	¥ 2,000
〃	第66年	¥ 2,300
1970年エベレスト登山報告書		¥ 2,500
山岳総索引	第26年1号～第60年	¥ 1,000
山岳覆刻版	第1年2号	¥ 1,800
〃	第1年3号	¥ 1,800
〃	第2年1号	¥ 1,800
〃	第2年2号	¥ 1,800
クラブタイ		¥ 2,500
ネクタイ止		¥ 1,000

社団法人　**日本山岳会**　東京都文京区湯島1－6－1 さくらビル

山がなぜ我々を呼ぶのか？ここにその答えがある！

山岳名著選

全冊A5判上製箱入

ベースボール・マガジン社
書店にない場合は注文されると書店が取りよせてくれます

ダウラギリ登頂 M・アイゼリン著／横川文雄訳／一、六〇〇円
ヒマラヤで初めて飛行機を使用し新ルートを

未知の山へ W・ノイス著／野間寛二郎訳／九〇〇円／62年惜しくも夏
山で死んだ山の詩人といわれたノイスのトリボル初登頂記

冬のアイガー北壁初登攀 T・ヒーベラー著／横川文雄訳／八〇〇円／苦難の道

垂直のかなた ある6級クライマーの手記 G・リヴァノス著／安川茂雄訳／一、四〇〇円／登攀歴20年の山男

エヴェレストの魅惑 グヤン・シン著／野間寛二郎訳／一、四〇〇円／インド隊の挑戦記

プモ・リ 地上最美の山 G・レンザー著／織方郁映、橋本信共訳／一、六〇〇円／ドイツ、スイス合同隊登頂記

チャムラン 久木村久、安間荘、鈴木良博共著／一、四〇〇円／ホング
コーラの奥にそびえる難しい山に挑んだ日本北大隊！

雲の中の九ヵ月 E・ヒラリー著／丹部節雄訳／一、二〇〇円／ヒマラヤ科学登山隊の研究データとアマダブラム登頂記

アメリカ隊エヴェレスト登頂記 J・アルマン著／丹部節雄訳
クンブ氷河からサウスコルへ 三、八〇〇円

実業之日本社

東京銀座1-3 / 振替東京326

好評のロングセラー

山のパンセ
串田孫一著
山の世界に独自の境地をひらいた著者の滋味あふれる随想集。1300円

若き日の山
串田孫一著
名作「若き日の山」を主体に、「乖離」ほかを収めた珠玉の随想集。1300円

定本 雪に生きる
猪谷六合雄著
猪谷千春の父である著者が、雪に生きた半生をつづった感動の名著。1300円

雪に生きた八十年
猪谷六合雄著
雪を追い、八十年を旅と放浪に生きた自然人猪谷六合雄の大河自伝。1800円

谷川岳ヒゲの大将
高波吾策著
谷川岳に生き、ヒゲのおやじと親しまれた、著者の天衣無縫の一代記。580円

上高地の大将
木村 殖著
上高地の主として生きてきた木村小屋のあるじが綴る山の記録。650円

オール写真版 登山教室
安久一成著
初歩から本格登山までの登山技術を豊富な写真で解説した好評技術書。650円

長編小説 **谷川岳鎮魂**
瓜生卓造著
昭和初期、谷川岳を初登攀した平田恭助の栄光と悲惨を描く山岳小説。680円

新版 山を考える
本多勝一著
異色ルポで名高い著者が山を対象に綴る各紙絶賛の好エッセイ。680円

冒険と日本人
本多勝一著
冒険に対する社会的反応を軸に日本人の意識構造をえぐる異色評論集。880円

きたぐにの動物たち
本多勝一著
北方動物五十七種の生態そして人間との関係を興味深く描いた動物記。690円

オオカミ追跡18年
斐太猪之介著
ニホンオオカミの生存を信じ、ついにそれを証した執念の書。680円

山菜記 正・続
片岡 博著
土の香りただよう〝ふるさとの味〟を綴った随筆集。(正)560円・(続)620円

中南米の光と影
東京大学ラテンアメリカ縦断調査隊編
メキシコから南米最南端フエゴ島まで遺跡と草原と氷河を訪ねた四万キロの記録。900円

「岳人」に連載され、好評を得た「七千メートルの山々」「ヒマラヤの高峰」の豪華決定版
ヒマラヤはもとより、コンロン、パミール、ヒンズークシ等高峰一三八座の苦闘の登山史

深田久弥著

ヒマラヤの高峰

望月達夫・諏訪多栄蔵・雁部貞夫編集

全3巻

第1巻／第1回配本（6月下旬発売）

エヴェレスト／スターリン峰／ヌン／チョモラーリ／アピ／ケダルナート／シア・カンリ／ラカポシ／ドウナギリ／テント・ピーク／ティリチ・ミール／サセル・カンリ／カメット／カブルー／ミニヤ・コンカ／アンナプルナⅣ峰／ナンダ・デヴィ／レーニン峰／マッシャブルム／マチャプチャレ／チョゴリザ／イストル・オ・ナール／ハラモシュ／ヒマルチュリ／ジャヌー／トリスル／クンサルトロ・カンリ／ガッシャブルムⅣ峰／アンナプルナⅠ峰／ゴザインタン他

第2巻

ケー・トゥー／アマ・ダブラム／チャウカンバ／グルラ・マンダータ／ツニオルチュ／ハン・テンリ／ティルスリ／カンジロバ／アンナプルナⅡ峰／トゥインズ／ニルカンタ／サイパル／ディステギル・サール／ピラミッド・ピーク／ヌプチュー／アムネ・マチン／クンブール／ヌプツェ／カイラス／ネパール・ピーク／アビ・ガミン／バルトロ・カンリ／ランタン・リルン／カルタブー／ナンダ・コット／アンナプルナⅢ峰／クンヤン・チシュ／ヒドゥン・ピーク他

第3巻

バルンツェ／カンチェンジュンガ／チョモレンゾ／ポベーグ／カン・グルー／ダウラギリⅠ峰／カンチェンジャウ／ディラン／ヌンブール／ニルギリ／モムヒル・サール／ブロード・ピーク／セント・ジョージ峰／ビッグ・ホワイト・ピーク／アララット／ナムチャ・バルワ／タルン・ピーク／崑崙／ガンガプルナ／ナラカン・カール／マカルー／スワート・コイスダン／ノシャック／ギャチュン・カン／ローツェ・シャール／ダウラギリⅡ峰他

A5判・高雅総布装箱入・平均650頁・予価4500円

東京神田小川町
振替東京33228
白水社

現代に自然を求める山仲間の月刊誌　　定価300円

山と渓谷

AB判・260頁／毎月15日発売

山の匂いをあなたの部屋いっぱいにお届けする『ヤマケイ』は、役に立つ実用記事と情報を提供しています。技術解説、コース案内、用具紹介、気象、医学など、きっとあなたのお役に立つことでしょう。

本格派のための山岳専門誌

岩と雪

B5判・150頁
奇数月10日発売
定価 400円

隔月刊『岩と雪』は、発刊ごとに岳界の話題を独占しています。公正な立場にたっての評論、フレッシュな記録、資料として価値の高い地域研究や海外の山山の紹介など——つねに登山界をリードしています。

東京都港区芝大門1－1－33　**山と渓谷社**　振替東京60249　☎(03)436-4021(代)

茗渓堂の山の本

森林・草原・氷河　加藤泰安　1500円

すこし昔の話―千島・樺太・札幌・信濃―初見一雄　1200円

遠い山・近い山　望月達夫　960円

山の古典と共に　大島堅造　1500円

雪山・藪山　川崎精雄　1200円

雪原の足あと　坂本直行　2800円

日本の山旅　足立源一郎スケッチ帖　3600円

屋久島―美しい豊かな自然―　赤星　昌　480円

山に忘れたパイプ　藤島敏男　2500円

ブータン感傷旅行　小方全弘　980円

未踏の山河―シプトン自叙伝―大賀二郎・倉知敬訳　1900円

登頂ゴジュンバ・カン　高橋　進　900円

南極新聞―1956・7年―南極研究会　600円

日高山脈　北大山の会　2200円

山岳　日本山岳会　61年版1800円／62年版2000円／63年版2200円
64年版2000円／65年版2000円／66年版2300円

山岳総索引　日本山岳会　1000円

山日記―1974年版―日本山岳会　850円　（予価）

山　―日本山岳会々報―一部100円

山で唄う歌―1集・2集―　戸野　昭・朝倉　宏
1集240円・2集280円

田中正造の人と生涯　雨宮義人　1900円

幻露抄　堀口大学　20000円

朱唇紅臉　堀口大学　（近刊）

遙かなる未踏の尾根　マカルー登山隊報告書　4800円

いろりばた　南会津山の会　1900円

株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一電話（〇三）二九一―九四四一振替口座東京二四七二三

●ご希望の方に既刊解説総目録を送呈します

造園実務集成 全6巻

庭園篇 全3巻完結

編纂 斉藤勝雄〈日本造園士会副理事長〉

1、庭園設計の実際 価二、〇〇〇円

2、庭園施工の実際 価三、七〇〇円

3、庭園地被と植物病虫害 価二、五〇〇円

公共造園篇 全3巻

監修 北村信正〈日本造園学会副会長〉

1、計画と設計の実際 価三、〇〇〇円

2、造園施工の実際 価四、〇〇〇円

3、造園管理の実際 8月中旬刊

造園技術の真髄を解明！

●本書の特色

- 「庭園篇」「公共造園篇」ともに、設計・施工・監(管)理の3巻からなる造園実務についての初めての集成である。
- 理解しやすいように実例を多くあげ、写真・図版を豊富に挿入。
- 造園についての豊富な知識、技術を持つ各分野の第一人者を結集し、各執筆者の経験・理論をもとに詳述し、平易に説明することに留意した。
- 今後の都市計画、環境作りに欠くことのできない都市公園・自然公園・児童遊園など、また学校、工場、リクリエーション施設の造園実務の座右の書となる。

理工学書新刊

交通工学ハンドブック
同研究会編 A5・¥4800

構造実験と構造設計
梅村 魁 他著 B5・¥2800

上水道流量表
内藤幸穂 著 B5・¥2000

建築用セラミック材料
素木洋一著 A5・¥2500

フィルダムの設計および施工
山口柏樹／大根義男 共著 B5・¥6000

有機フッ素化学(II)
酒井温良著 A5・¥8000

東京・港・赤坂1－3－6 技報堂 (電) 585－0166・振替東京10

古本の買入と販売

山岳書
国文学・漢文
全集・叢書
錦絵・和本
名士の書簡
色紙・短冊

地方も出張いたします

〒101
東京都千代田区神田神保町一ノ三
㈲悠久堂書店
電話（二九一）〇七七三番
〇九二〇番

世界の山に関する征服の秘訣を
海外から定期的にお届けする
権威ある山岳・地理雑誌

● Geography

Annales de Géographie（フランス）	隔月刊	年間ご予約価	¥ 5,780
Annals of Association of American Geographers（アメリカ）	季刊	〃	6,290
Canadian Geographical Journal（カナダ）	月刊	〃	3,200
Geographical Journal（イギリス）	季刊	〃	5,980
Geographical Magazine（イギリス）	月刊	〃	5,220
Geographical Review（アメリカ）	季刊	〃	6,470
National Geographic Magazine（アメリカ）	月刊	〃	4,070
Revue de Géographie Alpine（フランス）	季刊	〃	3,800
Revue Géographique des Pyrénées et du Sud-Ouest（フランス）	季刊	〃	3,800

● Sports & Amusement

Alpen（スイス）	月刊	年間ご予約価	¥ 3,080
Alpinismus（ドイツ）	月刊	〃	6,820
American Alpine Journal（アメリカ）	年刊	〃	2,600
Bergsteiger（ドイツ）	月刊	〃	5,220
Himalayan Journal（インド）	年刊	〃	3,040
Internationale Berg- und Seilbahn-Rundschau（オーストリア）	季刊	〃	7,000
Montagne et Alpinisme（フランス）	年5回	〃	2,850
Mountain（イギリス）	隔月刊	〃	2,520
Winter-Bergkamerad（ドイツ）	月刊	〃	3,590

Ⓜ 丸善
東京・日本橋
(03)272-7211
振替東京5番

SGS-2247

飲んで呑まれないために

飲みすぎ、二日酔は、お酒のよさをすべて帳消しにしてしまいます。
お酒に呑まれないコツといえば、平凡なようでも、一諸にほどよく食べること。それに、お酒の前後の新グロンサン錠が悪酔い・二日酔いを防ぎます。疲れもとるグロンサン効果を、お役立てください。

●適応症
疲労回復　二日酔　食欲不振　肝機能障害
妊娠悪阻　神経痛　リウマチ　脚気　湿疹
薬物中毒　自家中毒　耳鳴　夜尿症

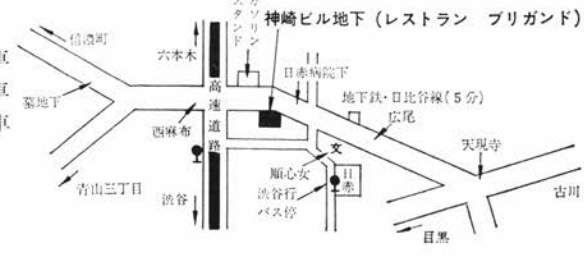
疲労回復・二日酔に
新グロンサン®錠 内服液

中外製薬株式会社

本格的山賊料理

知らない人は知っている人に聞いて下さい

＊交　通
地下鉄　日比谷線広尾下車
バス　渋谷→日赤産院下車
〃　〃→西麻布下車



Brigand
レストラン　ブリガンド

港区西麻布4・5・2　TEL(407)3009・3006

創立25年

豊かな暮らしに、
ご事業の繁栄に
お近くの〈協和〉
をお役立て
ください。

全国に220余の窓口
協和銀行
本店　東京・丸の内(新丸ビル)

わが国における
団体保険のパイオニア。

山岳保険でも
皆様に奉仕しております。

営業種類

福祉団体定期保険　新団体終身保険
団体信用生命保険　企業年金保険
海外旅行生命保険　オール保障保険

日本団体生命

本　店　〒150　東京都渋谷区東1－2－19
電話　(407) 6211(大代表)
支　店　大阪・名古屋・福岡・札幌
支　社　東京9社他14社

●お気軽な海外旅行を

どんなに旅慣れたお方でも海外旅行はなにかとめんどうなもの。まして視察研究留学の旅はなおさらです。煩雑な手続や日程作成、手配などはすべて専門家におまかせください。

海外一流業者と提携した日通観光のサービス網は、団体はもちろん、あらゆる旅行のお世話をいたします。

お問合せはお近くの日通支店観光係または左記の日通東京航空支店へどうぞ。

東京都港区新橋一―五―二

（電）　五七一・八四八一

日本通運

《サンワ》で
しっかり
貯めましょう

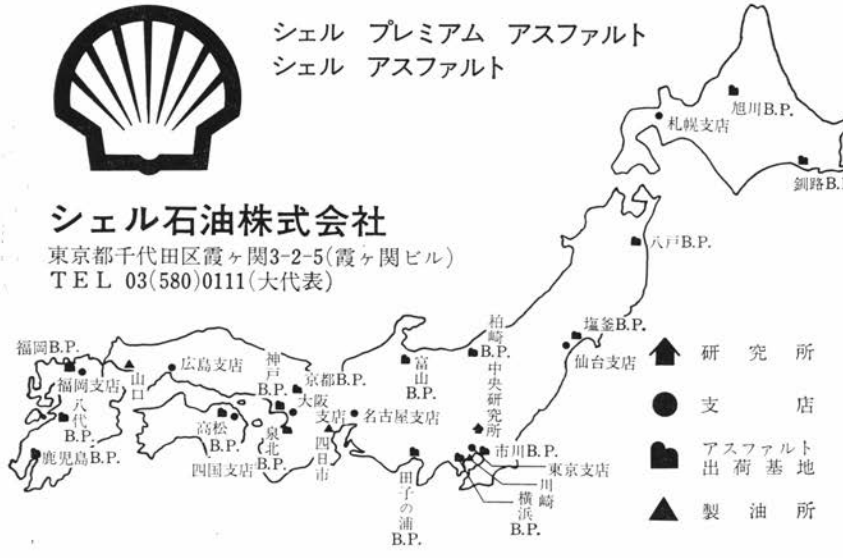
みなさまのお役に立つ

三和銀行

シェル　プレミアム　アスファルト
シェル　アスファルト

シェル石油株式会社

東京都千代田区霞ヶ関3-2-5(霞ヶ関ビル)
ＴＥＬ 03(580)0111(大代表)



「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都文京区湯島一―六―一
（さくらビル内）
日本山岳会「山岳」編集部

編集委員
望月達夫
中島寛
原眞
堀内章雄

一九七三年四月三十日発行
山岳　第六十七年
（通巻一二六号）
定価二五〇〇円

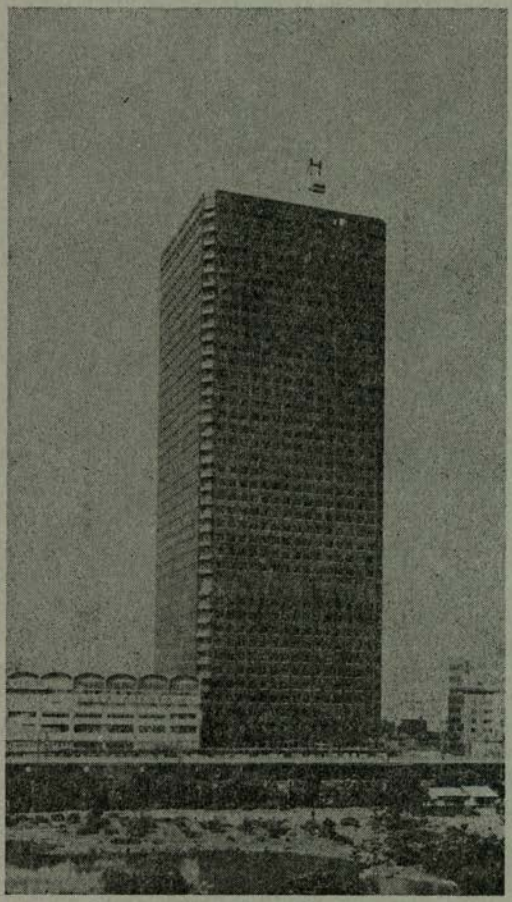
東京都文京区湯島一―六―一（さくらビル内）
発行所　社団法人　日本山岳会
電話東京八一三局二二八六
振替口座　東京　四八二九番

日本山岳会内
編集兼発行者　望月達夫
印刷　株式会社技報堂
写真版　京橋原色版印刷所
製本　株式会社鈴木製本

東京都千代田区神田駿河台二ノ一
発売所　株式会社茗渓堂
電話東京二九一局九四四二番
振替東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。

豊かな
生活環境を築きあげる……



（オーダー建材）
カーテンウォール
アルミサッシ
スチールサッシ
クールサッシ
NKウォール
アルミキャスト
（標準建材）
PA－60シリーズアルミサッシ
PA－70シリーズアルミサッシ
PS－80Aスチールサッシ
NKオートドア
（プレハブ）
マルチパーティション
設備ユニット
（産業機械）
熱交換器（アライトロン）
高速度沪過機（NKフィルター）
精密金型
各種コンテナー
（電機製品）
電気洗濯機
冷凍ショーケース
業務用食器洗滌機

日本建鉄株式会社

取締役相談役　早川種三
東京都千代田区大手町２－６－２
ＴＥＬ　東京（270）6511（大代表）

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXVII 1972